

アリナレコード～光と
闇の小夜曲～

選ばれざるオタクⅡ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

表紙

チーほむ様が原作開始半年前から介入した結果、アリナ先輩がみかづき荘入りして、エンブリオ・イブに取り込まれたかりんちゃんを救うために環いろは率いる新生マジウス（うい・ねむ・灯花）に喧嘩売るお話

そんな世界だから、みかづき荘に集まる住人も『更紗帆奈』『天乃鈴音（すずマジ終了）』『七瀬ゆきか（戦闘狂）』とかなり狂っていて……

この小説はメインストーリー『アリナ編』と、アナザーストーリー『ほむら編』の二部構成で進んでいきます。

マグレコと同じですね。

お話の都合上、ほむら編は原作開始半年前からのスタート、アリナ編は原作第一章からのスタートとなります。

この世界は原作マグレコ世界とは違って、版權モノの名前は改変されていません。基本的にまだマギ関連以外は現実と同じ感覚で大丈夫です。

タグにクロスオーバーがついていますが、他の作品のキャラは直接は出てきませんあくまでもほむら編が勝手に模倣して楽しんでいるだけです（）

こちら主人公イメージ画像

通常のアリナ先輩よりも白い部分がポイント

だんだん成長と共に外見も変わっていく…予定

新しく描いたつたで

※新しく書き直しました。※

だいたい以前までに投稿していた内容とあらずじは同じなのですが、

新しい描写を入れたり、わかりやすいように書き換えたり、そもそも構成を改善したり、ぐだつた部分はカットしたり：e t c, e t c.

より読みやすく、より面白く、より高い完成度を目指した結果ですので、出来れば『新生アリナレコード』の方を読んでもらえると助かります。

(なお、まだ新生版の数が少ない内は旧版を読んでもらつてお話の概要を理解してもらった方がいい場合もあるかもしれません。その時は初期のぐだぐだっぷりや読みづらさには目をつむって下さい！頑張つて新生版を更新しますので!!)

目次

『旧』 アリナ編 第一章 「アリナの始まり」

アリナ編その1 | 1

アリナ編その2 | 10

アリナ編その3 | 43

アリナ編その3.5 序 | 84

『旧』 ほむら編 第一章 「見滝原攻略 使徒、襲来」

ほむら編その1 | 98

ほむら編その2 | 105

ほむら編その3 前編 | 124

ほむら編その3 後編 | 152

ほむら編その4 『終わりの宴会』 176

ほむら編その5 『VS第一の魔女AD

AM』 | 203

ほむら編その6 『VS第三の魔女SA

CHIEL』 | 223

ほむら編その7 『分体達の苦悩』

254

ほむら編その8 『分体達の日常』

284

ほむら編その9 『分体達の怒り』

331

ほむら編その10 『分体達と契約』

367	ほむら編その1-1 『分体達と真理』		
401	ほむら編その1-2 『分体達と因果の渦』	418	
443	設定や旧あらすじ等のごみ置き場		
	新生アリナレコード プロローグ		
	前奏曲（プレリユード）	450	
	オマケ 「帰るべき場所」	467	
	メインストーリー（アリナ編） 第一章		
	「アリナのはじまり」		
	その1 「アリナ・グレイという少女」		
483	その2 「魔法少女専用救命支援要請：コード887」	504	
	その3 「アリナ・グレイという魔法少女」	520	
	アナザーストーリー（ほむら編） 第一章		
	「見滝原という街」		
	その1 「最強のまどかを育てるRTAはっじまーるよー」	533	

『旧』 アリナ編 第一章 「アリナの始まり」

アリナ編その1

★☆☆☆☆

第一話「切り札はいつだって悪手」

「シット……ッ！」

つい汚い言葉を漏らしてしまった

最近マミーにも散々口酸っぱく言われているのに……直さないとネ

なーんて考えてる暇は残念ながら今のアリナには無いワケ

現在アリナは戦闘中、

いくらマジカルガールの宿命が魔女と戦うことだって言っただって一日5連続は無い

ヨネ

もう集中力も切れてきちゃって

目の前のやたらカラフルな芋虫砂場のような使い魔魔女に最大出力でビームを撃つても

狙いがガバガバだから、奴らはそれをヒョイと避けてしまおう

アリナは追う、アイツらは避ける

たまに当たっても増援がわらわら出てくる

そんなバトルがもうかれこれ二十分は続いているワケ

未だ決定的な攻撃は出来ていない

魔力は減っていく一方

焦るなつて方が無理難題でシヨこんなもの……

そもそも、最近魔法少女になって間もないアリナはグリーンフシードのストックなんか持っていない

自分の固有魔法についてもあやふやなこの状態で魔女なんかとロクに戦えもしないのに……

「なーんでこんな時に限つて他のマジカルガールが倒れてるワケエツ!!」

結界に先客がいた事はアリナにもわかった

他のマジカルガールと共闘できれば、いくらへなちよこアリナでもラクに戦えるんじゃないかって期待して結界に入ったワケ

バット、アリナが駆けつけた時には既に

古風な魔法使いの帽子を被ったマジカルガールが倒れてて、すぐ側にはねじれた木製

の杖も落ちていた

傍から見ても満身創痍、いつ使い魔にやられるかわからない状態

正直見捨てるなんてあり得ないからムリヤリ乱入して使い魔と戦ってるワケだけども

このマジカルガールは一切起きる気配が無い

仕方ないからアリナがこうして守ってる……へなちよこのアリナだからいつまで持つかはわからないケド……

「アアツ……もう……いい加減にして欲しいんですケドオツ!!」

魔力も残り僅かだつてのにまた敵の増援が来た

もう、これ以上はムリ

そもそも魔女や使い魔なんて気色悪くて悍ましい存在、近くで見ているだけでも気持ち悪いつてのにここまで戦えたつていう方が奇跡に近いヨネ

だからエスケープするしか無いワケ

「ホラ!!ウエイクアップ!!起きて!!」

どんなに揺らしても起きそうに無かったから、結局例のマジカルガールは背負つて逃げる事になった

いくらアリナもマジカルガールだからって人間一人担ぐなんて非力なアリナにはツライ、

ケド、ここで見捨てたらもつとツライ

だからアリナは使い魔の攻撃がおぶってるマジカルガールに当たらないように逃げながら、出口に向かってひたすら走る

こんな時、もし捨て台詞的に叫ぶ事があるとしたらある漫画の主人公の言葉を借りてこうだヨネ

「逃げるんだよオオツ!!スモークキーイイツ!!」

別にこのマジカルガールはスモークキーって名前では無いだろうけど

……アレ?そもそも、なんで漫画の言葉が浮かんできたワケ?

何か引つかかるけど深く考える余裕は全くもって無かった

どのくらい走ってただろう

数秒しか経っていないかったかもしれないし数時間も走っていた気もする

やっと出口が見えてきた、これで勝つる!!

と、思った所で使い魔の攻撃がアリナの脚を撃ち抜いていった

移動手段を奪われたアリナはその場に倒れ込むしかなく、

使い魔共はあつという間にアリナ達を包围し、文字どおりの絶体絶命に

使い魔はここぞとばかりに大量に集まってきていて、ざつと数えただけでも数百匹と

かそのぐらいのレベル

おそらくあと少しもすれば使い魔の攻撃が一斉に突き刺さり、アリナはこのマジカル
ガールと一緒に死ぬんだろう

思い返せばアリナのマジカルガール人生は散々なものだった

契約した内容は何故か霧の中みたいにわからないし、

自分の固有魔法もわからないままに使い魔達と戦わされて

挙句の果てに汚い打算で結界の中に入って行って、

そこで期待は大外れ、その時点でさっさと逃げれば助かったかもしれないのに

いつものお節介でアリナ自身もこうやって死にかけている

アリナなんか助けに入っても何も変わらなかつた

所詮、テーマの無い、15で才能が枯れるアリナは世間に何のメッセージも無く、マ

ジカルガールとしても何も出来ずにロストされる運命だったってワケ

そんなアリナが「アリナ的美」なんてよく言えたよねってハナシ

「……………ふざけるな」

そんなの当然認められないヨネ

「ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなアッ!!」

ここまで苦勞したのに成果ゼロだなんてあり得ない

アリナが生きてきたのが全て無駄だったなんて許せない

「アナタ達の相手はこのアリナ!!ただ一人なんですケドオツ!!」

邪魔な役者は…デリートするしか無いヨネツ!!」

全力でこの子を使い魔の包囲陣の外へ放り投げる

でも、これだけじゃまたすぐに攻撃されるダケ……だからアリナは切り札を切る

「^そAnd ^しThen ^て ^誰There ^も ^居Phases ^な ^くNine ^な ^っPhases ^た ^たWere ^た ^たNone

死ぬのはアリナだけで良いから」

アリナの最期の力を込めるとキューブは虹色になって分解、全方向に散らばると同時に内部から崩壊するように爆発、そのエネルギーはビームになって撒き散らされる

包囲網の最前列の使い魔の半分を消し飛ばし、3列先の使い魔にまで届いたその攻撃で使い魔達のターゲットは完全にアリナに向いた

「あゝあ……これでアリナもおしまいかあ……」

ま、中々良いラストだったワケ

それじゃあ、バイバイ現世、また来世」

大量の魔力を使った疲労感に満たされて、アリナはその瞳を閉じた

Absolute Rain「アブソリュート…レインツ!!!」

ドシユウツ!!ドシユツドシユツ!!!

ズドドドドドドドドドドド

凜とした声と共に鋭い風切り音が鳴り響く

かと思つたら今度は使い魔の断末魔が喚き散らされる

その異変に驚き、再び目を開けると、……眼の前には空から幾千幾万もの青い槍が飛んできているという摩訶不思議な光景が広がっていた

その一本一本が確実に使い魔を貫き、絶命させ、霧散させる

まさしく、絶対的な槍の雨

あれよあれよという間に使い魔は全滅し、結界は消滅した

元の世界の路地裏に放り出された私は、そのまま地面にへたれ込む

「あなたたち、あぶなかつたわね」

かけられたのはとてもやさしく、聞いていると安心するようで、とても頼りがいがある……そんな感情を抱く声

その声を聞いて、ようやく生きている実感が戻ってきた

怖かった、初めて出てきたのはそんな感情

でも、それ以上に間に合つて良かった

あそこで何もしなかったら多分助けが来る前に死んでいただろう

二人共、生き残れたんだ

「大丈夫？立てる…かしら？」

その言葉を皮切りに、今まで偽りの自分を演じる事で抑えてきたココロの堰が決壊した

恐怖、安堵、疲労、劣等感、様々な感情はアリナの中を駆け巡り涙となつて外に溢れ出す

助けてくれた青い魔法少女はそんなアリナを何も言わずに抱きしめてくれた

初対面の、使い魔に苦戦するような弱つちい魔法少女

そんなアリナが落ちつくまでただ、ただ、側にいてくれた

これが、私へなちよこ魔法少女「アリナ・グレイ」と、

神浜の西を取り纏める大ベテラン魔法少女「七海^{ななみ}やちよ」との最初の出会いとなる

☆☆☆☆

アリナ編その2

☆☆☆☆☆

着実に日が短くなり秋の始まりを告げる木枯らしが吹き荒れたその日、

いつもどおりにパトロールをしていた私は新西区の路地裏にあった魔法の結界に入った

おそらく砂場の魔法の結界、規模からしてそう強くない使い魔だけの部類

しかし、入り口付近に残った魔力の痕跡から、随分前からこの結界の中で戦っている魔法少女がいる事がわかった

ここまで時間をかけているのならそれは、まだ見ぬ魔法少女は新入りか火力に乏しい者の可能性が高い

そして、かなりの確率でピンチに陥っているであろう

そう判断して私はすぐに結界の中に飛び込んだ

「ピンゴ」

入り口付近の場所には結界内のほぼ全ての使い魔達が集結しており、一人の……いや、二人の魔法少女を追っていた

そのうちのぐったりしておぶられている方には見覚えがあった

「秋野かえで」

ももこのチームの一人で確かに単独での戦闘には向いていない魔法少女だ

レナやももが近くにいないあたり、おおかた一人でいる時に結界に巻き込まれたりなんざりしたんでしょう

しかし、もう一人の方は見覚えが無かった

黒い軍服に身を包んだ所々に白が混じった緑色の髪の毛の魔法少女

かえでをおぶりながら走り、ときどき後ろに向けて緑と白のキューブからビームを放っているその姿からは並々ならぬ意思を感じ取る事が出来る

が、観察していた僅かな時間でその軍服の少女に使い魔の攻撃があたり、転ばされてしまった

使い魔の軍勢はその魔法少女達に追いつき、完全に包囲する

慌てて広範囲殲滅魔法の準備を始めていると、逃げていた魔法少女の決死の咆哮が聞こえてきた

「アナタ達の相手はこのアリナ!!ただ一人なんですケドオツ!!」

邪魔な役者は…デリートするしか無いヨネツ!!」

そうして、彼女は片足が使えない状態にも関わらずたった一本の脚の支えと体の捻り、腕の力のみで気を失っている秋野さんを投げ飛ばし、使い魔の群れの外へ逃した

それだけに留まらず、おそらく最期の魔力を振り絞って大技を発動させ、使い魔の注意を惹きつけた

ああ、他者の為に自分の命さえも投げ打つその姿は

かつて仲間だった二人を連想させて……

「もう、誰も死なせない……ッ」

Absolute Rain「アブソリュート…レインッ!!!」

ドシューッ!!ドシューッドシューッ!!!

ズドドドドドドドドドドッ

彼女が作ってくれた時間のおかげで、自身が出来る最大の殲滅範囲、攻撃回数、精密狙撃を誇る必殺技「アブソリュートレイン」を発動させる事ができた

天から降り注ぐ無数の槍一つ一つが使い魔を貫いていき、確実に消滅させる

数百もいた使い魔を残らず全滅させた事で結界は消え、元いた路地裏に投げ出される

すこし離れたところには例の彼女がへたれ込んでおり、秋野さんも気を失ったままではあるが無事なようだ

「あなたたち、あぶなかつたわね」

急いで彼女に駆け寄る

あの一撃が最期の魔力だったのなら、早くグリーンフシードを使ってあげないと、手遅れになる

「大丈夫？立てる…かしら？」

彼女の首元にある緑色のソウルジェムにグリーンフシードを使って穢れを取りながら聞くと、彼女の瞳から様々な感情が涙となってこぼれ落ちてきた

怖かつただろう、苦しかつただろう、

大丈夫、アナタは立派だ

黙って彼女を抱きしめる

そういえば私が泣いた時はおばあちゃんがよくしてくれていたっけ

なんとなく、今は亡き大切な人たちの事を思い出していたのは彼女の制服が栄総合学園の物だったからかもしれない

そういえば、今さつき私達の横を通り過ぎた小さなキュウベえは何だったのだろうか？

☆☆☆☆☆

第二話 「調整屋みたまちゃん」

そんな出来事があつたのがつい昨日のこと

あの後、すぐにももこに連絡して未だに気絶したまんまの秋野さんを引き取ってもらい

落ち着きを取り戻した彼女……「アリナ・グレイ」とお互いに自己紹介した

まさか、彼女があのだ。天才芸術家「アリナ・グレイ」だったとは……

炭化した生物で描かれた「死者蘇生シリーズ」

あんなにも恐ろしく美しいもの生み出したのが、まさかこんな気弱で正義感の強い良い子だったなんて……

芸術家はよくわからないという先入観は捨てたほうが良いのかもしれないわね

そんな 그레이さんを彼女の家まで送り届けたら、もう遅かったからそのまま家に帰って眠りについたわけなのだけれども……………

「おはようございます!!七海さん!!!」

次の日の朝、

何故か大荷物を抱えた 그레이さんが玄関先に立っていた

「あなたのパーフェクトボディをアートにしたいのでここに住ませてください!!」

「ええ……………(困惑)」

屈託の無い満面の笑みでそんな事をのたまう 그레이さん

その瞳には確かな芸術家としての狂気が見え隠れしている

前言撤回

やっぱり芸術家はよくわからないわ

☆☆☆☆

取り敢えず、家の中に入れて話を聞いた所、なんとか纏める事が出来た

既に、頭が痛い……………こんなにも話が噛み合わない人は初めてよ…………

「えーと……………要するに、 그레이さんはここに住みたいって事ね?」

「ハイ!」

「それでご両親から許可と家賃は貰っていて、既にこっちに向かって引越しのト

ラックが来ていると」

「ハイ!!」

「そして、急に押しかけたからお詫びとして日々の家事は代行したいと」

「ハイ!!!」

「うん、そこまではわかるのよ。そこまではただの良い子なのよ。それで?」

「七海さんを私のベストアートのしたいんです!!!」

「そこ!!そこが一番よくわからないわ!!」

ツッコミと共に勢いのままグレイさんに指を突きつけてしまった

「え?モデルの仕事依頼なの?」

そこらへんは事務所を通してもらえないと私がマネージャーさんに怒られるのだから、
「え?モデルの仕事依頼なの?」

「いえ!!私が求めてるのはモデルとしての七海さんじゃあ無くって魔法少女としての七海さんです!!」

……ああ……まあ確かに、それじゃあ事務所に依頼するわけにはいかないわね
「でも私なんかよりもよっぽどすごい魔法少女は沢山いるわよ……?」

「昨日、私を助けてくれたのは七海さんです!あの時の必死な表情!降り注ぐ槍の雨から感じた体の芯を痺れさせるような魔力!一撃で使い魔を絶命させる火力!

七海さんについていけば、私の『テーマ』を見つけ手がかりになってくれるハズなんです！お願いします!!」

そう言うのとグレイさんは日本式懇願の最大級である「土下座」を披露した

「ちよつ……土下座なんてやめなさい……やめなさいつて……ぐつ……ちよつ……剥がせない!!……貴方こういう時だけ力強いわね!?

ともかくやめてつて……ぬくくッ……だあつ……ハア……ハア……意地でも続けるつもりね……

あゝ、もう！わかったわ!!みかづき荘入居を許可します!!」

そう言った途端にグレイさんはガバつと顔を上げると。パアアという効果音が見える勢いで顔が晴れていき、

「七海さくくん!!」

飛びついてきた

ああ……なるほどね、こういう感じね……

今はとんと姿をみかけなくなつてしまったあの子と同じ雰囲気を感じながら、

私は目の焦点を遠くにあわせながらこれからの騒がしくなるであろう日常を心配していた

☆☆☆☆☆

みかづき荘に入居の許可を貰って少しした頃、アリナは適当に理由をつけて近所のあの公園までやってきていた

指定の時間までは少しあるので公園のベンチに座ってぽけーっとしてしていると、まだ暑さが残る初秋だというのに茶色のロングコートにフードを被って、サンングラス、マスクを装着した挙動不審のあからさまな不審者があらわれた

その不審者はアリナを見つけると走ってきて

「ごめーん、待った?」

その怪しい格好からは想像がつかない底抜けに明るい女の子の声が発せられた
「ちよ、声が大きい!」

全く……ま、アリナも今来たところだから、別に気にしなくていいワケ

コイツは自分から『正体を明かしたくない』とか言って、怪しい変装モドキをしているのに、わざわざ更に目立つ事をしないで欲しい

ご近所さんで私の悪いウワサが流れないか心配で胃がキリキリしてきた

「ほー! そうだった……それでそれで? どうだった?」

まるで落ち着きの無い子供のように「ふんふん!」とこの不審者は聞いてくる

「大成功。ま、情報は確かだったようだから、一応アナタの事は信用してあげるワケ
まさか、本当に「忠犬のように慕って強引に押し切る」事で入居許可が出るとは……
情報提供者たるアナタには感謝しか無いワケ

何かお礼をしたいのだけれども……」

そう言うのと情報提供者は勢いよく立ち上がって物凄い勢いで首を振り腕を交差させる

「いやいやいや!!別にそういうのは良いって!!これはただの私のお節介!!……それに、
今の私じゃあ、やちよししよーは護れない……から……」

この人にもナニカ事情があるのだろう

それも、本人にとってはかなり後ろめたいモノが

「そ、別にアナタと七海さんの間で何があったかとは興味無いし、詮索なんてしない
から安心してヨネ」

それじゃ、と公園を立ち去ろうとすると、ふいに不審者に腕を掴まれて引き止められ
た

何かを言おうと逡巡しているようだったが、しばらくすると決心したのかフードを脱
ぎ、サングラスとマスクを外した

現れたのは活発そうな茶色の髪をサイドデールにまとめた少女、

その橙の瞳に似合わない悲しげな笑みを浮かべてアリナの手を両手で握った

「お願い……何かあったら……やちよししよーの事、守ってあげてね」

まっすぐに目を合わせて伝えられたその言葉は重く、返事をする前にその少女は走って帰ってしまった

彼女が立っていた地面には気づくか気づけないかというサイズの小さなシミが残されている

☆☆☆☆

「調整屋？」

所変わって、みかづき荘

今日は七海さんはモデルの仕事はお休みらしいので私が昼ごはんを作っている時だった

「ええ、グリーンフシードを代金にソウルジェムの調整を行ってくれたりいろいろな事をしてくれる魔法少女専門のお店よ

最近の神浜はやけに魔女が多い……それに魔女の強さもどんどん強くなっている

……

神浜で生きていく為には絶対にお世話になるべき場所ね」

どうやら、お昼を食べたらそこに行くらしい

一体いつから神浜はそんな魔境都市になったんだか……

ちようど良い、あの子との約束を果たすために私は強くならなくてはならないのだから

「それにしても、神浜で契約したのに今まで調整屋を知らないで生き残れているって
…珍しいわね」

あ、ちなみにお昼は冷蔵庫にロクな物が入っていないなかったので（聞くと、今日買い物に行く予定らしい）

必要なのは米と卵と刻んだウインナーに玉ねぎ、その他調味料だけで良い簡単な
チャーハンを作った

アリナの得意料理のウチの一つ

七海さんには殊の外好評だった

モデルをやっているって聞いたからもっとオシャレな物を食べてるイメージあった
ケドそれは間違いだったらしい

曰く、コスパの良さと調理にかかる時間、そして一番大切な味、これら3つのバラン
スがこのチャーハンは丁度いいんだとか

話を聞いているだけでも七海さんの食事に対する情熱が伝わってくる（それでその体

型どうやって維持しているんだろ……)

☆☆☆☆☆

「あのー……本当にこんな所にあるんですか？ どう見ても廃墟しか無いんですケド……」

昼ごはんを食べた後、アリナ達は新西区の廃墟群を訪れていた

話によるとここらへんにその調整屋があるらしいがどう見ても店が経営できるような場所では無い

「調整屋の店長は特殊な魔法少女でね……」

魔法少女としての攻撃が使い魔や魔女に効かない上に、普通の魔法少女よりもソウルジェムの濁りが早いのも

一応対抗手段はあるんだけど、消費する魔力量は他と比べて大きいから人も魔女も寄り付かないこういった廃墟で店を開いてるらしいわ」

と、そんな事を話しながら歩いてみると、ある廃墟の前で七海さんが足を止めた

「神浜ミレナ座……？」

どうやらここがその調整屋らしい

入り口の真横の掲示板みたいになっている場所には

「調整屋みたまちゃん」とかわいらしい文字で書かれており、恐らく予約表…?のようなものも張り出されている

今週は土曜日が休みらしい

「この廃墟は元々そういう名前の映画館だったらしいわ

さ、入るわよ」

と、七海さんは先に入って行ってしまった

それに続いてアリナも入ろうとした時、突然

そう、本当に突然、何の前触れも無く、

別の廃墟から魔女の使い魔が飛び出してきた

使い魔はアリナを見ると真っ先に襲ってきて……

「中級閃熱魔法アツ!!」

どこからか飛んできた一筋の熱線によってアリナの目と鼻の先で使い魔はあつという間に消し飛んだ

「どうしたの!?!」

七海さんが調整屋の中から音を聞いて飛び出してきたみたいだが、もう全て終わったあどだった

「いやあ、ごめんごめん。うっかり一匹だけ逃しちゃってさ……ってあれ?昨日のアリ

ナちゃん？」

その廃墟からは何故か紅い本を片手に持った魔法少女姿のももこさんが出てきた

「すみません…助けてもらっちゃって」

「いいのいいの、元はと言えばアタシがチャツチャと倒せてれば良かった話なんだからさ」

そうやってももこさんは笑っているが、アリナ的には自分も魔法少女なのに反応できずにただ見ているだけだったのは悔しい

やっぱり経験の差なのだろうか？

「ももこ、さっきの使い魔…魔力を感じなかったけれど……」

七海さんが質問した事は、アリナも疑問に思っていた事だから、うんうんと頷きながらももこさんに視線を送ると

「なくんかね？元の魔女が珍しく隠密型っぽくてさ、中々に本体が見当たらないんだよ

よ
使い魔も結界外で普通に活動してるし、こんな人気無い所まで来るし、妙なんだよね」

そんな答えが帰ってきた

確かに魔女の性質からは逸脱している

三人はふくむと首をかしげるが、

「ま、ここで悩んでたってしかたがない、今日はアリナちゃんの調整に来たんだろ？奥で調整屋が待ってるよ」

ももこさんに促されてアリナ達は調整屋の中に入っていった

☆☆☆☆

廃墟の中の映画館を進む中でアリナは前に行くももこさんにどうしても言いたいことがあった

「あのくそういえばさつきベギラマって聞こえたんですけど……もしかして、ドラクエ好きなんですか？」

その紅い本にも中級閃熱魔法って書いてありますし……あ、でも漢字表記のダイ大は魔法じゃなくて呪文表記だったのような……」

それは、我々が日本が誇るRPGゲームに出てくる呪文であり、大抵の日本国民は一度はその名を聞いたことがあるであろうモノ

アリナが指摘しているのはゲームを元にした漫画で漢字表現がなされたもののお話だったのだが

それに対して帰ってきた返事は意外なものだった

「そっか……『魔術』についてもまだ知らないのか」

ももこさんが驚いたように言う

その『魔術』？はそこまで魔法少女にとって当たり前の事なのだろうか？

少なくともキュウベえからは聞いてない

「その事についても調整屋で説明があると思うから、詳しくはそこで…ね？」

???ソウルジェムの調整に『魔術』…？

全く繋がりが見えない

一体何をやっている場所なんだ調整屋…

「おつす、調整屋」

アリナが調整屋について考えている間に目的地についたみたい

ももこさんが気軽に呼びかけながら入った扉をくぐると、そこはこれまでの廃墟とは

違い青を基調としたステンドグラスに照らされる不思議な空間が広がっていた

至るところに摩訶不思議なオブジェが置いてありおそらく電池と磁石で動き続けて

いる

…けど、多分魔力で動いてるんだろ？なあ…ありえない動きしてるもんなあ…

「あああ、ひさしぶりね、ももこ。最近来ないから寂しかったわ」

「はっ、なーに言ってるんだか

最近じゃお客も多くなって思い出す余裕なんて無いんだろ？」

入り口から正面のソファには銀髪の少女が座っていて、こちらを見ると持っていた紅茶をテーブルに戻して嬉しそうにももこさんに駆け寄っていく

「どうやら彼女が例の調整屋らしい」

「あらあ、そんなことないわよお〜？」

拗ねるももこさんだったが、何も言われずともソファに座り調整屋のされるがままにほっぺをぐにぐにされているあたり

まんざらじゃあ無いのだろう

「それにしてもやちよさんもひさしぶりねえ」

確か最後に会ったのはホオヅキ市に殴り込みに行った時かしらあ？」

ももこさんを弄り倒しながら調整屋が七海さんと世間話をしているが、正直アリナはテーブルの上に置かれている劇物の方が気になって仕方がなかった

見た所、チーズケーキにケチャップがかけられ、イチゴのように梅干しが乗せられている

自分が経営している店だからって営業時間内に呑気にお茶していても良いのだろうか？（錯乱）

まあ、万事屋よりかはマシなんだろうけども

「いや、みふゆが居なくなった日にもここに来たわ

すぐに別の場所を探しに行ったけど」

「ああ…そういうえば、そうだったわねえ…一体何処に行ったのかしら…」

最近調整に来た子達の記憶でも見えなかったし」

「まあ、みふゆだって何年も魔法少女やつてるんだからちよつとやそつとじゃあ死なないでしょうし

それよりも今日はこの子の調整に来たのよ

お願い出来るかしら？」

つと、こつちに話が回ってきた

冒険的なナニカに気を取られて話は殆ど聞いてなかったけど

「はじめまして、アリナ・グレイです」

「どうもーはじめましてえ

「八雲みたま」って言うのよ？」

以後ご鼻屑にしてちょうだいね」

やはり最初は挨拶、古事記にもそう書いてある

そこからは調整についての説明やらなんやらが行われた

なんでも調整はソウルジェムの内部を弄るわけだから、必然的に人の記憶が見えるの

だそう

普段は意図して見ないようにしているけれど、逆に見ようとすればある程度深い深度まで読み取れるらしい

アリナ的にもかなりインテラステッドな話題で集中して聞いていた

また、調整の詳細な内容は説明してもらいつつ、七海さんとももこさんにも相談してもらいながら決めた

調整はゲームのスキルポイント振りに近いらしく、最初に初期ステータスを見る感じで軽くソウルジェムに触れてもらう

そこからわかった現在の状態から、どのように変化させるかを決める

ソウルジェムには魔女と戦った数だけ魔法少女に残る経験値的な物が残っているらしく

それぞれの要素が最も成長する場所に移動させるのが調整と呼ばれる技術の最たる例らしい

調整によって強化できる要素は、

- ・筋力
- ・魔力
- ・防御力

・持久力

・素早さ

・マギア

この6つになっている

『筋力』は別にムキムキになるわけでは無く、魔法少女故の魔力による補正具合を上げるもの

ようするに見た目変わらずパワーが上がるよって要素

ももこさんや七海さんみたいな近距離パワー型の人なら重要らしいケド

私の武器は遠距離だからいらない

『魔力』は使用できる魔力の最大保有量を底上げする要素

かなり重要だと思う

多めに振っておいた

『防御力』は割とそのまんま

痛いのは嫌なので極振りとはいかないまでもそれなりに振っておく

『持久力』や『素早さ』もそのまんま

まあ、七海さんが言うには平均値を下回らない程度には振っておいて損は無いらしい『マギア』はいわゆる必殺技の火力上げに相当する

ようするに短時間に膨大な量の魔力を使う技を使う時に、その魔力を効率よく破壊工
ネルギーへと変換する要素らしい

まあなんやかんやでもおもしろおかしく時間は流れ、

ステ振りも決めていざ調整って所である事実が発覚した

「それじゃあ服は脱いでその寝台に横になってねえ」

「どうやら、ここはそういうお店でもあるらしい」

まあ…みたまさんの纏う雰囲気からなんとなく察していたので

「わかりました」

「あ、脱いだ服はこのカゴの中に入れてねえ」

と、おとなしく従って仕切りの中で服を脱ぐ

「ちよっ…」

「…おい…調整屋……」

七海さん達が何か言っているがそんなの関係ねえ！といった具合にみたまさんが料
金表のような物を持ってきて説明する

「ウチはお手頃な30分コースから60分コース、長くて三時間コースまであってえ、
長いほど料金は高くなるんだけどお、

初回は一律グリーンシート二個で大丈夫よお。どれにするう？」

非常にニッコニコした笑顔でみたまさんが問いかけてくるので

「じゃあせつかくなので三時間コースで」

アリナはとても良い笑顔で返事をした

「しれつと最長コースを選択するなあッ!!」

ようやく場外からまともなツツコミが飛んできたなあ……なんて思いながらみたまさんに飛びかかるももこさんを遠い目で眺める

(まあ、ももこさんはみたまさんに寝技で勝てるはずもなく、不意打ちのキスをモロに食らってオーバーヒートして退場した

やちよさんの反応からしていつもの事なんだろうね)

そんなこんなでかなりドタバタしたが、何も問題はなくアリナの調整は始まった

☆☆☆☆☆

「あ、アリナせんぱーい新しく描いた漫画みて欲しいの〜」

栄総合学園のとある教室、紅い夕陽が差し込むその場所でアリナは新しい作品の作成にいそしんでいる真つ最中……

だっただんだケド、どうにも上手く筆が乗らない

そんな時に、向かい合った机の向こう側で何かを描いていたピンク色の髪をした小動

物のような子がアリナにすり寄ってくる

アリナは顔はしかめつつも、リフレツシユになるカラと何の文句も無くその漫画を受け取るとペラペラと流し読みしていき

「ふーん……ま、可もなく不可もなく、ゴミだヨネ」

率直に思ったことを口にする

「がーんなの……でも前よりは評価良くなったの!!」

アリナはそうやって冷たくあしらっているのに、小動物みたいな子はアリナの些細な言い方の変化にきやつきやと喜んでいる

まるで、アリナの心を見透かされているみたい

そんな様子にちよつと苛ついたアリナは小動物みたいな子の机の上から飲みかけのイチゴ牛乳を勝手にとり

ちゅーズゾゾ

と残りを飲み干し、空の箱を小動物みたいな子に投げ渡す

「あくんひどいの！飲みたいんならちゃんと先輩の分も買ってあげるのは……」

「飲まれたくなかつたらさつきとアリナを満足させる作品を書いてよねフルーガル」

☆☆☆☆☆☆

「……ッ!!……ハア……ハア……」

目が覚めたアリナは咄嗟に周囲を確認する

そこは紛れもなくさつきまでいた調整屋で、隣ではみたまさんが真剣な顔で、奥では七海さんとももこさんが突然跳ね起きたアリナにびっくりしている

「……ゆ、夢……いや、そんなハズは……でも、……アレ?」

ついさつきまで見ていたのは間違いなく過去の記憶だと思う

根拠は無いが、感覚がそう訴えている

だけど、アリナには後輩なんて居ない

それにアリナがあんなに他人を冷たくあしらうなんて事も、人の物を勝手に飲むなんて事もするはずが無い

してたら、絶対に覚えている

だから、あんな光景は存在しないハズなのに……

「あ、あのね……アリナちゃん……非常に言いづらいんだけどね……」

錯乱していた私は、そうやって言い淀んだみたまさんに掴みかかってしまった

「……ッ!!何が見えたんですか!?!この記憶は何なんですか!?!教えて下さい!!この……ッ

……この胸の痛みは一体……何なんですか!?!」

ポロポロと溢れ出た涙が寝台を濡らしていく

みたまさんは震える私の腕をゆっくりと外していくと、深呼吸の後にこう告げた

「落ち着いて聞いてね……アリナちゃんの持つてる記憶が全て、おかしいのよ」

そう、

告げられた瞬間、

アリナの体に衝撃が走った

いや、比喻表現では無く、本当に衝撃を感じた

よく漫画やアニメなんかで青白い雷光に撃たれる表現がされるが、それに近い
というか、殆ど電流だコレ

原理はよくわからないが、この雷のような衝撃のせいで顔の筋肉が引きつり、驚愕の
表情のまま固定される

恐らく傍から見たら目は白目だけになっているのではなからうか（たぶんなってい

る)

そして、その衝撃によって何かアンのロックされたような音が頭に鳴り響いたと思つたら、全身の力が抜けてへなへたと寝台に座り込む

ええ……明らかアリナの脳にナニカ仕込まれてるじゃん

「アリナの記憶が……おかしい……？ そんなハズは……だつて昨日の晩ごはんだつて正確に思い出せるのに」

とりあえず咄嗟に出た言葉はうろたえながらの否定だったが、

「じゃあ、アリナちゃんはいつ、何を願つて魔法少女になったのかしら？ アナタの固有魔法はどんなモノなのかしら？」

「ッ……」

みたまさんの指摘に反論できずにうつむいてしまふ

アリナは今、始めて自分の記憶が殆どない事を実感し、危機感を感じていた

両親や通っている学校での授業の話等の基本情報は覚えている

しかし、ソレ意外が何も無い

これまで創ってきた作品やとってきた賞は思い出せるのに

それはまるで他人の功績のように無味乾燥としていて、アリナが生きてきた証が何一つ心の中に残っていない

果たして本当にアリナは、アリナ・グレイなの？

頭がごちゃごちゃして上手く考えられない

多分今アリナの目はグルグルと渦を巻いていると思う

「グレイさん……辛いと思うけどね？ 私はこうしてアナタの問題を知ってしまった以上、

そしてみかづき荘の住民として一緒に生きていく以上、この問題を解決しなくてはならないわ

だから、そうやって一人で考え込まないようにしなさい」

しばらく無言で受け止めようのない現実途方に暮れていると、七海さんがうつむく私を下から覗き込んでそんな事を言ってくれた

「七海さん……でも、そんな……」

「アタシも手伝うよ。どうにも、目の前で困ってる人には手を出したくなっちゃう性だからね」

隣に座って背中をバシッと叩くのはももこさん

「ももこさんまで……」

「だあいじょうぶよお？ 私達はこういうのは慣れてるの

それに……調整屋さんは女の子の笑顔を守るのが仕事だから」

そして、さつきまでと変わらない笑顔で、なおかつ真剣さは今まで以上に、アリナの手を取るみたまさんは決意をあらわにしてくれた

「みたまさん……」

ここにいる人達は皆、アリナの力になってくれるらしい

こんな弱くて、自分の事もわからない、まだ出会ったばかりなのに、

そんなアリナの為に頑張ってくれるらしい

私の為に時間を使わせるのは悪いとは思いつつも

自分の事のように心配し、真剣に考えてくれる皆の姿には、

なんだかここに来て良かった、という思いがこみ上げてくる

「みなさん……ッ……本当にありがとうございます!!」

だから、この土下座はアリナの精一杯の感謝の気持ちだ

七海さん達が慌てて起き上がらせようとしてくるが、感謝ぐらい自由にさせてくれ

……やちよさんもももこさんも一人ずつならなんとか耐えられたケド、流石に二人相手には勝てなかったよ……

☆☆☆☆

騒動が一段落した後に、さっそく作戦会議を開く

と、言つても会議なんて言つてるのはやけに張り切っているももこさんだけで

七海さんとみたまさんは何処から出してきたのか大量のお菓子やらケーキやら紅茶やらジュースやらをテーブルの上に広げて

漂う雰囲気は完全に放課後の友達の家だ

アレ？さつきまでのシリアスは何処に行った!?

「どうおかしいかって言うとな、本当になんにも無いの

ポツカリと穴が開いてるみたいだわあ

それに、ソウルジェムを調整してみた感覚からすると、どうにもアリナちゃんかなり強い魔法少女みたいなのよねえ

それに、一年以上前の記憶のアリナちゃんは今のアリナちゃんからは想像もつかない

程の人間だったわあ」

まずはみたまさんが調整で得られた情報を共有する

「つて事はまたホオツキシ市の時みたいなの認識改竄系の魔法少女かしら？」

七海さんがうんざりした様子で聞いているが……またつてなんだまたつて

アリナ的にはその話も聞きたいけど、確実に脱線する上に長そうなので我慢する

「うーん……それがそうでも無いみたいなのよねえ……」

「どういふ事？」

「『暗示』にしる『幻惑』にしる、記憶が消してある部分は何か別の記憶に置き換わつてたり、そもそもわからないように細工されてあるのよお

でも、アリナちゃんのは本当に何も無い『ポツカリと穴が開いてる』の。不自然すぎる程キレイにね」

「みたまさんの説明を聞きながらももこさんが大学ノートにメモしていくえ？ちよつと待って？」

「さっきの記憶の中の謎の後輩よりも絵がヒドイんだけど？」

「何それ、ミミズの写生？」

「なるほどな、つまり今のアリナちゃんが弱いのは認識改竄による直接的なモノでは無く、何かしらの原因で記憶が失われた副作用って事か」

「それでもちゃんと理解して仮説を建ててるところを見ると、やっぱり魔法少女として先輩なんだなあ…としみじみ思う」

「他の部分での好感度は全員軒並み下がっていつているケド」

「ちよつと待って、ももこ。それだと記憶が無くなる一年以上前のアリナと今のアリナが違う事に説明がつかないわ」

「何かあつて変わったならまだしも、何も無いのに変わったなんておかしいでしょ

「？」

「うーん……だとすると何が考えられるかなあ〜」

結局何も思いつかず、いたずらにお菓子と飲み物が減っていく

七海さん？アナタお昼にあんなに食べておいてまだ食べるんですか？

晩ごはん入るの？

アリナお残しは許さないカラ（まあ、昼にあんなに語った七海さんならそんな事はありえないんだろうけどね）

「グレイさん、今思い出せる一番前の記憶って何かしら？」

そんな状態の会議を打ち破ったのがマドレーヌを口にくわえながらポテチの袋をあけようとしている七海さんだった

せめてちゃんと食べ終わってから開けましようよ……

「……昨日使い魔の結界に入る前は……確か……学校に……？」

アレ？昨日は土曜日だから学校は無いハズ……？

てことはここは勝手に補完されたモノだと思っから……

ああ、確か路地裏でキュウベエの幼体を見つけた所から記憶が鮮明ですね……キュウ

ウベエの幼体？」

「ちよつと待つて、確かその小さなキュウベエ、私も昨日の結界から出てすぐに見かけたわ！」

そこからは一気に会議が加速し、どうやら怪しいのは小さなキュウベえだという結論に至った

そうと決まれば七海さん達の行動は早い

片っ端から魔法少女の知り合いを当たってくれて、アリナの記憶の為になんと十数人の魔法少女の皆さんが手伝ってくれる事になった

さあ、首を洗って待つてなさいよ小さなキュウベえ！神浜ローラー大作戦で必ず見つけ出してアリナの記憶を取り戻してやるカラ！！

☆☆☆☆☆☆

アリナ編その3

第三話 「記憶のカケラ『幸せだったあの頃』」

☆☆☆☆☆

時は少し遡り、作戦会議の終盤

ある程度意見は出し尽くされ議論の勢いは失速し、七海さんのお菓子を食べる音だけが響く

「じゃあ結論だけど、今ある手がかりは『小さなキュウベえ』。他の手がかりはコイツを探しながら地道に收拾していく。取り敢えずはコレでいいかしら？」

進まない会議に痺れを切らしたのか、七海さんがいい感じに纏めてくれた。ポテチを食べながらじゃ無かったらリーダーとして百点満点だったのに：

「そうだな、何しろその小さなキュウベえが今、何処にいるのか、全く想像がつかないもんなあ。

よし、じゃあ探索メンバーはどうする？アリナちゃんはやちよさんと、私はレナとか

えでの三人で、2チームに分かれた良いかな？」

ももこさんも言っていることは正常なんだけど、みたまさんに膝枕＋耳かきをしてもらいながら言われてもなあ

え？ ナニコレ。魔法少女ってこんな自由人ばかりなの？ 私がおかしいの？ あ、いや、記憶を無くしてた事に気づけなかった私が言えた事じゃないけど……

「いえ、もつと確実に行きましよう。みたま、アレ使っていていいかしら？」

「ん〜？ ああ、アレならいつでもどうぞ〜」

みたまさん：あなたもももこさんの耳かきに夢中で殆ど聞いて無かったんじゃあないですか？

全く変わらないペースでお菓子を食べ続ける七海さん、客の前なのに堂々といちやいちやしているももこさんとみたまさん……

この人達って凄い頼れるのにシニールだなあ……

そんな事を思いながらお茶を啜っていると、七海さんが店の奥からパソコンを持ってきた。

なにやら薄くて高そうなノートパソコンを立ち上げ、何かを打ち込む七海さん。

「何してるんですか？」

どうせまた突拍子も無い事が起こるんだろうなあ……この人達の事だし。と思いが

らもお茶を飲んでると

「魔法少女専用掲示板で神浜中の魔法少女の力を借りるのよ」

「ブフーツ……ケホツ……ケホツ……え？……まっ……魔法少女……専用?！」

全く予想外の攻撃が飛んできた

「そう、この店の奥に管理してるサーバーがあつてね、認識阻害魔術が組み込まれてある特別製だから魔法少女以外は認識する事ができない私達の連絡ツールよ」

お茶を吹き出してしまったアリナだけど……これはアリナ悪くないと思うんだヨネ……。アリナにとってネットでの掲示板は『誰でも使える匿名掲示板』しか知らなかったし、一般的に見てもソレ以外考えられないだろうし。

吹き出したお茶を拭いてからパソコンの画面を見せてもらうと、何人もの魔法少女の皆さんが反応を示している光景が広がっていた。あつという間にスレの勢いが加速して、沢山の人から参加不参加の報告が飛んできて、数分後には十数人の魔法少女が私の記憶の為に協力してくれる事になっていた。

★★★☆☆

342：七海やちよ

？「パターン紫」？

最重要シリアス案件よ

急ぎの用事がない人、現状暇な人は直ちに調整屋に集まって欲しいわ
詳細は調整屋で説明する

343：水波レナ

なんかまた始まったんだけど

344：十咎ももこ

うちのかえでを助けてくれたアリナちゃんの為なんだ。
皆協力してくれないか？

345：常盤ななか

ふふふ、パターン紫なんてこの前のホオツキ市以来ですわね
久々に腕がなります

353：都ひなの

ふむ、取り敢えず彼女の事をざっと調べてみたんだが…コレは……

t t p : / / . . . j p g

354：遊佐葉月

うーんこの…

何だろう

この『狂気の天才芸術家』っていう肩書きと自らの命を犠牲にして秋野さんを守ったっていう情報がうまく結びつかないんだけど…

356：五十鈴れん

過去の実績と最新のエピソードが乖離しすぎでは？

358：竜城明日香

命を張ってかえでさんを護ったという、その精神は素晴らしいとは思いましたが
やっぱり厄ネタでしたか

359：美風ささら

厄ネタって……

まあパターン紫なんて碌なの無かったからなあ

365：相野みと

紫だから黒幕も魔女じゃなくて魔法少女なんだろうな

お、出番かな？（ガタツ

367：桑水せい

それ出番じゃない時に使うやつだよ

369：伊吹れいら

実際に出番なんだから笑い事じゃあ無いんだよね……

って、二人共！ここにネタ書き込む暇があつたら早く行こうよ！

372：和泉十七夜

記憶関連ならなきたんにもおまかせだぞっ！

374：八雲みたま

そうねえ…一応私の方では見てみたけど…

なぐんにもわからなかったわ…

十七夜とみとちゃんには期待してるわよ？

380：三栗あやめ

かこ、そういえばフェリシア家にスマホ忘れてつてから見てないけど

何処行ったか知ってる？

381：夏目かこ

なんか泊まり込みの仕事が入ったとかなんとかって書き置きが

公園のベンチに置いてあつたけど…

382：静海このは

この掲示板も全ての魔法少女が入っているわけでは無いですからね…

その泊まり込みの仕事とやらの依頼主もこの掲示板にいるメンバーでは無いので
しよう

385：春名このみ

すみません！今ブロッサムの仕事が終わったので遅くなります！

390：矢宵かのこ

今日は欠席させていただきます!!

393：阿見莉愛

ちよつと!?七海やちよ!!

なんでこんな日に緊急招集なんて出すのよ!!

よりにもよって私の仕事が入っている日に!!

394：七海やちよ

うるさいからよ

395：阿見莉愛

むきー!!

仕事さえなければ魔女だろうと魔法少女だろうときったんぎったんにやつつけて
やったのにー!!

くーツ!!

396：胡桃まなか

先輩……

メインスレ

……ここでぐらいおとなしくしましょうよ……

あ、私も今日は父の手伝いで市外について行くので欠席します

397：阿見莉愛

それもこれも私のユーザーネームがバグってるせいですわ!!

なんで取り消し線がついてるのよ!!

398：和泉十七夜

ふむ……：ベア君の『魔法少女から名前が覚えづらくなる』副作用がまさかこんな機械
ですら適用されるなんて最初は驚いたものだ

いくらバグ取りをしても治らないし、シャア君のIDを検知したら上から正常な画像を貼り付けるシステムを導入してもその画像の方がバグる始末

もはや一種の呪いなんじゃあないか？仕様として受けてもらう他無いな

411：江利あいみ

あゝ…ゴメンナサイ

今日私は無理です…

413：保澄雫

今、網走で居場所探し中なので不参加でお願いします

コレ流水館での写真

t t p : / / … . j p g

414：桑水せいこ

わあ…綺麗………

あ、今日師匠は家族旅行で大阪に行ってるらしいですよ

いくら連絡しても返事が来ないので多分スマホ忘れてるんじゃないかな？

☆
★
☆
★
☆
★
☆

さつきから開いた口が閉まらない。というか、なんか私が昔に描いたっていう絵の写真が貼られてるし、みんなドン引きしてるし

つてうわあ……え？ナニコレ本当にアリナが描いたの？こんな魔女結界みたいな絵を？

あつ……うーん……言われてみれば描いたような気がしなくも無いけども。ええ……（困惑）記憶取り戻すのが怖くなってきたんですケド

結局、他の魔法少女が集まるまでの待ち時間で七海さんが魔法少女専用掲示板につい

て説明をしてくれた。

曰く、過去に普通のSNS等で魔女退治の相談や待ち合わせ等をした魔法少女がいて、それが教育委員会の監視に引っかかって夜遊びや廃墟への侵入などの罪で補導された事があったらしい。更に不味い事にその生徒はあの水名の生徒だったらしく、学校側から退学が言い渡されてしまった。

その子達は魔女との戦いで他界してしまっただけで、その一件から魔法少女達の間では魔法少女としての連絡は暗号化して教育委員会にバレないようにしたり、待ち合わせや手紙などのアナログな手段のみで要件を伝えあったりするようになった。しかし、コレがいかにせん不便過ぎる。

そんな状況を変えたのがこの掲示板との事。

前述の通り、サーバーは調整屋にあつて、管理も調整屋の仕事。調整屋って一体…？この掲示板では、普通の匿名掲示板と同じようにスレを建てて喋るだけでは無く、魔女討伐の依頼等を貼り付けたり全員に聞いてほしい話をしたりする『メインスレ』があるらしい。このメインスレでの依頼にはパターンという重要度を色で表したモノがあつて、

種類は『紅・橙・黄・緑・青・藍・紫』の七種類

緑を基準として、寒色系はシリアスな案件、暖色系はコミカルな案件。緑から離れれ

ば離れるほど重要度が高くなるらしい。

その中でも最重要案件のパターン紅とパターン紫は特別で、対象は全員で用事がある人以外は強制参加という破格の権力を持っている

まあ、別に行かなかつたからといって罰があるわけじゃあないし、この依頼の為に無理して予定を空ける必要は無いらしいけど

その強制力故に、

・調整屋であるみたまさん

・西のリーダーである七海さん

・現在行方不明だが、七海さんと同じ西のリーダー『梓みふゆ』さんという人

・東のリーダーである『和泉十七夜』さんという人

・中央のリーダーである『都ひなの』さんという人

この五人しか発動する権利を持っておらず、自宅か調整屋にあるパソコンからじゃないと使う事が出来ないらしい

(実例) 紅 魔法少女の皆で海に行かないか? 橙 友人への誕生日プレゼント

の相談 黄 暇な人あつまれー 緑 特訓に付き合ってください 青 魔女討

伐に同行してくれる人募集中 藍 逃した魔女が成長していて手がつけられない、誰

か助けて 紫 昏倒事件

他にもこの魔法少女専用掲示板には色々な機能がついているらしく、たとえばサプライズの企画をする時にはサプライズの対象の魔法少女にそのスレを表示させないように設定したり出来るらしい（使用する為には調整屋が各地域のリーダー格の許可がなければならぬ。特定の人だけ見れないこの機能は使い方を誤ればあつという間にイジメへと発展するから。）

☆☆☆☆☆

七海さんからの掲示板の説明が大体終わったあたりで調整屋のドアが開き二人の少女が現れた

「ふゆう……アリナちゃん、昨日は助けてくれてありがとうね」

一番最初に入ってきた赤髪の子は昨日の『秋野かえで』ちゃん

昨日はアリナが七海さんに助けられて泣いちゃったり、かえでちゃんが起きなかったりでお互いに自己紹介出来ていなかったたので改めて自己紹介する

「ふーん……あんたがかえでを使い魔から守ってたっていうアリナ・グレイね

なによ、かえでと同じぐらいへなちよこじやない

レナ達はパフエ食べてたのを切り上げてこっちに來たんだから早く終わらせてよ
ね！」

「レナちゃん……たとえ本当でも、言つて良いことと悪いことがあるよ

たとえ本当でも!!」

かえでちゃんの後ろから出てきた青髪ツインテの子は『水波レナ』ちゃん

最初はその言動から“私のせいで不機嫌にさせちゃつたワケ? はわわわ……どうし
う謝らないと”つて心配になつたけど、

その後のかえでちゃんとの会話の内容や、若干頬を染めながらの

「ふん……ま、まあ?へなちよこでも使い魔に立ち向かつてつたその勇氣だけは褒めて
あげるわ!!」

という言葉から『ああ、ただのツンデレなんですねご馳走様です』つて事がわかつた

……それにしても、かえでちゃんしれつと毒吐いたヨネ……ちよつと傷ついた

ももこさんはいつもこの二人と一緒に三人チームで活動しているらしく

今回すぐに來たのはアリナを調整している間にももこさんが二人を呼んでいたから
らしい

アリナの固有魔法を聞かれたケド、わからないつて答えたら調整屋の奥を見ながら

「ああなるほどね。やちよさんと同じかあ……」

「確かアイツの謹慎つて来週までだっけ？」

「ふゆう…：私はあんまりオススメしないけど、どうしても知りたかったらみたまさんに頼めばその子の所に連れてつてもらええると思うよ」

と、何故か顔をしかめながら言われた。そんなに固有魔法を判別してくれる子つてのが嫌なの？

その後は話の流れでかえでちゃん達の固有魔法の情報を教えてもらった

かえでちゃんは『一時消去』

だけど燃費が悪すぎるからどっちかっていうと葛魔法の方をよく使うんだってさ

レナちゃんは『変身』

知ってる人に完璧に変身出来て、更にその人の魔法も使えるらしい

流石に固有魔法は無理らしいけど

ももこさんは『激励』

味方全体にバフをかける魔法なんて強くないわけ無いヨネ

そんなこんなでお話していたら、また調整屋のドアが開いてゾロゾロと四人の魔法少女が入ってきた

「あなたがアリナ・グレイさんですか」

「ある意味聞いてた通りって感じだね」

「そしてある意味情報と全く違うとも言えるネ」

「あつ…あの、よろしくおねがいします」

現れたのは、

かえでちゃんよりもピンクに近い赤髪の『常盤ななか』さん

銀髪シヨートの『志伸あきら』さん

青髪でお団子みつあみの『純美雨』さん

アリナと同じ緑髪の『夏目かこ』さんの四人組

第一印象はメガネ、ボーイツシユ、チャイナ、文学少女、とバランスが良いのかキララが立ちすぎてるのかよくわからないって感じ

話によると、とある目的の為に集まったチームで、現在はその目的を達成したけれどもチームは解散させずに一緒に戦っているらしい

(この話をしてる時七海さんが苦虫を噛み潰した顔してたけど…七海さんにも何かあったんだね。いや、まあ調整屋入る時に言ってたみゆさんって人の事だろうけど)

その七海さん達とはそれなりに前から交流があるらしく、何度も共に死線を潜った仲間だとか

常盤さんが私をジーっと見つめてから安心したようにしてたけど、一体何をされたんだろうね

なんか若干身体を魔力が通っていく感じがしたような気がしたから魔法か何かだとは思うんだケド……

あと、なんか店の奥の方を気にしてるのもなんでなんだろうね

いや、まあ詮索はしないケド……

詳しく話を聞く暇も無く、またまたドアが開いて魔法少女が入ってきた

「やつほー!!お、アリナっち発見!うひゃ〜写真の何倍もかわいいじゃん!!」

「ふうむ……ますますあの絵とイメージが合いませんね……」

「明日香?流石に第一声がソレってどうなのさ」

「すまないな、何かと変な奴が多いが根はいい奴らなんだ。許してやってくれ」

アリナっちと勝手に名付けた金髪の子が「木崎衣美里」ちゃん。(エミリーと呼んではしいらしい)

若干こちらを疑うような目で見てくる黒寄りの濃い青の髪の子が「竜城明日香」さん
明日香さんを宥めている黒髪の子が「美風ささら」さん

一番背が低くぶかぶかの白衣を着ている緑髪の子が「都ひなの」さん(中央のリーダー格の人らしいが、そんな風には見えない)

その後も続々と魔法少女が調整屋に集まってきて、沢山の人と自己紹介を交わした正直、こんなに多くの人の顔を一度に憶えるのは無理があると思ったので、髪の色と

特徴と雰囲気だけを名前と紐付けて憶えた。後日、すっかりと顔も憶える予定。

そんなこんなで掲示板で参加表明した人達が全員集まったので七海さんが調整屋の中で一段高くなっているステージのような場所に立った

(多分こういう集会が行われる事も想定されてこの調整屋は作られていると思う)

「集まったわね…今回の事件は今までとは少し毛色が違うわ」

七海さんの声で場の空気が一気に真剣なモノとなる

「既に大体の人は知っていると思うけど、『アリナ・グレイ』さんが記憶喪失になった。これが結構特殊なパターンで、生活に必要な記憶は全て入ったままそれまでの人生の記憶がすっぽり無くなっているの。」

そして、気がついたら魔法少女だったらしいわ。だから、自分の願いも固有魔法もわからない。

皆も知っている通りここ半年間神浜でキュウベえは目撃されていない。

グレイさんは生まれも育ちも神浜だから、魔法少女って事は半年前に契約していて、記憶を失ったのか

もしくはわざわざ神浜外に連れ出されてキュウベえと契約して、それから記憶を失ったのか

考えられる可能性はどちらかになるわ。

勿論、こんな回りくどい事を魔女がやるわけが無い。

だからグレイさんは魔法少女の陰謀、もしくはウワサに巻き込まれているのかもしれないわ。

今わかつている手がかりは今の所昨日、私がグレイさんを保護した時に目撃した小さなキュウベえのみ。

グレイさんの話によると使い魔の結界に入る前にも見かけたらしいから、十分に怪しいわ。

今日はこの小さなキュウベえを探そうと思う。

神浜は広い、今何処にいるのかはわからない小動物を探すのは骨が折れる。

でも人数がいればなんとかなるでしょう。

私は西のリーダーとして、この問題を神浜全体に関わる問題だと判断したわ。

グレイさんの記憶探し、手伝ってくれるかしら？」

シン……と静まり返る調整屋

聞いていた人たちの反応は、驚きに目を見開く人、私に同情の目を向ける人、正義感に燃える人、考え込む人、など三者三様に

しかし、答えは皆同じだった。

「もちろん」

その後、軽くチーム分けをして搜索地域を話し合った結果、

ももこ組十このみさん：新西区

つつじの家組：参京区（終わり次第北養区）

ななか組：中央区（終わり次第北養区）

相談所組：南風区

梨花れん二人組：水名区

団地の仲良し三人組：大東区

十七夜さんとみたまさん：工匠区

アリナと七海さん：栄区

という割り振りになった

割り振りが終わる頃にはみたまさんが店の奥から人数分の表紙に瞬間移動魔法と書かれたものを筆頭に多種多様の分厚い本魔導書を運んできてチームに配っていた。

曰く、ルーラは数が少ないのでレンタル式の魔導書だが、緊急事態なのでタダで良いとの事。それ以外の魔導書も本来は高価なのだが貸し与えてもらえるらしい。が、魔導書を使う為には最低限練習する必要があるらしいのでアリナは貰えなかった

そうして各々が自分達の担当地域に飛んでいった（団地組の三人は「魔術は魔力の消費が激しいから」と言って、せいかさんの固有魔法で飛んでいった。……でも、水が必

……ウン…物凄い勢いで空を飛ぶもんだから、身体にかかるGと叩きつけられる空気が抵抗で七海さんの身体から何度も振り落とされそうになった……どうやらちゃんと魔力を流せなかったアリナはルーラの範囲外って判定されたらしくて、魔法の保護範囲からは外されちゃったワケ……

雲を突っ切ったので体中ビショビショだし、凄い勢いで飛んでるから身体は冷えるし、正直、魔法少女じゃ無かったら低体温症で死んでいたと思う。

栄区の人気のない空き地に到着した七海さんちなみにルーラで飛んでいる姿はご丁寧に一般人には見えなくなっているらしいはアリナの状態を見て驚くと、すぐに焚き火を用意してくれた。あつたか〜い。

もちろん、この焚き火は実際の炎じゃなくなつて初級^メ火炎魔法^ラを使ったモノなので煙は出ないし、純粋な熱を持った魔力の塊らしいので一般人には見えず、精々高温で空間が捻れて見えるぐらいなので通報される心配は無いらしい。

帰りは絶対に歩いて帰る、と心に決めながらアリナ達は小さなキュウベえを探し始めた

へクチツ……ズズ……まだちよつと寒気がするカモ

☆☆☆☆☆☆

〈三時間後〉

少し特殊な魔力を見つけたアリナは七海さんと一緒にその魔力を辿って魔法の結界を見つけた。

「これは……立ち耳の魔法の結界かしら？ でも、あの魔法の魔力とは明らかに性質が違う……それにかなり強いと見たわ。私達だけじゃ危険ね」

そして掲示板で救援要請をしておき、増援が来るまでの間は暇なので結界内の使い魔相手に七海さんから魔法少女の戦い方を教えてもらっていた。

「まずは魔法少女の戦い方基礎ー『通常攻撃』、魔法少女の通常攻撃には大きく分けて、アクセル、チャージ、ブラスト、この三種類があるわ。全ての魔法少女がなんとなく出来る攻撃ね。

アクセルはM^{マギアポイント}Pと呼んでいる特殊な魔力が溜まりやすい攻撃。

チャージは次の攻撃の威力が強化する攻撃。

ブラストは広範囲を攻撃出来る威力の高い攻撃よ。」

「いやーあの！七海さん!!教えてもらえるのはありがたいんですけど!!そういう座学はできればもっと早くにやって欲しかったなって!うわっ…危ないなあ!!」

使い魔と戦いながら講義されても上手く集中出来ない。最悪、使い魔への注意がそれで攻撃を喰らってしまいかもしれない。

しかし、アリナの抗議はバツサリと斬られた

「実践でやった方がわかりやすいのよ。それと、戦いながら授業を聞く位出来ないと神浜ではやっていけないのよ。」

七海さんはトンデモないスパルタ体育会系教育者だった。

いや、確かに命掛かってるこの状況なら死ぬ気で憶えようとするっていう理屈はわかるけども……

やっぱり怖いものは怖い……ああもう！わかったワカツタ、やりやあ良いンデシヨ!! やってやるよ!! 西のリーダーに師事した最弱魔法少女が最強目指す少年漫画の如きサクセスストーリーやってやるよ!! 覚悟完了!! まずはアクセルからじゃオラア!! (豹変)

く3分後く

「いやいやいやいやムリムリムリ無理だつてえくツ!!」

アリナは使い魔の攻撃をひたすら避けていた。というか、コイツ攻撃の間隔が短くてロクに攻撃出来ないんですケドツ!

「回避のスジはいいわね……ちゃんと攻撃の軌道が読めてる。やっぱり貴方才能あるわ」

七海さんに褒められてるっぽいがそれどころじゃあ無い。正直言つてこのままじゃジリ貧だ。いくらチャージを貯めてプラストをぶっ放しても相手は倒れる様子がない。「それじゃあ次に行きましよう。魔法少女の戦い方基礎2『コネクト』、相手に自身の魔力を分け与える事で回復させたり、火力を底上げしたり、回避しやすくなったりする、神浜独自の技術よ」

そう言うと、七海さんはアリナの隣まで移動してきてアリナの手と手を合わせた。すると、重ねた手のひらから七海さんの魔力が流れ込んできて身体中に力が漲つてくる。

「これが、コネクトよ。さあ、解き放ちなってみなさい。これがチームで戦うという事よ。」

七海さんの言葉にうなずくと、アリナは一つ深呼吸をして目の前のこちらに突っ込んでくる使い魔を見据える。

固有武器である不思議なキューブを構え、魔力をキューブの内の一つのブロックに収束させていく。

その間にもどんどん使い魔は近づいてくるが、七海さんの魔力を受け取った今は全く怖くなかった。

使い魔との距離がほとんどゼロになったその時、キューブに溜め込み続けていた魔力

を一気にビームへと変換、そのまま小さな放出口に圧力を最大限かけて発射した。

渾身のプラストを使い魔の土手つ腹にブチ込むと、放たれた緑色のビームは螺旋を描きながら直進、使い魔の身体を貫いて結界の壁にぶつかって消失した。

「えっ……コレ……アリナがやった……の……？」

魔貫光殺砲みたいな光景を自分がやった事が信じられないアリナは震え声で七海さんに確認する

「ええ、紛れもなく貴方が倒したのよ。おめでどう」

「くうう……いやったあああああああ!!!」

初めて敵を倒せた。この事がこんなにも嬉しいなんて……だからガッツポーズで叫んでしまっても仕方ないヨネ？

その後、魔法少女の属性やらマジアの事やら隊列の事やら、なんやかんや魔法少女の戦い方基礎が終了する頃にはももこ組とななか組が集まっていたので結界の奥に進むことになった。

七海さんやももこさん、常盤さんや志伸さん等大多数の前衛職の人達を使い魔の群れに突っ込んでいく中、基礎を終えたアリナはかえでちゃんとかこちゃんと一緒に後方火力支援としての役目をしっかり果たせた。（思えば、後衛のメンバー全員木属性なんで

すケド……相手が水属性が多くて助かったワケ)

順調に進んでいってついに最深部にまでたどり着く頃にはすっかりアリナも戦うことに慣れてきていた。(というか、だんだん楽しくなってきた)

☆☆☆☆

最深部で待っていたのは最初に予想した通り『立ち耳の魔女』。そして、そこから離れた所で立ち耳の魔女の攻撃を避けている小さなキュウベえだった。

小さなキュウベえを捕獲したい一同だったが、この立ち耳の魔女は通常の個体の数倍強く、ベテラン揃いのこの合同チームの総攻撃でも期待したダメージは与えられなかった。

今の所、戦況は拮抗しているものの、一人が倒れたらあつという間に崩れかねない苦しい状況が続いていた。掲示板の情報から、もう少し耐えれば増援が期待できるものの、そんないつ来るかわからない援軍に頼って勝てる相手では無い。

なんとか相手の猛攻を耐え凌いでいた合同チームだったが限界は案外早くに訪れてしまった。

「グレイさん!!」

よりにもよって、まだ経験が浅く一番耐久力の無いアリナに立ち耳の魔女のハサミが当たってしまい、数十メートル上空に打ち上げられてしまった。

更に運の無い事に、立ち耳の魔女は空中に上がったアリナを追撃すべくその巨体に見合わない程の大ジャンプをやつてのけたのだ。

とっさにかえでが蔦魔法を使うもアリナにはあと少しの所で届かない。誰もが最悪の未来を想像してしまった。終わつたと心の何処かで思つてしまった。

たつた一匹を除いて

「モツキューーツツ!!!」

雄叫びのような、なんなのかわからない叫びに振り向くと、小さなキュウベえが跳んでいた。

その跳躍は一般的には不自然な速度と軌道で伸びていき、空中のアリナの元まで立ち耳の魔女よりも先に辿り着いてしまった。

小さなキュウベえは衝撃で気を失っているアリナの身体に飛び移ると、魔法少女服のポケットから小さな星のキーホルダーを取り出すと、パクリと食べた。

次の瞬間、突如起こつた巨大な光と衝撃波に合同チームの面々も立ち耳の魔女も、皆

まとめて吹き飛ばされた

☆☆☆☆

「あ、アリナせんぱーい新しく描いた漫画みて欲しいの〜」
栄総合学園のとある教室、紅い夕陽が差し込むその場所でアリナは新しい作品の作成にいそしんでいる真っ最中……

だったんだケド、どうにも上手く筆が乗らない

そんな時に、向かい合った机の向こう側で何かを描いていたピンク色の髪をした小動物のような子がアリナにすり寄ってくる

アリナは顔はしかめつつも、リフレッシュになるカラと何の文句も無くその漫画を受け取るとペラペラと流し読みしていき

「ふーん……ま、可もなく不可もなく、ゴミだヨネ」

率直に思ったことを口にする

「がーんなの……でも前よりは評価良くなったの!!」

アリナはそうやって冷たくあしらっているのに、小動物みたいな子はアリナの些細な言い方の変化にきやつきゃと喜んで

まるで、アリナの心を見透かされているみたい

そんな様子にちよつと苛ついたアリナは小動物みたいな子の机の上から飲みかけのイチゴ牛乳を勝手にとり

ちゅーズゾゾ

と残りを飲み干し、空の箱を小動物みたいな子に投げ渡す

「あくんひどいの！飲みたいんならちゃんど先輩の分も買ってきてあげるのに……」

「飲まれたくなかつたらさっさとアリナを満足させる作品を書いてよねフルガール」

そうだ……

何故この夜空に煌めく流れ星を忘れていたのだろう

『御園かりん』

栄総合学園中等部三年生 所属漫画研究部

アリナが唯一指導した後輩^{フルガール}

魔法少女マジカルかりん

誰もがアリナを『若き天才アーティスト』としてしか見なかった中で、唯一『アリナ・グレイ』を見てくれた人

初めて一緒に居て心地よかった人

アリナがアリナである為の大事な要素の一つ

そして、もう一生会えないk纏九b纏励1纏エ纏?ココ

☆☆☆☆

光が収まり、ようやく視界が回復した七海やちよ達は目の前の光景に啞然とした。

空中からまるで羽根を携えた天使のように光を纏い、戦場にふわりと着地したアリ

ナ・グレイ…

いや、あれは本当にアリナ・グレイなのだろうか？

しかし与えられた視覚情報から得られる答えは『アリナ・グレイである』のみ、ふざけるな！人間が空中をゆっくりと落下する事などあるものか

だが彼女は魔法少女だ。常識なんて物は通用しない。

そうして降りてきたアリナ・グレイに驚愕していると、背後で大質量が地面を蹴る轟音がなつた。いまだ立ち上がれない身体を捻って振り返ると、一足先に吹き飛びからのスタン状態から回復した立ち耳の魔女が未だ体制が整っていない私達に向かつて突進してくる最中だった。

やたら強いこの魔女の突進なんて受けたら、ひとたまりもない

——やられる!!

誰もがそう思った。

今まで通りなら確かにここでやられていた。が、しかしもう既に状況は劇的に変わっていたのだ。

アリナ・グレイはやちよ達と魔女との間に立ち塞がると、緑色のバリアのような物を展開した。

この場にいる者は皆知らないが、これこそが彼女を「アリナ・グレイ」たらしめる能力

「七海さん！皆さん！！思い出しました！！」

しかし、よく見たらアリナは立ち耳の魔女に力押しされて徐々に後ろに押されている。「今まで忘れていた大切な……とても大切な事を思い出せたんです！！」

一撃、また一撃、魔女の腕や頭のハサミによるラッシュが結界に阻まれるほど、確実に移動させられる、

だが、彼女は満面の笑みで嗤っていた。

「私の願いは『誰にも邪魔されないアトリエが欲しい』！！これによって得た固有魔法は『結界』！！この魔法は……」

アリナの可愛いフルガール
「御園かりんを……護る為の魔法！！！！！！！！」

その叫びと共に緑色のバリアは巨大化し、折りたたまれて立ち耳の魔女をまるまるスッポリ入る大きさの立方体が形成された。魔女を中に閉じ込めたままその結界の匣は少しずつ小さくなり、己の最後を想像したのか魔女の悲鳴のような断末魔が聞こえてくる。

本来ならば中身の空間もそのまま縮小されるハズである。しかし、彼女はソレを使わなかった。

ブチッグシャグシャアツ

およそ半分程の大きさになったあたりで遂に十二カが潰れるような音が聞こえ、匣からは魔女の体液のようなモノが吹き出して周囲を青く染め上げる。

「ヒッ……」

そのあまりにも悲惨すぎる見えない真実を理解してしまったかえでは声にならない悲鳴をあげる。かこは青ざめ口元を抑える。

枠組みだけを縮小して、縮小して、中の空間を物理的な体積と同じ大きさになるように設定された結界、いやもはや一種の拷問器具とでも呼んだほうが良いだろう。シンプリ故に凄惨さを想起する事が容易なこの匣は本来は恐怖の象徴である魔女をじわじわと、しかし確実にすり潰していく。

最終的にサイコロ程の大きさにまで小さくすると、彼女はその結界を開き………開ききる前にその結界ごと、サイコロ大になった魔女だった十二カを握りつぶした。

「だから……アリナはこんな所で死ぬわけにはいかないワケ……do you unde
rstand?」

その絞り出すような独り言は、この静寂に支配された空間に虚しく響き渡る。

クシヤリ

軽い音が聞こえ魔女結界は崩れだし、一行は元の空き地へと戻ってきた。

誰も何も言えなかった。

未だ恐怖に支配され、腰を抜かしている者、顔を青ざめて目を背けている者、悲しい瞳で彼女を見つめている者、顔を手で覆う者、唇を噛みしめる者、

しかし、誰一人アリナ・グレイを恐れたり、排除した方が良いと考える保守的な者はこの場に居なかった。

しばらくすると、アリナは糸が切れたようにその地面に膝から崩れ落ちると、地面に

手を付き慟哭をあげる

「うぐつ……おえつ……ひぐつ……つあ、あ、あ、あああツツ……」

「グレイさん!!」

やちよはハツと何かに気づくと、慌ててアリナの元へ駆け寄る。彼女のソウルジエムはやはりと言うべきか真つ黒に濁っていた。

幸い、先程倒した魔女のグリーンフシードは結界の崩壊と共に落ちてきていたのでそれを拾い、彼女のソウルジエムに押し当てその穢れを吸い取る。

他の面々もいまだ衝撃をうけてはいるが彼女を心配してかけよってきた。が、アリナの悲痛な叫びに何と声をかけていいか、誰もわからなかった。

しばらくした後、少し落ち着いたのかアリナは袖で顔を拭い、疲れ果てた表情を見せると口からこぼすように言葉を発する。

「……………七海さん…アリナをぶん殴って下さい……………」

「ハア!!しつかりしなさい!」

やちよさんはアリナの肩を掴み前後に激しく揺らす。

アリナはロクな抵抗をせずに頭を揺らされ、瞳はどこか遠くを見ているかのようだった。

「一体何があったの!?!ちゃんと話してくれないと判断が出来ないわ!」

アリナの顔を強引に向かい合わせ、そのある意味無気力ともとれる瞳を睨みつける。
「ハハ……とんでもないフアツキンクソ野郎ですよ……アリナは。」

アリナは忘れてはならない人を……とんでもない大切な人の事を忘れていたんですよ。

『御園かりん』アリナの……たった一人の後輩です。

ともすれば、家族よりも大切な人でした。

調整屋で見た光景はそのアリナの後輩との日常だったんです……」

やちよは与えられた情報に短く息を呑む。

「それでも、忘れたのはグレイさんのせいでは無いでしょう。自己嫌悪は時に大事だけれども、使い方を誤れば自らの手で身を滅ぼす事になるわよ。」

やちよはその経験からの助言を伝える。が、どうやらそう単純なことでは無かった。

「違うんです。後輩フルガールとの思い出はいくらか戻ってきてても、物理的な思い出が戻ってきていないんです。

……現実世界における後輩フルガールの記録がことごとく消えています。

アリナの部屋の本棚には後輩フルガールから貰ったはずの漫画があつたスペースがあつたはずなのに、ポツカリと何も無い空間があいていたり、

昨日、部屋で見つけたアルバムには何枚か透明人間とのツーショットのような写真

が入っていました。」

「グレイさん……」

やちよは言葉を失う。もし、それが本当なのだとしたら

それは個人の記憶喪失なんて問題では無い。これは明らかに誰かが御園かりんをこの世から消し去ろうとしている証拠である。

アリナは心からの叫びを上げる。

「簡単に後輩の事を忘れてしまった自分に対する怒り以上に、後輩を狙う犯人が許せません。」

たとえ、魔女だろうと魔法少女だろうと、ウワサとかいう未知のバケモノだとしても、御園かりんを見つけて元凶をブツ飛ばす為なら……ッ!!

……私はなんだってやります。」

その瞳に灯る憎悪の炎はとても強く、やちよは返す言葉を持たない。

先程は自らの持つ経験の上での話だったが、この状況はやちよの経験には全くのノーデータ。ナニカを言うことすらもお門違いである

その事を悟り、やちよは自らの握力の限り握っていたアリナの肩を離しうつむく。夕暮れの空き地に静寂が戻った。

「いいえ、それは違います」

一分二分どれだけ経つただろう。

気づいたら常盤ななかがアリナの側に立っていた。

「復讐が生きる目標になつてはいけません」

アリナ・グレイさん：あなたがいくら相手を憎んだからといって、相手が理想の復讐相手である事は無いのです。

相手だつて人間なんですから……」

ななかの持つ言葉には、他には無い重みがあつた。

ももこやレナが何かに気づき、ななかの事を見つめる。

「復讐のためだけに生き、そして復讐を終えた時、初めて今まで積み上げてきたものが意味をなします。」

先程あなたはなんだつてと言いました。恐らく、復讐の妨げになるものは本当になんだつて排除するのでしょうか。

そこで、果たしてその後輩さんはどう思うのでしょうか？それまでと同じように接してくれるのでしょうか？まわりはそれを看過してくれるのでしょうか？

貴方は復讐したあと、どうなりたいのですか？」

その質問にアリナは顔をうつむかせ何かを考えた後にななかの目を真っ直ぐと見据え、それに答えた。

「アリナは………私は……フルールガール御園かりんと一緒に過ごしたい……ツ！一緒に過ごして、幸せになりたい……」

「ええでしたら、なんだつてなんて言葉は使つてはいけません。貴方は復讐の悪鬼ではなく、『アリナ・グレイ』として助け出さなくてはなりません。」

その瞳には、先程までの昏い憎悪や悲しみは写つておらず、黄金の如き決意のみが浮かんでいた。

「じゃないと、私達みたいになんか無くなりますから……」

アリナ編その3. 5 序

〓前回までのアリナ編のあらすじ〓

よわよわ
弱々アリナ先輩

・ やちよさんに助けられてみかづき荘入り

・ 調整したら記憶喪失が発覚

・ 神浜中の魔法少女が手伝ってくれて、皆で小さなキュウベえを探すことに

・ なんやかんやで死にかけてたけど、小さなキュウベえも見つかって記憶のカケラを取

り戻す事に成功

・ 第一章「始まりのアリナ」終了。

第3. 5話「小さなキュウベえ」

「んーちやつちやー♪ちやーちやーちや♪んちやつちやー♪カナメイヤーー♪ア
アアアアアア♪アアアアアアーーー♪」

アリナ・グレイは浮かれていた。

その足取りはまるでスキップのように軽く、どこかで聴いたことのあるような戦闘BGMを口ずさむ。

口角は非常に気持ちよくつり上がっており、どこからどうみても天真爛漫に笑っている。

これが普通の日常のワンシーンならばどれだけ良かったただらうか。

実際は異形の化け物が襲いかかり、常に死と隣合わせの魔女結界内である。

「んー、次はあそこらへん…カナ！」

彼女は一際大きく飛ぶと、空中で自らの固有武器であるキューブを取り出し目の高さ
に構える。

片目を閉じてキューブを通して向こう側有象無象の使い魔がわんさか蔓延り瞬く間に消えていく戦いの最前線を見渡すと、幸運にも彼女の仲間の攻撃を渦を生き残った使い魔が一匹

「ん〜……ペンゴー！」

使い魔獲物を見つけた瞬間、彼女の目は「狩るいたぶる」者の眼に代わった。

その瞳は奥に彼女の網膜と同じ、緑色の炎を灯しており

爛々と輝く様は見るものに恐怖を植え付けるだろうが……幸い今の彼女を見るものはここにはいなかった。

その瞳は平常時とは比べ物にならない速さで脳内で彼我の距離、位置関係、その他の使い魔や魔法少女の動き、その他を計算し、

最適な狙いを定め、確実に相手を貫く威力に調節する。

そこまでの作業をそこらの木っ端魔法少女では知覚出来ない程の一瞬でこなした眼は、役目を終えたかのように瞳の奥に引つ込んでいく。

後に残るのは先程までと同じ彼女の目

「つてー!!」^撃

まるで遊びであるかのような呑気な掛け声と共に魔法のトリガーを引く。

キューブから撃ち出された緑とも白とも取れる質量を持った魔力の光は、「光」という性質に反してへによりと曲がる。

鏡に反射したような直線的な曲がり方では無い。

曲線の壁にそって進んでいるかのような、緩やかで、かつ明確に意思を持っているかのような、

まさに「へにより」と形容するしかない曲がり方。

こんなレーザー普通に狙ってもまず当たらないだろう。

しかし解き放たれた光の犯流は大きく弧を描き、使い魔を死角から貫いた。使い魔からすれば、「気がついたら腹に大穴が空いていた」といった状況だろう。そこまでの知性が彼らにあるとは思えないが。

「ん……グッド!!」

その様子を見て彼女は小さくガッツポーズ
彼女の目は輝いていた。まるで、初めてゲームという物に触れる幼子のように。

アリナ・グレイは浮かれていた。

こうなってしまったのにはいくつか理由がある。

一つ目は「ついさつきまで七海やちよに戦闘訓練をつけてもらっていた事」

調整によるステータスの強化に加えて、基本を身に付けコツを掴んだ彼女の魔法は昨日とは比べ物にならない程の火力にまで成長し、それは単純に彼女の自信に繋がった。

そして、自信は成長へと姿を変える。

いや、この場合は「成長」というよりは「思い出した」という方が正しいのだが……
そもそも調整前彼女はこのへによりレーザーを持って余していたのだ。

接近戦ならばいざしらず中距離でも当たらないというのに、こんな使いづらいレー

ザーで長距離狙撃をしようなんて正気沙汰じゃ無い。

だが、七海やちよとの訓練でそれは解決した。……………してしまった。

それはやちよのコネクトで初めて使い魔を倒した後の事。ちなみに、あの硬い使い魔は火属性で自動回復持ちの強个体だったらしい。

(覚えている限りでは)初めての体験による興奮から、彼女は周囲の使い魔に向けて至近距離でバカスカへによりレーザーを放ちまくり、使い魔の意識を刈り取っていった。

先程のクソ硬使い魔と比べてその呆気なさに驚き、まるで無双ゲームのように使い魔を伸していく。

この時点で、眼の片鱗はあった。

実際もつと長く最初の階層でザコ狩りを続けていれば眼が意味するものも全く違う物になっただろう。

しかし現実は一つ階層を降りると共に呆気なく撃沈。

やちよに救助され説教された事で天狗になっていた鼻は折れた。

その後やちよ指導の下、後衛からの援護射撃の訓練中

へによりレーザーが全く当たらず徐々にフラストレーションが溜まっていき、使い魔の遠距離攻撃がその身を貫いた事で限界に達した。

その結果、眼を完全に開く事に成功し、眼のアシストによる遠距離狙撃が可能になっ

た。

やちよから見ても眼は異質のはずなのだが、とある人物達の影響で「まあ、そんな事もあるわよね」と特に気にしていない模様。

本人は眼を自覚しておらず

「なんか、撃つぞぞ」って気合い入れると勝手に「後はトリガーを引くだけ」になるだヨネ」との事。

二つ目は「共に戦う仲間が大勢いる事」

やちよにななか組にもこ組

更に結界の外には他の神浜の魔法少女たちが彼女の為に頑張ってくれている。

その事実が彼女を浮足立たせ、冷静な思考判断を妨げている。

では、何故仲間がいる事が彼女を喜ばせているのか？

それは様々な要因があるのだが、少なくとも間違いないと言えることは「今の彼女は寂しがり屋である」という事だ。

☆☆☆☆

少し、「アリナ・グレイ」の内面について話さなくてはいけない。

確かに彼女は『アリナ・グレイ』とは違った考え方——まるで別人のような——を持つている。

しかし、だからと言って、彼女が「善」なのかと言うと、実はそうでは無い。

それどころか、「アリナ・グレイ」の性質は『アリナ・グレイ』の時となら変わって
いないのだ。

ならば何故「アリナ・グレイ」は『アリナ・グレイ』とは正反対のような行動を取る
のか。

それは彼女の“何を大事にするか”の違いのよる物である。

最初に入った魔女結界にて

使い魔の群れからかえでを助けた時、彼女は「見捨てるなんてありえない」と言った。

それは確かに本心でこそあれ、本当の理由では無い。

そもそも、彼女はこの段階で自らの事を「へなちよこアリナ」と評している。

そんな自信のない魔法少女が大勢の使い魔が迫っている中、誰とも知らない他人を助
けようとするだろうか？

勿論、本当に「気づいたら身体が動いていた」という聖人君子もいるだろう。

環いろはなんか特に。

だが、アリナ・グレイは違った。

彼女の場合は「自分が見捨てられるのが怖いから助ける」のだ。

自らが誰かを見捨てた場合、自分が危機に陥っても誰も助けてくれないかもしれないかもしれない。

確かに、かえでを守ろうと戦いの渦に突撃したら、殺されてしまうだろう。

だが、ここがかえでを見捨ててもいつかは自分も誰かに見捨てられ、殺されてしまう。だからかえでを助けた。自分が助かりたいが為に。

やちよに助けられた翌日にみかづき荘に入居したのも

ここで繋がった縁が切れる前により強固なモノにしたかったから

そも、彼女は神浜の西を統べる魔法少女である。実力もその目でしかと見た。

長いものには巻かれる。強い者の傘下に入るのは弱き者が生き残るための術の一つである。

勿論アートにしたいという意思も少なからずあったのだろうが……

まあ、それは彼女の中にかろうじて残っていたとある人物との記憶、その残滓の影響だろう。

彼女がチャーハンやその他家事が出来るのも、

他者に必要とされる事で一緒に居続けてもらう理由にするためである。

例の事件によつて彼女が記憶を失つてから、記憶が残されない日常をただひたすら繰り返させられ

実家で暮らしていた数週間、数ヶ月の間、彼女は無意識にハウスキーパーの人達に教わつていたので。

（彼女の家は両親も超有名芸術家なので家政婦やハウスキーパー等の職種の人がい
る）

記憶に残つていなくとも、身体は覚えていた。

よく彼女が感極まつて土下座したり、またことあるごとに自分を卑下したりする行動は「孤独への恐怖」からきているのだろう。

彼女は「人に置いていかれる事を何よりも恐れている」

勿論彼女が常時打算的な思考をして、計算づくで行動をしている訳ではない。

しかしやはりその行動理念の原点は「他者への渴望」なのだ。

何故、彼女はここまでして他者の存在に依存するのだろうか。

まるで「本当に誰かに置いていかれた」事があるかのように怯えている。

『アリナ・グレイ』という人物を知っている人からすればこれはありえない変化だろう。

『アリナ・グレイ』といえ、周りへの被害を一切気にせず自らの感情が昂るままに行動し、障害は実力で排除する。

その判断基準に他者への気遣いだとか、思いやりだとか、そういったモノは一切存在しない。

端的に表すのならば「エゴ100%の人間」

そして、そんな彼女の芸術アートのテーマは「生と死」

こんなにも不安になる組み合わせは無いだろう。

事実、最終的に彼女は人類を滅亡させようとした。∴最も、それはこことは別の時間軸なのだが。

某奇妙な冒険第四部にてこんな有名な台詞がある

「この岸辺露伴が金やチャホヤされる為にマンガを描いていると思っていたのかアーリーツ!!」

『アリナ・グレイ』という本質はまさにコレと同じようなモノ。

0から100まで自分のために行動する。

その為の努力は一切妥協しない。

純粋に自分の望みのために全てを犠牲に出来る人間なのだ。

ただ、そんな彼女にも唯一例外と言える人物が居たのだが……

そこらへんは『アリナ・グレイ』のM S S魔法少女ストーリーを読んで欲しい。

———とにもかくにもだ。

「アリナ・グレイ」は「他者に置いていかれるのが怖い」

だから、周りに自らを必要としてもらえるように行動する。

そこに本当の意味での他人への思いやりは無い。

ただ、自分の為だけに、己の欲望のままに彼女は行動する。

『アリナ・グレイ』は「自分の表現したい物を邪魔されるのが嫌い」

だから、邪魔してくる他人を排除し続ける。

そこに他人を貶めてやろうといった悪の感情は存在しない。

ただ、自分の為だけに、己の欲望のままに彼女は行動する。

☆☆☆☆

閑話休題まあ、それはそれとして

話を元に戻そう。

重要なのは彼女は一人を恐れていて、そんな彼女の為に頑張ってくれる人が一気に何十人も増えたという事だ。

これで浮足立つなという方が酷であろう。

さて、彼女が浮かれている理由。

三つ目は「命の危険を感じる事が出来ない事」

いくらこの結界の使い魔が通常よりも強く、まだ彼女が初心者^{ビギナー}の域を出ていないとしても

流石に3チーム、計9人の魔法少女による圧倒的物量

それに加えてほぼ全員が一騎当千の凄腕魔法少女

こんな条件下でピンチに陥るワケが無い。

彼女達の進軍を止めようと真正面から突撃してくる使い魔の軍勢は

振る度^{常盤}に花びらが舞う^{なか}二刀により横一文字^縦に消し飛ば^スされ、

蒼い激流^{七海}を伴う槍^{やちよ}の突進によって直線^横上の使い魔は大穴^スを開け地面に倒れ伏す。

運良く二刀と槍^{プラスチックラッパ}による苛烈すぎる猛攻を掻い潜ってきた使い魔も、

十咎^{チャー}もここ、志伸^ゴあきら、純美^ラ雨によるチャージドロー三連発からのチャージ^C連携^C

の前に倒され、

オマケに一気に稼がれたチャージはそのまま特攻隊へと送られ、最前線の火力が更に跳ね上がり多くの使い魔が吹き飛ぶ。

前衛が使い魔の大群を相手にしている間、当然後衛に横や後ろから不意打ちを仕掛けてくる使い魔もいたが、

後衛の護衛として残った水波レナにより、トリプルアクセルからの速攻マガリア連打によつて駆逐される。

彼女に守られている後衛は夏目かこがたまにアクセルドローで全員にMP配った^{魔法のページ}、マガリアで自動回復バフばら撒いたり、

秋野かえでが霧のデバフを撒いたり（出発前の調整で新しく覚えたらしい）、葛魔法で水波レナの足場を作ったりしている。

そんな彼女達の間で挟まれているアリナ・グレイの仕事は、ただひたすらに遠くから使い魔を撃つて撃つて撃ちまくるのみ。

これでどうやって命の危機を感じると？

どう考えても火力担当ばかりのチームで、必然的に後衛の仕事が少ない。

ブラストゴリラ×2（そのうち一人はブラストドロー持ち）

チャージゴリラ×3（全員チャージドロー持ち）

アクセルゴリラ×1

アクセルドロー持ち×1

デバフ&mp;地形形成×1

こんな脳筋の集まりの中に多少マシになったもののまだ低レベル故に十分に能力が育っていないアリナ・グレイが入っているというワケだ。

前線に出たら足手まといになるだけだし、かと言って彼女がいる一番奥まで攻撃は届かないし、

また前述の火力UPと眼による必中によって一撃で倒せる快感も合わさり、彼女はついついゲーム感覚で戦っていたのだ。

アリナ・グレイは浮かれていた。

他の少女達も安心していた。

こんなに人数がいて、連携もしっかり出来ている。万に一つも負けることは無いだろう。

だからこそ、万に一つが起こってしまった。

『旧』 ほむら編 第一章「見滝原攻略 使徒、襲来」
ほむら編その1

☆☆☆☆

「また、救えなかった……」

もはやここが実家なのでは無いかと錯覚してしまう程見慣れた天井を見ながら、私、
暁美^{あけみ}ほむらは目を覚ました

もう、すっかり涙は枯れ果ててはいるが、まどかの最期の姿は瞼の裏にくつきりと焼き付いて離れない、

今回のまどかの最期の言葉を反芻していると、喉の奥から熱く不快な物がこみ上げてくる

ゴミ箱の前まで移動し、中身の無い胃液を吐き出す

何度も何度も幾度となく経験してきたこの時間遡行だが、やっぱりまどかを救えなかったこの感覚は慣れたもんじゃあ無い

私は沢山のまどかを見殺しにしてきた、沢山のまどかを殺してきた、

私が戻れば戻る分、まどかは死んでいる

私がまどかを救うなんて、おこがましいのでは無いか

こんなにも血で穢れてしまった腕で、まどかは笑ってくれるのだろうか

少し、弱音を吐いただけで今までソレを溜め込んでいた堰は決壊し、自己嫌悪が体中を焼き尽くす

これは必要な事だ

そもそも時間遡行など本来はあり得ない

そんな物を扱っている以上、その罪は常に忘れてはいけけない

私のワガママで振り回してしまった数多の世界、数え切れぬ程のまどかを忘れてはいけけない

これは私の咎だから

だからといって、いつまでもよくよくよしては居られない

こうやって吐いている間にもこの世界のタイムリミットは迫っている

だから、私は心を切り替える、

胃液が垂れる口元を拭い、間延びした独特のイントネーションでこの言葉を口にする
「はい、よいスタート

魔法少女の運命その他諸々からまどかを救うRTAはーじまーるよー」

それは、始まりの合図、

かつて、こことは違う時間軸の、死んでしまった「鹿目まどか」かなめとの思い出……

Part. 1/X 「強くてニューゲーム」

さて、いつもの儀式が終了したあとは、パツパと行動していくわよ

マイナスの感情は最初に来るだけ出し切る、その後もスキを見て適度に吐き出して
おかないとあつという間にソウルジェムが濁ってしまいますので気をつけましょう（0
敗）

まずは魔力を使って視力を矯正、着替える時間ももつたいたので魔法少女姿に変身
して病院の窓から抜け出す

いつも通りに自衛隊の詰め所に潜入、

私の固有魔法「時間停止」を使ってハンドガンにサブマシンガン、ショットガンや狙

撃銃等の銃火器をわんさか拝借する

地对空ミサイルやC4と呼ばれるプラスチック爆弾、グレネード手榴弾やスタングレネード閃光手榴弾、スモークグレネード発煙手榴弾などの便利グッズ以外にも、戦車や軍用ヘリコプター等の乗り物系もお借りして、ムリヤリ盾の中の拡張空間に入れる

勿論、弾や燃料等もゴツソリ貰ってきた

この一連の武器調達によって何人かの自衛隊の方たちの首が飛んだりするのだけ
ど……

まどかを助ける事は世界を救うことになるので、そのための命と思えば安いもので
しよう

おっと、これだけは忘れてはいけない

中にガソリンがたっぷり入ったタンクローリー

これまた別の時間軸でのまどかの趣味に影響されたもの。「ジョジョの奇妙な冒険」というその漫画には時間停止の能力を操るラスボスが出てくる。その時間軸のまどかはその漫画の大ファンで、私の固有魔法を知ったときには劇中の名シーンを再現させられたものね。このタンクローリーはそのラスボスの最後の特技で使ったモノ。本編ではロードローラーなのだが、かなり昔に作られたOVA版ではタンクローリーとなっていて。おそらく、その後の爆発演出に理由をつけるために変えられたのだろうけど

……。それはともかくこのタンクローリー、単純に火力が高い。この愛車には何度となく助けられたことか……。毎回前の周のワルプルギス戦の時に突っ込ませて爆発させてるから周の始めに確実に調達しないといけない。これを用意するのをうっかり忘れた周はもう、散々な目にあつたものよ

さて、一通り武器調達がすんだら学校が始まるまで魔女退治に専念ね

ここの魔女の配置パターンで今回の周がどんな世界かがあらかたわかるわ

ほんの一例だけでも初っ端芸術家の魔女にあつた場合は私の最初の周に近いパターンの世界ね

さ、とりあえずいつものアパートを借りに行く道すがら魔女を狩りましょうか

〜一時間後〜

「……おかしい」

私は何の問題もなく借りれたアパートの一室を魔法で改造しながら思考する

いくらなんでも一時間もあつて一度も魔女に遭遇しないなんて不自然極まりないありとあらゆる試走で確認できた魔女の結界の位置は全て訪れた

が、結果はハズレ

魔女どころか使い魔の気配さえ無かつた

「なにより、私の1万を超える統計にはそんなパターンは一度も無いはZ……………ツ!!」

その時、ほむら八木に電流走る

思わず手に持っていた飾り付けの写真を床にバラまいてしまったが、そんなことを気にしている場合じゃない

私はバカか!?

何故あのレコードの事が真つ先に出てこない!?

『魔女が普段よりも少ない』

それすなわちマギウスが活動しているという事じゃあない!!

…それは、かつて私がまだメガネをつけていた頃、一度だけ体験した不思議な時間軸「環いろは」という少女の契約によりその妹と二人の天才が契約によってインキュベーターの権限である『回収』『変換』『具現』を奪い、

『回収』が暴走をし始めたタイミングに「アリナ・グレイ」が間に合った時間軸

唯一、あのワルプルギスの夜を討伐できた時間軸

結局、その後なんやかんやあった後の、プロミスドブラッドとの戦いの最中、まどかは「観鳥令」を庇って死んでしまったから私は諦めて時間遡行したのだけれども……

まさか、またもやそんな奇跡的な時間軸に巡り会えるなんて!!

こうしちゃあいられない!!

とりあえずキュウベエの排除は後回し

最悪、まどかが魔法少女になっても問題ない

このタイミングなら既に神浜での自動浄化装置は完成しているはずだから……

それよりも、今現在問題なのは

「《まどかスレイヤー》こと：美国織莉子ね」

まずは彼女とコンタクトを取らなくては何も始まらない

神浜に行っている最中にまどかが殺されていたら本末転倒なのだから

ただ、この周の彼女は話を聞いてくれると良いのだけれども……

と、その前に、

キュウベエを殺さない√なのだから、バマミの元へ菓子折り持って挨拶にいかないともしかしたら、佐倉杏子とまだ仲違いしてないかもしれないしね

ほむら編その2

ピピピピピ　　ピピピピピ

無機質なアラームの音が鳴り響く

穏やかな朝の日差しが差し込むその空間は、ただ舞っている埃が白く輝き漂うばかり
で何も動き出す気配は無い

そんな空白のままの時が過ぎると

ジリリリリリリリリリリリ

痺れを切らしたように今度はベル型のアナログチックな目覚まし時計が動き出す

電子音と金属音の大合唱

たまたまずっとといった様子でロフトの上のベッドがもぞもぞと蠢き出す

掛け布団の中から腕だけが伸びてきて、枕元にあったスマホのアラームを止めるもの
の、大音量を撒き散らす目覚まし時計はロフトの上からでは遥か遠い、部屋の反対側の
壁の棚に置かれている

けたたましい金属音から逃れるように掛け布団の隙間が内側から閉じられるが、その
程度で聴こえなくなる程目覚まし時計はヤワじやあ無い

すると、掛け布団の中から黄色いリボンがするりと這い出てきた

空中をひゆるりひゆるひゆると進むリボンの挙動は傍から見ると奇妙な触手、もしくは異常に細長い一反木綿のよう

あつという間に目覚まし時計までたどり着いたそのリボンは目覚まし時計の裏にあるつまみスイッチを器用につまんでOFFにすると、シユルリと元の布団の中へと戻っていく

そのリボンが戻り切る前に今度は複数のリボンが掛け布団の中から出てくる

一つは下階の棚を開け、着替えと制服をベッドの上まで届け、

一つはテレビのリモコンを操作し朝のニュース番組を点ける

一つは脱衣所にまで飛んでいき、洗濯機に服と洗剤と柔軟剤を入れスイッチを押し、その他複数のリボンはキッチンに向かい、

パンを取り出し、冷蔵庫の中から卵、ベーコンを取り出し、ガスのツマミを回してフライパンを温めて……分担作業の末にあつという間にベーコンエッグが出来上がった

その朝食をお盆に載せこぼさないようにベッドの上に運んでいくとようやくそのリボン達の主は布団の中から出てきて、

「ン、ン、ン、クアツ……」

割と変な声をあげながらひとしきり伸びをしたあと、朝食の盆に乗ったおひやを数回

にわけて飲み干した

朝食を食べ終わる頃には完全に目が覚めたみたいで、ハッキリとした手付きで寝間着から制服に着替えていく

新たなリボンが生成され、彼女の髪に巻き付くと途端に見事なドリルを巻かれていき、リボン達は髪飾りに姿を変える

そうしている間にも他のリボン達はせつせと部屋を掃除していき、主がロフトから降りてくる頃にはほぼ全ての部屋の掃除が終わっていた

「そして、映えある今日の運勢第一位は……おめでとうございます!!乙女座のあなたです!!」

テレビではちょうど朝の占いが流れている

それを横目にフツツと笑うと、彼女は顔を洗いに洗面所へと向かっていった

彼女こそ、この部屋の主であり、ここ、見滝原市をテリトリーとするベテラン魔法少女「バミバミ」である

「今日も良い一日になりそうね♪」

人はそれをフラグと言う

☆☆☆☆☆☆

～放課後～

学校の課題も終わり、そろそろパトロールに出ようかという時
なんてことのない日常は終わりを告げた

「ツ…!!!」

突如、今までに経験した事の無い程の膨大な魔力が現れたのだ

魔力パターンから魔女のものでは無く魔法少女の物であることはすぐに分かったが、それは魔法少女がもつにしてはあまりにも重く、濃厚で、のしかかってくるかのよう
な魔力だった

真つ先に出てきた感情は「恐怖」

まるで自分なんかとは格が違うのだ、とでも言わんばかりの高圧的な魔力に脚がすく
み、玄関先ながらもへたりこんでしまった

粗相もを犯らさなななかつたただけマシだと思う

ひとしきり恐怖と戦いきった後には、一体どこから発せられているのか？という疑問

が浮かんでくる

正直関わりたくない、今すぐダツシユでこの魔力の持ち主が追ってこられない何処か遠い場所まで逃げ出したいのだが

もしも、この魔法少女が見滝原のテリトリーを狙っているとしたら、それは出来ないいや、この魔法少女がいい人であれば何の問題も無いのだけでも

いたずらにグリーグシードを独占するだけでは無く、一般人にまで危害を加える「悪い魔法少女」だったら……

その時は私はこの誰とも知らない魔力の持ち主に立ち塞がらなくてはならない
黙って悪を見過ごすほうが私にとっては怖いから

だから、接触はしなくてはいけない

正義なのか悪なのか、判断する為に

「スウー……ハアアアアア」

深呼吸の後、決心しその魔力の濃い方へと探りを入れると、思いの外早くに見つかった

いや、思いの外早くなんてものじゃあ無い

この魔力は私の部屋目の前の廊下から発せられていた

そんな……嘘だ……ありえない……何かの間違いであってほしい

ピンポーン

勿論間違いなんでものは無く、その裏付けのようにインターフォンが鳴り響く頭の中で沢山の私が発狂して転げ回る映像が浮かんだのは一種の現実逃避であろうおそろおそろ、玄関ののぞき穴の蓋を震える手で開けて外の様子を伺う

「ヒッ…!?!?」

扉の向こうには黒髪ロングの少女が居た

見滝原の制服に身を包み、優越感からであろうか? その口は微笑みをたずさえているその姿は人間かどうかを疑うほど妖艶だ

そんな謎の少女と目が合った

合ってしまった

「はじめまして…:でいいのかしらね?」

気がつくとな彼女は何故か私の背後に立っていた

彼女から発せられる圧倒的存在感を生で背に感じる、この状況の非現実さは到底理解できるものでは無く、ビクンと体が飛び跳ねるとなんとか奮い立たせていた心が一気に恐怖で支配されてしまった

咄嗟に振り向き、なんとか彼女と対峙はするものの、膝と歯はガタガタ震え、立っているのもままならない

距離をとるように後退するも、脚が言うことを聞いてくれず、体制をくずしてしまい、それでも腕だけで移動しようとしてすぐにドアに当たって止まってしまった

『詰み』

まさしくこの状況を表すにはうってつけの言葉だろう

ああ……きつと私はこの少女に成す術もなくあつという間に殺されてしまうのだ
そんな思考が頭を支配し、私は意識を自ら手放してしまった

★☆☆☆☆

次に目を覚ましたのはベッドの上だった

うん……ベッドの上なのは間違いない

窓の外が暗いから夜だという事もわかる

ただ、私の頭の下には温かい人肌の感触があり、目の前には例の恐ろしい魔法少女が視界いっぱい広がっていた

「あら、気づいたかしら？ごめんなさいね、魔力を隠すのを忘れてて不用意に怖がらせてしまったみたい」

彼女は先程見せた微笑みとは異なり、人の良さそうな笑みを浮かべて何でもない事のように言う

その声はとても優しく、聞いていると心が安らぐようだった

なるほど、確かに今の少女からはあの威圧的な魔力は一切感じられない……というか本当に魔法少女なのか疑うレベルで魔力が出ていない

『魔力を遮断する』そんな芸当は見たことも聞いたこともやった事も無い

おそらく彼女の反応からして、私のように怖がられるのはいつもの事なのだろう

本当に彼女は何者なんだ

とりあえず、体を起こして話を聞いてみる

「あ、あなたは……？」

状況を見るに私を看病してくれたみたいだし、すぐに害を為すというわけでは無いでしょう

「自己紹介が遅れたわね

私の名前は暁美ほむら

今度、見滝原中学に転校してくる魔法少女よ」

「そ、そう……何はともあれありがとうね

私を尋ねてきたって事は、既に知っているとは思うけれども

私はバマミ、この街をテリトリーにしている魔法少女よ」

とりあえず、いつも他の魔法少女とあつた時と同じようにテリトリーの部分を強調して牽制する

それが彼女… 暁美さん相手にどれだけ通用するかはわからないけれども

「……………」

「……………」

二人の間に沈黙が流れる

テリトリーの話題を出したのはマズかった

暁美さんの機嫌を損ねてしまったかもしれない

今も暁美さんは私をじいっと見つめてきている

それに対して、私は彼女のなんらかの強い意思を秘めた瞳を直視することは出来ず、目をそらしてしまった

「フフツ……」

そう、いきなり笑つたのは暁美さん

「なにか勘違いしているようだけれど、

私はアナタからこの見滝原を奪おうとしてるわけじゃあないわ」

いつの間にか目の前に迫っていた暁美さんの手が私の頬に触れ、そらしていた顔がぐ

いつと暁美さんの方へ向けられる

「えっ……ちよ……ふうえ……？」

強制的に見せられた暁美さんの顔はのぞき穴から見たときよりも恐怖で震えながら
みた時よりも遥かに整っていて、

そんな少女漫画のような展開に内心かなり挙動不審になり、顔がオーバーヒートする
暁美さんはわちやわちやしてる私をもう一方の腕で抱き寄せ耳元で囁いた

「あんなに青ざめる程怖がらなくてもいいじゃあない…安心して…安心していいのよ…
巴さん…恐れる必要は無いのよ…ワタシと…おともだちになろう？」

それは……とてもとても甘い提案で、私が最も求めていたモノで、当然私には抗う術
も意味も無かった

「は……はひい……」プシュー／／／／

最も、この後また意識を手放した事は言うまでもない

★☆☆☆☆

Part. 2 / X 「百合の眼光」

超序盤からラスボスの部屋に突撃!!なRTAはーじまーるよー

今回はまどかを魔法少女にする√という事で、最大の敵は『美国織莉子』になります
彼女の固有魔法は『未来予知』という強力なモノ

本来ならば、この能力を使ってワルプルギスの夜の襲来を予知し、それを食い止めるために戦ってくれる魔法少女なのですが、

私が何回も時間遡行を繰り返したせいでまどかに因果が収束して、結果まどかの持つ因果量が通常では考えられない程に大きくなってしまいました

そんな彼女が魔女になったら、ワルプルギスの夜を超えるさらなる災厄となります
(確定事項)

彼女はこのまどかの魔女化の未来をみた場合に限り、まどかの命を狙う『まどかスレイヤー』となって襲ってくるわけですね

魔法少女になる前、後、関係無しにです

だから、いち早く説得しまどかが危険をもたらさない事を証明出来なければ、まどかは四六時中命を狙われる事になります

と、いう訳で彼女が住む家に直行……するにはまだ早いですね

そもそもこの午前中の時間帯ならば彼女はまだ学校のハズ

なので先にバمامィとの初邂逅にそなえて、ケーキと紅茶を買っておきましょう

世界線にもよるけどもمامィは大抵、駅前にあるケーキ専門店のケーキを食べさせると信頼度が上がります

ただ、そこはいつも混んでいてお目当ての一番人気のショートケーキはかなり並びばないといけないです

普段ならばただのロスなので適当にデパ地下で見繕っていくのだけでも、マジウスが活動している以上魔女は少ないので時間が有り余るので並びましょう

基本的には織莉子の説得は神浜に連れてって実際にドツペルを体験してもらう以外に思いつかないので準備するものも無いしね

さて、よさげな紅茶も手に入れたら、ちようど夕方あたり

そろそろمامィも家に帰っていることでしょう

それじゃあ巴家に：イクゾー！デッデッデデデッ！！（カーン！）デデデデッ！！

巴家に到着です

さて、バمامィについてだけでも、彼女は基本的に二年以上活動しているベテラン魔法少女です

それ故に魔女の狩場である見滝原を狙った市外の魔法少女からの襲撃等を経験している場合が多く、見慣れない魔法少女に対して一定以上のラインを超えさせてくれませ

ん

そういう所が今の状況の原因だと思うのですがそれは（ブーメラン）

内心では一緒に戦う仲間及び友達に焦がれており、魔法少女になった経歴と長いこと一人暮らしゆえに精神が大変不安定です

この豆腐メンタルですが、立ち直らせてはいけません
後に必要になってきます

と、いうのも今回のようにマジウスが活動している時間軸は前に体験した一回しかないので、出来るだけ当時と同じチャートで走りたいんですよね

よってママには悪いけれども？ホーリーママミ？になってもらいます（無慈悲）

向こう側に言ってもらわないとマジウス側の戦力が足りなくなつてワルプルギスの夜を呼ぶ前に解散なんてなつたら悲惨だしね

神浜の方に呼び寄せてもらわないと見滝原にワルプルギスがやってきてしまうから彼女達には頑張ってもらわないと困る

正直私を見滝原でのワルプルギス攻略はほぼ不可能だと思つてます

と、いうのも理由として

・魔法少女の数が少ない（神浜がおかしいだけ）

・ドツペルが存在しない

・市外の魔法少女に協力を求めづらい
等があげられます

戦いは数なので魔法少女の数が多い神浜で戦った方が遥かに勝算はありだろう、というワケです

しかし、そんな豆腐メンタルバママですが、ちゃんとフォローしてあげないと何処かのタイミングで死んでしまいます

大抵はお菓子の魔女Charlotteに頭から食い殺されます

「もう私、ひとりぼっちじゃあ無いもの」は死亡フラグなのでやめてもらっていいですか？

よって、普通に友達になつたら死んでしまいます
メンタルを治しても別の意味で死んでしまいます

しかし放置してたらなんか勝手に死んでしまいます

八方塞がりです

よって、ここは隷属√で行きます

隷属√とはバママを圧倒的实力差で支配下におく√です

うん、普通だな！

ええ…補足すると、バママは魔法少女の中でも最強クラスです

それはどこの時間軸でも変わりませんでした

ですが、それは魔力の感知にも長けているという事

魔力の大きさを彼我の実力差を推し量る技術はベテランなら大抵は習得してます

今回の隷属√はそこに付け入って勘違いを引き起こすチャートになっています

さて、まずは時間を止めましょう

The Worldザ・ワールドオツ!! 時よ止まれえツ!!

時を止めたら一気に巴家の玄関先まで行きます

そしてここで魔力開放!

魔力開放とは意識的に魔力を外に漏れ出させる技術になります

普通は魔法少女は他の魔法少女のソウルジェムの魔力を感知しています

この技術はそのソウルジェムの魔力がトンデモなく大きいものだと思認させる技術

なわけですね

さて、魔力開放した状態で時を動かします

ハイ、部屋の中からバマミの反応がありましたね

おおむね恐怖と困惑が6:4ってあたりですか

ほいじゃあインターフォンをならします

ちわーす宅急便でーす(大嘘)

こうするとたいていの人はのぞき穴から外を伺ってくるので、そちらからバمامミと目をあわせましょう

よつぼど変なことをしない限り勝手に恐れてくれます

それじゃあまた時を止めて鍵を開けて中に入りましょう

しつかりとドアを閉めて鍵をかけたなら時を動かします

「はじめまして…でいいのかしらね？」

何か意味深なことでも言っておきましょう

恐怖の足になります

さて、そのバمامミですがこつちを振り向くと同時に転んで床をものごい勢いで後退して行ってドアに頭をぶつけて気絶とかいうおもしろテクニックを披露してくれました

ええ…なにやってるの……

☆☆☆☆

取り敢えずバمامミをベッドに寝かせました

普通の怪我と違ってパニックによる気絶は何時起きるかわからないですからね

さて、悲しいおしらせです

完全にこの後の予定が崩れました（ガバ）

というのもバマミの懐柔はさっさと終わらせて、それも数分程度で終わる予定だったんですよ

その後で美国織莉子の家に失礼しに上がる予定だったんですが、バマミがこの様子だと離れられませんか

ここで放置しちゃうと完全に隷属√は失敗してしまうので早くバマミが起きてくれるのを待っただけです

おきてさえいてくれればあとはもう、長年の努力で培ってきた圧倒的カリスマでイチコロですよイチコロ

伊達に何千何万と時間遡行をくりかえしてるわけじゃあないんです

はあああ（クソデカため息）

夜になってようやくバマミが起きました

ここからノーミスなら美国織莉子に接触する時間が取れるので最短で懐柔しましよ
う

「あら、気づいたかしら？ごめんなさいね、魔力を隠すのを忘れてて不用意に怖がらせてしまったみたい」

.....

「は……はひい……」プシュー／／／／

ハイバマミ、陥落です

今回のこの隷属√を完走した感想ですが、ハッキリ言って怖がらせすぎましたね

まさかあそこで気絶するとは……

この方法は別に魔力開放を行わなくとも実は今の私ならバマミ以上の魔力なので出来るのですが、いかんせん試走では安定しなかつたのでダメ出しとして魔力開放を使いました、今回はソレが裏目に出てしまったかたちですね

ですが、そこからの会話パートでのリカバリーはうまく行ったと思います

バマミはぼっち属なので色恋沙汰に対する免疫が特に薄いです、咄嗟にあの判断が出たのは短縮ポインヨだったと思います

あとは、そうですね……「D I O様ごっこが楽しかった」って所ですかね

さて、バマミと仲良くお茶したあとで、これから美国家に单身突撃といったところで、今回はここまで

ご視聴ありがとうございました。

☆☆☆☆

ほむら編その3～前編～

☆☆☆☆☆

美国織莉子の固有魔法は「未来視」である

数十秒先、なんてちやちなモンじゃあ断じて無い

真正正銘未来の出来事が見える

常時発動型故に燃費は悪いが、集中すればその精度は凄まじく

応用しだいでは戦闘で常に優位に立つ事が出来るだろう

そんな彼女の最初の予知はまさしく世界の終末だった

吹き荒れる大嵐

巻き上がる大量のビル

高笑いをあげる舞台装置の魔女ワルプルギスの夜

それと相対した一人の魔法少女鹿目まどか

その一撃であっけなく舞台装置の魔女は倒れ伏すものの、倒した魔法少女の様子はお

かしい

その後、舞台装置の魔女を遥かに凌駕する最悪の魔女となった彼女の暴走は7日間続

き、

世界は滅亡した救済された

その未来を変えるため、彼女は鹿目まどか暗殺計画を実行する

時にはキュウベえに囷の情報を掴ませ、

時には駒を増やし、

時には魔法少女を殺害する

それが私、美国織莉子の使命なのだから

★☆☆☆☆

「そうだね、次はちゃんと魔法少女だけ殺すよ」

葬式の帰り道、なんの変哲もない歩道橋で彼女は語る

「織莉子、私は生まれ変わったような気分なんだ

いや、気づいたんだ

忘れていた願いに！」

目の前で上機嫌にぴよんぴよんと飛び跳ねながら語る黒髪の少女には

人を殺してしまい、罪の意識に潰れてしまうような

そんな弱いココロはもう、どこにもない

「それはきつと今私に溢れるこの感動だよ

すごく大きくて重くて

そして軽やかで晴れやかに

私の心は上等に富んでいるよ」

彼女は恍惚とした表情で笑いくるくると回る

「誰にでも笑顔を振り撒けるし

誰だって刻めるさ」

よかつた、ちゃんと完成したようね

私の駒として使える硬いココロが

「織莉子のためならね」

そう言つて彼女は私にくつついてくる

ああ……

この子を私色に染め上げられたという事実が全身を駆け巡る

ビリビリと流れる甘い痺れが私の感情を昂ぶらせる……

これで私の使命を果たしやすくなったという事はそうだが、純粹に私の事だけを見てくれる存在は彼女だけだ

そんな彼女をここまで私の為だけの人間に創壊する事が出来た

もう恐れる事は何もないような気分だ

私達は誰にも負けないという興奮が湧き上がってくる

「織莉子早く命令しておくれよ」

その欲望は幼い私の名残だったのかもしれない

しかし、その程度の事は、この溢れ出る情欲の渦の前ではどうでもいい有象無象の情報と等しい

誰かに私を見てもらえる

誰かが私だけを見てくれる

こんなにも素晴らしい事が他にあるだろうか

愛はそそいだ分だけ返されるのだ

……だが、この感情は表には出さない

彼女が求めているのはそんな私じゃあない

魔法少女美国織莉子なのだから

「気持ち昂りすぎて私、後ろ足が跳ね上がっちゃうよ」

奇遇ね、私もアナタというアナタをめちゃくちゃにしてあげたくてしようが無いの

「ぶっ、後ろ足つて……猫じゃないんだから」

けれど、今はまだその時じゃあ無い

私の使命が全て終わった時

私達の世界の中で一緒に過ごすためにはまだ動いてはいけ
ないだからくすつと笑って受け流す

「今日は大人しく帰りましょう」

「えっこの新鮮な動力をどこにぶつければいいのさ」

それに関しては完全に同意したい

この感情を魔力に変換できたら私の固有魔法も使いやすくなるの
だろうけれど

「じゃあ家に来る？」

その元気はパンケーキにぶつければいいわ

よしっ

自然にお家デートのお誘い成功！

「うんーうんーうんー！」

彼女も飛び跳ねて喜んでいてくれる

本当、使命なんてほっぼりだしてずっと幸せに暮らしたいもの
ね

「ところでキリカ、すごく歩き辛いんだけど」

そんな幸せな日常だったがそれを邪魔するいつもの横槍が
入れられた

ブオン

また、予知か……

これは、複数の魔法少女が一人の魔法少女と戦っている…？

風景はこの街では無い…じゃあ隣町かしら

一人の魔法少女を護るように魔法少女がその腕を振るう

魔法少女を操る魔法少女なんてのもいるのね

なるほど、これは計画に使えるわ

この魔法は本当にコントロールすることが出来なくて使い勝手が悪い

突然どこかの光景が頭に浮かんできても混乱する事はなくなつたにしても

さつきまでの幸せな気持ちを潰されたこのやり場のない怒りをどうしたらいいものか…

ただ、たまにこうやって有益な情報が得られるのは間違いない他には無いアドバンテージだから我慢せざるを得ない

「キリカ」

「ん？」

「残念だけどパンケーキは…」

ブオン

また？二回連続は珍しいわね…

今度は…私の家？時間は深夜か

ッ…!!

知らない魔法少女が私の部屋に乱入してきた

窓ガラスを蹴り割るなんて随分と派手にやるのね

髪型は黒のロングストレート…いや、若干2つに別れている？

魔法少女姿は学校の制服の改造みたいな感じであり突飛な特徴は無し

左手に小型のラウンドシールド

魔力的にコレが固有武器ね…

って!?!?!消えたと思ったら大量の爆弾？

あ、コレ逃げ切れな…

額に冷や汗が垂れる

どうやら私はトンデモない相手に目をつけられているらしい

予知の中ではあったが、彼女から溢れ出る膨大な魔力を感じた時の

この言いしれない恐怖は彼女が相当の実力者であることの証明だろう

そして、おそらくあの大量の爆弾はブラフ

死ぬ直前に感じた衝撃は私は爆殺されたのでは無く、横から頭を撃ち抜かれた感じのもの

爆弾を大量に持っているだけでは無く、銃も所持している……

そして、あの突然消えたり現れたりする能力も厄介だ

多分、私とキリカだけでは勝てない

さっきの予知で出てきた魔女使いも仲間にしたほうが良いわね

「織莉子？ どうしたんだい

いきなりだまりこくって考え込んで…

ハッ!? もしかしてまた予知かい?

魔力は大丈夫? 減ってない? グリーフシードの予備は持つてる?」

目の前でかわいい駒があわわわしている

かわいい

そうね、弱気になっていたらそれは美国織莉子ではない

もつと自信を持って、不敵に笑え、何もかも見通している風に装うんだ

「キリカ、命令よ」

その言葉を聞いた途端、駒の表情にパアツと笑顔が灯る

☆☆☆☆

その後、私達は固有魔法「洗脳」を持つ魔法少女『優木沙々』と接触

ネコ被っていた彼女の要望どおりに風見野の魔法少女達を暗殺し、かつその後の身の安全を保証する事を条件に一時的な協力関係を結ぶ事に成功

そして、予定通りにキリカを風見野の魔法少女達に突っ込ませ乱戦に持ち込んだ

この乱戦の中に鹿目まどかを連れてくる作戦や、他の魔法少女を魔女化させる作戦もあつたが優木沙々に逃げられる可能性があるのでは

普通に戦って全員蹴散らした

しかし、その際の非人道的な行為の数々から優木沙々の中で私達はすっかり『ブツ壊れている奴ら』になってしまったらしく、

その後全くネコ被る事は無くなったりしたけども、まあどうでもいいことね

そして、鴉も寝込む丑三つ時

私達は屋根の上で対襲撃者戦の最期の作戦会議を開いていた

「いいかしら？襲撃者はもうすぐこの道を通る

私とキリカで引きつけるからすぐに沙々さんは魔女結界を張って頂戴

その後、アナタの魔女と一緒に私達が戦うから

スキが出来たら死角から「洗脳」をしてほしいの
わかったかしら？」

この作戦の肝となる彼女にそう問いかけるが

「いや、わかるわけねえーだろおッ!!」

なんで私がそんなトンデモなく強い魔法少女との戦いに！それも一番重要なポジ
ション任せなきゃなんねえんだよッ！やってられつか!!」

まだ乗り気じゃないようだ

「あかさあ……ささささささ」

何度も言うてるけど、この襲撃者を殺さないと織莉子が安心して眠れないでしょ？
ささささささささの安全を確保するのはこの襲撃者をなんとかしてからって最初
に言ったじゃないか」

「冗談じゃねえ！私はそんなちよつとミスったら死んじゃうような作戦は御免だよ！
バカ！」

「バツ……バカとは何だバカとは!!バカって言ったほうがバカなんだぞ!!」

「やーいやーい、お前の脳内小学生!!」

二人揃って小学生みたいな事をしている

ここ人の家の屋根の上だからあまり騒がないでほしいのだけれど……

頭が痛くなってきた

正直言つて、彼女の固有魔法「洗脳」は強力だ、

いつ裏切られるかわからないが、例の襲撃者を撃退するにはコレしか方法が無かった予知でどんな方法で襲撃者を倒そうとしても私とキリカだけでは返り討ちにされる未来しか存在しなかった

唯一違ったパターンが優木沙々が協力してくれたパターンのみ……

彼女こそが切り札なのよね

それに、さんざん言っている彼女だがなんやかんやでここまでついてきているきつと頭ではわかってるんでしよう

私達が手をあげるような魔法少女が生きていたら、自分の命も危ない事に

(まあ、最悪の場合私達を盾にして逃げようとかは考えてるんでしようけど)

「時間よ、行きましよう」

すると二人共ピタリと言い争いを止め、こちらを向いて了承の意を示す

「なんでこんな時ばかりチームらしくなるのかしらね」

「あ、ア!? (織莉子お!?) 誰がこんなヤツと!!」

寸分違わぬ動きでお互いを指差し、こちらに抗議してくる様に不覚にも笑ってしまっ

た

「そういう所よ」

その後、私達は二手に分かれ、沙々は空き家の中に隠れ私とキリカが道の真ん中に立って襲撃者を待ち構えた

コツーン

コツーン

コツーン

コツーン

ブーツが地面を蹴る音が響く

ここは高級住宅地の歩道なのに、何故かトンネルの中のように反響する音と共に謎の威圧感が辺りを支配した

自然と息が荒くなり、威圧感が増してゆくと共に体感時間が長く引き伸ばされていく一呼吸するだけでも数秒、数十秒かかるように感じ、非常に息苦しい

威圧感の中心に近づくほど、体が危機を感じてアドレナリンを出しているのかもしれない

キリカもこの摩訶不思議な感覚を感じているのだろう

顔は青ざめ息は荒いが、目が見開かれ、爛々と輝き、滾る闘志を燃やしている事がわ

かる

やはりキリカは私の駒として優秀だ

ひときわ長い一秒の末、

ついに遠くの交差点から一人の少女が現れた

長いストレートの髪は電灯に照らされ濡羽色を輝かせ、紫色の瞳は怪しく光っている間違いない、この時間帯でここを通るのは例の襲撃者だけだ

そこで、隣のキリカがいぶかしげに眉をひそめる

「ねえ、織莉子。本当にコイツなの？」

テレパシーでそう私に聞いてくるのも無理は無い

襲撃者からは魔法少女ならばどんなに弱い魔法少女でも確実に出てくるはずの魔力が全く感じられないのだから

よもや一般人なのでは？と疑うレベル

しかし、それではこの叩きつけるようなプレッシャーに説明がつかない

「……………」

襲撃者の少女がこちらを向いて足を止める

その間約500メートル程度

魔法少女なら本気を出せばすぐに詰められる距離

だが、私達は動けなかった

向こうも動かなかった

それは数秒だったか、数十秒だったか

私には無限の時間にも思えるような長い時間、私とキリカは襲撃者の彼女と真顔で睨み合った

ついに動きだした襲撃者の少女が自らの後ろ髪を横に流し口を動かそうとした

次の瞬間

世界は襲撃者も私達も巻き込んで目まぐるしく変わっていった

あちこちから放たれる毒々しいショツキングピンクの水流、

所々点在しているドギツイ色で輝く水晶で出来た小島が唯一の足場

謎の紅い肉壁で仕切られた巨大なホールのような場所であり、戦うには十分な広さといえるだろう

その目に痛いピンク色の水（：；）の中には大きな怪魚の魔女がゆうゆうと泳いで、こちらに襲いかかる機会を伺っている

【さあさあ私の愛しいガギエルちゃん!! やつちやつてくださーい!!】
どうやら沙々が操っている魔女の结界はちゃんと張れたようだ

まずは先手必勝

不安定な結界内で足場を確保しながらあらかじめ予知しておいた襲撃者の位置に攻撃する

Oracle Ray「オラクルレイツ!!」

私の固有武器は純白の水晶球

それらを多数召喚し操りつつレーザーで切り裂くいわゆる必殺技だ

予知とあわさったこの技は絶対不可避の弾幕

敵の死角から近づき確実に切り裂く文字通りの必殺技

「久しぶりね美国織莉子」

なのだが、技を放つたと同時に背後から声が聞こえる

だが、避けられたとてここまでは想定内

予知で襲撃者の固有魔法は瞬間移動かナニカだという事は割れているもしくは他のモノの可能性も十二分にあるが…あまり関係ないだろう

すぐに振り向き予備で残しておいた一つの水晶球をぶつけるも、空を切る

「あら、危ないわね…いきなり人にそんなものを向けるなんて」

と同時に本命のテレパシーでキリカと沙々に予知で見えた襲撃者の次の移動先を教え

予知通りのタイミングでキリカと魔女がそこに現れるハズの襲撃者の首を切り裂く
Vampire Fang 「ヴァンパイアファングツ!!」

Madness Freezeing 「沼ゆゝ蜥イ縛阪? 悟船縛ヲ縛、縛崎協縛励? 謙ス
蝨偵? 蝨力縛」

しかし、キリカの渾身の一撃は空を切り、怪魚の魔女は何もない場所にドギツイ色の
結晶の花を創り出すだけだった

「んあ!? ナンデいないの!?!」

「縛エ纏薙_下縛? シ√ → 纏薙_下豁、蝨ヲ縛オ縛? → 縛? s纏? シ? シ」
【ちよつ…: テキトーな指示出してんじやねーぞ 美国織莉子オツ!】

誰も居ない場所に攻撃をしたキリカ達は大きなスキをさらす事になってしまい

また何の予兆も無く現れたタンクローリーに轢かれて吹っ飛ばされ、中に入っていた
ガソリンが大爆発を巻き起こす

魔女の方は突如その体中に数多の筒型の爆弾が連なつた鎖が巻きつけられ、爆発すると共に襲撃者が魔女の正面に現れ、多弾頭ミサイルを口の中に打ち込んであつという間に消滅させられた

「不味い……」

思わず口に出てしまう

魔女は倒されてしまったものの、キリカの速度低下の魔法でなんとか魔女結界は崩壊するのを見送られてはいる

が、それも時間の問題

パツと見た感じキリカは右腕骨折左足欠損全身やけど、魔力での回復に集中しなければならぬから戦線には復帰出来ないだろう

そして極めつけは私の予知が使い物にならない事

目の前に再び姿を表した襲撃者に水晶球を操り突っ込ませるも、ことごとく予知とは違う動きをされ全て避けられてしまう

「いやいやいや……こんなバケモン相手に勝てるわけ無いですよオツ!! 私は逃げさせてもらいますねッ!!」

案の定優木沙々が戦線離脱したようだ

私の予知が使い物にならなくなったのだから、当然といえば当然ね
彼女にとつて一番大切なのは自分の身の安全でしょうから

「とうとう、私一人になっちゃったわね……」

遠い向こう側を見ながらつぶやく

「あら、だつたらこちらの話を聞いてくれてもいいんじゃない？」

意外なことに襲撃者の少女が返事をしてきた

「よく、言いますね……こんな惨状を引き起こしておいて、ぬけぬけと」

憎々しげに襲撃者を睨む

貴方がいなければキリカも重症を負うことは無かつたのに

「そもそも、私は何もしてないわ

夜道を歩いていたらあなた達から襲つてきた

攻撃が飛んできたから反撃した……違う？」

痛いところをついてくる

確かに私達は現状何もされてない以上、加害者でしかない……けれど

「確かに、そうかもしれない

けど、貴方がこれから私を殺そうとしていたのは確実でしょう？」

「殺そうとすることと、実際に起こす行動は別物よ」

そんな詭弁をいけしやあしやあと、さも当然の事のように答えてくる
行動には思考が伴う

全ての事象いにはそれ相応の因果関係があり、襲撃される予知が見えたという事は、
それを行動するだけの思考があつたという事

その時点で明確な敵対意識ではないか

そして戦っている最中に見えた予知で一つ疑問が出来たのでカマをかけてみる

「そう……それが貴方の答えなのね……鹿目まどかの『守護者』さん」

「ええそうよ……まどかを殺そうとする『預言者』さん」

即答された

やはりこの襲撃者はどういうわけか鹿目まどかに何も行動していない私の事を知っ
ている

そして最初の予知で見えた光景に一瞬写り込んでいた黒い影

この襲撃者で間違いないのだろう

鹿目まどかの予知の中で私が殺される相手も、きつとこの襲撃者だ

私の仮説が正しければ……

「何度繰り返したの？」

あと何度繰り返すの？」

少なくとも多少は動揺するだろう

そう考えてこの問いを放った

おそらく彼女の魔法は時を操る物

そして私の事を知っているのは未来から戻ってきているから

ならばきつと何回も同じ時を鹿目まどかの為に繰り返しているのだろう

ならばその虚しさに既に気づいているのだろう

だから、相手の弱い部分につけこむ

『永遠』なんてものは人にとって果てしなく長くて、とても手におえるような物ではないのだから

「そうね……私は一ヶ月を繰り返しているけれど、15000回からは数えてないわ
そして、この最高の時間軸で全て終わらすつもりよ」

だから、思わず口が開けっぱなしになったのも仕方ないと思う

一ヶ月を15000回以上!?

単純計算で1200歳を超えるのだけれど!?

まるで戯言のような話だが、彼女の目は真剣で嘘ではないことがハッキリとわかる
「揺さぶっていたのなら、お生憎様

私には精神的動揺によるミスは無い、と思っていたかどうかしら」

その瞳に宿る意思はとも大きく、彼女の回答が正しい事の何よりの証拠であろう
「かつての貴方は私にこう言った

『私は貴方と違う

道が昏いなら自ら陽を灯す

違う道に逃げ続ける貴方が私に敵うはずがない』とね」

「確かに思い返してみればその通りだった

私はその時は現実逃避しかしていなかった」

「でもね、それは貴方にだって言える事なの

貴方は未来の道を見ているものの、そこから選んでいるだけ

ただ、数多にある運命の中から都合のいいものを選んでいただけにすぎないわ」

「クツ……」

何も言い返せない

恐らく彼女に私の予知が効かないのはそういう事なのだろう

私はただの観測者と思い込み、ただただ見ているだけだったのだ

「ええ、言わせてもらいましょう

私は貴方とは違う

道が無いのならば、自ら創り出す

カードを配られるのを待っている貴方が

覚悟をした今の私に敵うハズが無い！！」

眩しい

自分とは全く違うその輝く精神のありかたに思わず目を背けてしまいそうになる

ああ、彼女の言っている事はもつともだ

自分の使命を求めて魔法少女になったけれども、それは間違いだったのだろう

いつの間にか私は膝をついていた

襲撃者の少女はチェックメイトとでも言いたげにソウルジエムに銃口が突きつける

「撃たないの？」

私が問う

「いいえ、撃たないわ」

少女が答える

「別に貴方を殺しにきたわけじゃあないもの」

そう言うって彼女は微笑んだ姿は、かつての母を思い出すようで……

「織莉子に：触るなあああアアアッ!!」

Stepping Fang ステッピングファンク

きつと私達の会話が聞こえていなかったのだろう

キリカのツメが少女に向かって射出されていた

その質量と速度から、私を救おうと自分の回復を後回しにして魔力を全て使い切った
全力の攻撃だという事がわかる

気づいたら咄嗟に身体が動いていて、少女を突き飛ばしていた

よくわからないが、この少女には生きていてもらわねばならない、という予感がした
ような気がする

そして、突き飛ばしたという事は、私がキリカのツメの攻撃を受けるといふ事
世界が再びスローになる

遠くでキリカがこの世の終わりのような顔をしているのがハッキリと見えた

また違った方向からは、優木沙々がこちらに向かって駆け出しているのも見えた

だが、やはりと言うべきかなんと言うべきか

次の瞬間、私の視界は突き飛ばしたはずの少女で一杯になっていた
アドレナリンで引き伸ばされている体感時間の中、
確かに彼女はこう言った

「もう一つ教えておくわ

覚悟とは自己犠牲の心では無い

覚悟とは暗闇の荒野に、進むべき道を切り開く事よッ！」
そして彼女は3つの言葉を呟いた

「^{アイス}氷雪属性纏繞特技」「^{ヒヤダ}中級氷雪魔法」「^{バギ}真空魔法」

そこからは驚きの連続だった

魔法少女なんてものをやっている以上、非日常に生きているつもりだったが

この光景は次元が違いすぎた

つぶやきと共に彼女を中心に謎の文字が空中に刻まれ、とてつもない冷気を帯びた風

が巻き起こる

その風は一つの束になって彼女に巻き付き、瞬く間に堅牢な氷の鎧……？ダイビングスーツ？のようなナニカになった

例えるのならば日曜日の朝にやっている仮面ライダーに似ているような似ていないような………？

顔の部分だけは透き通った氷で出来ており、

頭には何故か、本当になんてかわからないがネコミミ（？）のような飾りが氷で表現されている

いや、本当になんてネコミミ？

そういう雰囲気の人には見えないのだけでも…

周囲の空気は完全に凍りつき、至るところにキラキラとダイヤモンドダストが浮かんでいる

キリカのツメがもう目前にまで迫っていたが

着弾する直前でナニカに弾かれたように甲高い音を響かせ進路を変えた

そして、空中で見えない壁に何度も弾かれたキリカのステッピングフアングは明後日の方向へと飛んでいった

とても信じられない

キリカのツメは空中に輝いているダイヤモンドダストに弾かれて進路を変えたのだ
どうやってあんなに小さなサイズの氷が、空中で攻撃を弾けるほどの強固さで固定さ
れているのか

全くもって理解不能だった

頭がどうにかなりそうだった

魔法少女や魔法の範疇からはみ出ている

恐ろしいものの片鱗を感じた

遠くでキリカが力を使い果たし崩れる音が聞こえる

それと同時に、周囲の魔法結界が消え去り元いた住宅街に投げ出された

見るとキリカが倒れているのは道路のど真ん中

いそいでキリカの元へと駆け寄る

身体の傷は殆ど治っておらず、ソウルジェムは既に穢れで真っ黒で魔法化ギリギリの
状態だった

懐からグリーンフシードを取り出そうとするも、どこにも見当たらない

最悪の未来を想像してしまい、血の気が引いていく

すると、横から少女がキリカにグリーンフシードを使ってくれた

感謝を伝えようと少女の方を向いたが、そういえば名前を知らない事に今更ながら気

づく

「ありがとう……お名前を聞いても？」

「暁美ほむら……ほむらでいいわ」

暁美ほむら……きつと、私はその名前を一生忘れないでしょう

今日、彼女は私の人生を大きく変えたのだから

と、その時、沙々さんが何故かほむらさんの背後に立っていて洗脳魔法を発動させていた……!!

「かかったなアホがアツ!!最後に油断してるからこうなるんですよ?さっさと食らって私のしもべになってもらいます!!」

勝った!ほむら編、完!!

魔法^マ反射^ホ魔法^カ
魔法^ン



ほむら編その3～後編～

Part. 3/X 「覚悟とは暗闇の荒野に進むべき道を切り開く事である」

わからんちんキユウバエじやなくて美国織莉子の方で強情な白いアイツを拳でわからせるRTAはーじまーるよー

前回は見滝原の守護神「バمامィ」を

15000回以上の試走によって上がりまくったカリスマと持て余しているAPPで墮とした所まででした

今現在の時刻はAM01:00

バمامィの気絶からの回復が思ったよりも遅かったので、諸々のアフターフォローを終えると気づけばこんな時間に

しかたないね

ちなみにアフターフォローの内容は

- ・買ってきたケーキ等をお土産（引越し蕎麦的なノリで）渡したり
- ・バمامィあがら気絶かしている間にめ作っておいた晩ごはんを一緒に食べたり
- ・二人でお風呂に入ったりました

（今回の時間軸は全時間軸のバママミの平均値よりも若干大きかったです。ナニとは言いませんが）

このようにそれなり以上の仲になった魔法少女は、日常生活を共にする事で好感度をメキメキと増やす事が可能です。

特に、バママミはどちらかと言うと私生活がだらしないですし、懐に入ってしまったえば豆腐メンタルなので至近距離でバカス力優しくしてあげると簡単に高感度が上がっていくというワケですね。

（だらしないとは言いつつも、別に目を話したらゴミ屋敷になるワケでも無いし、基本的な家事はやっていますけどね。まあ、彼女の家事は魔法の補助があるからやれているようなモノで、忙しかったらやりませんし、疲れていたらサボりがちになるのは事実です……）

昆庵原☆アンチマテリアルズ
ある時間軸でルームシヤアをしていた私が言うので間違いありません（バママミファンクラブ名誉会員）

まあそんな事もあったのであそこ、第二の家みたいなのなんですよね

例の時間軸ではシンジ君とミサトさんごっこもやったし

あの頃はまだサブカルチャーに通じていなかったので照れてうまく返せませんが、今ならちゃんと返してあげたいですね

そういえば、あの時間軸は何故かワルプルギスの夜が来ませんでした。バمامに「二週間後、この街にワルプルギスの夜が来る」なんて言ったばかりだったので赤っ恥かいた事は記憶に新しいです（何百年前だったかな）その後、まあ久しぶりに年を越したりバレンタインで大騒ぎしたり、楽しく過ごしましたが、高校生になってからまどかが契約してしまい（あの時見滝原にいた妙に感情的で人間味のあるキュウベえとは別の个体）何故かそのタイミングを見計らったかのようにワルプルギスの夜、襲来。すっかり平和ボケしていた私はまどかを守り切る事が出来ず、まどかは魔女化してしまい……あの世界は滅びました。まあ、今回の時間軸で何が何でも完走するのでそんな事は起きないんですけどね！（フラグの立った音）

ちなみに、巴家に入り浸る他のメリットとしてはまどかの契約のタイミングもわかりやすい事もあげられます

今回は必然的に神浜に干渉する必要が出てくるのでまどかをつきつきりで護衛する事が出来ません

なので、バمامとまどか（ついでに美樹さやかも）が知り合うように仕向ければ、後は勝手に情報が入ってくるワケです

それにホーリーママミ戦での洗脳解除にもこの上がりまくった好感度は役立つかもし

れませんし（未検証）

前のマジウスが活動した時間軸では『心が繋がっている状態で大きな魔力を込めた一撃を食らわせるとウワサとの融合が解除される』という話でしたが、そこからへん今回の時間軸でも通用するんでしょうか？ んにやぴ……まあよくわからなかつたです（調べられないので）

まあ、巴家に入り浸ると言っても借りたアパートは無駄にはなりませんよ。

流石に宿無佐倉杏子しの称号は嫌だし、他にもあのアパートには戦略基地としての役割がありますから……

そういうえば、好感度が高すぎた場合も？ ホーリーマミ？ になってくれるのでしょうか？

まあ、勝手に《メンヘラ》《隷属》《依存》《ダメ人間》《倫理観ぐにやぐにや》《ベテラン魔法少女》あたりの要素をごちゃ混ぜになるように誘導して業の深い代物を作り出せば良い感じにやってくれるでしょう

マミさんだしね（）

それはともかく、この時間帯は本来なら巴マミもパトロールを行っている時間なのですが、

（魔法少女は基本夜ふかし。ソウルジエムが本体だから肌荒れとかは無い）

これから美国織莉子の家に殴り込みに行くので動かれると困ります

前にマミと上手く行っている時間軸で織莉子に先手必勝とばかりに攻撃したら一般通過マミに目撃されて好感度が激落ちした事がありました

当時は若く（大体500周目位の時期だったような気がする）魔力感知によるレーダーが貧弱だった事が原因としてあげられますね

その後私を警戒するようになったバマミは最終的に魔女化を知り、「皆死ぬしか無いじゃない！」で死んでいきましたとさ

この時間軸でそんな事になったらもう神浜に閉じ込めるしか方法が無くなるので避けなくてははいけません

ここでオリチャー発動!!（そも、この時間軸引き当てられた事自体が幸運だったのでチャートなんて存在しないけれども）

バマミの足止めの為に別の時間の自分を呼び出しましょう

こっそり入れ替わって貰って後は放置!

バマミをムリヤリベッドに押し倒し、抱き枕にして寝てもらいます

物理的精神的に拘束した事でバマミは朝まで動けない上に好感度は更に加速します

なんででしょーねー

ええ：ハイ、この技ですが、某幻想郷^十在住^六の吸血鬼^夜に使えるメイドさん^夜もやっていた

アレです

少し原理は違いますが、いと^Dもた^rやすく行^Dわれる^eえげつ^Dない^C行為^hと言^eった^a方が^pわかりやすい方もいるかもしれませぬ

まあ別の時間と言つてもあ^魔け^法み^少屋^女に^ほた^むろ^らして^るあ^らの[☆]暁^た美^むほ^むら^ら達^らでは^あり^ませ^ん。

あの子達は一人ひとり^がどこ^か別の^宇宙^出身^の、言^わば^私と^同じ^存在[。]

同等の立場故に仮に呼び出したとしても私の言うこと聞く義務は無いですよ。(イ
タズラほむらとか絶対に制御出来ない)

ここで言う別の時間の自分とは、限りなく『現在』に近い『過去』もしくは『未来』の
自分の事です。

フエムトわかりやすく言う^と須^臈

須臾とは生き物が認識できない僅かな時のことよ

時間とは、認識できない時が無数に積み重なってできています

時間の最小単位である須臾が認識できないから

時間は連続に見えるけど

本当は短い時が組み合わさってできているの

……と、フエムトファイバーのコピペはここまでにしておいて、

ようは本来なら私と同一の存在であるはずの、須臾秒前や後の私を長年の研究による

魔術や科学を「ちやまぜにした

トロンデモ技術によって観測、無理やり存在を固定化させる事で私の記憶を引き継いだクローンみたいな存在を作り出す技術です。

少し前とはいえ、私であることは確かなので指紋や声帯まで完璧に再現されています。

私の膨大な魔力妖力霊力で無理やり作り出している側面が強いので、理論上は私の眷属という立場であり、私の命令に従ってくれるいい子達（）です。

ただし、全く同じ魂というものは2つ以上存在する事が出来ないのです、それぞれの分体一人ひとりに私とは少し違った個性が生まれます。

私よりも凶暴だったり、ビビリだったり、元氣ハツラツの幼女メンタルだったり、無口というかボソボソ喋る感じのキャラだったり、中々にカオスな状況です。

ただし、こんなカオスな個性のせいで偽物である事がバレると使い物にならないので、話す言葉やふとした時の仕草などありとあらゆる行動を本体である私と同じように設定してあるので、あくまでもこの個性は分体の脳内だけにとどまります。

この技習得するのに軽く500年程かかりました……いやあ、やはり時空魔術はダントツで複雑ですわあ……

声を大にして叫びたいですね「十六夜さん、アナタこんなモノ何処で学んだの!？」つ

え？自分の分体なんて出せるんだったらワルプルギスを数で封殺すればいいだろって？

勿論、かつてはそんな方法も考えたりしました

ですがこの分体、『一体作り出すだけで魔力を最大値の半分程消費するのでホイホイ何体も作れない』だけでなく、

私と全く同じ生体情報を持っている以上、そのままだと私のソウルジエムとの誤リンクが度々発生してしまい、ソウルジエム側のOSもまさかこんな自体を想定して作られてなかった故に『ソウルジエムがエラー吐いてフリーズする』とかいうクソみたいなトラブルが発生するんですよ。あの時は死にかけて。

この誤リンクを防ぐためにわざわざ分体達は魔力を必要としない体で作り上げ、また魂もソウルジエムではなく脳に入っています。

つまるところ、コイツらのソウルジエムはただの飾り

『ただのちよつと頑丈な一般人と変わらないんですよ』

ま、それでも自分が二人三人いるというのはインキュベーターや他の魔法少女との謀略戦争において大きなアドバンテージである事には変わりありません。

今後、残り魔力量に余裕がある時は積極的に分体を作り出すようにしましょう。

まあフルチャージした魔力コンデンサ（容量は普通の魔法少女レベル）を渡せば一応

魔法も使えるんですけどね。

ただやっぱりワルプルギス戦を戦い抜くには魔力が圧倒的に足りないし、魔力コンデンサの材料が希少な素材ばかりなのであんまり量産は出来ません。

オマケにすぐ壊れる。今現在残ってるの「一っだけなのでこの時間軸でも私の分体が十分に増えるまでは大切に使っていきましょう。

さて、ついさつきまでバマミには魔力遮断をして接していましたね？

コレは勿論ビビらせないためでもありますが、この身代わりを通す為の布石でもありませんでした。

これで美国織莉子との戦闘おはなしが邪魔される事も無いでしょう

完璧なチャートだあ…（自画自賛）

巴家の戸締まりヨシ！

美国家に：イクゾー！デッデッデッデッ！！（カーン！）デデデデッ！！

☆☆☆☆

さて、美国家周辺まで来ましたが突入しません

というのも美国織莉子の固有魔法は「未来視」

当然こちらの殴り込みもバレています

というかこちらの行動は殆ど先読みされていると思つていた方が良いでしょうね
戦闘でも頭脳戦でも使える強固な魔法ですが、だからといつて何も用意していないわけではありません

既に幾重にも重なつた試走でのデータから、この「未来視」への対策をたてています
それすなわち「常にプランB作戦」です

例えば今、私は美国国家に向かつています

頭の中で実行しようとしている事は『美国織莉子の部屋の窓ガラスを蹴破つて侵入する』です

心のそこから窓ガラスを蹴破ろうと思ひ、道を歩いているという事です

すると、美国織莉子はそれを予知して迎え撃つ為に家の外へと出るでしょう

普通の人だったらその時点で行動を変えても、そちらがまた読まれるだけです

ですが、並列思考をして違う命令を身体に与える事によつて、予知ではプランAを見せつつ実際に行うのはプランBという戦法が取れます

つまり私を迎え撃つために出てきた美国織莉子を逆に迎え撃つという訳ですね

これが「常にプランB戦法」です

初見殺しがすぎる（率直な感想）

基本的にはこの戦法を使えば美国織莉子は完封できます

さてさて、ここの交差点を曲がったら美国家ですが、既に待ち構えられていますね
まあ、そうなるように昼間から誘導した訳なんですけれども

それではプレッシャーを開放して進んでいきましょうか

第一印象が一番重要ってソレ一番言われてるから

さーて、歩道に立ちふさがっているのは純白のドレスのような衣装に身を包んだ魔法少女「美国織莉子」と

漆黒のコートのような衣装に身を包んだ魔法少女「呉キリカ」です

固有魔法『洗脳』を使いこなす「優木沙々」の姿が見えませんが、隣の空き家に潜んでいる事はソウルジェムから出てくる魔力でわかっています

おそらくこの後は彼女の操る魔法の結界内での戦いになるのでしょう

まあ、こんな住宅街でドンパチやったら周囲の住民を起こしちゃうのでホイホイついていきましょうか

はい、割と長めのにらみ合いの後にようやくと魔法結界が展開されました

ほーん…珍しいですね

この水の色と小島が点在する結界の魔法は「第6の魔法GAGHIEL」です
かつてアニメ「新世紀エヴァンゲリオン」が好きな18人の仲良しグループがいまし

た

彼女達はインキュベーターが目の前に現れ、契約を迫られた時に、

自分たちの人数がテレビ版の使徒の数と同じことを理由にそれぞれ番号を振り分け、
《その番号の使徒みたいになりたい》と願いました

一番の少女はアダム、固有魔法「永久機関」 二番の少女はリリス、固有魔法「予言」
三番の少女はサキエル、固有魔法「先駆け」 四番の少女はシャムシエル、固有魔法「切
断」 五番の少女はラミエル、固有魔法「荷粒子砲」 六番の少女はガギエル、固有魔法
「氷結」 七番の少女はイスラフェル、固有魔法「分裂」 八番の少女はサンダルフォン、
固有魔法「羽化」 九番の少女はマトリエル、固有魔法「溶解」 十番の少女はサハクイ
エル、固有魔法「質量」 十一番の少女はイロウル、固有魔法「超進化」 十二番の少女
はレリエル、固有魔法「ディラックの海」 十三番の少女はバルディエル、固有魔法「寄
生」 十四番の少女はゼルエル、固有魔法「絶対攻防」 十五番の少女はアラエル、固有
魔法「精神介入」 十六番の少女はアルミサエル、固有魔法「融合」 十七番の少女はダ
ブリス、固有魔法「自由意志」 十八番の少女はリリン、固有魔法「繁殖」

彼女達十八人の結末は固く、一時は最強の魔法少女グループとまで呼ばれましたが、
寄る年波には勝てず、最終的に魔女化、キュウベえにより各地にバラバラに配置され
てしまいました

この十八種類の魔女達を纏めて「エヴァシリーズの魔女」と呼ばれているとかいないとか（私が呼んでいる）

今回の第6の魔女はそのうちのガギエルの子ですね

平たくいえばでっかい魚です

ガギエルは使徒の中でもかなり大きな方で、空母をゆうに超える大きさなのですが、この魔女はそれと比べるといくらか小さくなっています

攻撃手段は主に水中からの体当たりと噛みつき、それとこの結界の水を凍りつかせて出来る水晶のようなナニカです

その巨体もあって、修羅の国神浜の外としてはトップクラスに強い魔女と言えるでしょう

そして、今回この魔女は優木沙々に操られています

つまり理性を持った行動をするわけなので通常の魔女戦よりも更に厳しい戦いになるでしょう

まあ、落ち着いて対処するだけですけどね

〈閑話休題〉

右枠での説明が終わったのでVS美国織莉子、呉キリカ、優木沙々、第6の魔女、戦

スタートです！

今回の勝利条件は織莉子達を説得して三人共仲間に加える事です

敗北条件は織莉子及び他二人の死亡、魔女化、逃走等があります

よって基本的な方針としましては力の差を示しつつ攻撃を避けまくって煽りまくります

「常にプランB戦法」によつて美国織莉子が正常に起動しないのでこのチームはあつという間に崩れますが、

逆に手加減しないとあつという間に魔力を使いきらせてしまつて魔女化したり、優木沙々が逃げ出したり、呉キリカが自ら魔女化して特攻してきたりします

なので、攻撃はひたすらカウンター

こちらは被害者なのになくという態度を崩さないことが説得の近道になります

ですが、さすがにキリカにちよこまか動き回られると厄介なのと、第6の魔女は邪魔なので倒してしましましょう

お、ちょうど良く強攻撃で来てくれましたね

デレ行動です

二人まとめて倒しましょう

うおおお!!! タンクローリーだッ!!! 無駄無駄無駄無駄アッ!!! ぶつ飛んでいけええッ!!!

よし、キリカの戦闘不能を確認、第6の魔女の殲滅を開始する！

第6の魔女ですが、ガギエルと同じように口の中にコアがあります

しかし、原作を知っているからなのか氷結能力でコアを覆って防御しています

なのでコアへの攻撃は第6の魔女に強烈な一撃を加えてダウンして防御が解除されている最中にしか効きません

よつて、最速で倒す場合はまずは体中を爆弾で囲みましょう

今回使う爆弾はお馴染みの手作り筒型手榴弾ですね

それを連ねた鎖でふん縛って、口の中に特大ナパーム弾でも入れておきます

そして爆発とともに正面に移動

多弾頭ミサイルランチャーをブチかませええツ!!!

ふう……：工事完了です！

さて、余計なやつらは片付けました

既に結界の出入り口は時止めて封鎖しておいたので優木沙々が逃げ出す事も無いでしょう

あとは美国織莉子の説得パートですが……

ここまでくれば基本的にまず成功します

と、いうのも美国織莉子は基本的に他者に対しては「予知」という絶対的アドバンテー

ジがありますか

それが崩れ去り、仲間もやられた今、彼女の心はもうどうしようもない具合に不安定なのです

「そう……それが貴方の答えなのね……鹿目まどかの『守護者』さん」

「そういう貴方は……まどかを殺そうとする『預言者』さん」

あ、ここジョジョ第一部のアレっほいな

もしや美国織莉子はジョジョラーである可能性が微レ存？

そして、ここで短縮ポイント

《聞かれた質問に正直に答えます》

というのも、現在私は15000回以上も繰り返しているわけで、彼女は私の時間操作能力に気づくと必ずと言っていいほど何回繰り返したかを聞いてきます

それは『そんな無駄な事して意味あるの？』という煽りなのですが（ちよつと違うカモ）

初めて会った時間軸こそ、取り乱したものの、

その次に会った時、また次の時、その次、その次、と

周回回数を重ねていく毎に彼女の顔はどんどん曇っていったんですね

彼女は普通に頭の回転早いので、回数だけで私が経験してきた膨大な時間を想像して

しまっているのでしょうか

慣れたらそんな辛いものでもないよ（ケロツ）

それと、あと何回繰り返すかですが今回で完走します（鋼の意思）

何度も言いますがマギウスの翼が活動している時間軸はもう…凄まじい程にレアです

夜道を歩いていたら自分の上に隕石が振ってくるレベルの天文学的数値です

やっぱり完走するのが一番大事ってそれ一番言われてるから

それと、最初の時間軸で言われたことって結構シヨックだったんですよ

今までずっと自分のやっていることを客観的に見ていなかったのですね（あの時まで）

だから、割とその時の怒りは残っています

なのでちよつとばかり説教しても良いでしょう

うん、彼女達風おろこ☆マギカに言えば『ただのやつあたりだよ』ってヤツですかね

さて、初めて出会った時間軸と同じようにソウルジェムをホールドアップでチェック
メイト

ここで初めて敵意が無い事を明かしましょう

ここまでくればもう大丈夫

あとになるようになるって……

ファツ!? キリカさん!?!? 貴方なんで起きてきてるの!?!?

つか貴方のステツピングファンングってそこまでデカく出来るんですか!?

まあ、いいか

適当に魔法撃てば相殺できるだろ……って織莉子さん!? 何してんすか!?!? 止めてくだ

さいよ本当に!?!?

さつきまで敵対してた私を庇ってって……あつ（チャートが崩れる音）……コレ好感度

ミスったのね（あまりの衝撃に口調が元に戻る走者の屑）

想像以上に高い……何故か

すううー……はアアアアア………

ふーぎ↓けるなああああああ!!!! これじゃあビジネス不ライクな関係を築けない

じゃない!!!! ああもう対人関係めんどくせええええええええええ!!!!

!!!!

ハイ……落ち着きました

現在時を止めて現実逃避しています

ドウシテ……（現場ネコ）

もう嫌です

敵同士からの始まりだったので普通は協力関係になってもビジネスライクな繋がりで終わり、関わるのは最低限でいいのですが、

初期好感度がここまで高いとなると普通に友人関係を築き上げていかねば最終的に好感度が暴落して協力してくれなくなります

なので織莉子達とは自動的に仲良くしなくてはならなくなったのですが：よく考えてみてくださいよ

織莉子の横には彼女によつて壊された爆弾キリカがいる上に、優木沙々はクツソ性格悪いじゃあないですか

そして、一番の弊害はバマミをこの持て余しているAPPで墮とした以上、絶対にバミにこの関係を悟られてはいけない事です

バレたら確実に面倒な事になります

織莉子側にバレても同様です

もしもバレてしまい両者の接触が起きた場合、下手な独占欲や嫉妬心から何が起こるか考えたくもありません

大乱闘なんてあつたら神浜行つてる余裕がなくなります

私は基本的にコミュ障なのでそんな修羅場を治めるには武力行使しか無いからです

ね……

つまり、これからはママの事を考える時は織莉子に予知されないように並列思考を続けなくてははいけません……

なんでこんな二股を隠してる男性みたいな気持ちにならないといけないんですか
私はまだか一筋だから（巴ママファンクラブ名誉会員がなんか言ってるぞ）

ハイ……もう良いです

吹っ切れました

そうですね！そもそもなんの縛りもないのはつまらないのでね

良いハンデだと思いきむことにします！（じやなきやもうやつてられない……）

ほいじゃ、まあここからは楽しむ事にしましょう

それじゃあ適当に美国織莉子の前に立って、時間停止解除！

テン♪↓テン♪←…テテテテテテ、テテテテ

テン♪↓テン♪→…テテテテテテ、テテテテ

頭の中で例の処刑用BGMを流して無理やりテンションを上げます

あつそうだ（唐突）今織莉子って私を庇って突き飛ばしたわけじゃあないですか
ちように良いセリフがあるのでやりましょう

「もう一つ教えておくわ、美国織莉子

覚悟とは自己犠牲の心では無いの

覚悟とは暗闇の荒野に、進むべき道を切り開く事よッ！」

それと同時に術式展開!!

曉美ほむらのコンマ三秒スタンドクッキンググゥ!!

今回使う材料は「氷雪属性纏繞特技」「中級氷雪魔法」「真空魔法」の3つです

まずはアイスフォースでヒヤド系統の属性を身体になじませます

アイスフォースは魔術の中でもフォーススキルを取らないと覚えられない上級魔術なので初心者の方は自身のダメージ覚悟でやりましょう

次にヒヤダルコの氷で身体のまわりに本体を形成

イメージとしては最初から完成形を目指すのでは無く、一つ一つのパーツ毎に作成していくイメージだと成功しやすいです

あらかた形成が終わったら仕上げにバギで細かい部分の装飾を刻み込んで、首の後ろに空気穴を開けて、まわりに氷を撒き散らして固定すれば……

完成!!「ホワイトアルバム・静かに泣く」!!

さつき覚悟の話をしたのでギアツチヨ戦をやりたかったんですよ

しかし、相手がステッピングファング一つだけじゃあ今ひとつ物足りないですね

やっぱりこの技はセックス・ピストルズ相手だったからこそ盛り上がったわけですよ

ねえ……

弾を弾いて攻撃するセックス・ピストルズに対して、弾き返して無効化される……そこがおもしろいわけで

ねえ
こんなただのどでかい攻撃一発だけを弾いてもあんまり盛り上がりがないんですよ

あゝあ、失敗したなこりや

まあ、織莉子の驚いている顔は十分見れたのでよしとしましょうか

キリカの最後の魔力が尽きたようで魔女の結界が崩れ去りました

織莉子が走っていつてるので追いかけてグリーンフィールドを使ってあげましょう

もうこんなりやヤケだ！

とことんまで好感度を稼いで多少不審な行動をしていても何も言われないレベルにまで信頼してもらいます!!

そういえば、お互いに自己紹介はまだでしたね……

まあ私は貴方の事を知っているけれども

「かかったなアホがアツ!!最後に油断してるからこうなるんですよ? さっさと食らって私のしもべになってもらいます!!」

残念だったな!! (K R M)

お前のソウルジェムからは魔力がだだ漏れでとくに居場所はわかっているんだよ!!
そして、お前の情報も全部こっちは知ってるんだ

対策をたてていないわけが無いだろう?

我がほむら式魔術研究は世界一イイイッ

出来んことは(あんまり)無アアアいッ
!!!!!!!

喰らえ優木沙々アッ!!

発動時間は一瞬だが、全ての魔法の所有権を奪い、跳ね返す絶対の反射結界

「魔法^マ反射^ホ魔法^{カン}」を!!

あ、やべ…出力ミスった……………(↑精神的動揺によるミス)

数日後

「暁美さん、今日はクツキーを焼いてみたの！ちよつと割れちゃったりしたけれど味の方は自信あるのよ!!」

「おりこおー私にもおー」

「ハスハスハスハス……うーん今日もほむら様の靴下のスメルは最高でございませう」

ほむら様がこの私を使ってくれるだけでなく、ご褒美までくださるなんて不肖優木沙々！一生貴方様に仕える所存でございませうハスハスハスハス」

もうやだ（涙目）

帰っていいかな？

帰りたい♪帰りたい♪温かいママの家が待っている♪（○水ハウス）

ほむら編その4『終わりの宴会』

Part. 4/X「崩れるチャート」

優木沙々の固有魔法『洗脳』

それは彼女の「自分より優れた者を従わせたい」という願いによって超強化されている代物であり、

格上相手ならば命中すれば確実に操り人形にする事ができる

まさに『ぶつ壊れ魔法』と言えるだろう。

現に彼女は複数の魔女を操る戦法を得意としており、これまで自分の邪魔をしてきた数多の魔女や魔法少女を複数の魔女のコンビネーションで闇に葬ってきた。

しかし、強い魔法という物は時に諸刃の刃となりうる。

そんな状況を創り出すのがこの魔法マホ反射魔法カクンダ

ガギンツ

魔法が結界にぶつかり、反射された時特有の青白い光が私の視界を覆い尽くす。

その光は圧倒的パワーで破られない限り絶対の防御であり、同時に絶対の攻撃の証で

もある。

本来ならば安心こそすれ、焦る要素なぞ何処にもないのだが……

(不味い、非常に不味い)

私は非常に焦っていた。

ナニが不味いつてうっかり魔法^{マホ}反射魔法^{ホカ}に過剰^タに魔力を注いでしまったコト。

確かに強い魔法は諸刃の刃となるが、それはこちらにとつても同じ事というワケだ。

普通を使う分には魔力の消費量が多い事と展開時間が短い事を除けば使い勝手の良

いこの魔法も

『とある仕様』のせいで特定条件下にてトラブルを引き起こす種へと変貌する。

さて、今現在優木沙々の状態は魔法^{マホ}反射魔法^{ホカ}仕様時特有の演出^{エフエクト}に阻まれて見る事が

出来ない。

過剰に魔力を注いでしまった結果彼女がどうなっているのか？ 全くもってこちらから

らはわからないのだ。

それは現実から目をそらすという点については非常に役立っているのだが、あいにく

の所、永遠に現実から逃げ続ける事など出来はしない。

故に、私はこの光が消えてくれるのを祈りながら待つしかないのだ。

せめて、普通の洗脳状態であつてくれ

どれくらい時間が経つただろうか？ 一時間？ まる一日？

いや、実際にはまだ一須臾（フエムト）秒も経っていない。

時間停止とは違う、アドレナリンによって引き伸ばされた長い永い体感時間の中、必死に心の中でお祈りをすませた私は、現実を受け入れる覚悟を決めた。

演出が消え視界を遮るものが何もなくなったのを感じると同時にカッと目を見開く。魔法反射呪文の結界の中で既に魔法が飛んできた方向に振り返っていた私は途端に広がったこの光景の中から、目的の人物を探し……

目がハートになった優木沙々を見つけた

……見つけてしまった

「うわあああああ 『ザ・ワールド世界』!! お願いだから時よ止まってえ!」

ハア……ハア……いや、まだやらかしたと決まったワケじゃあ無い。

まずは落ち着いて情報^ダ閲覧魔法^モでも使ってみよう。

うん、それがいい。そうしよう。

「優木沙々」

年齢 15歳 種族 魔法少女 性質 悪/カオス 特性 猫かぶり

自己中心的 劣等感 卑屈 世界への不満 状態異常 洗脳状態L

v M a x 絶対忠誠 (対象：曉美ほむら) 狂信 (対象：曉美ほむら) 依

存状態 (対象：曉美ほむら) 一般性癖 被虐趣味 (弱) (曉美ほむら限定) 加虐

趣味 (ムカつくやつら) 愛されたい

……うん、どうしてこうなった？

ええつと……？

まず『洗脳状態Lv. M a x』のレベルは洗脳の強度を表したもののね。

M a xだと自力での解除どころか、外部からの干渉でも解除する事が出来ない状態。効果時間も永続。ぶっちゃけ私でも治せる可能性はゼロ。

恐らく優木沙々が放った洗脳魔法は魔法^マ反射魔法^ホから伝わってきた魔力構成的に、た

ぶん『人格はそのままに対象への絶対服従のみを付与する洗脳』だと思っから、

基礎人格は弄られずにそのまま残っているハズ……。恐らく日常生活に支障がでる事は無いでしょう。たぶん。

……だけど、私に対する絶対服従だけではなく『狂信』『依存状態』、はたまた一般性癖に『被虐趣味（弱）』も追加されてるのだけど……

ええつと？つまりこれから優木沙々は一生私の命令を聞いてくれるどころか事ある度に私に判断を仰ぐようになって、

私を貶すような相手に殺意をむき出しにして、

私が居ないと死んでしまう軽度のマゾヒストってコト？ここまで混乱状態により走者口調が取れてしまっている

ナニ や っ て く れ て ん の ？ （滲み出る殺意）

うわああああん!!どぼじでこごなるのおおおお（幼児退行）

やだ！小生やだ!!魔法少女の人生壊しちゃった責任なんて取れない!!

やっぱりね…（自称）一族の血を引いている以上、どこかでガバを発生させる可能性はあつたんですよ……

ただ、それがこんな倫理的に問題がある事で引き起こされるなんて……

嗚呼……美樹正義の味方さやかかの好感度がどんどん下がっていく……

チャートが……私の完璧（自画自賛）なチャートがあツ……

助けてまどかああああ!!!

ええ……ハイ……完ッ全にやらかしてしまいました。

マホカンは原作ドラクエではそのままの威力で跳ね返す呪文なのですが、

開発段階でポケモンのミラーコートとごっちゃになってしまい、

また開発時に参考にした『反射』の固有魔法を持つ魔法少女の特性に引つ張られた結

果

魔法マホ反射魔法ホカンタは『結界に魔力を流し込んだ分だけ、当たった魔法を強化して跳ね返す』

という仕様になっています。

つまりこの禍々しい程に強力な洗脳は私の魔力によって強化されているので……

この件は私が悪いという事になります……

やりなおして良い？（涙目）

もう無理……帰る……

帰ってまどか人形に囲まれて寝るもん……

あ、そうだ。（唐突）

今日ぐらいはまどかの家に入ってもいいよね？どうせ時止めてるし

☆☆☆☆

く止まった時の中で1時間後く

おはようございます

やつぱり反射が最強！なRTA、はっじまゝるよ〜!!! (空元気)

ええ……先程のガバにより美樹さやか的好感度が激落ち君になってしまいう事が確定してしまったので、前回の世界をなぞるチャートは完全に崩れてしまいました……が、ここから先全部ノームスならお釣りが来るので続行です！(ウンチー理論)

そもそもね、ガバらないで何がRTAだって話ですよ

ガバるのは当たり前、大事なのはリカバリーだってハッキリわかんだね(開き直り)

久しぶりに新鮮なまどか成分(まどかが寝ながら口からたらししていた涎を採取して気化させたモノ)

を吸って脳をすつかりリフレッシュしてきたので新しくチャートを組み直しました。そもそも、優木沙々が襲撃の際に「第6の魔女GAGHIEL」を従えていた時点でこの世界はエヴァシリーズの魔女が存在する世界線である事が確定的に明らか、コイツらと優木沙々を上手く使ってどうにかこうにかリカバリーをしていくチャートになっております。(優木沙々をチャートに組み込む事によって人生を壊してしまった責任を取る機会を増やす事に成功)

そもそも『エヴァシリーズの魔女とはなんぞ?』という人の為に説明すると……つて確かさつき(ガギエル戦時)説明したばかりですね。

簡単にまとめるとエヴァ好きな18人の少女達が魔法少女になって魔女化した姿です。

この魔女達は基本的にクソゲス淫乱ロリコン営業マンインキユベーターのせいで世界各地に散らばって他の魔女と同じように穢れを振りまいていますが(今回の優木沙々も偶然ガギエルと遭遇して洗脳したのでしょうか)。

第1の魔女ADAM、第2の魔女LILITH、第17の魔女TABRIS、第18の魔女LILINは特殊で使徒みたいなヤツインキユベーターがどんな場所に設置しても必ず特定の場所に戻ってきてしまったり、言うことを聞かなかつたりする珍しい魔女です。

まあ、わかりやすく言うなら『固定シンボルエンカウント』『伝説のポケモン』そんな

感じでしょうかね。

特にやっかいなのがこのチャートで最も重要な第18の魔女で、

リリンは本来我々(?)人間、故に結界どころか実態を持たず人間の心の中に潜んでいる悪意そのものの魔女です。

他人の心の中に入れるタイプの固有魔法を持った魔法少女じゃないと倒すどころか干渉すら出来ず、人間の本質の一つであるので完全な消滅は||人類の滅亡を意味します。

つまるところ、正規の方法ではリリンを仲間にする事が出来ません。

遭遇するのがやっかいな分、『永久機関』『予言』『自由意志』『繁殖』と、仲間にするばお釣りが来るレベルの便利な魔法を持っているのでこのチャートでは彼女達を仲間にします。

幸い、彼女達の願いを利用する事で、割と面倒くさい手順を踏んだ後にリリンを表舞台に引っ張り出してくる事も可能なので

当分の目標は織莉子達の育成と並行して他のエヴァシリーズの魔女達を仲間にしていく事になりますね。

さて、時間停止の為の魔力もバカにならないので(もう既にグリーンフィードを十個近

く使ってる) いい加減に目の前の現実と向き合うことにしましょう。

☆☆☆☆

く 美国織莉子かく語りし

私の人生が変わってしまったあの日から三週間後

「「神浜市!」」

お茶会セットが並んだ私の家の庭で三人の疑問の声が重なる。

目の前の黒い悪魔は私達の頭に?が浮かんでいる事に「ふふっ…」と満足気に笑うと紅茶を片手に謎のキメ顔でこう言う。

「ま、どうせ明日には全てわかるわ。神浜市がどんな所なのかも、現在起きている騒動の原因も、何故私がたまに居なくなっていたのかも……この世界の主人公の物語も……ね。」

コイツはいつもそうなのだ。

何をするにも勝手に決めて、重要な事は全部仄めかすだけ、

かと思いきや予想外の出来事が起こって慌てふためいて、沢山の人を巻き込んで、それでも、なんやかんやあって結局全部丸く収めてしまう。

そのクセして、最終的な判断は強制しない所がまた嫌らしい。

半ば自分の意思で着いてきた身としては何も文句を言う権利は無いのだから。(まあ権利は無くともケチをつけたりはしている)

…と、愚痴はここまでにしておこう。

どうやらここ3週間程は基本的に(南極やら箱根やら月やらに行ったりはしたが)見滝原を中心に活動をしていた私達だけでも

今後しばらくはこの神浜という厄ネタとしか思えない街で活動するらしい。

なんでも最近めつきり魔女の姿を見かけなくなってきたというのに、この街では逆に魔女で溢れかえっているそうなの……

まるで神浜に魔女が吸い寄せられているかのよう……というかこの悪魔が言うには、実際に吸い寄せられているらしい。

勿論、例の犬畜生イソキヌベーターはこの状況に危機感を持ち、回収したグリーンフシードを《今まで集めていたエネルギーまで使って》穢れを再充填し、せつせと各地へとバラまいて魔女の数を増やしているが、そんなモノは焼け石に水。

既にくつつかの地域では魔女不足によるグリーンフシード不足が起こっていて、異様な

緊張感に包まれている街も少なくないとの事。

これが自然現象だったならどんなに良かったことか……神浜市にはハクビシンインキュベーターが意識を保つことのできなくなる結果が張つてあるらしく、ナニカ大きな陰謀が渦巻いているのは火を見るよりも明らか。

クソ白タヌキインキュベーターから今まで見たことも無いくらい低い姿勢で調査の依頼がされたぐらいだ。(まあ、悪魔は真相を知ってるらしいのでそんな依頼は蹴っていた)

そんな魔法少女達の今後にかかわる真面目な話をしている最中のハズなのだけれど、この黒い悪魔のトンデモ脳内にそんな事は関係ないようで

「そんな事より、昨日共有本棚に入れておいたTSシンジ君？ふたなりカヲルちゃんのR—18同人誌はどうだった？」

全く関係ない話をしだした。

今コイツ今後の活動方針を『そんな事』って言ったぞ!?

「いや、仮にも私達中学生だよ？平然とR—18の話をされてもね。良かったけどもさっ」

その割とシュールなボケに何処かズレたツツコミを入れるキリカ。

そこじゃ無い…ッ!

確かにそこも問題だけでもっと大事な部分があるでしょ!?

「うーん…確かに割と良かったんですけども、個人的にはちよつとありきたりかなーって思いましたね。悪くは無いですけど、正直エヴァ2の女装イベがある以上TSしてても新鮮味に欠けますし、定番が詰め込まれているのは安定した評価が期待できる一方で、ただの量産型にもなってますから……」

なんでも無いような顔でお茶菓子を頬張りながら批評する優木沙々。
変態悪魔信者。

いや、コッチはコッチで何を訳知り顔で論説垂れてるんだらう……

そもそも同人誌を読み始めたのは悪魔に会ってからのクセに玄人ぶって話してる。

「もつともな意見ね。まあ、コレ大体800年位前に私が描いたヤツだけでも」

「!?あ、でもでも!!確かにここなんかは今のほむら様の片鱗が見られますね!」

「いや、手のひらくるくるとすぎて手首複雑骨折してない?」

“ シリアスであつても心はいつもとどおりに ”

それが千何百年もの時を過ごしてきた悪魔の信念らしい。(いや知らんがな) おかげで私の脳内はすっかり罵倒や悪態等の汚い言葉で汚染されてしまった。それもこれも全て目の前の悪魔の仕業なのである

が、しかし

そんな、なんてことは無い「いつもの風景」が私は好きだ。

明らかに普通の一般家庭や魔法少女でもあり得ない程の混沌カオスとした空間ではあるものの、

そこには確かに、私が長い間触れていなかったモノ——人のぬくもりとも言うべきナニカがあった。

お母様が死んでしまいお父様が自殺してからすっかり広くなってしまったこの家だったが、いくら私の固有魔法が『予知』とはいえ、同居人が増えて珍妙な来訪者に振り回され、最終的に世界を救う為に（ほぼ方便ではあるが…）複数の魔法少女と一緒に活動できる。

そんな激しく刺激的で、生きる目的に満ち溢れた毎日が来るなんて一体いつ予知出来たであろうか？

まあ、少なくとも私一人では絶対にこんなクソツタレな未来は『予知』も実現も出来なかつただろう。シャクではあるがそれもこれも目の前にいる、

『大真面目な顔で吹き戻しを伸ばして謎の「吹き戻し超絶技巧」でキリカの食べようとしていたクツキーを掠め取ったかと思うと自らの下僕僕とそのクツキーでポツキーゲムに興じている』

『頭のネジやその他諸々が外れていて、重度の浮気症で気に入った子にはすぐに手を出すレズビアンだけど、顔だけはやたら良い』

そんなよくわからない悪魔「暁美ほむら」のおかげなのだ。

非常にシヤクだけれども。

絶ッ対に嫌なので礼もしたくないけども。

あ、それと最初に会ったあの日、不覚にも優しくされた際にこのクソレズ悪魔にお母様の影を幻視してしまったが、

この振り回された3週間で全くそんな事は無かった事に気づいた。

こんなイカレレポンチがお母様と同じだなんて天地がひっくり返ってもありえない。

そんなこんなで感傷に浸っていた隣では、バカ達の性癖論争から喧嘩に発展していた。(悲しい事に) いつもの事である。

予知を使わずともテーブルをひっくり返す未来が見えたので、紅茶のカップをテーブルから膝の上に避難させ……

同時に悪魔の絶対の味方優木沙々がテーブルがひっくり返す。

慌てて変身したキリカが『速度低下』の魔法を使って宙を舞っているお茶菓子の落下速度を限りなくゼロにして空中に固定し、全てキリカのお腹の中に収められた。

これもいつもの事。

ピンポーン

そんなこんなでドタバタと魔法が飛び交う戦場となった庭から避難するとインターホンが鳴り響く。

やれやれ、やっとこの悪魔の保護者が来たらしい。

鍵は開けておいてあるのだが、彼女達は律儀なのだ。この馬鹿騒ぎしてる悪魔と違って最低限の礼儀は守る。

まあ、約1名、開かなかつたらガラスを蹴破るような礼儀の「れ」の字もないような赤髪がいるけれども、最近は緑の幼女のおかげでいくらかマシになったような変わらなような……。

それはともかく、お客さんを待たせてはいけない。

私がパチンと指パッチンをする、私の固有武器が飛んで行つて壁についているスイッチを押す、

そのスイッチが起動すると、玄関のドアがギギギ……と厳かな音を立てて自動でお客さん達を迎え入れる。

私の固有武器であるこの白い不思議な“鉄球”

ステイル・ボール・ラン
(とある漫画になぞらえてあえてこ

う呼んでいる)は最初は上手く使いこなせなかったものの、

(悪魔のせいで巻き込まれた)数多の戦いの日々を経てすっかり自分の身体の一部のように扱いに慣れてしまった。家のスイッチを壊さないように押す事など造作もない。ちなみに、この家は例の悪魔にお願いしてほぼ全ての事をスイッチ一つで出来るように魔改造して貰っている。

(あの悪魔、ちゃらんぽらんなクセに知識や技術だけは超一流なのよね……)

一時期、ワルプルギスを倒せなくてもすぐには時間遡行をしないで、大学に通って卒業と共に時間遡行するって生活をしてたみたいだし……)

さて、お客さん達が入ってきた事で玄関の方が賑やかになる

次の瞬間

中庭へのドアが思いつきり開け放たれ破、もはや見慣れた黄色いリボンが中庭を飛び交う。

悪魔大好き道化師

優木沙々を人の家の中庭でにやんにやんさせていた悪魔は、瞬く間にその身体を剥がされ、上下反対で宙ぶらりんに吊り下げられる。

その間、わずか一秒にも満たない圧倒的な早業。そんな事が出来るのは一人しかない。

ボキリボキリ

拳を鳴らしながら笑顔で悪魔の元へと足を進める黄色い影

「あ……あら、遅かったじゃないママ」

いつもの無表情なのかよくわからない表情でいつもどおり（いや、若干震えている）声をかける悪魔だったが、黄色い鬼からの返事は放たれた容赦無いマスケット弾。

その魔力弾は正確に悪魔の眉間を貫き、紅い脳漿をぶちまけ……る前に悪魔の姿がポロポロと崩れ落ちた。

初見の人が見たらあまりにもショッキングな光景に発狂するだろうが、なんてことはない。いつもの悪魔お得意の変わり身だ。

「はあ……バカは死んでも治らないって言うけれど、貴方のソレはソウルジェムを砕いても治る気はしないわね……」

黄色い鬼……もとい滝原のベテラン魔法少女『巴ママ』

彼女がため息を吐きながらマスケット銃をリボンに戻して振り向くと、そこにはピンクの女神の背に隠れる悪魔の姿が

「おあいにくさま。私は目的を果たすまで絶対に死なないし、女の子ちよつとにしつかいお出す事茶は人生のスパイスよ。これが無かったら私はとつくに魔女化してるわ」

そんな事を言いつつもそんな状況ではイマイチ格好つかないし、説得力もない。いや、コレどんな状況でも最低の発言だわ。

「そもそも、沙々は私の下僕よ？もはや身体の一部みたいなモノだからこんなの実質オナニーと変わらないのよ」

いや、流石にソレは無いわ……なんか変態悪魔中毒者優木沙々はそれを聞いて歓喜の表情で融けてるけども

案の定、キレル『巴マミ』。

煽りながら逃げ回る『暁美ほむら』。

融解から復活し、マミに対して激しい憎悪を向けて対立する『優木沙々』。

怒り心頭のマミをなだめる『美樹さやか』。

逃げ回る悪魔を抑え、沈静化させる『鹿目まどか』。

勝手にBBQセットをウチの倉庫から持ち出してくる『佐倉杏子』。

その手に持った買いた物袋の中から肉を取り出してせっせと準備をすすめる『千歳ゆま』。

ひたすら串にチーズを突き刺していく『百江なぎさ』。

何故か混ざってマシユマロを串に刺してる『呉キリカ』。

その一連の騒ぎを眺める私『美国織莉子』。

いや、なんで勝手にBBQしようとしてるの？

ここ私の家なのに？

それ元々お父様のBBQセットなのにな？

ちよ、ソレ冷蔵庫に入れておいた貫い物の仙台産の曲がりねぎじゃない！いつとつてきたの!!

あ！それは後で茹でようと思ってた北海道産のトウモロコシ!!

ちよ!?ちよつと何やってるのキリカ?!?!A5ランクの秘蔵肉をこんな所で出さないでよ!!

コイツらに知られたらあつという間に喰い尽くされて……

あつ…ダメみたいですね（諦め）

ついに私の静止も効かずに佐倉杏子がコンロに火を灯してしまった。

こうなつたらもう彼女達は止まらない。

肉というカロリーのバケモノを前にした育ち盛りの中学生にとって体重というストッパーなぞなんのその。

その強大な誘惑には誰も逆らう事は出来ない。

しかし、『十人もの人間がBBQをやるにはこの庭はいささか心もとない』という問題も

この家は悪魔によって改造されているので空間拡張魔法で庭を広げる事で解決される。

ここは紅魔館じゃ無いのだけでも……

そんなこんなで急遽『第18の魔女戦おつかれパーティー』は始まった。

宴は夜が更けても続いており、夜ご飯時を過ぎたところからなんか悪魔が調子に乗って勝手に焚き火を焚いてカレーを作っている。

いや、別にソレ自体はいいんだけどその材料はいつたい何処からとってきたの？
そのカレールウってウチで使っているのと同じヤツよね？

案の定キッチンに行くとカレールウの他、様々な食料がゴツソリ無くなっていた。キレた。後でブン殴る（キリカが）

「ウイヒヒヒ……みんな〜楽ひんでるかあ〜い……ヒック」

キリカと共にカレーを作ってる悪魔を締め上げていた所に、ベロンベロンになった鹿目まどかが家の中から庭に戻ってきた。

その大事そうに抱えている腕の中にはお父様のワイン貯蔵庫にあった年代物の一品。

いや、犯罪!!

たしかに、ソウルジエムが本体である魔法少女にとってアルコールによる脳萎縮なんて効かない。

急性アルコール中毒になったとしても魔力がある限り息が止まった、心臓が動かなくなつた、程度で死にはしない。

悪影響が無いのだから、毒物だろうがなんだろうが存分に楽しむことが出来る。でもさ……せめて法律は守ろう？

貴方そんな悪い子じゃなかつたでしょう!?

勿論、この場にいる魔法少女達が酒なんて面白いおもちゃを見逃す筈がない。

彼女達はなんの躊躇も無しに次々とワインを開けていき、お父様のワインは全て中庭に出され貯蔵庫はすつからかん。

後日、悪魔がなにかしらの部屋に改造するでしょう。

アルコールが入つた事で彼女達の悪ノリは更にエスカレートしていく。

キャンプファイヤーに花火、チーズフォンデュに大道芸……

彼女達は人の家の庭をキャンプ場か何かだと勘違いしているのだろうか？

ハッキリ言つて正気の沙汰では無いが、コレもあの悪魔の影響なのだ。

そんな喧騒から少し離れた所でワインを呑んでいると、(ここまで来たら呑まなきややつてられないわよ) 割と珍しい光景に出くわした。

悪魔が懐から四角い紙の箱を取り出すと端をトンと叩いてスタイリッシュに紙巻タバコを出している。

彼女が口に咥えてポケットを探っていると、悪魔の目の前ほんの数センチの所を業火が通り過ぎていき、タバコに火が着いた。

どうやら、佐倉杏子が火吹き芸で火をつけたあげたらしい。

また喧嘩になるな……と予想したのだけれど、

意外にも悪魔は「くふふっ」と短く笑うと上機嫌でその紫煙をくゆらせている。

佐倉杏子の方も「くひひっ」と笑っただけでその場を離れ、千歳ゆまにせがまれるがままに他の大道芸に挑戦しに行った。

なんだか甘酸っぱいようなそうでもないようなよくわからない不思議な空間だったが、私はこの空気を知っていた。

うん、完全にアウトロータイプの世界の百合そのものだね。

彼女達にも真つ当な恋愛が出来るのか……と、半ば感動したものだだったが、よくよく考えたら佐倉杏子は天然ジゴロみたいなのもあるし、悪魔は例によって例の如く悪魔だし、

冷静に考えると恋愛として成り立っていないかった。しょんぼり…。

(ちなみにタバコは悪魔と私以外には不評だった。そんなに不味いかしら？コレ……)

そんなこんなで宴の場のボルテージも上がっていき、ワインが無くなったので悪魔が

様々な酒を買い足してきて酒呑み対決が始まってしまった。

目の前に広がるのは深夜に女子小学生と女子中学生がジヨツキに入れたストロングゼロをラツパ飲みするという、実に究極に犯罪的な光景。こんなの見つかったら一発で補導モノだろう。(見つかるわけが無いけれども)

最終決戦のカードは案の定『暁美ほむら』VS『佐倉杏子』

一時間に及ぶ接戦だったが、僅差で悪魔が優勝した。

そんな事よりも、鹿目まどかが3位の座に輝いた方が私は驚いたけれども……

そんな横で酒呑み対決に参加していなかった巴マミは酒で血を洗う修羅の酒呑み対決を肴にして、何を血迷ったのか業務用角瓶と炭酸をジヨツキの中で混ぜていた。

いや、それ自体は至って普通の事なのだがどう考えても比率がおかしい。角瓶9の炭酸1の濃度のハイボールを作っている。

ジヨツキには氷も沢山入っており、それをガラガラ鳴らしてから排水溝のような音でイツキ飲みする。

例の「ハイボールの人」の完全再現だった。

椅子に座っていたので上機嫌にアル中ステップも披露している。

しばらくその濃すぎるハイボールを堪能した巴マミは、今度は何処から持ち出してきたか謎だが畳の上にごぎを敷いて座りだした。

いや、本当に何処から持ち出してきたの!?

(後で聞くとやっぱりあの悪魔仕事らしい……あの盾って異世界転生者御用達のアイテムストレージよりもチートなんじゃ?)

その傍らには旧式の炊飯器を置いてあり、その後ろにあるスピーカーからは永遠に「てってってー」が流れ続けている。

そんな例の舞台と言っても過言では無い空間を作り出したバママミは、

BBQをした時に残っていた肉をセロリや大量の味の素(まるまる一瓶)、その他調味料と共に炊飯器に入れスイッチを押して煮込み始める。

それを待っている間に今度はキャンプ用のバーナーで油が入った鍋を加熱し、不安定なソレで肉を揚げ出した。

その程度で終わる彼女では無く、次々と「ハイボールの人」が作っていたトンデモ料理を作っていく。

そして、見事全て完食してしまった。

一回戦敗退で唯一生き残っていた千歳ゆまからは拍手喝采(その他、私以外の全員は酒呑み大会に出て潰れてる)

「水道止められたのでコインランドリー行ってきます」

と言って立ち上がると、そこでバママミは糸が切れたように倒れた。

何も宴会芸にそこまで身体を張らなくても……………

ひとしきりケラケラ笑っていた千歳ゆまも、笑い疲れたのか眠ってしまった。

ようやく訪れる静寂。私はなんとなく屋根に登って日本酒をお猪口に注いで月見酒をキメていた。

ちなみに元々ウチの敷地内には認識阻害魔法がかけられているので、ご近所さんから私の姿が見られたりはしない。

いくら春だからと言っても夜風はまだ寒かったが、火照った身体を冷ますにはちやうどよかった。

屋根の上から改めて拡張された中庭を見下ろすが、なんともまあ……酷いものね。

佐倉杏子の尽力によって食べ残し等は無いけれど、BBQセットやキャンプファイヤーの燃えカス、花火が突っ込まれた水入りバケツ、バママミのアル中セット、e t c . e t c . その他諸々……………

アレ？もしかしなくても、コレ私が全部片付けないといけない感じ？

☆☆☆☆

翌日、未だ日は高い休日の午後2時

ウチのリビングは二日酔いで動けないバカ達によって占拠されていた。

魔法少女は脳萎縮は避けられるが、酔いを感じれるようにアルコール耐性は付けていないので普通に二日酔いはするのだ。

悪魔が「もう二度と呑まない」とか言っているが、それはまた呑む人のセリフである。ちやらんばらんヤツが禁酒なんてできるハズもない。

全員が床に這いつくばってゲロを流しているとても情けない姿だが、何の因果かこのイロモノ集団こそが、私の所属しているチーム。

見滝原を縄張りとしており、現役最強チームとウワサされ半ば伝説化しているレジエンドチーム

その名も『ピユエラ・マギ・ホーリー・デクテツト』聖なる魔法少女による十重奏なのである。

一体ナニがどうしたらこうなってしまうのだろうか……かつての暗殺対象と共に馬鹿騒ぎを送る毎日をごすなんて

ほむら編その5 『VS第一の魔女ADAM』

★☆☆☆☆

《美国織莉子の日記より》

3月11日 土曜日 (先勝)

私達の世界はたった一人の来訪者によって全く別のモノへと変えられてしまった。

今まで信じてきた私の使命は意味を無くし、自分自身でこれからの道を切り開いていくのだ。

そんな目まぐるしく変化し続けていくであろう私……いや、私達の世界を整理し受け入れる為に、

今日から日記を感想と共に書き留めようと思う。

事の始まりは昨日の午後

キリカと共に葬式から帰っている最中に見えた『予知』だった。

「黄色をした道化師の魔法少女が魔女を従え、他の魔法少女と戦っている」そしてその

直後に見えた

『私の家に何者かが襲撃し、私を殺す』という二つの予知。

襲撃の予知から彼我の力量差を理解した私は、直ぐにもう一つの予知で見えた魔女使いの魔法少女——優木沙々と同盟を組んで対抗する事にした。

さくつと優木沙々の問題を解決し、私達は早々に準備に取り掛かった。

彼女の家（レンタル倉庫）に置いてきていた魔女を回収し、グリーンフィードを全員に分配し、綿密に作戦戦闘中の『予知』がある以上、柔軟性が非常に大事になってくるので作戦はシンプルなモノにならざるを得ないを立てた上で襲撃者を待ち伏せし、こちらが最大限有利な立地で戦った。

結果は、惨敗

私の『予知』は尽く通用せず、『速度低下』込みのキリカと沙々の操作する魔女の挟み撃ちも、全て軽く捻られてしまった。

しかし、彼女は『予知』とは違って私達を殺そうとはしなかった。ただ攻撃には攻撃を、言葉には言葉を返すのみ。

そこに一筋の希望を見出し舌戦に持ち込んだが、やはり私は敗北した。彼女の背負っている物は私達が理解するにはあまりにも大きすぎた。

彼女の成し遂げようとする事はどうしようもなく正しいことだった。

彼女の精神は私達なんかよりもよっぽど気高かった。

私達が彼女——『暁美ほむら』に勝てない事は当たり前のことだったのだ。

その後、色々あつて魔女結界が崩壊した後

キリカにグリーンフシードを使っている暁美さんの背後をとつた優木沙々は洗脳魔法を使つたが、跳ね返されていた。

今思い返すと、彼女の規格外さを間近で見ただけの私は「暁美さんならこの程度大丈夫だろう」とすっかり思いこんでいたのかもしれない。

沙々が動いているのを見ても特に危機感を感じなかつたのはそういう事だろう。

その後、暁美さんにもミスがある事が判明した。

跳ね返した洗脳魔法の強度を強くしすぎてしまい、優木沙々が永遠に彼女の下僕となつたのである。

いくらド畜生で小物で性悪な優木沙々だとしても、一人の少女の人生を壊してしまい慌てふためく本人は隠しているつもりだったのだろうが、バレバレだった。暁美さんの姿からは

『彼女は絶対の神等ではなく私達と同じ人間である』事がありありと伝わってきた。

この事件が無かったら私達は彼女を崇拜していたかもしれない。

その後、落ち着いた暁美さんはキリカの傷を完全に修復させると、今回の彼女の目的を話してくれた。

曰く

『見滝原を襲う災厄の魔女「ワルプルギスの夜」の討伐』

『最強の魔女とも言える「救済の魔女」の誕生の阻止』

この二つを成し遂げるために私達と協力関係を結ぶ事が主な目的だったと言う。

それは奇しくも私達の目的と同じモノだったが、私達は鹿目まどかを暗殺しようとしていたのに対し、暁美さんは鹿目まどかを守ろうとしていた。

彼女には鹿目まどかを生かしながらも魔女化させない手立てがあるらしい。∴が、何処でインキュベーターが聞いているかわからないこの状況では詳しく話せないという。

ちなみに、私の予知が効かなかったのは彼女が並列思考をして私の予知を誘導していたからだそうだ。

それも一般的な無意識を利用する並列思考では無く、『二つの全く別の事を同時に思考する』という化け物じみたモノ

(やっぱり暁美さんは人間を止めているのでは?と思っただが、そもそも私達魔法少女は人間を止めていた。)

最初の襲撃の予知も並列思考によって誘導されたモノだったらしい。つまり、私達は曉美さんの手のひらの上で踊らされていたに過ぎなかった。

——こうして私達3人は曉美さんをリーダーとしたチームを組む事になった。

戦いの後、私の家でぎっくりとした今後の活動方針取り敢えず何をするにもまずは戦力が必要だから、強い魔女を仲間にするを聞かされた私達は、

「その前に、あなた達はその疲れた身体を癒やしなさい」

と言われたので今日は丸々一日を体力回復と英気を養う為に費やした。

学校は勿論全員サボって、キリカと一緒に買物をしたり、

キリカの家から持ってきたゲーム機ゲームキューブで四人で対戦大乱闘スマッシュブラザーズDXゲームをしたり

(結局三人で束になっても曉美さんのスネークには勝てなかった)、

ただただ昼間から惰眠を貪ったり……と、気の赴くままのんびりと過ごした。

おかげでキリカはいつも以上に元気になり、沙々はすっかり身も心も曉美さんの物となり、私も心なしか身体が軽くなったような気がした。

また、曉美さんには『ソウルジェムの調整』とか言う施術もしてもらった。

なんでも、直接戦えない魔法少女が編み出した技術らしくて、調整屋とか言う商売が成り立っているらしいが

彼女のはその技術を盗み見た情報だけで研究、習得したらしい。

その調整のおかげで基礎的な身体能力や魔力の循環が上手くいくようになったし、常時発動故に燃費が悪かった私の『予知』もなんとか任意発動させられるようになった。

キリカも調整のおかげで今まで弱点だった『一撃の軽さ』がある程度緩和され、そこそこの重い攻撃を今までと変わらないスピードで放てるようになった。

沙々さんも燃費が上がったり、洗脳のクオリティが上がったりしたらしい。

しかし、この『調整』は副次効果として施術者に記憶が流れ込んでしまう。

結果として私達の過去を知った暁美さんは、何か言いたいことを無理やり飲み込んだような顔をしてアドバイスをしてくれた。

『弱さと幼さと何かにすがる事は全く違う事よ。そこを混同してはいけないわ。』

『人は自分をさらけ出せる他人が居ないと生きていけない生き物なのよ』
なるほど、確かに私の過去を見たらしい言葉だった。

キリカの願いもわかったようで、『私に相応しい自分に変わり続けたい』という願いだった。

まさか、キリカと魔法少女になる前に出会っていたとは……

『たとえば、過去がどうであつても今の貴方達は私の大事なチームメイトよ。それだけ

は忘れないで。』

最期はそう言つて私達二人を抱きしめてくれた。

暁美さんの腕の中はとても暖かかく心地よかつた。

と、まあ今日起こつた事はこんなところだ。

正直これから私達の世界がどう変わつていくのかは見当もつかないが、少なくとも以前の世界よりは素敵な世界になっているように未来の自分を信じようと思う。

3月12日 土曜日 (先負)

3月13日 日曜日 (仏滅)

3月14日 月曜日 (大安)

酷い目にあつた。

まさか三日三晩戦い続ける事になるなんて……

★☆☆☆☆

おはようございませう（早朝寝起きドツキリ）

よしよし、織莉子達はちゃんと3人川の字になって寝ていますね

ねぼすけさん達にはこの催涙スモークグレネードランチャー（無反動砲ver.）をお見舞いしちゃうゾ

「最初からクライマックス！なRTA、はっじまゝるよ〜!!（クソデカ目覚まし）」

前回は無事（？）に織莉子とキリカ、そして本チャートの主人公『優木沙々』を仲間にした所まででしたね。

まあ、前回と言つてもあの一戦から既に一日程時間が経っています。

その間は彼女達と友好を深めたり調整してあげたりしてました。いわゆる事前準備というヤツですね。

「ゴホツゴホツ……って曉美さん?!いきなり早朝に何かしら!？」

「んにゃー……あと5分……」

「ほむら様?!敵襲ですか?!?!」

やれやれ、まだ寝ぼけているようですね。

昨日までは散々甘やかしましたが、今日からのんびり日常パートもおしまいです。

ここからは果てしない強敵との連戦となるので、さっさと準備して出発するぞ!!

「遠足の時間よ。各自おやつは300円まで、準備が出来たら中庭に集合しなさい。」

「?」「?」「?」

質問される前にさっさと部屋を出てしましましょう。こういう時は有無を言わさない強制力が必要です。

中庭には既に用意していたVTOL機があります。

ハイ、エヴァでゲンドウとかが乗っていたアレですね。

勿論、こんなモノ自衛隊の基地などにはあるはずがないのですが……

無いのならば作ってしまえば良いでしょう?

という訳で過去に全ての分野の大学をそれぞれ主席卒業している私の技術にかかれば、この程度のジェット機は一日で建造できました。

やっぱり一番大事なのは労働力(分体)なんやなって……

さて、準備を終えて中庭のVTOL機を見た皆の反応ですが、三者三様ですね。

織莉子は絶句しています。目がこれでもかと思開かれ、顎が外れそうな程口を開けて固まっています。

自分の家の庭に昨日には影も形も無かった乗り物が突然現れて信じられない……といった所ですかね。そりやそうだ。

織莉子とは対象的に、キリカは目をキラキラさせながら興奮してVTOL機をペタペタ触っています。

この反応は…もしやキミ、エヴァを知っているな？

昨日もガギエル初めて見た時興奮してたんじゃない？

そして、沙々ですが…：うん

そんなモノには目もくれずにVTOL機の搭乗部に立っている事でガードが薄くなつた私のスカートを覗き込んでます。

キミは本当にブレないね（元凶）

まあキミをこんなにしてしまった事に負い目を感じてる部分もあるので指摘はせずに好きなだけ見せてやりますか…

さて、残念ながらこれRTAなのでリアクションしている時間なんてロスでしかないんですよ。面白いんですけども。

特に今から戦いに行く相手はとにかく耐久が凄いので時間がかかります。

じゃけん、早く出発しましょうね。

「さ、目的地までコレで行くわ。皆、ちゃんとシートベルトを締めて座りなさい。」

「は!?!ちよつ…：曉美さん正気なの!?!こんなので出ていったらご近所さんに迷惑どころか警察がくるわよ!?!」

「問題無いわ。光学ステルス迷彩に加えて認識阻害魔法も組み込みである。ダメ押しにアンチバリアの機構も備えてるから、たとえ相手がアメリカ軍でも魔法少女でもバレ

る心配は無いわ。」

「アンチバリアって……このVTOL機もそうだけどほむらってアニメの世界にでも行けたりでもするの?」

「確かに発想の元はそうだけれども、基本は全部私が開発したものよ」

「ええ……(困惑)」

織莉子が遠い目をしていますが、こんなのはまだまだ序の口なんだよなあ……

さて、皆がシートベルトを締めたのを確認してから出発するようにしましょう(1敗)

「キリカーっ!!」

「くふふふっwwキリカさーんw?大丈夫ですかーw?」

いっつつつ……どうやらシートベルトをつけてなかったキリカが私の後頭部にダイ

ブしてきたみたいですね。痛い……(涙目)

「キリカ?そんなに落ち着けないのなら貴方には副操縦士を任せようかしら?」

「ふへっ!?!やるやる!!」

そんなこんなでキリカに操縦方法を教えながらの出発になりましたが、許容範囲です。

むしろ私が居なくても飛ばせるようになるのはうま味ですかね。

それでは大海原に向けて出^{しめっほっ}発!!

「そういえばほむらー。さつきから凄いスピードで海の上進んでるけどコレ何処に向かっているの?」

「そうね。そろそろ行き先を教えてくださいませんかしら?」

出発からだいたい2〜3時間経ちました。

初めこそ自作VTOL機のインパクトに流されて乗ってくれたものの、

そろそろ彼女達もおやつや携帯ゲーム機だけでは不安になってきたようです。

まあここまで来ればもう帰るなんて選択肢は消えたので教えてもいいでしょう。

「あ、そういえば言っていなかったわね。南極よ」

「そう…南極ね。」

え?南極??

織莉子が信じられないような物を見る目でこつちを見てくる。

うん。まあそうなるよね。だから伝えずに乗せた訳だし。

「そう、南極。」

「ほ…ほむら…?このVTOL機に南極ってもしかして…」

お、キミのような勘の良いガキは好きだよ。(話が早いから)

「ええ…おそらくキリカが考えてる通りであってるわ」

「ハ…ハハ…嘘でしょ?」

ギギギ……と壊れた機械のように首を動かしてこちらを見てくるキリカ
「残念、本当です。」

満面の笑みで答えてやりましょう。

私の笑顔とかかなりレアだぞ？（自分で言うな）

おっと、ソウルジェムが濁りそうですね。

危ないなあ（元凶）、ほい、浄化完了。

「ちよつと！暁美さん!?南極ってどういう事よ!?

キリカもキリカで何があつたの?」

織莉子はエヴァを知らないのので話に付いてこれないようですね。

仕方ないのでちゃんと説明しましょうか。

「南極に行く理由は第1の魔女『ADAM』を捕獲する為よ」

「うーわあ……大丈夫だよね?セカンドインパクトとか起きないよね?」

キリカがガツガチ歯を鳴らして震えている。

大丈夫だいじよーぶ。よつぽどの事が無い限り起こらないから。

お、ちょうど南極大陸が見えてきましたね。

それではアダムを起こしましょうか。

おつはよーございまーす

「発射アツ!!」

「いや発射って何!?!」

後ろで織莉子がうるさいですが気にしない気にしない。

躊躇なく対地攻撃ロケットランチャーのボタンを押しましょう。

もちろん、対象はあの一際デカイ冰山の中の魔力反応だ!!

ドドドドドッカーン

燃えるゝ燃えるゝ冰山が燃えるゝ

中からゝ出てくるはゝ光の巨人ゝゝ♪（作詞作曲：暁美ほむら）

「さあ、神殺しの時間よ」

☆☆☆☆

《美国織莉子の日記より》

正直に言うとうと、私は生きて帰れた今でもあのVTOL機に乗った事を後悔している。

思えば暁美さんは最初からわざと目的地を伏せていた。

初めに遠足だと言ったのも、わざわざあのVTOL機を中庭に置いたのも、全て私達の注意を他に惹きつける為。

うーん…確かに今回の作戦は今後の為に必要だったとはいえ、やっぱり一言相談してほしかった。

暁美さんがVTOL機からミサイルを撃つてから、私達は地面に降り立った。当たり前だが、広がっている光景はどこもかしこも雪、氷、吹雪、クレバス。と、言うことは無かった。

いや、それどころか今まで見えていたハズの南極大陸すら無くなっていた。

その代わりに見えたのは……毒々しい魔女結界と、その奥に佇む真っ白な光の巨人
うん……うん？

まぎれもなく、アレは魔女だった。

暁美さんが「ちゃんと封印が解けたようね」とか呟いている。

でも、明らかに魔女にしてはおかしい。

勿論、魔女は総じて巨大な姿のモノが多い。中には2メートル程度のモノもいるにはいるが、10メートルを超える魔女はそれなりに多い。

だが、アレはそんなレベルでは無い。大きいとか小さいとか、そんな低次元の話では無い。

存在の格が違う。

ひと目見ただけで体中が竦み上がるようだった。

暁美さんの説明によるとアレが「第1の魔女『ADAM』」

新世紀エヴァンゲリオン

得意顔で説明する暁美さんの解説を要約すると、アレはとあるアニメが大好きな魔法

少女達が魔女になった姿らしい。

元々のモチーフとしたモノが神のような存在だったのと、願いが組み合わさって強力な魔女へと成長してしまったとかなんとか。

その性質は『永久機関』今後の計画に役立つので仲間にするとの事。

沙々さんの洗脳魔法は、魔女相手に使う時は一度瀕死状態にまで持ち込まなくてはならないらしいので、第1の魔女と戦わなくてはいけなかった。

キリカ曰く「ふざけんな!!生命の実もつてるようなヤツに勝てるか!!」

(ちなみに直後の沙々さんの会話から、暁美さんと戦った時の魔女もエヴァシリーズ(暁美さんがそう言っていた)の魔女らしい。)

ともかくにも、戦闘はこちらの先制攻撃でスタートした。

私の『予知』、キリカの『速度低下』、沙々さんの『洗脳』による『統率の取れた魔女の軍隊』、そしてチートじみた暁美さんが最初から最後までフルスロットルで戦い続けたのだけでも、

第1の魔女の凄まじい回復力と無尽蔵の体力、『A.T.フィールド』と呼ばれる特殊な結界(正式名称はAbsolute Terror Fieldらしい。)に阻まれてしまい、私達と第1の魔女との攻防は三日三晩続いた。

幸い、暁美さんが大量のグリーンフシードを持ってきていたから魔力の枯渇の問題は無かったのと、沙々さんのガギエルのA・T・フィールドで第1の魔女のA・T・フィールドを中和出来たので攻撃は通ったのだが、だんだんと皆の体力は消耗していく一方。ついに蓄積した疲労によって沙々さんが倒れた時、苦々しく顔を歪めた暁美さんは「やってくれたわね……」と憎々しげに第1の魔女に対して呟くと

私達にV T O L機の中に退避するよう指示して一人戦場に残った。

なんとか気絶している沙々さんをキリカと二人がかりで引き上げ、キリカの操縦するV T O L機で空に避難した私達が備え付けられていた双眼鏡で下を見下ろすと、

そこでは初めて会った時と同じ、魔法少女の戦いではありえないトンデモ風景が広がっていた。

「これ下手したら死んじゃうからやりたくなかったのだけどね……」

1200年以上生きてても私は自分の仲間傷つけられて黙ってられるほど人間出来上がってないのよッ!!」

そう言う暁美さんは盾の中から二つの同じデザインの指輪を取り出して指に装着する。

宙に浮くオーラを纏った不思議な魔法陣を3つ（青二つ赤一つ）描いたかと思うと、何をトチ狂ったか、いきなり肩と背中がさらけ出された青を基調とした奇妙な服に姿

を変えた。

早着替えだとかそういう類のモノではなく、アレはいつも彼女が行っている『調整』によるソウルジェムの改造。

つまり、今の彼女はアレが魔法少女服なのだ。（後で聞いた話だと、『モード：シャノア』と言うらしい）

さらけ出された背中中は傷一つ無いキレイな肌だったものの、彼女が魔力をその腕と背中に這わせると紅い入れ墨のようなモノが浮かび上がり、これまた奇妙な魔法陣のようなものが出来上がった。

そして、彼女は浮かんでいる魔法陣を（仕組みはわからないが）その背中の魔法陣に吸いこませる。

dominus angor

次の瞬間、爆発でも起こったかのように彼女の魔力が強大なモノへと変貌していく。その魔力は濃密で、暴力的で、血の匂いがした。

さながら、恐怖の大王の復活

支配者たるモノにしか許されない圧倒的な力が、そこにあった。が、その力も代償無しでは使えないようで、身体中から断続的に血が吹き出していた。

暁美さんは何も持っていない両手を大きく振りかぶったかと思うと、そこから一瞬で

超巨大な青紫色のビームサーベルを生成した。

UNION Gryph 「n i t e n s . m e l i o r f a l x 『V e n u s 』」

身体の何倍もあるビームサーベルを生成する魔力量や技術も大概オカシイのだが、何よりワケがわからなかったのはそんなバカでかい武器をまるでプラスチックバットのよりに振り回す膂力。(もちろん魔力で補正しているのだろうけど)

一撃一撃がATフィールドを切り裂き、魔法の四肢を切断していく

頭部だけになった頃に沙々さんが目を覚ましたが、魔法を使えそうに無いので暁美さんに(備え付けられていたスピーカーから)相談すると、病み上がりの沙々さんの負担を減らすため私達の二人の魔力を沙々さんに繋げて3人の力で洗脳魔法を使うという解決方法を教えてもらい、私とキリカの力を最大まで使い果たしてようやく第1の魔法を洗脳する事が出来た。

その後の事はよくわからない。

暁美さんによるとそのまま私達3人は気を失ったらしいので、暁美さんの魔法によって家まで転送されてそのまま布団に寝かせられていたらしい。

結局、起きたのは既に深夜だった。

ふう……

まさか日記を書き始めて二回目で一氣に三日分溜め込むことになるとは……

三日分も一気に書くって案外疲れるものね。

これからはこんな事が起きないように朝一番でその日の予定を聞くことにしよう。

ほむら編その6 『VS第三の魔女SACHIEL』

☆☆☆☆☆

《ほむらside》

おはようございます！（徹夜明け）

いやー第1の魔女は強敵でしたね。

まさか討伐に3日もかかるとは……この暁美ほむらの目を持ってしても見破れませんでした。

戦闘中に見滝原で別行動している私から連絡が入ってしまい、対応しているスキに沙々の体力が尽きて倒れてしまった時はもう……焦りましたね。

それもこれも全部試走の事前にエヴァシリーズの魔女と戦った時間軸よりもアダムが強くなっていた事が原因です。

織莉子、キリカ、沙々十ガギエルとその他の魔女、それに私のドリームチームでも三日かけて削った後に命がけの超火力戦法でなんとか瀕死に出来るとか普通の魔法少女だったらず勝てないでしょ。（普通の魔法少女は南極の氷山を壊したりしない）

まあ、それでもアダムはエヴァシリーズの魔女の中では動きが遅く攻撃が少ない防御型寄りなので、普通の魔法少女でも死にはしないでしょう。(逃走を第一に考えた場合) 兎にも角にも、これで『S2機関』こと固有魔法『永久機関』を手に入れることが出来ました。

これで様々な武器の超強化が可能になりますね。楽しみだなあ！(クルキチ研究員)
あ、ちなみに他のエヴァシリーズの魔女にはS2機関は無いです。コアはありますが、ただ単に弱点になつてみるみたいですね。

なのでガギエルのコアでS2機関の研究を進めるとかは出来ません。だからアダムを仲間にする必要があつたんですね。(まったく意味をなさない例の構文)

それとアダムを連れてくる事にはもう一つカーナーり重要な意味があるのですが……

おっと、そろそろ織莉子達が始まるころです。

起こすついでにちよっかいかけに行きましようかね。適度な嫌がらせは友好度を深めるコツです。

ただ単に礼儀正しいだけじゃ他人行儀になつてしまいそれ以上の発展は見込めません。急接近する為には多少常識はずれでも相手に強烈な印象を残す事が大切なのです。

☆☆☆☆

《キリカside》

コツン

コツン

コツン

コツン

廊下から誰かが歩く音が聞こえてくる

ふわあ……今何時？むにや、うーんそろそろ起きるかな

コツン

コツン

コツン

コツーン

廊下の足音が止まった。でもまだ寝てたいから寝返りをうつ。

あ、織莉子だ。まだ寝てる。ふへへえ……織莉子が寝てる姿はいつ見ても癒やされるなあ。

そんな事を寝起きのふわふわした頭で考えていたら、ドアが勢いよく蹴破られる。朝日が廊下の窓からドアを通して部屋に差し込んできて、ちょうど逆光のような状態となり来訪者のシルエットを黒く染め上げる。

「おーいねぼすけども〜! 3秒以内に起きてこねえとドタマぶち抜くぞお〜」

そのシルエツトは特徴的な巻き舌気味にそんな事を言いながらコチラにバズーカを向けてくる

「はい、い〜ち」

チュドーン ドツカーン

「いや、2と3は?!?!」

「知らねえなあ〜漢は1だけ憶えてれば生きていけるんだよ。まあ、私は女だから知ってはいるが」

コイツ……さり気なくアレンジを加えて原作以上に面倒なヤツになりやがった。

「それにしても、今のを防ぐのか……なるほど。ただのねぼすけじゃあ無いみたいだなあ?」

コイツは1セット鉄板ネタが終わったのにまだ松平のマネして巻き舌で喋ってる。微妙に似ていないのが余計腹立たい。

織莉子に当たっては不味いから咄嗟に変身して受け止めたけども、クツソ目が痛い。コレこの前の催涙スモークグレネード!? 同じの使うなよ。

「ゴホツ……ゴホゴホツ……ちよつと! またなの曉美さん!」

「あーあ、後ろまで煙がだだ漏れで織莉子が起きちゃったじゃない……かッ!!」

取り敢えず殺る。ソレ以外の感情を削ぎ落として最速で飛びかかる。狙いはソウル
ジェム一点。

「当て身！」

しかし、時止めによる瞬間移動で後ろにまわられ背後から一撃。ふいうちは威力8倍
！あつさり私は意識を手放してしまった。

「ふっ……やはり、我が『静』なるスタンドハイエロフアントグリーンこそキサマを始末
するのにふさわしかつたな……」

うるせえ、それはスタンドじゃなくてただの武術じゃねーか。あと、始末されるべき
は織莉子の快眠を邪魔したお前だからな。

うっかり聞こえてきたセリフについてツツコミを入れてしまったが、今度こそ私は意識
を手放した。当て身を受けたら意識を手放さなくてはならない。古事記にもそう書いて
ある。

「んで、朝ごはんは？」

たつぷり10秒ほど意識を手放したのち、私は復活した。魔法少女だからこの程度の
打撃はなんとも無い。ほむらも加減してくれてたしね。

それとコレとは話が別。朝ごはんは一日の元気の源なんだ。元気が無かったら織莉
子を守れない。最重要案件

「はいはい、キリカには暁美スペシャル作っておいたからさっさと着替えて寝癖直してから食べなさいよ。」

「はい。」

さっきのネタもあってどっかの副長の犬の餌を連想してしまうが、あんな油の塊なんかと違って暁美スペシャルは最強に美味いぱーふえくとな料理だ。

スーパールとかコンビニとかで売ってる小さい5個入りのアンパン、アレをフォークでめつた刺しにして穴まみれにしたら、

卵に牛乳と砂糖を溶かして混ぜたヤツに浸して、

バターを溶かして塗ったホットサンドメーカーに並べて、

残った溶き卵も入れちゃって、挟んで焼いたモノ。

簡単に出来てめっちゃ甘でうまうま最強の食料だ。魔法少女じゃなかったら糖尿病まっしぐらの超カロリーの塊でもある。

南極でもそのカロリーは大活躍した。アダムの攻撃からホットサンドメーカーを守りきって食べる暁美スペシャルは美味かったなあ…

他にもほむらは南極で色んな料理をホットサンドメーカーで作ってくれたりした。

まあ、それはともかくさっさと変身を解除してパジャマから着替える。

「暁美さんってアホな事してると思ったらいきなりお母さんみたいな事言い出すの本

当ずると思う。」

「あら？織莉子も言うようになってきたじゃない。わたしや嬉しいよ」

「え？アホの部分にはノータッチ!？」

織莉子もほむらと話してる間に準備が終わったので朝ごはんを食べに行く。

「ああ？もう！遅いですよ織莉子！キリカ！わざわざほむら様のお手を煩わせるなんて言語道断！ガギエルちゃんの餌にしてあげましょうか!？」

ダイニングテーブルにはそれぞれの朝ごはんが並べれており、既にさささささが座ってた。

口ではこんな事言っているが、ほむらと会った日の内にコイツは『仲間への攻撃禁止』命令がされているから実際は脅しにもなっていない。

というかコイツも本気で言っていない…と思う。ま、あんな激戦と一緒に潜ったんだから多少はコイツの中でも仲間意識が芽生えてると信じたい。

「ん？ささささささ、そのクマどうしたの？」

「私は沙々!!何回も言いますが『さ』は2回で良いんです!!」

「ああ、沙々は私の作業を手伝ってもらったのよ。確かに沙々にはちよつとハードな徹夜だったかもしれないわね。」

「ええ……私達が寝てる間になしてるのよ……」

「ケアル」

ほむらがお得意の魔術とやらを使うと、みるみるうちにさささささのクマが消えていく。

「にやひひひ……あゝ♡ほむら様の魔力がわた私の中にいっくふひやあ♡」

「うっわ気持ち悪い」

それと同時にさささささの顔も悦楽に歪んでいく。うるさいし本当に気持ち悪い。

「へえ、魔術つてドラクエ呪文だけじゃ無いのね。」

「別にホイミでも良いのよ。そこに性能の差はほぼ無い……というかほとんど同じモノね。演出が違っただけ。結局の所『回復魔法』っていう本質は同じだから全く同じ術式

回路を使い回せるのよ。さっきはただなんとなくケアルの気分だっただけ」

なんとなく日常の一場面でほむらの謎が解明されていくのもこの共同生活の面白い所だったりする。もはやほむらって存在がエンターテイメントだからね。

ちなみにほむらとさささささはご飯に味噌汁、酒の塩焼きの和食スタイル。私と織莉子は洋食スタイルだ。(別に和食でも良いんだけどね。)

皆が席についたので食事のあいさつ「いただきます」

うん。おいしい！

曉美スペシャルはこのままでもドチャ甘で最offの高なんだけど、私はコレにさらに

メープルシロップをドバドバかけて甘みを加速させる。

身体がある程度自由にできる魔法少女にしか許されない禁断の甘味だ。

うーん……この背徳感がヤバイ。朝からこんなモノ食べれるなんて魔法少女様様だね。

「うげえ……またそんな悍ましい食べ物のようなナニカを錬成して……見てるだけで吐き気がしてくる……うぶっ」

ささささがなんか言ってくるけど気にしない気にしない。

甘味は人が生み出した文化の極みなんだから。

「今日は皆でエヴァを見るわよ。」

朝ごはんを食べた後、唐突にほむらが言い出した。

ほむらが言うには「これからエヴァシリーズの魔女達を仲間にしていくのだから最低限TV版は観ておきなさい」だってさ。

おもしろそうだけれども、盾の中からDVDが出てきたのはなんで？しかも全巻、旧劇と新劇も揃ってる。

なんか聞いたら他のアニメや映画とかもポンポン出てくるあたり、あの盾の中ってレインタルシヨップを開けるぐらいの種類の在庫があるのでは？キリカは訝しんだ

「で？ここは確か空き部屋だったはずなのだけれど……」

「勿論改造したのよ。やっぱり見るなら大画面で見たいじゃない？」

盾の中身なんてどうでもよくなるくらい頭がおかしい代物が出てきた。

昨日までは確実に何も無かったハズの部屋が何故か立派なシアタールームになっている。

いやまあ、確かにこの家にあつても違和感無いけどね？地下室にワイン貯蔵庫があるぐらいだし。

「ここ私の家なのに……」

「あら、ちゃんと許可をとったじゃない。『空き部屋なら好きにしても良いって』」

「私は自室として使う事を想定してたのだけれど……」

しかも許可を出したのはささささささの部屋の話の時っていうね。

ほむらの想定外の行動に織莉子が早くも諦めムードだ。

うーん……いつもなら織莉子を困らせた判定で今すぐにも飛びかかっている所だけども

本音を言うと私も皆でわいわいエヴァを見てみたい。

「ま、一回使ってみようよ織莉子。もとに戻すかどうかはそれから決めるって事で。」
なんかさささささが信じられないようなモノを見る目でこつちを見てきてる。

いや、だってエヴァ見るのはこれからを考えると必要じゃん！私は常に織莉子の為になる事しかしないよ！

とは言ったものの、流石に最初の衝撃を上回る物が出てくるなんて思ってもみなかった。

『ドアを開けるとそこには映画館が広がっていた』なんて、誰が想像出来るよ。

あ、織莉子の予知ならワンチャン……まあ、今は魔力節約の為にoffにしてるんだけれどもさ。

ほむらの解説だと、どこかの映画館に繋がってるワケじゃなくてココに映画館を作ったらしい。ワケがわからん。サイズ的に明らかに織莉子の家突き抜けてるんだけど。

外に出て確認してみたけど外見は一切替わっていない。つまり、普通の部屋のサイズ外の空間にあの映画館が広がっている事になる。

「

絶句。驚きで何も言葉が出てこない。一体いつからここはトリックアート美術館になつたんだろう？

「時を操るといふ事は空間を操るといふ事。この部屋は私の盾の収納の技術から派生した空間拡張魔法で広げているの。」

……魔術って本当になんでもアリなんだね

※く魔法少女視聴中く※

ヤシマ作戦が終わったあたりで一旦休憩という事になった。初見の織莉子がいる以上、慣れないウチに一気に見ても頭痛くなるだけだしね。

いやあやっぱりラミエルはシンプルに強い。このわかりやすさが知名度にも影響してくるんだなあ……え？ゼルエルの方が強い？

そら（最強の拒絶なんて持ち出してきたら）そう（なる）よ。

そんな事を話しながら私達は散歩（とついでに魔女探^{パトロール}し）の為に玄関に出た。

瞬間。

轟音

爆発

衝撃

赤い閃光が煌めき私達めがけて一直線に飛んでくる。咄嗟に織莉子の前に出たが、怪光線はちょうど家と道路の境界あたりに発生した青い光を放つバリアに阻まれて特有の十字の爆発を生じる。

その衝撃で道路は見るも無残な姿になり、対してバリアを挟んだ私達には音と強風が

来たのみ。

このバリア何で出来ているんだ……というかこんな防御設備織莉子の家に無かったハズなんだけど

その数秒後、爆発による煙が晴れた後に私達が目撃したのは見滝原の中央街を二足歩行で闊歩する巨人だった。

のだが、巨人というにはパーツがおかしい。

頭部にあたる部分は無く、かわりに首の付根の部分に白い仮面が取り付けられている。

胴体も肋骨とそれに守られる大きな赤いコア以外は黒の筋肉で構成されており、その肋骨は鰓のように蠢く。

手足は細長く、肩は異常に隆起している。

その巨人の仮面の目はコチラを向いており、一歩でもバリアの外に出れば『また撃つぞ』という気迫を感じた。

しかし破壊されている街のようすは変だ。確かに街自体は見滝原なのに、人っ子一人いない。

さらに、空は毒々しい赤紫色の雲に覆われている。

やばい、ちよつとあまりにも脳内で感情が爆発してまともな言葉が喋れない。

「キリカが限界オタク化してる……あんな初号機の暴走であつさりやられちゃったヤツに對して？」

「キリカ……」

うべあ、待つて織莉子。誤解だよ!!そもそも本編サキエルは私にとつてあんまり重要じゃなくつて、真に好きなのは

「ん?ちよつと待つて。もしかしてキリカが想像しているサキエルつて……まさか二次創作の最初に逃げたアレ?」

YES!YES!YES!!よかった。ほむらは知つててくれた。

「そう。サマエルになつたあの」

「細胞の……」

「そうそう、投げられるオーストラリア大陸」

「そう……アレは良かったわよね。私が知っているエヴァ二次創作の中で最高傑作の一つよ。」

やつぱりほむらは話が合うなあ!!

そんなやりとりを続けてたら沙々の部屋の窓からガギエル(ミニサイズ)が飛び出してきた。

「縛昂≧縛? 縛昂≧縛?」

「ガギエルも『そうだそうだ』と言っています!」

うーん…ラドンさん?

沙々がボケてくれたりしたこと、どうにか落ちつく事が出来た。

とうかガギエルも知ってるのか…魔法少女時代の記憶が残るものなの?

「まあ、なんにせよアレと違ってこのサキエルは逃げたりしないから、問題なく倒せるはずよ。取り敢えず詳しい事を説明をするから着いてきなさい。」

とにもかくにもまずはほむらから色々聞かないといけない。

「で? キリカ。コレはどういう事なの?」

私は必死に織莉子に弁明しながらほむらの後をついて行った。途中でよくわかんないエレベータに乗って地下に行ったりしたけど、織莉子の誤解を解くのが大変だった。それどころじゃ無かった。

☆☆☆☆

♪

ドオンドオンドオンドオンパー→パー→

ドオンドオンドオンドオンパー→パー→

ンパ パンパ パンパ パンパ パンパ パンパ

ンパパ ンパパ ンパパ ンパパ パーパー←
 ンパパ ンパパ ンパパ ンパパ パーパー→ (ミーレドシラソファミー)
 ンパパ ンパパ ンパパ ンパパ パーパー←
 ミー←シー→ラシレー→ド←シツ←ラー↓シー
 ミー→レー↓ミソー→ファミツ←レーシ↓

例の曲が流れる室内、目の前には何度も映像越しに見てきたNERV作戦本部が広がっていた。

オペレーターはホログラムで再現され行き交う報告の声も劇中そのまま再現されており、まるで本当にエヴァの世界に入ったかのようなようだ。

私は今何故かその作戦本部、MAGIの上に位置する総司令席に座っている。

勿論、サングラスをかけて白い手袋をつけ例のゲンドウポーズをしてポーカーフェイスをしているが、内心感動しすぎてトンデモナイ事になってる。

「目標を映像で確認。主モニターメインに廻します。」

オペレーターのシゲルさん（ホログラム）の操作でメインモニターにデカデカと黒い怪物が映し出された。本当、芸が細かいなあ…。

「15時間ぶりね。」

後ろにたっている織莉子がそう呟く。手元にある台本どおり。

私はニヤリと笑って答える

「ああ、間違いない。『魔女』だ。」

「ハイ、カット!!」

ほむら（映画監督コス）の声とよくあるカチカチならすやつ音が響き渡ると、ささささが操作した端末によってオペレーター達のホログラムが消されていく。アレささささが操作してたのか（困惑）

織莉子はふう…と息をつき、私もサングラスを外して肩をぐりぐりほぐして伸びをしながらか総司令席から階段を降りる。

地上では第3の魔女「SACHIEL」が暴れており時々衝撃が伝わってくるというのに、あろうことか私達は呑気にごっこ遊びに興じていた。

まあ普通に考えて正気の沙汰では無い。

じゃあ何故わざわざ付き合っているのか。それは沙々に軽い洗脳をかけられて物理的な行動が縛られていたからである。

つまり、私達はほむらに無理やりごっこ遊びをさせられていたのだった!!許すまじ暁

美ほむらアツ!! (責任転嫁)

まあ実際はこの作戦本部につれてこられてあまりの改造に吹っ切れた織莉子が言い出したんだけどね

というか浅い洗脳だったとはいえ、無理やり身体を動かされるって結構疲れるね。でも織莉子の顔を見る限り楽しそうなのでヨシ! (現場ネコ)

「さて、じゃあやることやったし作戦会議の時間よ」

そんなこんなでいつのまにかほむらがミサトさんコスになってる。さつきまで映画監督コスだったのに着替えが早すぎない?

まあコレも調整の応用だろうけど……なんだろう。絶対使い方間違ってる気がする。コスプレするための技術じゃないってソレ。

なかなか締まらないゆるふわな空気でなんとなく作戦会議(という名の説明会)が始まってしまった。

「取り敢えず現状の説明から。昨日第1の魔女A D A Mを仲間にしたでしょ?」
「今アダムちゃんは第一ケージに格納されてますねー」

さささささが持つてる端末を操作して外のサキエルが映ってる主モニターメイをエヴァアみたいに入ってるアダムの映像に切り替える。

ええ…確かに2号機以降はアダムのコピーだけでもさあ……

「え？第一ケージって……まさかこんな空間がもつと広がってるの!？」
織莉子が頭を抱える。

ここに来るまでもにも結構地下通路通ってきたしね……多分明日になったらもつと広がってるんじゃない？（空港のアレみたいに床が動くから疲れてないけども）

ところでコレも空間拡張魔法使ってるのかな？

織莉子の家の土地範囲外にまで広がってたらいくら地下でも違法建築なんだけど……

まあ認識阻害魔法かけてたらわからないし、ほむらの事だからうまい具合にやってるんでしょ（適当）

「そうそう。エヴァシリーズの魔女達は特別な魔女でね、

アダムが南極から移動、ないしは消滅すると世界中に散らばっているハズのエヴァシリーズの魔女達が共鳴して、

魔女としての行動に一切縛られずにアダムの元を目指す特殊行動をとるようになるの。

それも使徒と同じ順番でね。

この特殊行動時のエヴァシリーズの魔女達は一般的な魔女の常識にとらわれずにエヴァごっこをするために全力を注ぐ。

わざわざアダムがいる、もしくは消滅させた魔法少女がいる街全体を忠実に再現した魔法結界を作り出して、

アダムに関わった魔法少女のみを狙って結界に取り込んでNERVの役をさせるの。

今の私達の状態がソレね。」

「縛セ縛√い綱? 綱? 蝮舐 r 蛟偵 @ 縛漚 ▲ 縛ヲ險? 縛」 縛ヲ縋ゆ ◆ 縛セ縛漚 U 蛟偵 ○
 縛漚 □ 縛代 ㄟ 蝮濁鴨縛 ヨ 莠工 縛」 縛ヲ縛? → 縛? ユ 疲ウ 募一 大・ウ 縛エ 縋薙 縛才 邁?
 # 縛ヨ 驕句 多 縛エ 縋薙 ※ 縛九? 縋峨 一 縛エ 縛? @ 縋√ お 綱 工 縋。 縋堤 衍 縋雁 一 ス 縛上
 @ 縛ヲ 縋俱 コ コ 縛控 c 縛エ 縛? ↓ 縛セ 縛」 縛工 縋峨 # 縋√ s 縛? 縛九 i 縛ユ

縛昂 一 縛才 邁? # 縋ゆ お 綱 工 縋。 縛斐 ▲ 縛薙 @ 縛漚 √ 縛」

「ふんふん……どうやらこのエヴァごっこはアダムちゃんを倒した魔法少女への試練みたいな感じらしいですね。『まぐれで勝っただけの奴には私達の運命を任せられない』らしいです。」

「なんかアダムを起こしてからガギエルがよく喋るようになったわよね……最初からエヴァシリーズの魔法達を仲間にした事は無かったからわからないけれど、これも特殊行動のうちなのかしら? ガギエル、その話詳しく。」

私達を置いてガギエル(ミニサイズ)、ほむら、沙々の3人で盛り上がっている。話を

聞く限りほむらも知らなかった情報があるらしい。まあ、魔女の言葉を理解出来る人なんてそうそういないだろうしね……

「つまり一般人の被害は全く気にしなくて良い……と。そういうことかしら？ 曉美さん」

だんだんと関係ない方向にシフトしてきたほむら達の会話に痺れをきらした織莉子が割り込む。

「ふーん……織莉子が被害とか気にするなんて意外ですね……？ 今まで邪魔する者は容赦なく殺すイメージしか無かったですしい……」

「いや、確かに私は邪魔するのは全員殺すけども、いたずらに死者を増やしたいわけじゃないわよ」

ぐはあッ!!流れ弾が飛んできた。

まあ、私も一般人殺しちゃったのはついこの前だったしね（あんなになったのは織莉子のクラスメイトだったってのもあるけど）

でももうそこら辺は大丈夫。

「んんっ……そろそろいいかしら？」

今度は私、織莉子、沙々でわちやわちやしてたので、ほむらが咳払いをして話を元に戻す。

「つまり、これから毎日エヴァシリーズの魔女との連戦になるわ。それすなわち魔女が減っているこの見滝原でも短期間で沢山の实戦経験を積めるといふ事。

今後、他の街に殴り込みに行ったりする以上全員ある程度の戦力は持っていないと敵しい……

よつて、このグランドクエスト『使徒、襲来』とも言えるイベントでは――

―あなた達を鍛え上げる事を最優先事項として行動します!!」

☆☆☆☆

諸々の作戦を立てた後、私は射出場に一人来ていた。

『サキエルの固有魔法は「先駆け」。一番最初に行動するとその行動にブースト補正がかかるアタッカータイプよ。ただ、私達が最初に戦ったのはアダムだから、この「先駆け」補正は無効化されるの。つまり、全員で出ていくと瞬殺しちゃうわけ。なので………キリカ!!今日は貴方一人でサキエルを倒してもらいます!!』

ついさつきのほむらの発言を頭で反芻してみる。

うん。やっぱり納得出来ないわあ。別に瞬殺なら瞬殺でいいじゃん。

まあ、織莉子から頼まれたらやるしか無い。織莉子には極上の勝利を捧げるのが私の

喜びだからね。

それにしても作戦本部の他にもこんな場所まで再現してるなんて……

アダムと戦っている間にほむらが呼び出した別次元のほむらが工事してたりいけど、一体どうなってるんだ？三日でこんな施設が出来るわけ無いだろ。

まあそれはそれとして、私は指定されたN-15-34射出口に入ると、魔法少女に変身し、装備の最終チェックをこなす。

うん。多分大丈夫。

「キリカ？準備は良いわね？」

備え付けられたスピーカーから織莉子の声が聞こえてくる。

「ああ。いつでもバッチリだよー」

「発進!!」

ほむら（ミサトコス）の号令と同時に、足場と上半身が固定されてるカタパルトが物凄い勢いで上昇して私を地上へと押し上げる。

何か叫びながら出撃したかったが、そんな事したら舌を噛みそうだ……というのはあるエヴァ二次創作のシンジ君の談。

それに加えて私は今エヴァでは無く生身でこの凄まじい加速度に耐えている。絶叫マシンなんてちやちなモンとは比べ物にならない衝撃に、魔法少女じゃなかったら

光線のチャージを始めている。

空中に飛び出してしまっただけなら空気は蹴ったりすることが出来ない以上、回避の手段が無い。絶体絶命のピンチ！

——なんてマヌケな事はない。

「計画通りッ！」

Stepping Hook ステッピングフックツ！！

私はサキエルに向けて固有武器の4つのツメを飛ばす。

調整によって強化されたツメは前よりも遥かに速いスピードで飛び出していく、サキエルの胸のコアに突き刺さる。

しかし、いくら調整で威力を増したからといっても流石にこの一撃でコアは破れない。このままではサキエルの怪光線に焼かれてお陀仏だ。

が、それはあくまでも「ステッピングフック」の場合。

私が使ったのは新技の『ステッピングフック』

飛ばしたツメには魔力で編み上げた強靱なワイヤーが繋がっており、そのワイヤーのもう片方は私に繋がっている。

着弾する事でツメに仕込んだギミックが発動し、高速でワイヤーを巻き上げ私を私の身体を着弾地点まで運んでくれるという

サキエルはほぼ瀕死。速度低下状態は実質状態異常麻痺と言えるだろう。更に心のなかでAボタンを連打する。

人智は尽くした。後は天命を待つのみ！

「喰らえッ!!洗脳装置!!」
モンスターボール!

「私達沙々ほむらの徹夜の成果!!見せつけてやって下さい!!」

掛け声と共に私はくす玉並の大きさのボールをサキエルに投げつける。(ちなみに私はハイパーボールを信じていない。)

ボールはサキエルに当たるとひとりでに口を開き、中にサキエルを吸い込んでドスンという音と共に地面に落ちる。

1……………

固唾を飲んでボールを見守る

2……………

地下基地の方の音も静かだ。

3……………

お願いします神様仏様無名の神々様アッ!!ここまでの努力を水の泡にしないで下さい!!

ちよつと季節外れの鍋が温かい団らんを演出しているようで、ここまで心がポカポカしたのは生まれて初めてだろう。

こんな日常を護るためにも、私達は強くならなくてはいけない。

取り敢えず、明日はシヤムシエル戦か。

明日は織莉子と戦えるかな？

★☆☆☆☆

「病院内の隠されたおやつ……おいしかったのです。

あの人達は『何かあったら相談してくれ』って言われたけど、

お母さんの事を言っても何も解決しないのはなげさが一番わかっているのです……」

☆☆☆☆☆

ほむら編その7『分体達の苦悩』

現時点での出来事時系列まとめ

（西暦2011年（平成23年））

3月1日 美国織莉子 契約

キュウベえに千歳ゆまを紹介し攪乱

（おりまギ無印一話、おりまギ新約一話）

呉キリカ 契約（時期不明だけど織莉子と同じ日だと良いよね）

3月6日 織莉子が帰り際に魔女に遭遇、浅古小巻が魔女を殲滅し

彼女が魔法少女である事を知る（新約一話）

帰り道キュウベえとの会話「魔法少女候補を見てきた」（新約二話）

織莉子VSキリカ

キリカが織莉子の駒になる（新約二話〜三話）

3月7日 美国公秀とのエンカウント キリカのライダーキック（新約四話）

3月8日 キリカ、浅古小巻と行方晶を殺害（新約五話〜六話）

3月9日 キリカ、人殺しのシヨックで美国家に引きこもる

↓織莉子のクラスメートを殺してしまった事を知って精神崩壊
 ↓織莉子のキリカ改造計画（癖畢走）の始まり（新約七話）

まだ、キリカは織莉子に『理想の織莉子』を抱いていない。
 キュウベえが魔法少女殺しについて調べ始める（新約七話）

優木沙々、風見野で襲撃を受け（新約八話冒頭）

『魔法少女がバママミしかない』と噂の見滝原に侵攻（新約七話最後）

3月10日

ほむら（全ての元凶）、襲来「朝」（ほむら編その1）

織莉子が告別式の帰りにほむらの襲撃を予知する「お昼ごろ？」（新約八話）

バママミ、陥落「放課後〜夜」（ほむら編その2）

キリカ、美緒（名字不明）を殺害して沙々とコンタクト

織莉キリ沙々同盟を結ぶ「午後〜夕方」（新約八話〜九話）

原作とは違い織莉子が沙々を利用しようとせず、依頼に全力を注ぐ
 ↓人見リナ、佐木京、朱音麻衣、を暗殺「夜」（おりマジ原作からの乖離）

3月11日

ほむらVS織莉キリ沙々同盟「01:00〜」（ほむら編その3）

ほむら、織莉キリ沙々と同盟を結ぶ「〜03:00」（ほむら編その4パ一

ト1前半）

半)

一日を甘やかしに使い切り織莉子達のSUN値を回復させる(パート2前

3月12日 VS第一の魔女アダム一日目(パート2)

3月13日 VS第一の魔女アダム二日目(パート2)

3月14日 VS第一の魔女アダム三日目(パート2)

3月15日 VS第三の魔女サキエル(パート3)

……ハツ!?

こうして振り返ってみると最近織莉子やらキリカやらばかりで私の出演少ない……
少くない?

いや、明らかに少ない!(断定)

これは私の物語のハズなのに……と、言うわけで

いつの間にか飛ばされていた私の“裏”の活躍を振り返るRTAはつじまーるよ

Part 5/X「夜、逃げ出した後」

3月11日 午前01:00

今現在、私は巴家にて奇妙な人影と対峙している。

未だ明かりの灯るリビングから扉を開け、照明の灯いていない廊下に現れたソイツは、光が逆行となり表情を読み取る事が出来ない。

わかるのは私と同じぐらいの背丈である事。同じ黒髪長髪で、左腕に小型のラウンドシールドをつけている事ぐらい。

私と寸分違わない姿をした、言わばもう一人の“私”とも言えるような存在。

リビングにいる家主が二人の“私”の存在に気づきそうなものだが、残念ながら私が認識した瞬間に時が止められている。

世界に入門していない彼女が気づくこともないだろう。

勿論の事だが、その“私”の姿は鏡写しになんてなっていない。

故にミラーズの使い魔ではないことは明らかなのだがというかこの時期にミラーズが見滝原まで繋がっていたら割と大事件だわ。せっかくマギウスが神浜に結界を張っているのにミラーズからインキュベーターが入ってくるとか勘弁してくれ…

一体、この“私”は何者なのか——

……と、まあ謎のドツベルゲンガー出現！みたいに描写してみたけど、コレむしろ私の方が偽物なのよね。

あ、どうも

本体である「暁美ほむら」の分体が一人、「暁美ほむら2号カッコカリ（仮）」という者よ。

『んじゃ、そういうわけだから。マミさんベッドに押し倒してしつぽり朝まで楽しんでね!』

前述の通り、私はこの眼の前で巫山戯ふざけてる色ボケ馬鹿…もとい本体オリジナルの暁美ほむらに今しがた創られたばかりの分体で、この人格も出来たばかりなのだけれども

生まれて早々、忠誠心がゴツソリ削れるような事言わないでくれないかなあ…

もつとこう…威厳というかカリスマというか…何かあるでしょう？

ガラでも無いのにバチコンウインクなんてキメちゃって、陽キャ御用達の横ピースなんかをクツソ腹立つ顔しちやって、

そういうのはコミュ力つよつよの陽キャ筆頭のエミリー先生にでも任せときなさいよ

『はあああ〜〜……………』

こんな奇行を目覚めてすぐに見せられたら特大級のため息を吐きながら頭を抑えたくもなるものね。

まさか、初めてのため息が自分の創造主に向けて発せられるモノだなんて夢にも思わなかったわ。

まあ自我芽生えてから夢なんて見る暇無かったけれども。

今現在、本体は美国織莉子に（脳内で）喧嘩をふっかけて、待ち伏せしてる所を返り討ちにして、最終的に丸め込んで仲間にしようと企んでいるのだけでも、

その戦いにパトロール中のマミが乱入してくるととんでもなく面倒な事になるからその解決作として分体である私を創り出してマミの相手をさせておこうとした……と、まあそういう状況なのね。

え？そこらへんは本体視点で既に読んでるって？

……そう

それはともかく、私が物申したいのは

メインの任務が『足止め』のハズが何故かマミに逆レ仕掛けないといけない事になつてる事ね。

いや本当に訳がわからないわ……（例の白いゴミクスでは無い）

『巴家の戸締まりヨシ！』

美国家に……イクゾー！デッデッデッデッ！！（カーン！）デデデデッ！！』

いきなり耳を貫いた定型文に驚いて思考の海から浮上するとため息からコンマー秒程度しかたつていない、既に本体は外に出ていて、玄関はチェーンロックがかかっていた。

おそらく声からして現場指差し猫確認は既に済んでおり、もうあと数秒もかからないうちにマンシヨンの廊下から大空へと飛び立ってしまおう所だろう。

ああもう！まだ何も抗議出来てないのに！

勝手に言いたいことだけ言ってさっさと姿消す所とか、本当に：本体は本体だなあ！チエーンと鍵を外し、ドアを開けて本体を追うような時間はもう無い。

仕方ないが、多少の犠牲には目をつむろう。大丈夫、きつと修理は本体がやってくれるだろう。

私はすぐに数歩後ろに下がり助走距離を確保すると、全身の筋肉をフルで使った本気の飛び蹴りを玄関ドアに放つ。

防犯性から並のドアとは比べ物にならない程に頑丈に作られているはずの玄関ドアだが、高レベル魔法少女としてのフィジカルから繰り出される圧倒的破壊力を一点集中で受けたその姿は見るも無惨な物に変わり果ててしまった。

が、そんな事はお構いなしに私は既に外に出てしまった本体めがけて跳ぶ。

魔法が使えない以上、二段以上のジャンプは出来ないが本体に追いつくだけならばこれだけで良い。

本体はドアをぶち開けた時の音で気づいたらしく、こちらを見て顔を青くしている。

『え……また私、なにかやっちゃいましたか……？』

うるさい！存在自体がチートの塊みたいな奴が今更なろう系主人公ぶるな！！
追加された怒りの分もついでに込めて全身全霊の力で腕を振るう。

拳はキレイに顔面に吸い込まれ、次の瞬間には本体は数メートル下のコンクリートに叩きつけられていた。

『スママセンでした……』

『あら、顔面真っ赤にはらした本体がなんか言ってるわく』

『いや、ホント、調子に乗ってました。添い寝で大丈夫です。許してください』
数分後（時止め中）

本体に壊れた道路と玄関ドアを修理させてマミの家に戻り、正座をさせている。
さて、混乱している人もいるだろうから、ネタバラシというか解説の時間ね。

確かに私達分体は上記の通り「眷属」という立場上本体に逆らう事は出来ない。

しかし、だからといって私達分体は自我を持っている以上絶対にやりたくない命令と
いうのはどうしても存在するし、本体の判断だっていつも正しいわけじゃ無い……どこ
ろか大抵が暴走してるからストップパーが必要なのよ。

だから、私達分体の物理攻撃には本体の暴走を止めるために“本体にのみ攻撃力UP XX”が付与されてる。

また、分体は魔法は使えないからバフはかけられないけどもフィジカル面は本体と全く同じだから玄関ドアをぶち破るといった事も可能。

つまり、こと本体に限った話なら、本気で逃げられない限りしばき倒せる。

まあ一応本体は馬鹿であっても阿呆では無いので分体の拳は避けずにちゃんと殴られてくれるしその後の行動も改善してくれる。

そのための右手

あと、そのための…拳？

とにもかくにも、なんとか本体が冗談半分で出した命令を取り下げさせる事が出来た。

本体が例のお約束をやってくれていなかったら命令の撤回が出来ず、危うくマミの貞操が失われる所だった。

その後、腫らした頬をケアルガで回復してから出発していった。

でも本体の事だから、“自分の分体にしばき倒された”なんて恥ずかしい事は本体視点には書いてないだろうなあ。

私は呆れたように二度目のため息を吐いてからマミが待っているリビングへと戻る。

ちょうど私がクッションに座ったと同時に、再び時が動き出し世界は急速に色を取り戻していく。

あまりのタイミングの良さに思わず笑ってしまう。

あんなにも情けなく、分体にストッパー役としての機能をつける必要があるほど常識が欠如してしまっている本体だけれども、それでも、あくまでも私達の創造主なのだ。

このびったり過ぎる時間停止解除に『愛されてるなあ』と感じてしまうのはおかしいことだろうか。

それが反乱を防ぐために仕組まれたプログラムだと知っていても、やっぱり私は本体を本気で嫌いになることが出来ない。

そんな本体と入れ替わった私は何食わぬ顔で任務を遂行する。

「さ、今日は色々あった事だしそろそろ寝ましようか。」

☆☆☆☆

「じゃあおやすみなさいね、曉美さん」

「ええ、おやすみ巴さん」

二人でベッドに入り照明を落とすと部屋は暗闇に包まれる。

カーテンの隙間からは夜景の光が漏れているが、それほど気になるわけでもない。

ロフトの上、普段マミが寝ているベッドには私とマミが二人で寝ることになった。と
 いうかした。

もちろん、本体からの命令もあるのだが、そもそも巴家には予備のベッドや布団なん
 ても無い。

両親が死んでから2年以上、その間まともに友達も出来ていなかったのだ。無理もな
 いだろう。

マミはしばらく逡巡していたものややはり向かい合って眠る勇氣は無かったのか、外
 側に身体を向けて眠ってしまった。

チツ：チツ：チツ：チツ：

時計の秒針のみが部屋に響き渡る。

片や分体故に表向きの本体の皮である無口顔が良のクールビュいだけのューコミユティー障を装うしかない
 という縛りを抱えており、

片や何年ぶりかの人の温もりに触れ、(本体のせいで発生した)慣れない感情にドギマ
 ギしている状態

おやすみと言ってしまった手前、そんな二人に会話が発生するはずもなく

なんとなく気まずいような違うような微妙な空気が漂い、時間だけが過ぎる

☆☆☆☆

一体どれぐらいだったのだろうか

マミの寝息が聞こえ始めてしばらくたち、時間の感覚がかなり曖昧になった頃突然マミがうなされ始めた。

「……………やつ……………つあ、あ、ッ…!!…」

息は荒く額からは汗が吹き出し何かを掴むように虚空に腕を伸ばす

私達分体は本体の記憶を引き継いでいるので、当然マミの精神の不安定さやその理由を知っている。

大方、今日一日慣れない他人との触れ合いで両親の事を思い出してしまい、そのまま契約当日の悪夢でも見ているのだろう。

しかし、『巴マミの不安定な精神は今後の計画に必要なだ』と本体は主張していたし、おそらくこのまま眠ったフリをしてマミの監視を続ける事が、分体の行動としては正解なのだ。

……………だからと言って、こんなにも苦しんでいるマミを放って置くななんて、私には出来なかった。

「巴さん、巴さん!?大丈夫!?!」

気づいた時には、私はマミをゆすり起こそうとしていた。

が、多少外部からの刺激を加えた所でマミの意識は未だ悪夢の中であり、防衛本能が私の手をはたき落とす。

それは明確な拒絶の意思

並の人間ならば多かれ少なかれ弾かれた事にショックを受け、頭ではわかっていつつも本人が正気を取り戻すまで動揺が続くだろう。

だが、腐つても私は暁美ほむらの分体

拒絶された経験なんてものは何回、何十回、数え切れない程ある。

故に、その無駄に多いデータから最適解を導き、無理やり抱きついて落ち着くまで拘束する。

錯乱状態のマミは必死に私を引き剥がそうとするが、じつと耐える。反撃^{拒絶}なんてもつてのほか。

分体だろうと玄関ドアを破る程のパワーを持っているのだ。無意識に魔法による身体強化を使つて半ば本気で抵抗しているマミでもギリギリ抑えられる。

「ツ!? あ、暁美さん?！」

目が覚めたらしいマミをベッドにおろしてやると、荒い呼吸を整えながらもその眼はまるでありえないものでも見るようにこちらを見上げている。

やはりまだ完全には悪夢から戻りきれない。

その顔を覗き込むようにして話を続ける。

「大丈夫？かなりうなされていたけれど」

「え……、……………わ、私……………」

そこでようやくマミは現状を理解できたらしく、途端に申し訳無さそうな顔になった。

「……………ごめんなさい！暁美さんを起こしてしまつて……………」

そう言つてマミは頭を下げるが、その瞳には恐怖が浮かんだまま

「酷い汗よ。怯え方も普通じゃなかった。」

額の汗を拭つてあげていると、マミのパジャマの内側からスルスルと魔法のリボンが伸びていき、キツチンから水を持つてきた。全くの余談だが、マミの精神状態を鑑みるにこんな精密な魔力操作は出来る訳が無い。恐らくだが、このリボン自律行動してる。自我を持った眷属の生成とか普通は固有魔法でも無い限り出来ないんだけど……………本體でも研究開始から百年程度はかかったのに

「……………魔法少女になつた日の夢を見ていたの」

しばらくの静寂のあとにマミがぼつりと呟く。

「詳しく聞いても?」

私は難聴系主人公では無いのでしつかりと拾って話の続きを促す。

いや、難聴系主人公はシリアスな場面ではしつかりと聞こえているか。

「別に、面白い話じゃないのよ……ただ、私が失敗しただけ。こんな話聞いても曉美さんも困っちゃうわよね。さっきのは忘れてちょうだい。」

「それでも、私は気になるわ。勿論、巴さんが嫌ならそれでいいのだけれども……他人に話してみると案外スッキリするものよ?」

それから少しずつではあるがマミは過去の誤ちを話してくれた。

一つ一つ、噛みしめるように

それに対して私は相槌をうつ。

長年不満を吐き出せる相手がいなかったマミの心は本人が思っていた以上に負の感情を溜め込んでいたようで、

次第にそれらはどんどんと表に出てきた。

「どうして私だけが生き残ってしまったの…」

——生き残ってしまった罪悪感

「パパもママも生き返らせる事だつて出来たじゃないッ!!」

——最良の選択肢を掴めなかった悔しさ

「結局私は親殺しと変わらないのよ」

——それによる自責の念

「どうして親戚の人達は私を恐れるのかしら……」

——理不尽に対する憤り

「魔法少女の活動で忙しいのに、友達なんて出来るわけないじゃない！」

——環境の違いによる孤独

「何故魔法少女はテリトリーを奪う為に戦うの？ どうして手を取り合う事が出来ないの!？」

——思想の違いによる衝突

「あのまま飛び出して行っちゃったけれど、佐倉さんは大丈夫かしら……戻ってきてくれるかしら……」

——疎遠になってしまった愛弟子

「なんでッ！なんで私はッ!!いつも、いつもいつもいつもいつもッ!!」

最後には涙を流しながら布団を叩き、半狂乱とも言える状態のまま枕に伏してしまった。マスケット弾が飛んでこなくて助かった

確かにそれらママの独白は知っていたモノとそう代わりは無い。

しかしそれはあくまでも“本体の知識”で得たものあり、“私”がバママから聞くの

は初めてなのだ。

実際に体感した彼女の寂しさというモノは知識のモノよりも遥かに辛く、寒く、暗いものだった。

——“私”は初めて涙を流した。

本体のものであるこの体は反応してくれなかつたけども、確かに心では泣いていた。

「……………そう、アナタは十分頑張った。もう大丈夫。頑張らなくてもいいのよ。甘えつつて良い。

今のアナタには私、暁美ほむらがいるんだから」

☆☆☆☆☆☆

「なんで……………」

私は泣いているママの近くで正座をし、その膝にママの頭を乗せる。俗に言う膝枕である。

「二人ぼつちは、寂しいもの。それに、これからは巴さんだけが無理をしなくてもいいのよ。幸い手持ちのグリーンフィードは沢山あるから」

優しくママの頭を撫でるとママはひとしきり泣いたあとに静かに私から離れる。

「何故、こんな事をするの…?」

その表情は先程とは打って変わってこちらを睨んでいる。いや、警戒している？

「友達が苦しんでいるのを助けるのに、理由が必要かしら？」

「……………ツ！そう言つて近づいてきた魔法少女は沢山いたわ。全部ゼーんぶ嘘だったけれどね」

「マミらしくもないような事を……………ナニカを隠すために、目をそらす為にわざと攻撃的な事を言っている…？」

「私は違う」

「嘘」

「本当よ」

「そんなの、貴方にメリツトが無いじゃない！」

「ついにマミは魔法少女衣装を身に纏い、ベッドの上に膝立ちでこちらにマスケット銃を向けてきた。」

「知識の中にあつた『みんな死ぬしか無いじゃない！』が頭をよぎり、冷や汗が流れる。が、銃身やトリガーにかける指は震え、顔は歪み涙としゃっくりで銃口はブレブレとてもじゃないがまともに狙えていない。」

「ここが攻めどきか、少し荒っぽくなつてしまふが仕方ない。」

「私はマスケット銃を手で弾き飛ばしマミの胸ぐらを掴む。」

「いい加減にしなさい！バマミ!!それじゃあ、私達の出会いは一体何だったの？一緒に」

に晩ごはん食べたりお風呂入ったりしたのは??私が損得勘定で何かを決めると持っているの!?!?」

それまでの私では無いけれど、まあ「暁美ほむら」ではあるのだから間違っていないし、普通に私の本心だ。

(ちなみに本体は損得勘定で動いてる)

「……………そんなの、全部ウソだと思ってたほうがいいじゃないッ!!」

何故貴方はそうやって私に希望をもたせようとするの!?

夜の時から……………いいえ、最初に魔力を浴びた時からずっと思ってた……

こんな私が、人両親を殺した私が暁美さんと釣り合うハズが無いって……………」

ママが力なくうなだれる

「契約の時の話を暁美さんに伝えている途中で、私の中でも整理がついたわ

私が一人ぼっちなのは自分ひとりだけ助かるうとしたから。

正義の味方として魔女は使い魔まで全て倒してきた。それが私の贖罪だから。

でも、それによって佐倉さんは離れていってしまった!!

私は私の罪のせいで佐倉さんを失ったのよ!

暁美さんがどんな風に思っている!!

どうせ私はまた一人ぼっちになる……

結局私はそういう運命なのよ。」

マミの瞳は諦めに染まっており、それに呼応してかソウルジェムも濁っていく。

今の魔女が少ない見滝原なら、もはや魔女化は免れないレベルだろう。

もしもその罪とやらが本当にあるのだとしたら、どうやらその罪とやらはよつぽどマミに救われてほしく無いらしい。ここまで頑固な運命、もはや一種の呪いとも言えない。

すると、この穢れは私と過ごした時間の代償といった所か。とことんまで巴マミという存在を一人にしようとしているコレにはもはや天晴あっぱれという他無い。

——だが、それはあくまでもこの世界においては、だ。

グリーンフィードを取り出し、浄化する。

私達、暁美ほむらは別の世界から来た存在。

たとえ、世界から呪われていようとも、そんな呪いは私達が断ち斬つてやれば良いだけの事なのだ。

さて、ひとまず魔女化は防げたけれども残念ながらマミの心は閉ざされたまま。

このままではマミのソウルジェムは時を置かずしてまた濁った状態に逆戻りするだろう。

……これは、私もそれ相応に腹を括らなければならぬかな。

ベッドから腰を上げロフトの柵に腰掛ける。

すこし高い柵だからほとんど飛び乗る形になってしまったが、まあ良い。大事な話をする雰囲気ぐらいは作れるだろう。

「実は私ね、魔法少女になる前は入院していたのよ。」

マミは俯うつむいたまま何も言わない

「生まれつきの心臓の病気でね、治る見込みも殆ど無い難病だった。」

窓から見える月を眺めながら、何百何千年も前の昔話を語る。

「生きるためには特殊な医療機器が必要。でも、それは都会の大病院にしかおいてない貴重なもので、

両親は仕事の都合上引越しては出来なかった。」

思えば両親の事を思い出したのなんて、いつぶりだろうか。

会おうとすれば会うことはできるだろうが、今更会った所で何が起こるわけでも無いだろう。

「主治医と両親の相談の結果、私は一人でこの見滝原の病院に入院することになった。

元の家はここから数県離れた田舎町で、仕事も忙しいというのに、両親は毎日仕事終わりにお見舞いに来てくれた。

……でも、

私が成長すると次第にその頻度は減っていった。」

月から目を離しママに視線を移すが、その姿は話し始めてから微動だにしていな
い。中学2年の秋、完治とはいかないけれども私は学校に通える程度には回復した
が、まだ定期検診が必要だったから元の家に戻ることは出来なくて

見滝原にアパートを借りてそこに住みながら通学することになった。」
ママがのそりと体を起こす。

いまだ眼は真つ赤に泣きはらしているが、その表情には先程には無かった困惑の色が
うかがえる。

良い兆候だ。

「登校初日

今まで両親と主治医、看護師ぐらいとしか話したことが無かった私は

他の生徒とうまくコミュニケーションを取ることができず

また、微妙な時期からの転校生という事もあつてかなり浮いていた。
勉強も周りの数段下のレベルで、体育はもちろん見学。

私は、生徒達の好奇の目に突き刺されて、何もかも自分の数倍以上出来る周りに押
しつぶされそうだった。」

何かを言いたげにママが口を開きかける。

その疑問は最もだろう。

『何を言っているんだコイツ』と思われて当然だ。

「そんな私を助けてくれた心優しい人もいた。

もちろん、その時は筆舌に尽くしがたい程嬉しかったけれども

結局、自分は保健委員である彼女の負担にしかなくていないと気付いて

また自分が嫌になった。」

何しろ見滝原中学にはこれから転校するハズなのだ。

しかも、新学期と共に。

話している内容と現実が噛み合っていない。

「そんな負の感情を抱えていたからでしょうね。

帰り道、私は魔女に襲われた。」

疑問と困惑ばかりだったマミの表情にわずかに驚愕が混じる。

彼女からしてみれば私が魔女に襲われている姿なんて想像も出来ないのだろう。

「もちろん、魔法少女では無かった私は抵抗する事も出来ず命を散らす筈だった。

そんな私を助けてくれたのが同じクラスの心優しいたった一人の友達と……」

言葉を一度切り、柵から降りてマミと正面から向かい合う。

「巴マミ。アナタだったのよ。」

「……………はあ？」

たつぷり数十秒の硬直のあと、マミの頭の上に大量の^{疑問符}が飛び交う。

まあ普通に考えてそらそうなるわな。

今日初対面の相手を今日よりもあとの日付で助けたなんて。

しかも、それを過去のこととして聞いている。

事情を知らないと時系列がゴチャゴチャで何を言っているかわからないだろう。

「それからはとても楽しい毎日だった。

友達がいて、頼れる先輩がいて：

共通の秘密を持つというのは仲間関係を作る上で有効な手段。

私は魔法少女では無かったけれども、魔法少女という秘密の存在を知り

それを共有する仲間として迎え入れられた。

楽しく、平穏で、すこし刺激的で、

輝いていた日常をおくることが出来た。

……………一ヶ月後までは」

私の声のトーンが一段階低くなったことを察知したママが溢れんばかりの疑問をとりあえず柵において話を聞く姿勢を整えてくれている。

このような事が出来るんだからママのコミュニケーション能力は低くないのだけけれども……………」

「巴さんは『ワルプルギスの夜』を知っているかしら？」

「……………地球を周回し、ありとあらゆる厄災を振りまくという伝説上の最凶最悪の魔女

…よね？」

「ええ、そのとおりよ。」

舞台装置の魔女『ワルプルギスの夜』そんな伝説の魔女がここ、見滝原を襲った。」

「そして、バママ。」

アナタはワルプルギスに立ち向かい、そして、」

「死んだ」

「それでも、たった一人の私の友達は、

あなたが育てた魔法少女は、絶望に立ち向かった。

……そして、同じように死んでしまった。」

「なんで、どうして、そんな思いでいっぱいだった。

そんな所に現れたのがキュウベえ。

私は、たった一人の友達と憧れの先輩との出会いをやり直すため、守られるだけではなく、護るために、魔法少女になる事を願った。

そして、世界は一ヶ月前に戻っていた。」

「私の固有魔法は『時間遡行』

そして、その副次的効果の『時間停止』

この魔法で、私は今度こそ友達と先輩を守り抜く事を誓った。」

「でも、魔法少女になったばかりの私は弱かった。

時間停止をしても素の体力も無く、自分にバフをかけられるほど魔力操作もうまく無かった私は、ドラム缶一つを壊すのが精一杯だった。

それでも、アナタは私に魔法少女として色々な事を教えてくれた。

その一ヶ月も、魔法少女としての戦いは苦しかったけれども、楽しい日々を過ごした。

けれど、その平穩はまた崩されてしまった。」

「3回目もうまく行かなかった。

4回目もうまく行かなかった。

5回目、6回目、7回目、8回目

9、10、11、12、13、14……………

いつしか私は数えるのをやめた」

「私はね、バمامィ。アナタを救うために魔法少女になったの。

それは確かにアナタとは違うバمامィだったかもしれない。

それでも、私は巴マミという魔法少女に助けられて今、此処にいる。
私がアナタを救おうとする理由としては…軽いかしら？」

マミの瞳から涙が零れ落ちる。

先程の自らを呪った涙とは違って、どこまでも透き通った涙だった。

「そっか、……もう私ひとりぼっちじゃないのね」

「ええ、そうよ」

「——暁美さん」

「何？」

「もう一度、手…繋いでもらってもいいかしら」

「ええ、構わないわ」

「……………温かい。そう、いつの間にか人の温もりさえも忘れてたのね…私」

「……………失ったものは、またこれから取り戻せばいいのよ」

東の闇がうつすらと群青に変わり、その色を少しずつ淡く落としていく。

あかつき
暁の空は未だ暗く、夜闇が覆う部分が多い。

しかし、だからこそ炎の星によって白み始める光景は美しいのだ。

開けない夜は無い。

が、夜明け前が一番暗い。

巴マミは、確かに今、夜明けを迎えた。

ほむら編その8『分体達の日常』

ピピピピピ　ピピピピ

家主が寝静まった部屋にスマホのアラーム音が鳴り響く

それは一見、日常の焼き直しにも思えるが、この場所に精通している者ならば違和感を感じ取るだろう。(家主はぐっすりと眠りこけているが)

まずアラーム音がいつもより小さい・・・と言うよりくぐもつていると言った方が正しいか

これではいつもよりも目覚ましとしての効果は気体出来ない。(いつも目覚ましとして効果を発揮しているかと聞かれると首を傾げざるを得ないが…)

だがしかし、部屋を見渡せば日常とは違う違和感の元は音だけでは無い事がわかるだろう。

差し込む陽光が照らすのは掛け布団がはねのけられぐっちやぐちやになったベッド

あまり寝返り裏切りの事では無い。眠っている最中に身体を動かすことをしないと
いう家主の性質上、床にまで散乱するほど乱れているのは明らかに異常だ。

そして若干湿っている布団の上に転がっているのは家主だけでは無い。

もう一つの人影はアラームの音に目を開けると上半身だけ起き上がる。

それに伴いいくつかの家主の黄金に輝く髪が長く艶めく黒髪に絡め取られ、宙を舞いまた落ちる。

一種の幻想的な光景になっているのはひとえにその人影と家主が人類種から逸脱した美貌を兼ね備えているからであろうか。

そんな人物は一人しかいないだろう。この家主にとってたった一人の友達である。

ん？

あゝ……もう朝かあ

はい、どうもおはようございませす…

暁美ほむら2号カッコカリ(仮)です

現在時間は午前06:00

結局あのあと一睡も出来ませんでした……

脳内で思考の記録ログをつけながら分体である暁美ほむら2号(仮)——長いので下2号と呼称する——は、少しぼんやりしている頭できよきよと周りを見渡す。

スマホのアラーム音は確実にこのベッド付近から出ているハズだが、ざっと見渡した範囲では見当たらない。

その瞳にはくつきりとクマが浮かんでおり心なしか髪もかなり傷んでいる…ように見える。

だからといってその人外じみた美貌が損なわれるどころか一種のアクセントになってより際立っているのだから末恐ろしい。

ノーメイクの寝起きでコレとか世の女性の大半が泣いて羨むだろう。(そもそも化粧とか必要無い)

まあ別に寝不足でこうなったわけじゃないんだけどね

というのも、私達分体はデフォルトで睡眠無効のパッシブスキルが備わっていて眠る必要どころか一ヶ月以上不眠不休で働き続ける事も可能だから

こんなになつてるのは…ぬ、スマホ発見。アラームOFFつと

とりあえずロフトの床に散らばった掛け布団まだ3月だが布団は三枚重ね。下から順に肌触りの良いタオルケット、中ぐらいの厚さの夏用の布団、そして冬用の分厚い掛け布団である。見滝原は群馬県らしいので標高が高い分気温も低いと思われるため回収すると下から件の家主のスマホが出てきた。

昨晚のてんやわんやの間にここまで飛ばされていたらしい。

未だに動き出さない家主を横目にため息をつきアラームを切った2号はそのまま迷いなくスマホのロックを外し受信メールやTwitterの内容やらを漁り始めた。

うくん予想通り酷い中身ね。直近のメールは全部学校からの保護者宛お知らせメール、たまに親戚からのメールも混じってるけど内容は事務的な会話のみ。

うわ、ついたアカウント名『救世済民の魔法少女』とかタルトさんかな？

内容も……うん、見なかったことにしよう。

いかにも“ボッチを極めました”とでも言いそうな中身のスマホに顔をしかめる2号。

Twitterでは主に自身の不安を吐露しているツイートが中心に投稿されている。

ママ本人の状況を鑑みて読めば内容がある程度わかるツイートの数々は、魔法少女の事をぼかして書いていたり現代人が決して抱かないような自らの命をかけた戦いへの不安などが悪い具合に組み合わせり、傍から見れば痛々しいポエム集にしか見えない。

フォロワーはもれなく中二病患者ばかり。

だがしかし、中二病患者といってもプロフィールやツイート内容を見る限りかなり社会的で良識がしっかりしている。

いや、しすぎている。人間として中身が出来ている中二病以外は。コレもう社会人じゃないか？

少なくとも様々な場所に顔突っ込んでクソリプ貼り付けていきっているような

中学生クソガキでは無い。

幸運にもフォロワーには恵まれていたようだ。内容はアレだけどでも鍵垢になっている。以前なにかしらがあつたのかもしれない。

内容を遡ってみるとたまに本の感想なども投稿していて、フォロワーも反応している事から、現実よりかは遥かにネット文化を謳歌していた事がわかる。

中二病患者達が閉じたコミュニティ内でお互いの傷を舐め合う蠱毒・・・その結果が例のママのセンスなのだろうか。

……で、なんだっけ？

ああ、そうそう。ポロポロになつてる理由ね。

コレ別に寝不足でクマが出来たわけじゃなくて、冷静になつて考えたらその場の流れに身を任せてママにカミングアウトしたのは悪手だった……というかかなりマズイ事だつたつて気づいたからのさね。

基本的に分体は各々の自我に備わっている価値観によつて本体の暴走を止める役割を持つているが、

元となつたベースがああ、の**暁美ほむら**な以上、分体も分体で暴走する時がある。

本来の仕様としては他の分体と共にチームで仕事が割り振られるため、お互いの暴走をそれぞれが抑える仕組みなのだが、

2号は単独任務であった為その仕様が起動しなかった。

とうかそもそもこの時間軸に飛んでからまだ一日しか経っていない今、分体の数は雀の涙ほどしかない。

新しい時間軸についてからしばらくの間付き纏う人手不足の問題はデータが殆どないマギレコ時空においてはあまりにも致命的だった。

意図的に一部情報を盛ったり秘匿したり魔女化の事したからマミが知りすぎたという状況にはならなかったものの

暴走止める為のストッパーが命令無視して勝手にメンタルケアして、更に正体カミングアウト

コレ最悪の場合本体のチャートが機能しなくなるのよね

いや、本当にこの件どうやって報告しよう……

そういった自分のガバによってチャートが崩壊する心配で精神にダメージを受け、マミが眠った後に冷静になりベッドの中で悩んだ結果がこのボロボロの姿だった。

分体は他の魔法少女よりも精神状態が表に出てくるように設計されている為だ。

が、2号はまだ知らない。

自分のガバに関係無く、もうとつづくにチャートが崩壊している事を

ジリリリリリリリリリリ

しばらくするとロフトを降りた先にある棚の上の目覚まし時計がけたたましく鳴りだした。

ベッドに腰掛けていた2号が少しうんざりした様子で立ち上がろうとするとパンツ

乾いた銃声が鳴り響き目覚まし時計が貫かれその役目を終える。

そして間髪入れる間もなく2号の身体は黄色いリボンに絡め取られ無理やりベッドの中に連れ戻される。

「眠い」

一言そう呟くと、目覚まし破壊と2号拉致の犯人であるマミは2号を抱きまくらにして眠ってしまった。

今日は金曜日なので普通に学校があるはず

二度寝なんてキメたら確実に遅刻する事になる。

2号は抗議するために超質量を誇るマミの胸部装甲から顔を無理やり出すが

「すー……すー……」

安心しきって眠りにつく顔を見ると、どうにも毒気が抜かれる。

……まあ、マミはこれまで苦勞してきたからなあ。

ある程度は好きにさせてやるか

そう思いつて目を閉じ、再び目を開けた時には、時が止まっていた。

まだマミは時が止まった事に気づいていないが、先程までマミの中でぽかぽか暖かくなっていた2号の身体は急激に冷えていった。

何のためらいも無くマミの拘束を力ずくで抜け出した2号はマミから離れることで止まった時の中からマミを追い出す。

時が止まった以上、それはヤツが時止めを使ったということであり

それすなわちヤツが接触しにくるかもしれない。

とてもじゃ無いがあんな姿は見せたくない。

はあ……はあ……あつぶねえ!!

駄目だ、マミの中危ないわ……

あんなにまで人を墮落させる事に特化した身体あるの？

本体が^{時止め}介入してなかったら戻ってこれなかったわ……

あゝ……でも本体が来たら怒られるんだよなあ……

止まった時の中で同じ場所をぐるぐる周りながら自らのガバをどう報告するか悩む

うん、顔洗おう

本体について考えるのはその後だ。

結局たどり着いた答えは後回しなあたり、やはり分体といえども暁美ほむらは暁美ほむらだった。

憂鬱な考えを無理やり頭の隅に追いやって、2号はロフトを降りた。

☆☆☆☆☆

ジャー

バシャ バシャ

はふう：

3月の朝はまだ冷える

温かいお湯で顔洗うのは間違いない。至福の一時だわさ

おかげで、かなり酷かった寝起き顔もいつもと変わらない程度にはマシになった。

やっぱりストレスには癒やしをぶつけるのが最適解ってハッキリ分かんかね。

その癒やしってママの効果も入ってない？などという質問は禁句だ。

状況的にそんな指摘をする人物はいないが、もしもそんな事を言ってしまった者がいたとするならば、ソイツは正拳突きで上半身を跡形もなく消滅させられるだろう。

飛び蹴り一発で玄関ドアをぶち破った筋力はもはやドラゴンボールの世界だ。

並の魔法少女では話にならない。

※ここからしばらくこの世界の設定に関するうんちくの垂れ流しが始まります。興味が無い方は次の水平線まで飛ばしてもらっても物語にはなんの問題もありません※

指摘するならば、時間停止中に洗面台を使っている事にすべきだろう。

本来この状況はおかしい。

雨や噴水が時間停止中に空中に静止するのはよくある表現であり、それすなわち水が落下するという状況は起こりうるはずがないからだ。

まあ、そんな事言ってしまったらそもそも時間も時間停止中に普通に動いたり、重火器ブツパしたりしてる時点でおかしいのだけでも

しまいには（某百年の眠りから蘇った吸血鬼のナイフのように）銃弾や砲弾が目標に当たる直前で止まるなんていう、訳がわからない事をしているのだからそんな疑問は聞くだけ野暮というモノなのだが、

それでも一応この世界には“理由”が存在する。

そもそも、この世界における“止まった時の世界への入門”というものは大きく2つの能力に分かれている。

一つは自分が止まった時の世界を認識する能力

そしてもう一つが自分及びその周囲の限定的な時間の進行を可能にする能力である。

まずは1つ目の認識するという事について

そもそもとして“世界”というのは得てして観測者がいなければ成り立たない。

シュレディンガーの猫とかいう有名なアレである。

量子物理学だか量子力学だかよくわからん学問の、観測されるまではどうなっているかわからない状態でどうなっているかは観測されるまで確定しないくだとかなんだとか

よくわからない説明をうんぬんかんぬん垂らされてもわからないと思うし、ボクもほぼ確実に理解していないのでわかってる部分だけ取り出すと

観測されるまではその世界は存在出来ないという事だ。

うん、最初の説明とほぼ全く同じだな。

そもそも、時が止まった世界なんてものは時が流れている以上観測のしようが無い。

そして一秒前の時が止まった世界と今現在時が止まった世界は全くの別物である事もわかるだろう。

一秒あれば様々な事が起こるし、そもそも一秒たてば自分が存在している座標は全く

異なる。

地球は常時トンデモナイスピードで移動し続けているからな。

自分が微動だにしていなくても地球が移動しているのだからどうしようもない。

そんな時間の数だけ存在する時が止まった世界も観測する人がいなければ空想上のモノでしかない。

だからこそ時が止まった世界なんてものは存在しない。

存在出来ない。

だから時を止める能力とは、まずはこの時が止まった世界を観測する必要があるわけだ。

1つ目の能力はわかってもらえただろうか？

わかってもらえなくとも次に行くぞ。

2つ目の“自分及びその周囲の限定的な時間の進行を可能にする”という事について

止まった時の世界というモノは基本的に全てのエネルギーがゼロになる。

ここで言うエネルギーとは科学でいうエネルギーの事だ。

位置エネルギーだとか運動エネルギーだとか熱エネルギーだとか化学エネルギーだ

とか

そういったアレである。

まあ、もちろんの事だが、時が進んでいる世界でエネルギーがゼロになんてなったらありとあらゆる熱エネルギーもゼロになり、世界は一瞬で凍りつくのだが

しかし、時が止まっているという事はエネルギーがゼロだとしても“変化しない”

物質が保有している熱エネルギーはそのまま熱エネルギーとして保有したまま動かないのだ。

そして、時が動き出せば止まっていた物は元の運動エネルギーで動き始める。

つまり、『エネルギーがゼロになる』というよりも『変化が出来なくなるから実質的にエネルギーはゼロ』と同じなのだ。

なぜせっかく時が止まっている世界で自分はともかくとして周囲まで時間を動かさなければならぬのかという事だが、

それがこの“変化出来ないが故のエネルギーゼロ”と密接に関わってくる。

そもそもとして活動に酸素を必要とし陸上で生活して大抵生物は皆空気に包まれてる。

この空気が動かさなくなった・・・つまりガッチリ固定されてしまったらどうなるだろう？

魔法少女は確かに生きるのに酸素なんて必要無い。

ぶっちゃけ、呼吸しているのは周りの人間族に溶け込む為でしかなく、水中や宇宙空間での活動なんてお茶の子さいさいなのだ。

マギレコの夏イベではみたまさんが人魚に調整する事で水中呼吸を可能にしていたが、あんな事しなくても普通に活動エネルギーを人間ベースのものから何から何まで魔力を使う魔法少女特有のモノに変えてしまえば良い。

まあ、『自分は人間では無い』という事をハッキリと認識していなければ出来ないのだが

ここらへんの事を考えるとまさにインキュベーターとの契約は悪魔の契約だったんだなとしみじみ感じる。

また話が脱線した
閑話休題

ともかく、空気が必要としていなくとも周りに空気が存在する以上、こいつらを動かせなくなったらコンクリで固められているのと一緒：どこか変化出来ない空気は破壊不能なあたりコンクリの方がまだマシ

時が止まった世界で活動するためには少なくとも自分の周りの空気は変化を許容しなければ動くこともままならないのだ。

そして、時が止まった世界で物を移動させるためにはそのモノも変化出来るようにし

なくてはならない

しかし全ての変化を可能にしてしまったら、それは時を止めている意味もなくなってしまう。

だからこそその『自分及びその周囲の限定的な時間の進行を可能にする能力』なのだ。例えばマグマがあつたとする。

マグマにたいして熱エネルギーや化学エネルギーはそのままに移動する為の変化のみを許可する。

すると触つても熱は感じないままドロツとした液体を素手ですくつて、持ち運ぶ事が出来る。

熱エネルギーがゼロのモノ⇨絶対零度ではあるのだが、あくまでも変化しないだけ故のゼロなので触つた手が凍傷になつたりなんて事はない。

ね？わかりやすいでしょ？

それでもない？

悪かつたな、説明が下手で

ともかく、曉美ほむらの能力は

この“限定的な変化の許可”を“自らが触れたモノ”に対して常にかけている。

だからこそ、触れた空気は変化できるので止まった世界で動ける。

だからこそ、触れた物体は動かせるので物を持ち運ぶことが出来る。

だからこそ、曉美ほむらに触れている人も止まった世界に擬似的に入門できる。

だが、これでは何故止まった時の世界で放った銃弾が目標に当たる寸前で止まるのか
が説明出来ない。

コレに関しては“一度触れたモノの変化はある程度自由にON/OFFが出来る”
と解釈するしかない。

叛逆でマミにリボンで時止め防がれた事からOFFに出来るのは自分から離れたモノ
ノ限定だろう。

余談だが、某吸血鬼及び星の高校生の時間停止もコレと同じような仕組みだと思っ
ている。

時を止められる時間が作中最長でも九秒という点から推察するに、このあまりにも短
い時間は“変化の許可”の能力の持続時間なのではないか？

だとしたら、時に入門したばかりの星の高校生が動けずに見えるだけ…つまり観測の
み出来たのも納得が出来る。

世界入門は世界の観測

動くためには“変化の許可”を可能にする能力が必須

そして、人間の身にはあまりにも負担が大きすぎる為時間は短い。

星の高校生は全盛期で5秒、10年ぶりの仕様で2秒

某吸血鬼は吸血でハイになった事で9秒になったことから、

吸血鬼の人間とは一線を画す能力による停止時間の長さだったのだろう。

“変化の許可”はそれほどに燃費が重いのだ。

：が、人外の吸血鬼でさえたった九秒が限界なあたりやはり時止めというのは非常に高度な技術なのだという事がわかる。

あく、でも確か成長していけばいずれ停止時間は増えていくんだっけ？

でもアレただ単にDIO様がそう感じたっただけで何も正確性が無いのよね。

少なくとも吸血鬼の上位種である柱の男がいる以上、吸血鬼に限界はあると思われる。

そもそもとしてディオ様が石仮面産の吸血鬼として異質すぎるんだよな。

石仮面によるミーム汚染を受けているとはいえ、それさえも利用して頂点に上り詰めるよとすする意思

吸血鬼の能力を最大限引き出す圧倒的な身体能力

何よりも気化冷凍法なんて普通考えつかないどころかその後の二部でも使いこなせた吸血鬼がいけない事からわかる天才的な戦いのセンス

どれをとつても圧倒的なんだよな

ジョジョとの因縁のせいであつてもなくアホになつちやうのは物語上仕方ないことなんだ。

でも新たな力手に入れたつて言つてもそれで遊んじやつて無様さらすのはどうかと思ふ。

終盤殆どジョジョの話しかしてないな
閑話 休憩

それじゃあ話を本編の元に戻そう

☆☆☆☆

時止めから数分後、ベッド周りを片付けている最中にソレはやつてきた。
私達分体の元オリジナルである暁美ほむら

本体がいつになく真剣な表情で玄関ドアを開けて入つてきたのだ。

ご丁寧に靴を揃えている所から、現在本体は純度100%の真面目モードである事がわかる。

つまり……

あ、これバレてますね。間違いなく。

どうする……？ここから言い訳をしてみてもいいが、納得させられるだけの材料なんて無い。

何より、アレは完全に本気のみ

一つでも選択肢をミスったら消し炭になるのは間違いなくこちらのほう

しからば……最終手段ッ！

コンマー秒にも満たない思考の末、結論を出した2号。

逃げ出さずまっすぐに本体の目を見る。

リビングにて二人は同時に動き出した。

「スミマセン！ガバやらかしてチャート崩壊しましたアツ!!」

「スミマセン！うっかりマミに過去話しちゃいましたアツ!!」

「へ？」

高さ、角度、勢い、その他細やかな身体の動き、全てが寸分たがわぬ動きでジャンピング土下座を敢行する本体と分体

まるでスマブラのガノンミラーマッチで度々目撃される儀式かのごときシンクロ率であつた。

そりやそうだ。どつちも暁美ほむらなんだもん。

☆☆☆☆☆☆

「えくと、要するに……」

こめかみを押さえながら本体と分体が状況を整理する。

「そつちでうっかりマホカンを力んじやつて沙々を洗脳しちゃつていた時……」

「そつちでは勢いに任せてマミに過去を話していた……と」

「アホなの!?!」

お互いがお互いでガバやつていた事が判明し、感想がダブってしまった二人

しばらく二人でリアル大乱闘（魔法抜き特攻一時解除の完全互角ミラーマッチ）に興じていたものの、無駄に体力を消耗してへろへろと横たわる。

何をやっているんだコイツらは……

「で?新しいチャートってのは?」

「主に織莉子キリカ沙々達を育成して、グラントクエスト『使徒、襲来』をクリア

S2 機関と死海文書を回収、そしてリリンによる養殖魔女計画

その間にママや杏子、ゆまを使ってなぎさの回収、魔女化回避

どこかのタイミングでまどか達に真実を伝えてその上でまどかを自分の意思で契約させる。

ただし、強要はしないであくまでもまどか自身の選択に任せる。ただ、まあ：願いについては口出しするけども

その間に拠点の発展と分体の大量生産をやりながら神浜に行つてインキュベーター避けの結界の調査

出来れば接触しておく事でこの先やりやすくなる魔法少女とはこの時点から干渉していく（特に八雲みたまはリヴィアに取られる前に最優先で回収）

変装した分体を何人かマジウスに潜り込ませるのもアリね

時期的にまだ更紗帆奈の事件とかホオツキ市の事件にも間に合うからそこらへんも回収しつつ

環いろはが神浜に来たら情報で支援しながら成長させていつてマジウスの方も加速させていく

最終的に神浜にワルプルギスを誘導したら本格介入

環ういを救出して速攻でエンブリオ・イブを撃破し、キモチの石も全回収からの永
久封印

万全の体制でワルプルギスを迎え撃つ

…とまあ大ざっぱに言えばこんな感じね」

「うん。まあ、いいんじゃない？ どうせまたどつかでガバって修正する事になるだろ
うけど」

こめかみを押しえながらため息と共に不安を吐き出す2号

どう考えてもこんな長期的なチャートが全てもうまくいくはずが無い。

今回だつて優木沙々というイレギュラーが出てしまったのだ。

今後チャート修正は必要になってくるだろう。

「ま、とりあえずは今日の予定ね。

マミの前で変に色々隠す必要が減ったんだから、マミと一緒に登校して好感度上げ
てきて。

チャート変更に伴って、高感度はあればあるほど良くなったから、荒稼ぎ出来る時
に稼いでおいた方がよい……というか現状ソレ以外にやることあんまり無いのよね。

行きとか帰りとかその後のパトロールでもし魔女結界を見つけたらこの時間軸の
マミの実力を把握しておくのと、軽く戦闘指導もよろしく」

「はあ？んじや魔力コンデンサー頂戴よ。丸腰で魔女と戦えつて？」

「アレは3号に渡してるから現状無理。」

せめてこつちが第一の魔女倒した後じやないと量産は不可能だから。

大丈夫、どうせ魔女なんてマギウスのせいと全然見つかからないでしょ。

それにそこらへんの魔女ならいざとなったら拳で吹き飛ばせばいいし

たむらに出来て私達に出来ない訳が無いんだから。」

「確かにそうだけど……」

「ああ、あといつものアレ学校にやっておいてね。」

「通り道具はまとめておいたから。」

「いや、まあうん……コレはありがたいんだけどさあ

この用意周到さをもうちよつと他の事にまわしてくれないかなあ？」

「いや、たとえ分体でもガバやらかしたキミが言えたことじゃないでしょ」

「正論だけどもやらかしてる本体には言われたくないわあ」

「あ、あ？」

「ん、？」

その後、売り言葉に買い言葉でまた大乱闘に発展する本体と2号

止まった時が解除されたのはそれから数時間後の事だった。

☆☆☆☆

トン トン トン トン

包丁の音と味噌汁の匂いで私は目を覚ました。

頭がガンガンして気持ち悪いが、確か目覚ましを壊して暁美さんと一緒に二度寝したはず……

ところが、手元のスマホを見てみると対して時間がたっていない。

せいぜい5分程度眠っていただけようだ。

首を傾げながらも正直昨日の疲れが残っていて少しだるい身体を起こしてロフトから降りると

「おはよう、巴さん。和食で作っちゃったけど大丈夫かしら？」

「え、ええ、大丈夫よ。……おはよう暁美さん」

割烹着に身を包んだ暁美さんがキッチンでザクザクときゆうりを切っていた。

は？私の友達可愛すぎでは？こんなの男子女子関係なく誰もが嫁に欲しいって思うレベルじゃない

突然の新衣装供給で多少声の上擦ってしまった。眼福なのだが心臓に悪い。

テーブルの上には既に二人分の朝食の用意が並んでいる。

お茶碗によそわれたご飯、豆腐や大根などが入っている具沢山の味噌汁、焼き鮭の切り身にほうれん草のおひたし。

どう考えても私が意識を失っていた5分で作れるような献立では無い。

なるほど、これが例の時間停止……日常生活でも使うとなると未恐ろしいほどに便利な魔法ね。

と、ここで一つ疑問が生まれる。見た感じもう朝食は出来上がっているのだが、彼女は一体何をしていたのだろうか？

「暁美さん？」

「ああ、ちよつと待っててね巴さん。コレ冷蔵庫に入れたらご飯にしましょ」

再びキッチンを覗くと暁美さんはジップロックに乱切りにしたきゅうりをいれて塩を揉み込んでいた。

どうやら浅漬けをつくっていたらしい。

そういうえば最近忙しくって冷蔵庫の中の野菜使えてなかったような……

冷蔵庫の中を見る限り、他の野菜も漬けられている。どれもすっかり存在を忘れて冷蔵庫の奥底で息を潜めていた野菜達だ。

悪くなりそうなものを優先的に漬物にしてくれていたそうで。

とても助かるのだけど、自分の家の冷蔵庫を見られるだけでは無く、整理までしてもらうとなると存外に恥ずかしい。

☆☆☆☆

きゆうりの浅漬けも無事に冷蔵庫の中におさまり、ようやく……いや、寝起きからまだ三分もたっていないが……朝食である。

不思議な事に、どこからどうみても洋風のガラスのテーブルに並べられた和食達はそこにあるのが当然の如く周りの雰囲気と同調していた。

いや、違う。和食の方が周りの雰囲気を侵食しているのだ。

たとえどんなにオシャレな部屋だとしても、この和食が出てくると田舎のおばあちゃんの家のような暖かさが辺りを支配するのだ。

いや、こういう風に表現するとなんか私の部屋がオシャレだって言ってるみたいに聞こえるけど、そういう意図は全く無い。いや、ママさんの家は十分にオシャレな部屋だと思っけど……

私の向かい側に暁美さんが座り二人で手を合わせる。

「いただきます」

まずは味噌汁を一口。

具沢山だけれども、あえて汁だけをすすする。

適度な味噌の塩気、出汁と一緒に煮た野菜の旨味、やけどはしないが冷えた朝の身体を温めるには十分な温度、

思わず「ほうう、」と息が出てしまう。

寝起きは多少なりとも口の中が気持ち悪いがこの一口だけでそんなものは吹き飛んだ。

昨日の晩ごはんの時点で曉美さんの料理がありえないくらいに美味しいという事は知っていたが、コレは何というか……美味しいだけじゃ無い。

おそらく日本人が愛してやまない「おふくろの味」というやつだ。

確かにお母さんが存命の頃作ってくれていた味噌汁とは何もかも違うのだけれども、無条件で安心出来るような、それでいて体中に活力がみなぎるような、うまく言葉には言い表せないがそれが「おふくろの味」なのだろう。

焼き色がきれいに付いた鮭は箸を入れるとキレイに身が割れてくれる。口に運ぶと魚特有の美味しさが口の中を蹂躪する。

思わずご飯をかき込んでしまう。

鮭、ご飯、鮭、ご飯、少し大きめに割った鮭をご飯に乗せて一緒に、たまに味噌汁やおひたし

がつついて食べるなんてマナーとしては悪いが、我慢なんてしては行かない。させてくれない。

普段は食べない鮭の皮ももつたいたく感じてしまい食べる。

パリパリで香ばしく塩が効いている表面と、身についていた部分故にすこしぬるりとした食感の裏面がこれまたご飯にあう。

そして、このご飯もやわらかすぎず、かたすぎず、ちょうど食べやすい具合に炊き上げられている。

私が炊いたらこうはいかない。どうしてもべちゃちゃちゃしてしまうか固すぎて芯が残ってしまうかなのだ。

2年間一人暮らししている私でもこうなのだ。暁美さんは一体何年の間……いや、やめておこう。

味噌汁は汁も美味しいのだが、具材ももちろんおいしい。

豆腐、大根の他にも人参、玉ねぎ、白菜、キャベツが入っており、どれも柔らかく煮込まれていて口の中でほろほろと崩れていく。

小鉢に入ったほうれん草のおひたしもなめらかな舌触りと共にほうれん草の旨味としょうゆが絡み合って非常においしい。

思えば普段私が意識してとっている野菜は大抵がサラダなどの生の野菜ばかりで、こ

う煮込まれた野菜というのはあまり食べていなかった。

年越しそばもわざわざ作るのも面倒だったからどん兵衛ですませていたし、一人で鍋というのは寂しさが際立ってしまいやっていない。

この加熱された野菜特有の甘みというのも何時ぶりに味わったのだろうか。

というか料理だって簡単なモノしか作っていなかった。だって面倒くさいんだもの。誰かと一緒に食べるのならともかく、私一人の為に作るとなると途端にやる気がなくなる。

それに魔法少女と学校を両立させている以上、あまり料理に時間をかけたくなかった。

こんなにもしつかりと朝ごはんを食べたのは何年ぶりだろうか。

朝はいつも食パンの上はその日の気分で様々なモノを乗つけて食べるだけで済みます事が殆ど

寝坊しかけた日なんて朝食を抜かすこともザラにある。

そんな風に自らの生活のだらしなさを考えているといつの間にか完食していた。

「ごちそうさまでした」

後片付けする暁美さんを手伝おうとしたが、断られてしまった。

というかそもそもここは私の家なのだから洗い物とか私がするのが当たり前なのだ

けども、暁美さんは譲ってくれなかった。

曰く、「手伝ってくれるのはありがたいけれど、まずは着替えしてきなさい」とのこと。もはや完全にお母さんだなあ……と思いつながら制服に腕を通す。

一通り朝の準備が終わっても起きるのが速かった分時間に余裕が出来た。

「そういうえば暁美さんは今日どうするの？」

話では見滝原中学への転校は新年度と同時だったはず。（この場合は転校というよりも編入だろうか？）

今日は3月11日なので大体一ヶ月程時間がある。

もちろん編入手続きなど学校側としなくてはいけない事はあるだろうが、わざわざ今すぐに必要な事では無いだろう。

ところが、暁美さんは何故か見滝原の制服に着替えている。

「基本的には巴さんについて行くわ。学校にはこれから魔法少女になる候補となる生徒もいるから」

おそらく一番最初に私と共に暁美さんを助けたという優しい保健委員の事だろうか。

暁美さんは私だけじゃなく彼女の事も救いたいと願って魔法少女になったらいいの

で、気に掛けるのは当然ね。

今は最初の時間軸とは違って半年前まで戻っているらしいから「魔法少女候補」なんでしょうね

「候補、となるとその子がキュウベえに会う前に魔法少女について色々レクチャーしておく必要があるわけね。」

2年もこの見滝原で魔法少女をしている以上、それなりに他の魔法少女とも関わってきた。

その中にはキュウベえに言われるがままに契約してしまい、覚悟の無いまま魔法少女になって後悔していた人も少なからず居た。

まだ魔法少女になっていないのならば、できるだけ具体的に魔法少女の実態を教えるおかなければならない。

ただでさえ、今この見滝原からは魔女が少なくなっているのだ。
魔法少女が増えれば当然グリーンフシードの食い扶持も増える。

見捨てるつもりは無いけれど、戦えないままの魔法少女を養っていく余裕は無い。

「まあ彼女達の事だから、いくら危険で取り返しのつかない事だって教えるても魔法少女になるんでしょうけどね。

何度も『魔法少女になるな』って言っても聞かなかつたもの。

それに、生半可な願いでは魔法少女になってもいたずらに苦しむだけだし……」

暁美さんの場合、それで彼女達が崩れる様を何回も見ているのだろう。

その表情からは悲痛な色が見て取れる。

願い……私も魔法少女になってから願いを後悔したクチだ。

キュウベえによると固有魔法や武器は契約者の資質と願いによって決まるらしい。

ワルプルギスとの戦いに向けて特訓していく以上、願いの内容にも気を使わなくてはならないのだろう。

その点、私の願いは「助けて」と単純なモノだったからこそこんなに汎用性が高い物になったのかもしれない。

ただ、私自身知っている固有魔法や魔法少女の願いがそう多いわけでもない。

固有魔法の方はそれなりであるとしても、大抵の魔法少女がこの見滝原を縄張りにしたようとした襲撃者だったのだ。

最初から敵意むき出しの魔法少女の願いを知るほど私はコミュニケーションが得意ではないし、そんな事が出来るのならもっと友達も多いはずである。

まあ、もう暁美さんがいるから良いのだけれど……

そう考えると過去を思い出して辛そうにしている暁美さんを見るのはかなり辛い。

その痛みを肩代わりする事は出来ないけれど、せめて何か元気づけられれば

私は自らを鼓舞するように立ち上がる。

「大丈夫よ。暁美さんの話だと、他の時間軸の私も先輩として色々教えていたんだもの。」

暁美さんも加わってくれるんだから、この魔女が少なくなっている今の見滝原でも、きつとなんとかなるわ。」

・・・ちよつとわざとらしくかつたかしら。

「…………ふふつ。じゃあ、巴センパイのお手並み拝見といった所ね」

暁美さんが笑ってくれた。よかつた。

「もうとつくに暁美さんの方が先輩でしょ

魔法少女としても、人生においても」

言つてから気がついた。この発現かなり失礼では…?

「私の中では巴さんは先輩よ。どれだけ時が経つてもそれは変わらないわ」

内心かなり焦つたし、ひやひやしたけども

暁美さんが気にしていない様子だからセーフ!

うーん、でも。そつかあ…私、先輩かあ。

駄目だ、ニヤニヤが止まらない。

顔も熱いから多分真っ赤になつてる。

コレは流石に暁美さんに見せられない。

「ん〜?」

でも暁美さんもニヤニヤしながら私の顔を覗き込んでくる。

慌てて違う方を向いて逃げる私。追いかけてくる暁美さん。

その追いかけてこは私がソファに顔から飛び込む事でようやく終わった。

「ところで、そろそろ出発しないとマズインじゃない?」

暁美さんに言われてソファに埋めていた顔を上げて時計を確認すると、校門が閉まるまであと5分といった所だった。

「ええ!?嘘、いつの間に!」

さっきまで照れと嬉しきで真っ赤になっていた顔が一気に真っ青になり冷や汗がだらだらと吹き出てくる。

これだと魔法少女としての全力で走っても到底間に合わない。魔法少女としてやっている以上どうしても夜ふかし気味になってしまう私は遅刻常習犯だ。

他の部分でカバーはしているが、うっかり授業中に居眠りしてしまう事もあって教師からの心象は良くはないだろう。

その割には皆気さくに話しかけてくれる先生ばかりだからキツく怒られた事はあまりないけれども、それでも内申点にどう響くかわからない。

死ぬ！魔法少女でも流石にこの速度は死んじやう!!

周りの景色が線にしか見えないのだけど!?こんな速さ新幹線ぐらいでしか体験した事ないわよ!?

気を抜くと風圧で振り落とされてしまうのでさつきから暁美さんとは完全に密着状態だ。しかもおんぶだから胸を押し付けてる事になる。

だが、そんな甘酸っぱいドキドキなんてこの超速度の前には塵に等しい。恐怖のドキドキで完全に上書きされる。

吊り橋効果とは危機を共にすることで恐怖のドキドキを相手への恋心だと誤認してしまう現象の事だが、コレは完全にその逆。

暁美さんへのキモチも全て恐怖へと変換されてしまう。

あまりの恐怖に恥も外聞も投げ捨てて、変身しリボンをおんぶ紐のようにして暁美さんと私を括り付けている。

それでも気を抜くと風圧で引き剥がされそうになるのだ。

しばらくビルの上を飛んでいた私達だが、ついに暁美さんが地面に着地する。

「どうやら間に合ったようね」

ズザザザと地面に摩擦熱で赤い跡を残して着地した先は校門と昇降口の間だった。

私と同じで遅刻ギリギリの男子生徒達が走っているのが見える。

が、ソレ以上に私は地獄のジェットコースターで満身創痍だった。

未だにぐわんぐわんまわっている頭で周りを認識していると、とある事に気がつく。

「あ…：曉美さん？私、魔法少女衣装のままなんだけれど……」

しかも曉美さんにリボンのおんぶ紐でガツチリ固定されている状態で、だ。

そんな格好の私達が突然降ってきたのだ。騒然とするに違いないし、今後の学校生活に支障をきたすだろう。

一瞬の内に脳内を駆け巡る最悪の未来

いや、でも命があるなら最悪ではないが……それでも魔法少女としてではなく年頃の女の子としての生活はジ・エンドだ。

「大丈夫よ。よく見なさい」

私を降ろしながら（気づいた時点でリボンは解除している）曉美さんが言うので恐る恐る周りを見渡してみる。

昇降口へと向かう生徒はたくさんいるにも関わらず、こちらを注視しているような生徒は誰一人いない。

あんなに大きな音をたてて着地したというのに、全く気にも止められていない。

何が起こっているのかわからず困惑していると、曉美さんがイタズラが成功したような顔でポケットからスマホほどの大きさの機械を取り出した。

「コレは光学ステルス迷彩魔術結界って言つてね。

まあ、わかりやすく言えばキュウベえみたいに魔法少女以外には見えなくなるものよ。

私だけじゃなくて近くにいる指定した相手にも効果が及ぶから巴さんの魔法少女姿は誰にも見られてないし、ついでにビルの上を跳んで移動してたのも誰にも見られていない。

そして、コレの効果範囲にいる間は何をしても見えない人達からは怪しまれない機能もついている。見えないだけじゃなくて存在そのものを認識出来ないってことよ」

「……トンデモ技術すぎてまるで訳がわからないわね。

むしろ固有魔法って言われた方がまだ納得できるのだけれども」

「残念ながら、純粋な技術で作られた誰でも使える装置よ」

動力も単三電池二本だしね。と呟く暁美さん。

あまりの規格外さに舌を巻くどころか呆然とする。

そんなものがあつたら魔女を一方的にタコ殴りにする事が出来る。

一般に流したら決して解決できない完全犯罪が成立してしまうだろうし、もし軍事転用なんてされた日には世界地図の書き換えなんてしょっちゅう起こるだろう。

数年前に比べると急速に発展したと言われ、もはや近未来都市と言われている日本で

もコレは余裕でオーバーテクノロジーだ。

【悲報】 たった一人の友達の技術が進みすぎている件について

「さ、早く席に座らないと朝礼始まるわよ」

なんでもないかのようにスタスタと歩いていってしまう暁美さん。

色々聞きたいけれども、遅刻カウントは取られたくないので教室へと急いだ。

☆☆☆☆

「あれ？あの子……」

お昼休み、私はいつもの屋上でさやかちゃんと仁美ちゃんと一緒に弁当を食べていた時だった。

向かい側の屋上で弁当を食べている腰まで届く黒髪がキレイな少女が妙に気になっちゃった。

「うん？あの金髪ドリルの人？」

隣のさやかちゃんが聞いてくる。

向かい側は二年生の校舎だ。だからおそらくあの黄色い人は先輩なのだろう。

一ヶ月後には私たちが通う校舎。だから、なんとなく見てしまったのかもしれない。

「ううん、その隣の黒髪の人」

「黒髪……？あそこには金髪の先輩しかいませんよ？」

「え!？」

慌ててもう一度見ると、確かにそこには黒髪の少女の姿は無く、金髪の先輩が虚空に向かつて喋りながらお弁当を食べているだけ

「なんだ？まどかは幽霊が見える霊能力者だったのか？」

さやかちゃんが「あくりよーたいさーん」とか言いながらくすぐってくる。

ちよ、ちよつとやめてよう！

私達の話題もまた他愛のないモノに戻り、さやかちゃんのせいで私の頭の中からもあの黒髪の少女の事はすっかり消えてしまった。

☆☆☆☆

さて、世の中には中学でも給食の学校も中にはあるみたいだが、残念ながら見滝原中
学はお弁当である。

学食も無ければ購買も無い。忘れたらお昼は抜きなのである。

正直言って、このお弁当というシステム、クツソ面倒くさい。

つい言葉が汚くなってしまふほど面倒くさい。

何が一番面倒くさいって適当なコンビニの菓子パンを食べていると周囲から浮いてしまう事だ。

たしかに教室ではなく屋上や中庭等で食べることも出来るが、それだって誰かしらの目はある。

ボッチという人種は2つあって、ボッチである事を全く気にせず我が道を行くタイプと、コミュニケーション能力不足で孤立してはいるものの目立ちたくない陰キャタイプ私は後者だ。というか、いじめられない為にはある程度周りに合わせないといけないのだ。

女子の世界は同調と共感の世界。それが出来ない物は爪弾きにされていく。

だからこそ、皆大して興味のない流行りの曲やファッションなんかを必死になつて勉強して周りの話についていこうとする。

それでも現代は様々な種類の趣味が発展したおかげでまだマシならしい。

これはまだお母さんが生きていた頃に聞いた話なのだが、

テレビぐらいしか娯楽が無かった一昔前なんて人気のテレビ番組を見ていないとまともに話すらしてもらえず、何か用事がある日はビデオテープに録画して後で見なく

てはならなかったとか。

その時代の魔法少女は大変だっただろう。パトロール後に録画を見て、宿題をして、そして勉強も待っているのだ。

まともな睡眠時間を取っていた子はどれだけいるのだろうか？

話がそれた

ともかくこのお弁当というシステム、私は嫌いだった。

だがしかし、暁美さんと友達になった今は違う。

いや、正直悪いとは思っているのだが暁美さんが「一人分作るよりも二人分作る方が楽だから」と、私の分のお弁当まで作ってくれていたのだ。

本当に暁美さんには感謝しかない。というかこちらが色々してもらってばかりで恩を返せている気がしない。

いつか何かしら本格的にお礼をしなくては。

ちなみにお弁当のメインは豚の生姜焼きである。

「は？一瞬とはいえこの距離で結界が突破された!？」

そんな暁美さんのお弁当に舌鼓を打っていると、目の前で暁美さんが唐突にそんな事

を喋りだした。

暁美さんはお弁当を食べる手を止めて向こう側……一年生校舎の屋上を見ている。

片方の手は箸を持っているのだが、もう片方の手は空間投影型ノートパソコンのキーボードに物凄い速さで何かを打ち込んでいる。

ディスプレイにはよくわからない文字列のようなものが書き込まれている。プログラム言語というヤツだろうか。中学生でもその手のモノに詳しい人はいるが、あいにく私には管轄外だ。

が、よく見てみたら文字列の中にはアルファベットでは無い何かが混じっている。魔法結界の中でよく見かける……というよりもソレ以外では見たことのない文字だ。

となると、魔法関連のプログラムなのだろうか

この時点でコレを理解出来るのは暁美さんだけだと言うことがわかった。

私は空間に投影されているディスプレイの事は考えるのを止めて、さっきの呟きに対して質問する。

「結界って、その見えなくなるヤツよね？ということとは例の魔法少女候補？」

「ええ、指輪が確認出来ないからまだ契約前のハズなのだけれど……流石は因果律才バケ。やることなすことスケールが大きい」

因果律……？確かキュウベえが昔言っていたような……言ってなかったような……？よ

くわからない。

「ふうくん？つまり、あの屋上にいる子が後の私の後輩なわけね」

数十メートル離れてはいるが、ピンク色の髪の子と、青色の髪、そして緑色の髪の子が見えた。

「ピンクの髪が『鹿目まどか』

青の髪が『美樹さやか』

緑の髪が『志筑仁美』

魔法少女になるのはまどかとさやかよ。」

「ほーん……そう。

で？会いに行かないのかしら？」

しかし、ここで暁美さんは苦虫を噛み潰したような表情になる。

「それが、まあ……」

いきなり見知らぬ人に声をかけられて魔法少女云々話されたら巴さんだつたらどうする？」

「まあ……全力で逃げるわね。そんな不審者に話しかけられたら」

確かに想像してみると明らかにマズイ情景が浮かんでくる。

実際に魔法を見せる前に逃げ出されるだろうし、そもそも魔法少女というモノに対し

て悪いイメージを持ちかねない。

いや、実際に魔法少女なんて良いモノでも何でも無いけれども、

何もしなくても契約してしまうのなら、出来るだけ魔法少女として強くなってもらった方がよい。

そのためには魔法少女に対しての先入観は出来るだけなくしたいし、仲良くしたい。

「まだ私はこの学校に入学したわけじゃないから今接触するわけにはいかないし、

編入するのは一ヶ月後だし、

町中で偶然を装って知り合って……というのは仲良くなるのに時間がかかるし、

結局魔女、もしくはは使い魔に襲われている所を助けるのが一番手っ取り早いのよね

キュウベえは今ここにいないし」

考えてみると、今の状況でその鹿目まどかと美樹さやかという子に魔法少女の事を説明するのは至難の技だ。

キュウベえは契約を急ぎすぎるきらいがある。できるだけキュウベえに会うより先に会いたい。

だが、以前の見滝原ならいざ知らず、最近の見滝原には魔女が少ない。

そう簡単に魔女に襲われてくれるなんて楽観的に考える事は出来ないだろう。

そもそも私はボッチだからコミュニケーションは得意では無い。

「やつぱりパトロールしてきて手頃な使い魔なりなんなりを捕まえるしかないのかしら……」

「それしか無いのよね……」

暁美さんと一緒に頭を抱え込む。生姜焼きは美味しいのだが、問題の方は現状解決できそうも無かった。

弁当を食べ終わると暁美さんは投影型ノートパソコンを消して立ち上がる。

「まあ、今すぐに取れる手段無い以上どうしようもないわ。

一旦まどか達の事は置いておいて先に最後の魔法少女候補……百江なぎさの方を片付けましょうか」

そう言うのと暁美さんは階段の方へと歩いていく。

百江なぎさ……暁美さんの話だと見滝原中学の生徒ではなく、小学5年生だという。彼女の場合はそのまま放って置くで大変な事になるらしい。

何がどう大変なのかははぐらかされてしまったが、暁美さんが焦るほどなのだ。途轍もなく厄介なのだろう。

「でも、その百江さんって子は小学生なのでしょう？ どうやって接触するつもり？」

それこそ鹿目さんや美樹さんよりもよっぽど接触しづらいと思うのだけれど……」

私の疑問に、暁美さんは立ち止まると身体の向きを変えず、器用に頭だけを後ろに倒してこちらを振り返るシヤフ度

「ええ、だから早乙女先生に会いに行くわよ。」

「……………え、なんでそこでウチの担任が？」

暁美さんは「まあ来ればわかるわ」と言い、階段を降りていってしまふ。

首を傾げながらも私は暁美さんについていった。

まあ暁美さんがついてこいって言ってるのだからついていく以外無いのだけれども

ほむら編その9 『分体達の怒り』

☆☆☆☆☆

3月11日 午後13:45

風見野市 中央街

とある街中のショッピングモール、駐車場へと向かう人気のない連絡通路に複数の足音が響く

発生源を探せばとある親子……両親と幼い少女である事がすぐにわかるだろう。

緑色のツインテールを揺らす少女は両手で両親と手を繋いでおり、とても仲睦まじい様子に見える。

しかし、それにしても両親の表情がぎこちない。

まるでなにかを嫌々させられているのを顔に出さないように抑えているかのような表情だ。

少女のほうも少女のほうでその笑顔はわずかに引きつっている。

だが、そんな多少の違和感なんてものは道行く無関係の人からみると大差ない違いである。

危険なサインには全く気づかず、に微笑ましい親子を見たとき勘違いしたまま通り過ぎる事だろう。

他人というモノは得てしてそういうものなのだ。

外側から入ってくる情報の中から自分に都合の良いコトしか見ないし、見えない。

故に少女の助けを求める瞳や、その両親から漂うゲロ以下の吐き気を催す邪悪に気づけない。気付こうともしない。

だから、決して気づけていない何も知らない通りがかりの一般人達の事はどうか責めないで欲しい。

知らなければ彼らの良心が痛むこともないのだから。

この少女、「千歳ゆま」は既に小学5年生である。

年齢に見合わず身長は130cm、明らかに小学校低学年程の身長しかない。此処ではない別の世界の千歳ゆまは本当に低学年だと間違われた事がある。

それは生まれつきそういう体質なのか、それとも別の理由があるのか……いや、この痩せ具合から見て明らかに栄養失調のせいであろう。

きれいな緑色を少ししたツインテールだが、その裏の額には痛々しいタバコの火傷痕が残っている。

今更このご時世で根性焼ききでも言うのだろうか？それに、ロクに処理もされていない

い。

もちろん、この怪我については両親も知っている。

いや、無関心な父親は知らないかもしれないが、少なくとも母親は知っているはずだ。自分がつけた火傷なのだ。「忘れた」なんて言わせないし、許さない。そもそも娘の額にタバコを押し付けると言語道断、到底許されざる行為だ。

明らかなる虐待である。

児童相談所に連絡させてもらいますね。

だが、それは出来ない。

この母親は児童相談所に通報された場合、自棄になって娘に当たり散らす。

万年栄養失調気味の非力な少女の身体では母親が取り押さえられる前に命を散らしてしまおうだろう。

母親の風上に置けないどころか、母親ですらない正真正銘のクズである。

虐待するようになったのは何か理由があったのだろうと思われる方も多いだろう。

事実、母親が虐待を始めたのには理由がある。

少女の父親は不倫をしていた。

母親にとってそれは信じられないことであり、許せない事だった。

日々父親と不倫の事を追求する母親。しかし、父親は「自分は悪くない」といった姿

勢を全く崩さない。

話はいつまでも平行線を辿り、それによって溜まったストレスを父親は不倫を繰り返す事で発散した。

当然、更に怒る母親。いくら言っても話が通じない父親に父親の比では無い量のストレスが母親に溜まっていく。

しかし、母親は専業主婦。日々の大半を変わり映えのしない家で暮らすのだ。父親のように新たな出会いがあるわけでもないし、そもそも不倫という行為そのものに嫌悪感：いや、一種のトラウマのようなモノを持ってしまった母親は自分も不倫をして意趣返しをすることもせず、また相談できるような相手を見つけることも出来なかった。

そんな母親がストレスのはけ口を選んだのが最も身近に居た少女だった……というクツソ胸糞悪い話である。

現にこの夫婦は未だに会話をしていない。

だが、民生委員の方から娘の事で自宅訪問が行われた以上、近所に虐待を行っていないと示さなければならぬ。

コレはそのための外出^{三文堂}だった。

両親と手を繋いだ少女は、一見すれば中の良い3人家族に見えるだろう。

しかし少女からすれば繋がれた手は自らを繋ぎ止める手錠でしかない。

脱走を阻止する為の拘束具でしか無い。

命令されたから必死に笑顔を保っているが、恐怖の元凶の元で笑顔をつくるというのはどれほど辛い事だろうか。

だが、少女はお出かけが好きだった。

自分が笑っていれば外では両親は喧嘩をしないのだから。

自分が笑ってさえいれば何も痛い事をされないから。

そんな親子を見つめる影が一つ。

腰まで届く長い黒髪に、肩が出てる黒のセーター、膝上5センチ程の黒のスカート、黒のタイツ、黒のブーツ、黒の肩掛けバッグ、サングラス、真つ黒なマスク……という、上から下まで真つ黒のコーディネート。

誰が見ても明らかな不審者である。

そんな不審者が延々と親子の後ろを一定の距離を空けてつけているのだ。

なんとわかりやすい事に壁や柱の影に身を隠しながら……である。

おまわりさん、コイツです。

しかしそんな真つ黒な少女が不審者がわかりやすく後をつけているというのに、親子は気づか

ない。

周りの客も気づかない。

いや、気づけない。

昨日、隣町でこの街の少女達が死んでしまった以上この街には彼女に気づける存在は
いない……

いや、一人いた。

つい先程この街に辿り着いた赤髪の少女。

だが、本来の力を封じている今の彼女では気づく事は出来ないだろう。

駅前からここまでではそう離れていない。

いずれ彼女は誘われたようにこの場所に来るだろう。彼女の今最も欲しているモノ
を手に入れるために。

はいよ、曉美ほむら3号（仮）だ。

日頃から恨んでいる仇インキューベーター 敵と嫌々協力するRTAはじめていくぞ。

私の仕事は『千歳ゆまの契約の確認と補佐』そして『佐倉杏子との接触』だな。

織莉子のヤツが魔法少女になっている以上、千歳ゆまの情報がロリコンインキューベーター白タヌキに伝
わってる。

今は神浜関連の調査及び各地の魔女不足の対処の為に数いる個体の内の大部分を投入しているらしいから元々魔女の数が多かった見滝原、風見野周辺にはこの一体しかない。

だから千歳ゆまにはさつさと契約してもらわないと、総合戦力も増えないし、ゆまが居ないとこの先不安定な部分が増えるし、アイツが来ないからまどかが契約出来ないし、ついでにさやかも契約できないし……

ハッキリ言って今のこの状況は私達「曉美ほむら」にとつて百害あつて一利無しなんだ。

だから、本当はクツソ嫌だけどクソゴミキュネモドキに協力する必要があつたわけだな。

はあ……帰りたい

黒の少女は脳内で誰かに喋りかけながら……いや、喋りかけている訳ではない。

ただ記録ログに書き込んでいるだけだ。後で自らの主人が1つの物語にまとめる際にわかりやすいように。

実は私は他の分体とは違って、本体から現状たった1つしかない魔力コンデンサーを

渡されている。

全ての元凶インキュベーターと協力する為には魔法少女として変身しなくちゃいけないからな。

入っているのは普通の魔法少女と同等程度の魔力だけ。限界ギリギリフルチャージで

コレだ。

まあクソ下衆インキュベータードブネズミのヤツから変に怪しまれない分マシだろう。

必要以上に興味を持たれて粘着されたらこの先困るからな。

窓の外に白い謎の動物が現れる。

ソイツは黒の少女とアイコンタクトを取ると、頷いてどこかへ跳んでいつてしまった。

その間、少女は能面のように顔を変化させていなかったが（そもそもグラサンとマスクで隠されている）内心ではずっと眉間に力が入っていた。

それほどインキュベーターは彼女達にとって憎むべき存在なのだ。

だが、協力体制をとる以上「暁美ほむら」の固有魔法についても自ら開示している。いやバカ正直に真実は話さないぞ？「分体」をさも固有魔法かのように話ただけだ。どうせコイツらは意識を共有してる群体生物なんだ。どこかで二人以上の「暁美ほむ

ら」が同時に観測されたらすぐにバレル。

なら、逆にコチラから信頼の証○としてさっさと開示した方がよっぽどガバしなれば「時間操作」にたどり着かれないからうま味テイスト ってわけだな。

陰湿インキョウベキゴミ営業達ケイギョウダチが私達「暁美ほむら」と契約をしたことが無いハズのこの状況も真実を織り交ぜた嘘で説明しておいた。

「私は別の平行世界からこの世界に飛ばされてきた」

ただし、向こうの世界の魔女の攻撃のせいで飛ばされた。つつう設定だ。こんな嘘でも大体は説明出来るんだから平行世界つつうのは便利だよな。

ついでにこれが終わったら見滝原に住むことと、見滝原にトンデモ鹿ナイ素質目の持ち主まがいる事も伝えてる。これで千歳ゆまの契約が終わったら真っ先に見滝原に来るだろう。

フヘツ：本当にコイツは操りやすいな。人間とは違つて感情を持たず、合理的判断でしか行動しないから余計にわかりやすい。

——どうしてボクに協力するんだい？——つて聞かれたが、「千歳ゆまも鹿目まどかも美樹さやかも佐倉杏子も、向こうの世界で共に戦った戦友だから」つて返した。間違つてはない。

あ？戦友なら魔法少女にするなつて？

もう私達がこの時間軸に辿り着いた時点で魔法少女になる運命に固定されるからなあ……知らん所でヘンな願いで契約されて世界崩壊救済の魔女なんてされるよりも、目の見える範囲でやってもらった方が管理しやすいし安全だろ？

窓の外の白い謎の動物……インキュベーターが去って数分後、目の前の親子含む世界がぐにやりとネジ曲がり、イバラと花が支配する摩訶不思議な空間へと変貌した。

決して離さないように手を繋いでいた手はこの空間の歪みの前ではあまりにも無力
親子三人はバラバラに分断されてしまった。

おっと、そんなこんなで千歳ゆまの両親が魔女に襲われてるな。へッ……いい気味だ。

コイツらは自分たちがうまく行かないのを娘に八つ当たりして、それを黙って見ていたクソ野郎どもだからな。助ける価値なんてあるわけがねえ

母親はイバラによって作られた四方八方を4メートル程の高さの壁で囲まれた小部屋の中で目を覚ました。

「……………んっ……………うん？……………はあ!? な、……………何よここ!! なんなのよ!! ちよ、冗談じゃないわ!」

母親は突然の出来事に理解が及ばずにヒステリックに叫んでいる。いや、コイツの場合いつもヒステリックか。

ガリガリと頭を搔きむしり辺りを見回す。

「しかも少しずつ狭くなってるじゃない!!」

このイバラの壁にぐちゃりと潰された自分の姿が頭の中に投影された母親は、なんとか逃げる為に壁の上に届かないかと助走をつけてジャンプをする。

だが、ヒールを履いた専業主婦に4メートルを超える跳躍など出来るはずもなく、棘だらけの壁に身体を叩きつける。

見たところイバラの棘は若いサボテンの棘のように柔らかく、母親も危険は無いと判断した為ジャンプを試したのだ。

しかし、この世界では現実の常識は通用しない。

壁のイバラの棘は母親が叩きつけられた瞬間――

ザシユツ

「ガ……………あ?」

――硬く、鋭く、そして長く、変化する。

熟練の鍛冶職人が手掛けたレイピアの切っ先のような細さ、切れ味、頑強さを兼ね備えた一本の棘。専業主婦の身体程度ならば容易く貫ける。

母親の人生で経験したことのない壮絶な痛みが下腹部で発生し神経を伝って脳へと信号を送る。

いや、本当に経験したことはないのだろうか？

確かに下腹部を突き刺されそこを起点に半回転させられることなんて普通に生きていたらありえないが、その痛みの発生位置は経験があるはずである。

まあだからといって慣れていくわけでもないし、出産の痛みは慣れる事が出来るような生つちよろいモノでは無いだろう。

少なくとも男性が耐えられない痛みだという話はよく聞く。

でも、女性全員が耐えられるわけじゃないし、誰だつて積極的に痛みだけを与えられたいとは思わないだろう。実際にこの母親はゆまを産んだ際に「もう出産は懲り懲りだ」と言っている。

だからだろうか？

母親の脳裏に当時の光景が再生される。

今は見る影もない、まだ優しかった夫と共に子供の名前を考えた日々。

夫の名前……「祐作^{ゆうさく}」と、自分の名前……「眞子^{まこ}」から取つて

男の子なら「さくま」、女の子なら「ゆま」

わざと漢字は当てなかつた。夫には「ひらがなの方が可愛いから」と言つたが、本当は自分の漢字がキライだったから。

そして妊娠、陣痛、出産の痛みを耐え抜いた後の、生まれてきた我が子を抱いて胸の中に希望が満ち溢れたあの頃。

思えば、どこからこの道が狂つてしまつたのだろうか？

夫が初めて浮気をしてきた時だろうか、

いや、違う。そのときには既に夫婦の仲は冷めきつていた。

それじゃあ夫の不注意で幼稚園の保護者会の日程を間違えて大喧嘩をしたときだろうか？

それとも夫が昇進して帰りが遅くなつてから？

もつと前からでは……それこそ、ゆまが生まれてすぐの授乳期間。

夜泣きでほとんど眠る事が出来ない自分の隣でぐっすりと眠り微動だにしない夫その時に抱いた失望こそが、全ての始まりだったのではないだろうか？

ああ、あの頃に戻れたら。選択を間違つていなければ。

しかし、今となつてはどうしようもない。考えることすら意味のない夢想である。

それは、走馬灯だったのだろうか。

気がついたら母親……「千歳眞子」は逆さに吊り下げられた状態で気を失っていた。未だジクジクと下腹部の痛みは収まらないが、再起動したおかげか、もしくは夢想をしたおかげか、頭の中はスッキリと晴れ渡っていた。

「……………ゆ、……ま」

口から娘の名前が零れ落ちる。

まだ幸せだった頃に夫と考えた我が子の名前。

思えばこれまで何度もこの名を呼んできたが、笑いながらこの名を呼んだことは何回あっただろうか。

そうか、この痛みはきつと今までの罰なのだ。今までの罪を認めて、償って、ゆまに許してもらえたら、この痛みから救われるんだ。

そうに違いない。なんせゆまは私の子供なんだ。子供なんだから親を助けるのも当たり前のはずだ。

なら、まずはゆまを探そう。そのためにはここから動かなくてはいけない。棘から身体を抜くために目の前のイバラの壁を腕で突き放すように押し出す。

返しによってすぐには引き抜けないが火事場の馬鹿力によって回転した時を越える

激痛が走るが、返しが食い込んでいる体組織ごと引きちぎる。

数分、数十分、それ以上か？

詳しい時間はわからないが、しばらくの後に真子の身体は下腹部周辺を犠牲に棘から抜け、自らの血溜まりに頭から落ちた。

さほど高い位置から落ちた訳では無いが、鼻を打ち付け骨折したせいで顔面は酷い有様になっている。

真子は痛みに耐えながら立ち上がろうとするが、下半身の感覚が無い。

さつきまで突き刺されていたイバラの棘の返しは真子の想定よりも遥かに下半身を傷つけていたようだ。

いや、そもそもこんな状態で意識を保って動ける方がおかしい。

それはひとえにここが魔女結界だからだろうか？

しばらく必死に動こうとしていた真子だが、どうにも全く動けない下半身が邪魔で腕の力で這いずるにしても動きづらいことこの上ない。

どうしたものか、とアドレナリンをキメている脳みそで考えていると、傷跡の中に光るモノを見つけた。

痛みを堪えてその光るものを引き抜くと、5センチ程度の刃渡りの刃、棘の返しとしてついていたモノだ。

現状、下半身が邪魔にしなければならないのならば、置いていくしか無い。

「うっ……グアアッ……」

い……や、……ま……だま……だアッ!!

ハア……ハア……、絶対、死んで……やる、もんですか……!」

ゴリッ……ヌチャッ……

汗と血と肉の油で刃を握る手が滑る。

股関節が堅くて思うように断ち切れない。

いくら火事場の馬鹿力があるとはいえ、かぼちやを切る時みたいに全身の力を使えないのがこの作業を長引かせている。

その間も傷は塞がっていないのだ。血溜まりはどんどんその嵩を増やしていく。

どう見ても1リットル以上血が出ているというのに出血性ショックで気絶していない。

魔女結界の中という異常な環境の中だとしても流石に異常すぎる。もはや人間の限界を超越し過ぎだろう。

ようやく下半身を切り離れた眞子は腕二本で器用にも前に進んでいく。

いつの間にかイバラの壁の一部は消えており、その先に新たな空間が出来ていた。それは、新たな死地へと誘う悪魔の罠か。それとも、真子の覚悟に魔女が称賛を示したのか……

どちらだとしても、真子には前に進むしか道は無かった。ほとんど死にかけなのだ。もう、何も怖いことは無い。

その先で真子は夫の死体を発見した。

とてつもない力で強引にねじ切られた身体は6つにバラバラにされており、その虚ろな目がコチラを眺めている。

普段の真子ならば発狂するような光景だろう。もしくはザマアミロでも思うだろうか？

だが今の彼女の心はピクリとも動かなかった。

ああ、死んだのね。ご愁傷さま

その程度の、なんとも思っていないような反応。

それよりも、だ。

この空間に巻き込まれる前に一緒だった夫の死体がここにあるのだ。なら、ゆまもこの近くにいる可能性が高い。

眞子は何事もなかったかのようにまた娘を探して身体を2つの腕で持ち上げ前に進む。

……………その背後から化け物が迫っているとも知らずに

☆☆☆☆

数分の気絶から幼い少女が目を覚ました。

「すーい

へんなお花が咲いてるー」

幼い少女は今まで見たことのない幻想的な光景にしばし呆然と立ち尽くす。

これは何なのだろうか？ 不思議の国のアリスのように別の世界へと迷い込んでしまったのだろうか？

無防備なその姿はいかにも襲ってくださいと言っているようなものだが、周りのイバラはピクリとも動かない。

これ以上考えても何もわからない事から少女はこの世界の事を一旦頭の隅に置いておくと、とある事を思い出した。

「パパとママはどこだろ……」

気絶する前、確かに一緒に歩いてきたハズの両親。

日常的に少女に虐待を行ってきた両親だが、こう何も頼れるものがない世界にいきなり放り出されたとなればいささか寂しくなり、つい助けを求めてしまう。

若い少女が両親を探すため歩き出したその時、ズルリとなにかが落ちた音がした。

「ママ？」

視界の端に写った長い髪から母親だと判断する少女。

たしかにその判断は正しい。しかし、もうそこには少女が知っている母親の姿は無かった。

「ひはっ

ひ……ひいいたい

たす……け……」

鼻の骨は折れ、右目は抉り取られ、顎は外れ、至る所を血で濡らしている亡霊の如き
双眸

上半身だけになって無様に助けを求めるその姿はいつかのテレビで見たゾンビそのものだった。

母親……いや、千歳眞子は……いや、もはや彼女は千歳眞子でも無い。

ただの少し意識が残っている程度のゾンビに過ぎないのだ。
這いずり、手をのばす。

もう少し、あともう少し。

少女は後ずさる。当然だ。この手に掴まったら自分もこうなる。本能的にそう感じた。

だから逃げた。

母親はまた這いずり、手をのばす。

先程よりも近くなった。

少女は恐怖で動かない足でなんとか後ろに下がる。

あと一步…あと一步で娘に手が届く。

しかし背後から太いイバラが残った上半身の切断面に突き刺さる。

「う…ぐう……………」

もうゾンビには叫ぶだけの体力も残っていない。

そのまま突き刺されたイバラによって後ろへと引き戻され化け物によって身体の内側にイバラを送り込まれる。

どんどんと膨らんでいく身体。

そして、皮が耐えきれなくなり、ビリビリに引き裂かれ中に入っていた血が飛沫と

なつて飛び散った。

大きな目玉の化け物は母親だったモノをあらかた破壊しつくすと、幼い少女を一瞥する。

目の前で自らの母親を殺した化け物に睨まれ、何も出来なくなる少女。

しかし、化け物は面白くなさそうにぷい、と横を向くと

奥へと進んでいった。

後に残された少女は、逃げることも、泣くことも出来ず、ただ瞳を開いて目の前の血溜まりを見つめ続けるしかなかった。

☆☆☆☆

その様子を一人、常人では見えない程の上空から見ていた存在がいた。

お、父親に続いて母親の方もやられたか

どうだ？ 痛いかな？ 苦しいかな？ 怖いかな？ 恐ろしいかな？

だがなあ、お前はこれ以上の恐怖をゆまに對して毎日のように浴びせてきたんだぞ？

本来なら安心できる場所であるべき自宅がッ！

絶対安全であるべき両親の膝下がアツ!!

テメエらは自分勝手な責任転嫁でそれらをゆまから奪い続けていたんだぞ!?

そんなテメエらが今更助けてくれだあ?

バカも休み休み言いやがれツ!!

テメエらがやってきた事は明るみに出れば確実に社会の制裁を受けていただろう。

だが、私は寛大だからな。そんな罰からテメエらを逃してやったわけだ。

勿論、行き先は地獄だがなあツ!!

………無事、最大限の苦しみを味わいながら事切れてくれた。

工事………完了だ（穢れの無い澄み切った瞳）

さてと、あとは他のシヨツピングモールの客に被害が出る前にサクツと雑魚掃除して

おっかな

全てを見届けた黒の少女——暁美ほむら3号（仮）は、スッキリした顔で頭の中に書

き込むとブレザーのような魔法少女衣装に変身し、左腕についている小型の盾から
突撃銃アサルトライフルを取り出す。

そうして幼い少女を置いたまま3号はこの魔女結界の浅い層へと移動していった。

走り、探知し、襲われている利用客を助け出し、無事を確認したら忘却剤を注入して

また走る。

彼女は赤の少女……佐倉杏子が来るまで出来るだけこの魔女結界を維持しながら被害者を少なくする必要がある。

そのためには一般魔法少女並の魔力しか入っていない魔力コンデンサを節約しつつ行動する必要があったため、一発で結界ごと壊せるような暁美ほむら本来の超高火力魔術は使えず、仕方なく歩兵スタイルでちまちま掃除していくしかなかった。

だが、幸いインキュベーターからの連絡で佐倉杏子がここ周囲に来ている事はわかっている。

あとは、ひたすら耐えて耐えて耐え忍ぶだけだ。

☆☆☆☆

「風見野く風見野く落とし物、お忘れ物にご注意ください」

路面バスから降りて伸びをする赤髪の少女

彼女の名前は佐倉杏子

つい先日、師匠と呼べる存在と仲違いし見滝原を去る事になった魔法少女である。

「しっかし、やっぱりこの街にも魔女の気配はねえな」

一通り辺りを見渡すと彼女は焼き鳥の串を啜えながら一人愚痴る。

「大体、見滝原自体がここら一体でトンデモナイ穴場スポットだったはずだ。

それであの状態なんだから他はもつと悲惨なのは、まあわかってたんだけど

ねえ」

「最期に見た時は相当に参っていた師匠を思い出す。あの様子でグリーンフィールド不足の中やっていけるのか……」

「いやいや、そんな事アタシは知らねえ。」

「マミのヤツがどうなろうと関係ねえ。」

「アタシはアタシの為に生きるんだ。」

「とりあえず、魔女は人が多い場所に集まる。」

「まずはここらへん食べ歩きしながら気楽に探していくか」

「おっちゃん！ コロツケ6つ！」 「あい、まいどありー！」

コロツケ片手に街を歩いていると、まあ、大体の事がわかる。

「ここらへんはどんな店が並んでいるかとか、どんな奴らが歩いてるかとか、路地裏にはどのぐらいゴミが落ちてるかとか」

「そういう気にも止めないような情報から、魔女が近くにいるかどうかはわかったりする。」

「一口に治安が悪いと言っても魔女による治安の悪さと素の治安の悪さは違うんだ。そこらへんを見極められねえと、魔法少女としては半人前だろうな。」

「ちようどコロツケを全て食べ終えたころ、魔女の魔力を感知した。」

場所はおそらく目の前の大きなショツピングモール

全体から魔力を感じる以上、余程の大物だつて事がわかる。

「ヒヒツ、こりゃあ随分ツイてるんじゃないの？」

コロツケの包み紙をクシャリと潰すと親指で弾いて前に飛ばす。

それと同時に走つてショツピングモールの自動ドアを開け、結界に巻き込まれると同時に身体は宙を舞つた。

目の前にはさつきとばした包み紙が同じようにふわふわと舞っている。

くるくると縦回転で落ちていきながら頭の中をカチリと戦闘に切り替えると、一度着ていた服は魔力の粒へと変わり炎へと変換される。

包み紙を燃やしながらその炎は身体へと纏わりついていき、赤いチャイナドレスのような魔法少女衣装へと変貌する。

相棒であるいつもの槍を生成して着地をキレイに決めると、あたりにいる使い魔を蹴散らしながら禍々しい魔力の方へと駆けていった。

☆☆☆☆

お、ついに杏子のヤツが来たか。つたく、遅すぎるんだよ

あらかた使い魔を自衛隊基地から奪つてきた89式5.56mm小銃で片付けてい

た3号。

もちろんそのままでも使い魔や魔女は攻撃できるが、彼女のは暁美印の改造済みだ。必要最低限の魔力を流すだけで通常の約50倍もの威力を叩き出す魔法弾を打ち出す特別製。

弾数は魔力が尽きるまで。リロードの必要はない。

接近戦の時は内部に折りたたまれて収納されている銃剣が飛び出す。魔力でエンチャントされているので折れないし大体なんでも斬れ、さらに追加で魔力を流すことにより形状変化可能。

そんなバケモノ突撃銃で視界に入る全ての使い魔を一撃で粉碎していた。

いくらグリーンフィードのストックが前の時間軸からの引き継ぎのおかげでたくさんあると言っても、流石にずっと同じ作業を繰り返していると飽きてくる。

そこに待ち望んでいた佐倉杏子の登場だ。

今、3号にはあまりの精神的疲労で杏子の事が女神様に見える。アンタ達の女神様は別人だろ。

魔力反応を見るに、どうやら今まで一部の使い魔を誘導して作っていたモンスターハウスへと向かってくれているようだ。

その数は一般的な魔女結界内部にいる使い魔全て集約してもまだ足りないほど。い

くら杏子でも多すぎて苦戦するハズの数だ。

さっさと合流して、共闘して、ゆまを回収して、ワルブルの情報教えて、グリーンフシードでも報酬に出して協定を結んで、あとは帰って風呂に入る！

そのための、最期のひと踏ん張りだ。いっちょ頑張りますか。
3号は杏子の魔力反応へ向かって走っていった。

☆☆☆☆

「チツ……たくう………」

使い魔を屠りながら愚痴をこぼす佐倉杏子

「いくら……ッ」

槍の一振りで見の前の軍勢に扇形の穴が生まれる。

「なんでも……ッ!」

後ろから迫ってきた使い魔を魔力結界の盾でせき止める。

「多すぎじゃねえかあッ!」

体制を整えるとすぐに結界を解除し、雪崩込んできた使い魔をたたつ斬る。

それでも見渡す限り使い魔使い魔使い魔使い魔

数えるのも億劫になるほどに群がり蠢く使い魔の大群

幸い、一匹一匹は大した事が無いのだがどうにも数が多すぎて突破する事も全ての攻撃をガードする事も出来ない。

そして大部屋の真ん中ほどに誘導されたせいで撤退もままならない。

このままではイタズラに体力を消費していつてギリ貧になる。

そんな最悪の想像が頭に浮かび、冷や汗が垂れる。

「チツ……こんなところで死ぬのなんてゴメンだねー！」

使い魔はイバラの塊みたいなやつが多い。

幸い、毒などは無いのだがチリのようなダメージも積もれば再起不能になる。

どうにかして撤退の道を作らなくては……

頭の中で何か良い案は無いか考えながら目の前の使い魔を斬る。

そのとき、ゾクリと嫌な感覚が全身に走る。

戦闘に特化した魔法少女としての機関、生存に特化した人間としての機関、そのどちら

らもが警鐘をガンガン打ち鳴らす。

咄嗟に頭だけでもその方向に向けると、すぐ目の前で新種の使い魔が今にもその鋭い

顎門アギトで首を噛みちぎらんと構えている所だった。

もう既に槍は振り抜いてしまっている。ここから強引に引いたところでコイツの牙

が首に届く方が早い。

(まっずー！)

頭の中で悪態をつくも、もう遅い。新種の使い魔はその首…そして首元で輝く真紅のソウルジエムに向かってその牙を振り下ろし……

ズダンッ！

たった一つの轟音と共に使い魔に大穴がその牙ごと大穴を開けられ、ぐちゃりと汚い床のシミへと成り果てた。

驚きながらも既に振り抜いていた槍で前方にいた使い魔を薙ぎ払い即席の空白地帯を作り出すとすぐに音のした方を伺う。

それはこの大部屋にいくつか立っている用途不明の柱のような物の上にいた。

身の丈程あるスナイパーライフルを構えている黒髪の魔法少女

彼女は左腕の小型ラウンドシールドにそのスナイパーライフルをしまうと中から小型の重火器を二丁取り出すと空中へと身を躍らせた。

「なんだあ…？アイト 『ドゴオンドゴバゴドツカーン』

しかしその眩きは次々と巻き起こる轟音によって遮られた。

視線を周囲に走らせると至るところの使い魔が複数まとめて吹っ飛ばされている。

どうやら、あの銃身が太い拳銃のような火器はグレネードランチャーのようだ。

しかし、その弾速は先程のスナイパーライフルと遜色なく、また威力も申し分ない。

使い魔の軍勢を全滅させる程では無いが、跳躍から着地までのたった数秒の間に杏子の周り十数メートルの使い魔は綺麗サツパリ消えてしまった。

黒髪をバサリとひるがえし杏子の隣に着地した彼女は武器を変えながら提案する。

「苦戦してるようね。一時共闘と行きましよう？」

「ああん？誰だか知らねえが先に見つけた以上、獲物はアタシのぞで」

競争ならまだしも、魔法少女が共闘とか笑わせやがる。

確かにちよつとヤバかったのは事実だが魔女から手に入るグリーンフィードが一つだけな以上、アタシは譲るつもりはない。

キツと睨みつける杏子。

それに対し、アサルトライフルに装備を変えた黒髪の魔法少女は表情を変えずに懐からグリーンフィードを取り出すと次の瞬間には杏子のソウルジェムを浄化していた。

まるで反応出来なかった。だが、何が起こったかわからない訳ではない。

純粹な速さの違いだ。

確かに杏子には反応出来ない速度だったが、魔法少女特有の動体視力はキツチリと彼女の手がソウルジェムを杏子の首から取り外す過程を一瞬の空白も無く見届けていた。

「全く……流石に穢れを溜め込みすぎよ。ハイ、コレは前払い。」

依頼内容はこの魔女の討伐までの共闘関係、

報酬はこの結界のグリーンフシードとこれからの話。

アナタにとつて、悪い話じゃあ無いと思うけど？」

ストックはまだあるから。

そう懐から10を越える数のグリーンフシードを見せる黒髪の魔法少女。

あまりのグリーンフシードの多さに思わず絶句してしまう杏子。

昨今の魔法不足の状況下でこのグリーンフシードの量、そして先程の戦闘力、杏子は目の前の彼女こそがこの風見野を縄張りに行っている魔法少女だと理解した。

そして、少なくとも自分よりも力を持っている強者だということも。

「…アンタこの街の魔法少女なんだよな？ それにしては余所者のアタシに随分と大盤振る舞いじゃあないの」

だからこそ、そう問わずにはいられない。何故、ここまでするのか？

漂わせている雰囲気からどう考えても『正義の味方』救いようのない大馬鹿野郎ではないだろうが、聞かずにはい

いられなかった。

「別に、お人好しだとかそういうんじゃないわよ。

私はアナタの戦いを見て高い戦闘力を評価した。

純粹に欲しいと思った。

だからこそ、こうして協力を依頼した。

そして、正当な働きには正当な報酬を。当然でしょ？」

コテンと無表情のまま首をかしげるこの街の魔法少女
当たり前前の事を何言ってるんだろう？といった顔だ。

「へえ……そうかい。」

コイツは良い。

実力、常識が揃っていてマトモな思考回路をしている。

そして、おそらく現実を見据えている。

浮かれて周りが見えなくなっている『ヒーロー気取り』の奴とは大違いだ。

コイツは確実に生き残る。

雇用主として信頼に足る人物だ。

「まあ返事は後でもいいけど、とりあえずコイツら片付けちゃいましょう？」

見るとさつきまで遠くにいたハズの使い魔の軍勢が周囲を囲っていた。思ったよりも敵の動きが速い。

咄嗟に黒髪の魔法少女と背中を合わせる。

「そうだな、だがその前にアンタの名前聞かせちゃくれないか？」

いつまでも「アンタ」呼びじゃあ戦いづらいだろ？」

「暁美ほむら」

「佐倉杏子」

それだけを言うと、二人は同時に駆け出した。

ほむらは慣れた手付きで走りながらアサルトライフル8.9式5.56mm小銃についた銃剣に魔力を通す。身長の2〜3倍もある大剣へと形状変化させ最前列の使い魔をまとめて斬り払う。

そのまま目の前の使い魔をたたつ斬りながらある程度進むと真上へ跳躍

使い魔の視線がほむらを追って上へと向くと、それをあざ笑うかのように足元で爆発によって飛び散る複数の破片による殺戮の嵐が巻き起こる。

空中で銃剣を元に戻したほむらはそのままの体制で突撃8.9式5.56mm小銃銃をフルオートでぶつ放す。

勿論フルオートでぶつそんな事したらほとんど当たらず弾と時間のムダでしかないのだが

分間約700発程度の数をばら撒かれた魔力弾は全て寸分変わらず使い魔達の弱点を貫き一発で絶命させる。

ただでさえ空中で足場のない不安定な状態だというのに撃てば撃つほどバタバタと敵が倒れていく様は戦闘ヘリに搭載されているバルカン砲の如き威力だった。

明らかにスペックでは届きようがないはずなのだが、全弾命中とかいう人外じみた射撃精度と、リロード不要という改造が揃うとこんなにも驚異となるなんて、もはや笑う

しかないだろう。

杏子の方も魔力を回復したおかげ先程よりかなり速いペースで使い魔を殺戮して
る。

オマケにたまにほむらの援護射撃によつて背後の敵が消えている事もあり、安定して
戦う事が出来ていた。

しかし、それでも数々の差は圧倒的であり、何度か攻撃に当たりそうになる。

「クソツ………アイツ思い出すから使いたくなくなつたが、こりやあ言つてる場合じゃ
あ無いな。」

ほむらが向こうであんなに頑張っているんだ。流石に本気を出さないとマズイ。

眩きと共に槍に流し込んでいる魔力の流れを少し変える。

パキン、と音がして勢いよく槍の柄が別れて多節棍へと早変わり

更に槍自体の長さもどんどん長くなり攻撃範囲が広がっていく。

もはや真紅の龍とでもいうような姿になった多節棍はまるで鞭のように広範囲をな
ぎ払い破壊していく。

ほむらに負けずとも劣らない鬼神の如き強さはあつという間に使い魔の軍勢を消し
飛ばしていく。

数分後、あれだけいた筈の使い魔は一匹残さず駆逐され二人の魔法少女のみが残っていた。

流石はBlastゴリラ共。

雑魚殲滅能力はピカイチである。

杏子もほむらも、特に何も言わなかった。新たに部屋の中央に出来た結界の扉を見ると確認するようにならずきあい、二人で扉をくぐる。

その後の魔女戦は、特に言うことは無かった。

まるで前の部屋にわざと使い魔が集められていたかのように魔女の周りには使い魔の影もなく、杏子がマジア一発「盟神快槍」を打ち込んだだけで終わってしまった。

そのあまりの呆気なさに二人の空気が微妙になってしまったのは言うまでもない。

ほむら編その10 『分体達と契約』

★☆☆☆☆

さて、無事に魔女を倒してシヨツピングモールへに帰ってきたわけだが

「ん、喰うかい？」

杏子が懐から棒付きキャンディを2つ取り出してこちらへ差し出してきた。

この感じだと、さっきの戦闘でかなり信頼度を稼げたみたいだな。

「あら、ありがとう」

差し出されたのはリンゴ味とコーラ味。ここはコーラ味を選ぶ

包み紙を外し口に入れてガリツゴリツと噛み砕くと、安っぽい人工甘味料と香料で作られた駄菓子でよく使われるコーラ味。不思議と懐かしいあの味が口の中に広がっていく。

うん。飴はどうにもチマチマ舐めるより噛み砕いた方がうまい。

「おいおい、せめて味わって食えよ」

「食べ方ぐらい、好きにさせなさい。私はわりとせつかちななのよ。」

それに、球体は案外完全に噛み砕くのは難しいんだぞ？

勿論魔法少女の力ならあつという間に粉々に噛み砕けるけど、流石にそれは風情が無い。
い。

こういう時はわざと力を入れず一般人レベルの方が楽しめたりするんだよな。

ちなみに本体がこういう棒付きキャンディを啜えたら端から煙が出る。

ものすごくレロレロしてるから煙が出るんだとか

某白髪天パの侍がやってる国語教師と同じ原理らしい。しらんがな。

残ったリング味の飴を啜えた杏子は数回口の中で回転させると魔法で端に火を付ける。お前もか。

「タバコに憧れてるなら、本物使えばいいじゃない」

「うっせえな……一回吸ったけど、あんなもんとてもじやねえが人が吸うモンじゃねえ」

顔そむけて赤面してるわ。別に吸えないなんて恥ずかしい事じゃないだろうに…

「で？これからの話ってのは？風見野の魔法少女サン？」

「…アナタ戦闘中はちゃんと『ほむら』って呼んでたわよね？」

「雰囲気作りは大事だろうが」

だとしたら、その棒付きキャンディ……あ、あ、しゃらくせえ!!いちいち棒付きキャンディなんて名前使つてるとむず痒くなるわ。こんなんチュッパチャップスで良いだ

ろ！つたく：

んで、そのチュツパチャップスを啜えてタバコのマネするのも雰囲気作りだったのか？

まあ、見滝原来た時は展望台に登ってわざわざ双眼鏡作って見渡すぐらいだからな……わりと手順を踏むというかロマンチストというか何というか……

「はあ……じゃあ私の家にでも来る？少なくともシリアスな雰囲気はバツチりだと思
うわよ」

「逆にシリアスな家ってどんな所に住んでるんだよ……？」

「まあ、色々と訳ありでね」

と、まあなんだかんだ締まらない。

これじゃあまるでグダグダとまるで同級生とダベリながらの下校みたいじゃあないか。

いや、あながち間違ってもいないな

まあどつちも学校に通ってないし、これからも通う予定も通わせる予定もないけど

ああ……でも『暁美ほむら』は学校に通うか

無人のショッピングモール内を談笑しながら進む二人。出口を目指して角を曲がった先には

「……」

血溜まりの中に浮かぶバラバラの死体と、その前に座り込む少女がいた。

おっと、今回のもう一人のターゲット「千歳ゆま」だな

どうやら、あの淫獣インキュベーターは結界崩壊の際にちょうど良い場所に出してくれたみたいだ。

特にこちらからは指示していなかったんだが……こういう時は有能なんだよな。ソレ以外が壊滅的だけど

「……おいガキ」

いつもどおり、杏子が声をかけに行った。

この状態で杏子そのままスルーする事象は今の所発見されていない。いわば確定イベントみたいな感じだな。

まあなんやかんやあったが、ここまでくればもう大丈夫。あとは勝手に杏子が拾ってくれるだろ。

「災難だったね

でも、現実なんてこんなもんさ」

というか下手に干渉すると杏子がへソ曲げて拾わなかったりした時にリカバリーが出来ないだろ。

勿論本体なら「短縮ポイントが見つかるとか言って色々試すんだろうが、あいく私はそのままでやるつもりはない。

「震えたって泣いたって死んだ両親は帰ってこないよ。

生き残った幸運に感謝するんだね」

「……」

「フン……いくぞ、ほむら」

「ふうん……」

「んだよ、その眼は。こんなヤツ、この世界じゃ珍しくないだろ」

「別に、アナタがいいんなら、それでいいわよ。」

返事を返さず血溜まりの前で固まったままのゆま

結局痺れを切らして杏子は無視して先に行ってしまった

一見、非情にも思えるけど、その実さっきのゆまの表情がバツチリ脳内に残ってたり既に死んでる妹と重ねちゃったりしてたりする。

杏子のこういう所、私はかなり好きだ。もしかしたら“私”が“3号(仮)”として生まれたのは杏子と最初に接触する「暁美ほむら」だからなのかもしれないな。

まあ運命なんざ行動次第でどうとでもなっちまうもんだから宛にならないんだが
 ……

さて、そろそろゆまから数十メートル程離れたわけだが、だんだん杏子の顔が曇ってきた。

「チツ……………スマンほむら。忘れもん取ってくる。」

結局ゆまの所まで戻って連れてきた杏子

ホント、この場面だとチョロいね

「…へえ」

「うるせえ、そんな目で見るな」

「別に？ 女兒誘拐犯として通報してやろうかと思っただけよ」

「とりあえず飯食わせるだけだ。腹膨れりゃ、後は大抵一人でなんとかしていけるだろ」

☆☆☆☆

「あぐは、ふもぐもぐ、こっくんもぎゆもぎゆ」

さっきの魔女に両親殺されたやつだが、仕方ないからハンバーガー奢ってやってる。

特に金も持ってねーみたいだし、あんなにデカイ腹の音鳴らされたら無視出来ない。

しっかしよく食べるこって、全く。

普段ならこんだけ気持ちよく食べてくれると奢りがあるってもんなんだが

はあ…アタシもまだまだ甘いな

「いいか、それ食ったらどっか行けよ」

ほむらのやつにも無理言っただけ待っててもらってるわけだし、魔女の犠牲になったヤツなんて腐る程いるんだ。

コイツだけに肩入れするなんてバカバカしい。

そういうのはどうしようもない馬鹿のやることだって、つい最近も言ったばかりなのにな

「あと、お前はもうちよつと遠慮しろよ!? 何でアタシがほむらの分まで奢らなきゃなんねーんだ! 正当な報酬云々は一体何処行つたんだ!？」

コイツを挟んだベンチの反対側には一人で約2人前に相当する量のハンバーガーやらポテトやらチキンナゲットやらを平らげているほむらがいる。

「うるさいわね…今日はお昼ごはんまだだったのよ。魔女狩り後ぐらいお腹いっぱい食べさせなさいよ。」

「じゃあ自分で払えよ…」

「それはそれ。コレはコレ」

そういつて新たなバーガーにかぶりつく。澄ました顔して一口がデカイ。

「うぐ」

ほむらのヤツを一回ぶん殴ってやろうかと考えてると拾ったコイツが喉に詰まらせて苦しみました。

ああもう、そんなに急いで食べるからだろうが……

「はい、飲み物」

「んぐんぐんぐ……つぶはあ」

ほむらがどっかからお茶のペットボトルを取り出して渡した。

ごくごくと詰まった食べ物をお茶で流し込むコイツを見てるとある事に気づく。

ハッキリ言うとハンバーガーにはコーラだ。

だからいつもどおりコーラを買ったんだが、コイツが炭酸飲めるかわからない以上お茶の方が無難だった。

こりゃあ、この缶コーラはアタシが飲むしかないな。

「お前がつつきすぎだろ、ちゃんと飯食ってるのかよ」

「ふへ……」

だいたい落ち着いたと思うんだが、まだちゃんと話せる状態じゃあないらしい。

さっさと話すこと話して、どっか行って欲しい。

「……体型からして典型的な栄養失調児ね。」

ペロりと食べ終えたほむらがコイツの腕やら腹やらを観察しながらそう言う。

栄養失調……だから、モモの姿がちらついていたのか。

似てる……と言えば確かに似てるかもな

「そして、コレ……」

ほむらがコイツの髪をかきあげると、そこには丸い火傷の跡が残っていた。おそらく、タバコを押し付けた跡だ。

「……親、か」

「でしようね」

気がつくと、さつきまで止まらないで喰い続けてたコイツの手が止まっている。

身体もカタカタ震えて目も見開かれて顔面蒼白だ。

あく……どうしよ、ほむら。

だが、ほむらは目を閉じてゆっくり首を横に降る。

クソツ……責任は自分でとれってか？

ああもう、面倒くせえな…

「、ハア……。おまえの両親を殺したのは、魔女っていう化けモンさ。」

「まじよ……？」

「まあ、簡単に言えば人間を食べちゃう悪いやつらって事ね」

アタシの端的な説明にほむらがガキにもわかりやすいように補足してくれる。

さつきアタシに押し付けたコイツがこんな風に口出ししてくるとは思わなかった。

んだよ、手伝ってくれるんじゃないか。

テレパシーでそう送ると《貸しよ》と帰ってきた。

クソ

「それで、アタシ達はそれと戦う魔法少女ってやつ」

「……………」

コイツの目が少し輝きを取り戻す。やっぱし、ガキだな。

悪者に立ち向かうヒーローなんかにめっぼう弱い。

とんでもなくひねくれてるやつじゃなければ大抵のガキはヒーローに憧れてるもんだ。

「まるでマンガみたいだろ？」

でも、マンガみたいに愛と勇気に溢れてるわけでも

救いがあるわけでもない。」

「おまけに最近では魔女も減ってきて、明日を生きれるかどうか分からない状態。

酷いところでは魔法少女同士で争う始末」

「それで、魔女に殺されて居なくなっちゃまった家族も戻ってきやしない。

ま、お前にとつちやありがたいかもしれないがな。」

ふつ…とコイツの瞳からまた光が消えた。

しくつたな…親の話題はまだ駄目だったか。

「…だから、食い物だつてこれからはお前一人で「…ゆま」

「あん？」

『『お前』じゃなくて、『ゆま』』

このガキ…いきなり遮つてきてなんだ？名前で呼べつてか？

つたく…名前なんて、知るだけ苦しいだけなのによ。

どうせ死ぬんなら何処どこ其処そこの某なにがしかなんて知らねえ方が500倍マシだ。

「ふうん……本名、『千歳ゆま』風見野市立第2小学校所属5年3組…ね」

隣から聞こえた呟きにゆまが驚いてほむらの方を見る。

あたりまえだ。アタシだつて驚いた。

というかどつから持つてきたんだよそのノートパソコン（空中投影持ち運び型、2号

と同じモノ）

「おい、てめえなんでそんな事知ってるんだ？」

「児童相談所のデータベースにハッキングしたのよ。そうすれば一発。」

「自慢げにパソコンの画面を見せてくるが、それ犯罪だからな？別にアタシが言えるよ
うな事じゃあないけど。」

「すごい、そんな事もわかるんだ。」

「食べ終わったコイツ……ゆまがベンチから立ち上がってクルリと回ってアタシらと
向かい合う。」

「ねえ、おねえちゃん達は正義の味方なの？」

「は？！そんないいモンじゃねーよ」

「まあ、そうね。ロクでもない存在よ。私達は」

「冗談はよしてくれ。」

「だが、ゆまのやつは聞く素振りを見せない。」

「じゃあ、わたしもたたかえるかな」

「はあ？」

「思わず呆れてしまう。何言ってるんだコイツ

さつきから冷や汗が止まらねえ

「わたしも魔法少女になって魔女と戦いたい！」

「だからガキはキライだ。……ちよつとキツク言うか

「くだらない」と言ってるんじゃないよ……！」

「だってパパとママも死んじやったもん！

わたしもうどこにも行くところないもん!!」

だが、ゆまは間髪入れずに反論してきた。

心の内側を吐き出すようなその主張には、ゆまの必死な感情が乗っている。

「ねえ……どうしたら魔法少女になれるの!!

私なんだってやるよ!」

「ん?今何でもするって「ほむらは黙っててくれ」……すまないわね」

ちやちやを入れてきたほむらに槍を突きつけて黙らせると、アタシは立ち上がる。こ

んなやつに付き合ってらんねえ

「はあ……甘ったれるな

文字通り命懸けなんだよ。」

そうだ、もう戻れやしないんだ。

こんな他人を蹴落として安全を確保するような世界じゃ、命なんざあつという間に消し飛ぶ。

「同じ命を懸けるなら

まっすぐ生きること懸けな」

まだ、お前にはそれが出来るだろ。

アタシ達魔法少女なんてのはお手本にしちやいけないんだ。

そのまま、背を向けてどっかに行つてくれ。

うぐ……とぐずる声が後ろで聞こえる。

……知らん知らん！アタシはコイツに教えてやった。間違つた選択してもコイツの責任なんだ。アタシは関係ねえよ

「ああ……その事なんだけれどね」

ああ？なんかほむらが申し訳無さそうに言い出した。

「何だ？」

《やあ！僕の名前はキュウベえ。千歳ゆま、キミにはその二人と同じように魔法少女の素質があるよ》

「……うん、？……わあ！ぬいぐるみが喋ってる!!」

聞こえてきた神経に触る声を聞いて振り返ると、キュウベえの野郎がベンチの上に乗つてゆまに話しかけていた。

「……ごめんなさい、もう見つかつてしまったわ。」

「バカやろつ……テメエツ!!」

突然出てきたキュウベえに再び槍を取り出して突きつける。

いつもより気持ち長めの槍だ。ちょうど刃先が瞳にギリギリで突き刺さっている。

「オイ、ガキに余計な事吹き込むんじやあねえよ」

《やれやれ、杏子。キミは最近魔女の数が減ったからって気が立っているんじゃないかい？キミらしくない》

ああ、確かにアタシらしくないだろうな。他人ヒトの為にナニカするなんざ、昨日のアタシに言えば笑われるだろう。

だがアタシは引くつもりなんか無いね。

「うるせえ、今すぐその汚えクチ塞がねえとたたつ斬るッ」

《まったたく……そんな事しても意味なんて無いのに、どうしてキミたちはこうボクを毛嫌にするんだい？》

こんな最悪な場面でコイツが出てくるなんて、今日は厄日に違いねえ。

するとほむらがアタシの肩に手を乗せて首を横にふる。

「杏子、こうなつてしまった以上、インk y……ん、ん、っ」

…キユウベえはゆまが魔法少女になるまで付き纏うわ。それこそ、地の底まで。アナタも感じるでしょう？ゆまの中の強大な魔力を

キユウベえがこんな子を逃すはずが無い」

ああ？だつたらほむらは諦めるつてののかよ!?

「うぜえッ！だつたら、コイツをこの場で轢き殺すだけだろうが！」

《だから意味が無い、と言っているだろう？この個体が消えるだけさ。この風見野周辺に新しいボクが配属されるだけだよ》

「ああん!?何わけわかんねえ事……」

「いえ、キュウベえが言っているのは本当のことよ。

キュウベえは世界中に複数の個体が存在していて相互に情報を共有している…

非情に腹立たしいことだけれども、コイツから逃げるのは不可能なのよ」

はあ?なんだ、そのチート生物…

「テメエら……キュウベえって何なんだよ!!」

《やれやれ、あんまり気乗りしないけどキミたちはエントロP」流星にそれはゆまには早すぎるわ。今日のところはさっさと帰りなさい」

ブスッ

《ん?》

「え?」

「はあ……?」

キュウベえの目が赤一色から急激に薄まり真っ白になっていく。

しばらくフラフラと歩いたキュウベえだが、ピクリと身体を震えさせたのを最期にそのまま動かなくなった。

ゆまがツンツンと指でつついてみたが、反応がない。

「まじかよ……コイツ、刺しやがった。」

何のためらいもなく……注射器をさしやがった」

「わあくキュウベえがぬいぐるみになったあ！おもしろい!!」

きやつきやとゆまが喜んでいるが、そんな事言ってる場合じゃねえだろ、コレは。

コイツ、自分で無駄だとか言った後に殺しやがったぞ!?

「ん？別に殺してないわよ。ちよつと眠ってもらうただけ。」

まあ、ちよつち細工はさせてもらうけどね」

アタシの視線から心の中でも読んだかのように答えたほむらは、また虚空からノーパソを取り出す。

しかし、さつき使っていたものとは異なり、先端にUSB端子がついているコードに繋がっていた。

なんだ……？何かとてつもなく嫌な予感がする。

具体的にはそのノーパソから何故か禍々しい魔力を感じる。

だから、アタシは近くにいたゆまの側へと移動する。何が起こってもなんとかできるように。

そんな謎の機械を手にしやがみこんだほむらは、そのUSB端子をキュウベえのケツ

にブツ刺した。

……ケツにブツ刺した

「……」

絶句だ。

なんも言葉が出ねえ。

咄嗟にゆまの目を塞ぐことが出来たのは奇跡だったとしか言えないだろう。

ケツにUSBをブツ刺されたキュウベえはビクツと跳ねた後、力を完全に抜いた。

瞳はなぜか真っ黒になり、そこに無数の白い文字がどんどんと表示されていく。

ほむらがノーパソで何かを打ち込む度に増えていく文字から考えるに、キュウベえをハッキングしている…のか？

そんなワケのわからない事になっているキュウベえだが、ほむらの方もほむらで負けず劣らず訳のわからない事になっている。

ちよつと目を離れたスキにさっきのノーパソが変形してキーボードが3つ……いや、さらに足元にも3つ増え、ディスプレイが8つに増えた。

どこにそんな質量が収納されていたのかわからないが椅子まで完備されており、ほむ

らは靴を脱いで足でもキーボードを叩いている。

汚い、という事は無い。

キーボードも空中投影型なのだから。

確か、去年の冬頃発売された画期的な新製品だとかなんだとか言つて電気屋には発売日の深夜からとんでもねえ行列が出来たとかなんだとか。

ともかく、ほむらは二本の腕と二本の足で3つのキーボードを叩いているのだが、残る2つのディスプレイにも絶えず何かが入力されていた。

これは何処で操作しているのか……と観察しているとその2つのディスプレイ上を絶えず眼球が動いている事に気づく。

目の動きで入力しているらしい。

化け物か？

もう、ワケがわからねえ。

なんだ・・・なんだこの光景は……

アタシは悪夢でもみているのか……？

「あつ……くつ……つだあ駄目ね。強引にシャットアウトされた」

しばらくほむらはその人外じみた作業で奮闘していたようだが、キュウベえの方が一枚上手だったようだ。

大量の文字列が表示されていたディスプレイとキュウベエの瞳はまたたく間にまっさらに消去されていく。

そしてパソコンが真っ赤に熱せられると、爆発してしまった。修理しても二度と使えないだろう。

結局、何がなんだかわからないアタシはゆまの目を塞ぎながら抱きかかえて爆発に巻き込まれないように逃げる事しか出来なかった。

ため息を吐いたほむらはブチッとUSBを外すとキュウベエの尻尾を掴みグルグルとぶん回した後思いつきり空の彼方へと遠投する。

魔法少女の強肩でキュウベエだったものはキラんと輝いて消えてしまった。

アニメみたいな事って本当に起こるんだな。バイバイキーンってか？

そんな風に現実逃避するぐらいしか出来ない。

「ま、他の個体との情報共有する機関にウイルスを仕込む事は出来たから、しばらくは大丈夫でしょう。」

「ワケがわからねえ」

口から率直な感想が漏れてしまったが、仕方ないだろう。

明らかにアタシが知らない世界だ。

というか、この地球上全ての人類も魔法少女も知らない世界だと思う。

懐から双眼鏡を取り出してキュウベえが飛んでいった方を眺めてるほむらを見ながら、アタシはこれからコイツと活動するのか…と一抹の不安を覚えたのは仕方がないことだろう。

☆☆☆☆☆

「で、ゆまの事だけど、アナタこれからどうするつもり？」
今、アタシ達は銭湯に来ている。

ほむらオススメの場所で、滅多に客が来ないのにキレイに整備されている不思議な雰囲気のお店だ。

魔女狩り後でちよつと汗もかいてたし、ゆまも身体についた返り血は拭いてやったが全身気持ち悪いだろうからな。

脱衣所ではゆまの全身から色んな傷跡が見つかって今更ながらに死んだ親に対して殺意が湧いた。何やってるんだだろうな。一回死んじまったらもう二度と殺せるわけないってのに。

傷跡はほむらが治した。コイツ、別に回復系の願いじゃないらしいけど、やたらと素の魔力での回復うまいんだよな。

ゆまは初めて入る銭湯に大はしやぎで、風呂の中で泳いで遊んでいる。

まあ、他に客はいないし止める理由もないからそのままだ。そのうち疲れて出てくるだろ。

で、アタシとほむらはサウナの中だ。

3畳もないような狭つちい空間にほむらと二人で汗を垂らしている。

アタシは髪をゴムでまとめているが、ほむらはそのままだ。

ただ汗を流すだけなんて何が楽しいんだか、ジジくせえ……と思っていたがやってみると中々にハマってしまった。

水風呂に入った時の身体がキュツと締まる感覚が特に良かったな。

…で、今は二週目なんだが、焼石に水をかけながらほむらが言ったのが、さっきの言葉だったわけだ。

アタシ相手だったから聞き取れたが、その他のヤツにやったら水が蒸発する音で聞こえないと思うぞ？

「どうするつもりって言ったって、魔法少女にさせるわけにはいかねえ。」

まあとりあえず、これだけは譲れねえな

魔法少女になつちまったら全部がパアなんだから。

「だが、アタシと一緒に暮らすのもナシだ。」

ゆまのガキさ加減は短い間だがよくわかった。

魔法少女のアタシと暮らしてたらいずれ魔法少女になりたいって言い出すに決まっ
てやがる。

「だから、一人で生きる方法を教えてやったら、後はサヨナラだ。

それが、ゆまにとつても、アタシにとつても一番いいだろ。」

サウナの中でもゆまがばしやばしやと泳いでる音が聞こえてくる。

どこにあんな元気があるんだか

……いや、動いてないと落ち着かないのかもな。

「そう……」

ほむらは目を閉じて黙り込んでしまった。

いや、顎に手をやったり首を傾げたりしてるから悩んでいる？

それにしても、どうにも頭がぼんやりするような感じがするな…暑さのせいかな？アタ

シは暑さ如きでやられる程脆いやツじやない筈なんだがな。

しばらくすると、ほむらは一つ頷いて目を開けた。

「二人共、私の家に住まない？」

「いや、アタシの話聞いてたか!？」

思わず立ち上がってしまったが、アタシは悪くないだろう。

まさかここまでヒトの話を聞いてなかった奴がいたなんてな。

頭にかけてた手ぬぐいが床に落ちるが、んな事は関係ねえ

今アタシは魔女に向ける睨みと同じモノをほむらに向けているだろう。

だが、ほむらはソレを意に介さずおもむろに軽く握った拳を上げた。

「3食手料理付き

ベット完備

風呂トイレ別

駅まで徒歩5分

家賃タダ」

一つ条件が提示されるたびにその拳に一つずつ指が立っていき、手のひらが開いていく。

提示されたのはかなりの好条件だった。

正直、ホテルに泊まるのも何日もとれる手段じゃねえからこれはかなりありがたい。

そして、完全に開かれた手の中から出てきたのはグリーンフシードだった。

「なにより、このグリーンフシードの心配が無くなるわ。」

向こう一ヶ月は魔女狩りをしなくても生きていける量のストックはあるから」
そう言うのと自然な動作で口元へと持つていき、ちゅつと口づけをする。

何やってるんだコイツ。

ああ……つまりアタシの分まで工面してくれらるって事か？

これが魔女結界で言っていた『正当な報酬』というヤツだろう。

コチラも破格の条件だ。破格すぎる。

この魔女不足の中、グリーンフィードの提供なんてされたら誰だって喜んで契約するだろう。

しかし、最初からずつと抱いていた違和感がある。そこをハッキリさせないと、受けるにしても断るにしても判断がつかない。

いや、そもそもアタシはゆまと別れるつってるじゃねーか。

「ほむらがアタシの力を欲しいってのはわかったよ？

けど、アンタの力なら一人でもやっていける筈だ。そのグリーンフィードだって自分の為に使えば死ぬこた無いだろ。

そんなにまでしてアタシを求める理由がわからねえ。それと、ゆまの事も。

なあ、アンタ何を急いでるんだ？」

思ったよりも、スラスラ言葉が出てきた。

だが、肝心の部分が聞けてない。

アタシはゆまと別れるって言ってるだろうが。なんでその事言えなかったんだ？
これもこのサウナの効果なのか？そういうえばさつきよりも頭がぼうつとするが…
汗が垂れて口に入った。しょっぺえ。

「…………このままでは、あと半年後にワルプルギスの夜がこの日本を襲う」

ふーん…そう

ん？

ハア!?!?

とんでもねえ事を言いだしたぞコイツ

今なんだった？

ワルプルギスの夜？

サウナの中だったつうのに全身が冷えていく感覚がする。

魔法少女じゃなかったら倒れてたかもな。

『ワルプルギスの夜』

流石にアタシでも聞いたことがある

全てを破壊しゼロへと戻す舞台装置

歴史の最終章を司る存在

物語の終焉を齎す存在

悠久の歴史の中で幾度も魔法少女が徒党を組んで挑んだが、全て打ち負かされた伝説の魔女

通つた後にはぺんぺん草も生えないどころか、再び文明が築かれるまで数年から数十年、はたまた数百年かかっても再生されなかった場所もあると言われている災厄の王かつての師匠がすこし興奮しながらも語っていた伽話のような本当の話だ

「オイ、そんなの初耳だぞ。んでそれを先に言わねえんだ!!」

そんな存在が日本を襲うなんて、逃げ場がねえじゃんか

一人や二人でとてもじゃないが敵う相手とは思えない。

思わずほむらの肩を掴んで前後に揺さぶっていた。

がつくんがつくんほむらの頭と共に髪も揺れてめっちゃ目に入ってくる。

湿ってるから割と纏まって痛い。が、そんな場合じゃないだろ。

「聞かれなかったもの」

そう言うとはむらはアタシの両手首を掴んで力ずくで肩から外した。勿論アタシは抵抗したが、全く歯が立たない。

コイツ……なんつう馬鹿力持ってた。自慢じゃねえがアタシだってそれなりに力には自身があるんだが……

完全に頭に血が登ったアタシは思いつきり膝を叩きつけるが、まるでわかっていたかのように間に足を差し込まれて膝蹴りそのものが防がれる。

そして壁に押し付けられる形で拘束された。すぐ目の前にほむらの顔が迫る。

ただでさえクソ暑いサウナだ。

突然動いたせいでお互い荒かった息を更に荒げてる。心臓がいつも以上に仕事して酸素を運ぼうと全身に血が駆け巡るのがわかる。

ほむらの吐息が直接かかって更に熱い^{あち}。

サウナ室は最低限のスペースしか確保されていないから、暴れると自然とそういう形になる。

だから、こんなにも全身が茹だったように熱いのはサウナの熱と、ほむらの熱と、何も出来ずに拘束された屈辱と怒りで震えているからだ。そうに決まってる。そうであってくれ。

しばらくそのまま何も言わずに睨み合っていたが、ふつとほむらが手を離してそのままベンチへと戻った。

「落ち着いた？」

そんな事を言つて挑発気味に笑つてやがる。

「ハア!?ん、んな事されて落ち着くも何もねえだろうが!!」

そもそもコイツがアタシの話しを聞いてないような提案をしてくるのが悪いんじゃないか!
ねえか!

だから、ここでアタシが怒つてんのは正当な怒りのはずだ。

まだ顔が熱いままだが、それだつてこの怒りのせいにはすぎない。

ちよつと口がもつれたのだつて、……アレだ。そもそもコイツの突拍子の無い行動に驚いたからにすぎない。

が、そんなアタシの様子をみてほむらはクスクス笑つてやがる。

クツソ……癩に障るやつだ。

なにより、アタシの力じゃどうあがいても勝てない所が心底嫌らしい。

ここで飛びかかってもまたさっきの光景の焼き直しか、それとも今度は床に押し倒されるか、はたまた流石に怒つたほむらに首を掴んで持ち上げられるか……

……ハツ!?こ、コレはあれだぞ?相手がどう動くかのシミュレートだぞ!!

そうだ、どうやったら逃げ出せるかのシミュレートだ。それで、どのシミュレートも失敗してる。

だからアタシはここで反撃しない。たぶんコイツは不意打ち食らつても余裕でカウ

ンターしてくるだろうという確信がある。

まあ、ともかくコイツの話しを聞かない限り進まなそうだ。

アタシはムカつく笑みを浮かべてるほむらの隣に座る。

ちよつと、乱暴にドカツと座ったのはあくまでも納得出来てないという意思表示だ。わざと壁の方に顔そむけて目を合わせないのも納得できてない意思表示だ。

意思表示なんだ。

「まあ、ゆまに關してはアナタに一任するわ。

契約させてワルプルギスとの戦いに備えるもよし、契約させずにキュウベえから守り続けるもよし。

頼まれればキュウベえから守る手伝いだつてやぶさかではないわ」

そういう事なら、別にコイツの家で住むつつうのも……まあ、今の所否定材料は……無
い。

んだよ、ちゃんとアタシの話も聞いてるんじゃないか。

なんでそれを先に言わねえのかな。

そうすれば、こんな無駄な事しなくても……いや、なんか嫌だな。

なんだこの気持ち。知らん知らん。

こんどはほむらがおもむろに立ち上がり、くるりと回ってアタシの前に立つ。

ちよつと前、外でゆまが見せた子供らしいターンとは違った、スタイリツシユなター
ンだ。

無駄のない洗練された無駄な動きと言えるだろう。

だが、回つた際にほむらの髪がアタシの身体に当たつてむず痒い。

しつかし、コイツはアタシとは違つて一つ一つの所作がキレイだな。

そこらへんも妙に癪に障る。

というか、アタシが座つてすぐに立ち上がるとかじつと出来ないのか？

あくまでも自分が上だとしても言いたいのか？

「私の目的はただ一つ

ワルプルギスの夜を打倒する事」

ほむらの声から一種のおちやらかな霧囲気が消える

「その為には沢山の強力な魔法少女の協力が必要

それも、3人や4人なんて数じゃない。

最低でも数十人、欲を言えば百人二百人至つてまだ足りない」

とんでもねえ事を言い出した。

思わずそらしていた顔を元に戻してほむらを見てしまう。

正気なのか？コイツ

そんな数の魔法少女なんて、全国各地を回らないと集められないんじゃないか？
それに魔法少女なんて基本同業他社だ。

そんな数の協力者なんて得られるはずも無いだろうし、そもそもそんな数の魔法少女なんて一種の組織だろ。

「勿論、こんな計画ともいえないようなモノ馬鹿げているわ。

でもアナタは今日一日そんな馬鹿げた事をしてきた私を見ているでしょう？」

それは…まあ、確かに

正直キュウベえハツキングのインパクトが強すぎて他何があつたかほぼ忘れたけど
確かに馬鹿げた事成功させてたな。キュウベえのハツキング。

ほむらは右手を胸にあてる。

「私はワルプルギスの夜を越える。

でも、今の私には力はあっても仲間が足りない。

アナタにはそんな私の最初の仲間になってほしい」

そして、その右手をアタシの目の前に差し出してきた。

ふわふわと周りを魔法陣なり魔術式なりが漂っている。

この手を取った時、アタシはコイツの仲間とやらになるんだろう。

「ダメ……かしら？」

んあああ……その表情は反則だろうが!?

ん？何が反則なんだ？

うるせえ！ともかく、反則だ！

そんな顔されて断れるやつなんてこの世にいるのかよ。

心の中で頭をがしやがしやと掻きむしる。

むしゃくしゃして、頭の中がぐちゃぐちゃになってきて、ついでにサウナの熱で頭の動きもクソになって

あたしは、気がついたらその手をとっていた。

「じゃあ、契約成立……って事でいいのね？」

コイツの笑顔は腹立つが、ぐっと我慢する。

「フン……アタシも死にたくは無いんでね。

しかたねえから協力してやるよ。

あ、ゆまは魔法少女にさせねえからな!？」

正直、仲間……しかも事実上傘下に入ったようなモンだなんて、

普段のアタシが聞いたら卒倒しそうな内容だが、

もはや、なりふり構っていらねえ。

ワルプルギスの夜打倒

これしかアタシ達が生き残る術はねえ。

なんせ、日本中を蹂躪していく化け物つつう話だ。

どこにも逃げ場所なんてない。

だから、アタシはコイツの仲間第一号になってやる。

そうだ。

こうするのが、アタシに一番都合が良いんだ。

客観的に見ても、それは一目瞭然

他の感情なんざ一ミリも入っちゃいない筈だ。

★☆☆☆☆

ところで、サウナから出たらドアの前でゆまが鼻血垂らしてたのは何だったんだろうな？

まああのぼせたんだらうけどさ。アタシらが出てきたらビクって逃げてって……本当
に何だったんだ？

ほむら編その11 『分体達と真理』

☆☆☆☆☆

「はふう……」

見渡す限り誰もいない湯船、その縁に腕をのつけたゆまはぐでぐつと脱力していた。別にのぼせた訳では無い。

ついさっきまで生まれてはじめての銭湯で上がったテンションに身を任せこの広い湯船でバチャバチャと遊んでいたのだ。

さすがに体力と好奇心がイコールで繋がっている小学生とは言え、お疲れモードにもなる。

ぽちゃん……

杏子とほむらも一緒に入っていたのだが、今はサウナの中にいる為ここにはゆま一人だけ。

ゆまもサウナについていこうとしたが、「ガキにやまだ早い」と断られてしまった。実際、日本のサウナは中学生以下は入ることが出来ない施設が多い……のだが、純粹に体力の問題なのでほむらと杏子にとっては何の問題も無い。そして、この銭湯は既にほ

むらの息がかかっている。店員に怒られることも、余計な客が来ることもない。毎日貸し切り状態のようなものである。

縁から手を離れたゆまは身体を仰向けにして、ゆらゆらとお湯の中を漂う。

温かいお湯の中は布団の中にくるまっっているようで、気持ちいい。

そもそも湯船なのだからプール程水深は深くないのだが、ゆまの小さい身体には十分な深さだった。

『ひはっ』

ひ…ひいいたい

たす…け…け…』

ふいに、頭の奥から断末魔が聞こえる

それは数時間前に聞いた母親の最期の声

見上げていた天井の模様が魔女（化け物）に変わり、血の匂いが鼻を刺す

「ツッ！」

慌てて船底に足をつけたゆまは、ブンブン振って幻覚を頭から追い出す。

…で　　な　　ん　　ん　　で

だが、頭の中から魔女（化け物）は出ていってくれない。

大きく息を吸ってお湯の中に潜る。

それは幽霊を恐れて布団の中に籠もるような自らの身を守る防衛行為だ。

なんで お前だけが生き残った!?

しかし、お湯の中でもあの魔女（化け物）は追ってきた。

驚きと恐怖でうっかかり口の中の空気を出してしまおう。

「ふはあっ……はあ……はあ……はあ……」

慌ててお湯から飛び出し、息を整える。

怯えた目であたりを見渡しても、魔女（化け物）はどこにもいない。

あの魔女は杏子とほむらが倒した筈だ。それはゆまも理解している。

だが、過去の幻影は簡単にはゆまを離してくれなかった。

バチンツと自らの頬を叩いて湯船から出る。

「ゆまはキョーコやホムラみたいに強くなかないもん……」

びちゃ、びちゃ、と怯えた目のまま、しかし足取りはしつかりとシャワーの方へと向かう。

シャワーを少し冷たための温度にして熱で火照った顔に直に当たった。

調整がうまく行かなかったようで、想定よりも冷たい水が出たが構わない。

むしろこの冷たさが意識を、思考を、ハッキリさせる。

これで、よかったんだ。

ゆまは生きてる

お母さんもお父さんも死んだ

キョーコとホムラに会えた

これで良いんだ。

自分に言い聞かせる

頭の中で反芻させる。

だが、

それでも死体は消えてくれない。

自分にこびりついた血の匂いが落ちることはない。

ふと目の前にある鏡に気がついた。

湯気で曇って何も見えないが、シャワーで流すと向こう側を映し出す。

現れたのは、千歳ゆまこちらを覗いている小さなみすぼらしい傷跡だらけのいらぬ子。

それが今の自分

否定したい。

そんな事は無い！と声高に宣言したい。

悔しさについ唇を噛みしめる。

しかし、それが現実なのだ。

何も出来ない役立たず

それが、

嫌で、

嫌で、

でも、変える方法もわからなくて。

ゴン

気がついたら、ゆまは鏡を殴っていた。

いや、鏡客観的なの中の自分を殴っていた。

が、非力なゆま拳では傷一つついていない。

鳴った音もとても小さく、耳を澄まさなければ聞こえないほど。

それがまた、何も出来ない今の自分を表しているように感じられ、そんな自分に怒りが湧き上がる。

「うぐ……むぐぐぐぐ……」

放出する場所は見当たらず、涙となって零れ落ちた。

小学生は感情の歯止めが効かない。

一度感情が爆発してしまうと自分ではどうしようも出来ない。

だが、ゆまはこんな事でメソメソ泣いている自分も嫌だった。

再びシャワーを頭から被るゆま

冷たくしすぎた水は熱くなつた身体を冷ますと同時にその涙も洗い流してごまかしてくる。

物理的に頭を冷やしたゆまはふらふらと足を動かしていた。

目指す先はサウナ室

そこに今の自分を護ってくれる人達がいる。

一人だと、どうしても悪いことばかり考えてしまう

誰か、誰か一緒にいてほしい

その一心で、サウナ室の扉の前にまで辿り着いた。

その扉はゆまから見るととても大きく、重厚な雰囲気を漂わせている。

『ガキにやまだ早い』

キョーコの言葉を思い出す。ここから先はゆまには入れない。

でも、これ以上一人ぼつちは寂しい。

だから、せめて二人を近くに感じたくて
しばらくうろうろした後に窓の存在に気づく

身長を考えるとすこし高い位置にあるが、ギリギリ見えない事も無い。

ゆまは背伸びをして窓からサウナ室の中を覗き込んだ。

「——らがアタ——を欲しいっ——よう？」

二人は並んでベンチに座って何か話している。

だが、扉が厚いせいでよく聞こえない

何を話しているのか、気になったゆまは扉の隙間に耳を押し当ててみる

「けど、アンタの力なら一人でもやっていける筈だ。そのグリーンフシードだって自分の為に使えば死ぬこた無いだろ。」

そんなにまでしてアタシを求める理由がわからねえ。それと、ゆまの事も。

なあ、アンタ何を急いでるんだ？」

まだ小さいがちやんと聞こえてきた。

誰かの声というのは孤独を解消するのに一番手っ取り早い手段だ。

ゆまの心が少し軽くなる。

「……このままでは、あと半年後にワルプルギスの夜がこの日本を襲う」

「ふーん……そう……ハア!? オイそんなの初耳だぞ。んでそれを先に言わねえんだ

!!
」

その言葉と共に取り乱す杏子

慌てて隙間から耳を離して窓から覗いてみると、杏子がほむらの肩を掴んでがつくんがつくん揺さぶっている。

それは、少し前まで母親にされていた虐待と似ていて……

次の瞬間ゆまはドアに手をかけていた。

入るなど言われた事なんか関係ない。

今すぐにキョーコを止めないと

ゆまにとつて佐倉杏子とはカッコいい存在だった。

自分に持っていないモノを全て持っていて、悪い怪物をやっつけるカッコいい魔法少女^{ヒール}_{ロウ}

魔法少女なんていいものじゃないと言っているが、テレビの中のヒーローがむやみにその力を自慢する事がないのと同じだと思っている。

出会って数時間しか経っていないが、

既にゆまにとつて佐倉杏子はそういう存在になってしまっていた。

だから、これ以上ゆまの中の『キョーコ』を守るためにはやめさせないといけない。

それはキョーコじゃない。

キョーコはいじわるしない。

キョーコは理由もなく痛い事はしない。

佐倉杏子をキョーコとする為には、その行為は到底見過ごせるものではない。

だが、実際にゆまがサウナの中に乱入する事は無かった。

ゆまがドアを持つ手に力を入れようとしたその時、ほむらが杏子の腕を掴み、そのまま捻り上げる。

その光景に、思わず目を奪われ、奪われた目から鱗が落ちた。

なんてことは無い。ゆまには反撃する力を持っていなかったが、ほむらはその力を持っていた。

ただそれだけの違い。

その違いが、ゆまの生きてきた常識をひっくり返した。

そうだよ

ゆまとホムラは違うもんね……

二人が何か言っているが、その内容は覗いている状態では聞き取れない

そんな事はどうでもよかった。

ほむらは杏子の膝蹴りも足を使って防ぐ。

ただただ、ゆまはそのほむらの『力』に見惚れていた。

しかし次の瞬間、ゆまの顔は驚愕に染まる。

ほむらは杏子を力づくで壁に押し付けて拘束した。互いの吐息がかかるほどの超至近距離で数十秒間の膠着。ほむらが離れた後には杏子が真っ赤な顔で息を荒らげている。

確かに我々は何が起こっていたかを知っている。

本人達も実際に起こった事を正しく認識しているだろう。

だが、その背後から見た場合他人の目にはどのようなように映るのか？

ちよっ……!?!?ホムラ!?!

え、なんで……!?!

ホムラとキョーコってそういう関係だったの!?!

はわわわわ……え、どうすればいいんだろ!?!

コレゆまが邪魔しちやいけないよね

ん……でも、ちよ……ちよっただけなら、見ててもいい……かな……?

答えは『ほむらが杏子にキスしてるようにしか見えない』だ

ゆまとて女の子。

当然人並み程度には恋愛に対する興味もあつたし、学校でそういう事をしてる現場に遭遇した事もある。

しかも、一年ほど前に上級生から告白を受けたこともあった。

ゆま自身は気がついていないが、その低学年相当しかない小さな身体と天真爛漫さは同級生からは『子どももつばい』と毛嫌いされるものの、

一部のコアなファンからは絶大な人気を誇っていた。

(なお、ゆまが返事に困っている間にその上級生は鬼の形相をした他の上級生に連れ去られ、その後その上級生を見た者はいない。)

しかし、興味はありつつもゆまは恋愛についてあまり良い印象を持っていなかった。

『だって、子どもが生まれたらお父さんとお母さんになっちゃうんだよね』
ゆまにとって親という存在は自らの両親しか知らない。

『いつかはゆまも恋をするのかな?』

そう考えても次に出てくる感想が『お母さんになるの嫌だなあ』だったのだ。

だが、この日ゆまはこれまでの自らの誤ちに気がついた。

男×女ノーマルカブでは無い、女×女百合こそが至高

『百合厨千歳ゆま』誕生の瞬間である。

(なお、この時は百合という言葉を知らない)

いつの間にかゆまの中から魔女の幻影は消えていた。

それと同時に母親に怯える事しか出来なかった『千歳ゆま』も同じく消えた。

この世界の真理の一つに辿り着いたゆまの心の中はスツキリと澄み渡っており、未だ小さいが確かに、一つの炎が燃え上がりだした。

なお、興奮すると鼻血を出す体質になったが、代償としては軽い方であろう。

☆☆☆☆

3月11日 午前19:00

既に日は完全に落ちて夜闇に包まれた頃

見滝原と風見野の境近くのとある三叉路に建つアパートにほむら達：もとい3号達は来ていた。

説明するまでもなく、原作でほむらが借りていたアパート

通称ほむホームである。

ぬわああん！疲れたもおおん：（語録順守）

いやな？確かに弱音吐くなんてアタシらしく無いが、今日ばかりは言わせてくれ。

クツツツツ疲れたわ!!ただでさえ魔力コンデンサでの戦闘でギリツツギリまで神経すり減らすのに、いつもと違うタイミングでインキュベーターが来るし、ごまかす為に一

人でハッキングしないとイケなかったし、その後銭湯で杏子と裸の付き合いとか……馬鹿だろ？アホだろ？仕事量がいつもの5倍はあるんだが？

今頃本体は織莉子達とのんびりしてるんだろ？もう殺意しか湧いてこないわ

我が家に帰ってこれた事で脳内ではぐだっぐだに弛緩しきっている3号だが、表情には反映されない。

こういう時は便利な身体だ。

いつも通りのデフォルト顔でポケットから財布を取り出した3号は、中の鍵に魔力を通す。

すると、一般的な黄銅の鍵の溝に魔力が流れ淡い光に包まれる。

その様子を興味深そうに見つめるゆまと隣で買い物袋を重そうに持っている杏子にはほむら^号が何をしているのか見当もつかない。

魔力エンチャをした鍵を鍵穴に入れると、何の変哲もない玄関ドアに淡い光のラインが走っていく。

曲がり、分岐し、一体何を描いているのかわからないが、なにかしらを描いている。

数秒も経つとピタリと光が止まり、なんらかの魔法陣が完成した。

ここまでで既に杏子は深く考える事を諦めている。

3号が鍵をひねると『ガチャリ』と大きな音が直接脳内に響き、

光のラインが一際強く発光したと思ったら

いつの間にか玄関の中に入っていた。

「わあく！すごいすごい!!」

「わっけわかんねえ……こんな作る意味が本当にあるのか？」

「雰囲気作りは大事なんでしょう？」

魔法らしいギミックに興奮するゆま

考える事を放棄した杏子

対照的な二人の反応だが、ぐぎゆるるる……と同時にお腹を鳴らす。

「ま、とりあえずちやっちやとご飯作るからリビングで待つてなさい」

「はーい」

玄関で靴を脱ぎ、扉をあけるとそこには原作で描写されていたあのリビングルームが広がっている。

真つ白の壁に謎の絵が飾られふよふよ浮いており、奇妙な形をした振り子の影がガツコンガツコンと揺れていて、中心部にソファやらテーブルやらが並んでいる謎の空間だ。

しかし、原作と違うのはどこからが壁かわからないこの真つ白な壁にドアがついている事だろうか

そのドアの先にはごく普通のダイニングキッチンが広がっていたり、

こたつが置かれた和室があったりと雰囲気の違いが激しい。

「魔法を使った謎空間なのか一般家庭なのか統一してほしい」とは杏子の談である。

ゆまは「こんなにおつきなベッド初めて！」だそう。お腹が空いてる筈なのに天蓋付きベッドの上でポヨンポヨン跳ねている。

と、まあそんなこんなで二人がほむホームを探検している頃……

『炊飯器スイッチON！ヨシ！！コレ時間を止めといた空間に放置しておいて！』

『了解、つてオイ！7号！野菜はまだなのか！？そっちも一緒に煮込んでおきたいんだが』

『無茶言わないでくださいよ！！ただでさえコッチは魔力使えないつてのに……』

『うるせえ騒ぐな！集中力が切れる！！こちとら魚捌いとるんじや！！テメエらが騒ぐだけで完成品の味が1%損なわれると思いやがれ！』

『口より手を動かせ！つてぎやうああああ！！目が……目がああああああ』

『だから揚げ物する時はよそ見るな……ホラさっさと見せな。魔力使えないと

回復も出来ねえだろ?』

『うう…すまない3号……手間かけさせちまったな』

『やるならせめて部屋出て治療してくれませんか!?ただでさえ狭いキッチンに5人も入ってて包丁振るってるんだから安全性もクソもココには存在しないんですよ!』

複数の曉美ほむら達がドタバタと料理を作っていた。

勿論本体は今頃アメリカ家でダラダラしているし、2号は巴家でママを甘やかしているの
でココにはいない。

ここに住んでいるのは3号の他に、技術班に配属された4，5，6，7号だ。

普段はこのほむホームの魔改造や、まだこの時間軸に存在しない曉美式便利製品を日夜作っている。

魔法が使えない彼女達ではあるが仮にも『曉美ほむら』

かぼちやをいとも容易く一刀両断し、宙に放った魚を包丁の居合で斬り刻み見事な姿造りを仕上げるその姿はまさにチートそのものだ。

ちなみに、上記の会話は全てテレパシーで行っており、彼女ら一人一人の個性がわかるのだが、

現実と同じ姿形をした5人の少女が鬼気迫る顔で一心不乱に料理を作っているのだ。

しかも一人はしょっちゅう瞬間移動を繰り返している。

一般人が見たらSUN値チエックが入る光景かもしれない……

数分後……

「それじゃ、全員集まったし食べるとしましょうか」

「そうね」

「お腹すいたわ」

「杏子とゆまとの出会いを祝して」

「「「「かんばーい」」」」

「……いや、まずその後ろのやつらの事を説明してくれないか!?!」

「」

「」

「当たり前のように同席している正体不明の『暁美ほむら×5』を前にして固まる杏子

とゆまであった。

ほむら編その12 『分体達と因果の渦』

3月11日(金) 12:50

コンコン

ガラッ

「失礼します。早乙女先生はいらっしやいますでしょうか？」

昼休み

それは学生たちが思いっきり羽根を伸ばす天国のような時間

……なのだが、私達教員にとつては残念ながら勤務時間の真つ只中

授業の用意や次の行事の為の準備、保護者へと配るプリントの作成に宿題の丸付け、

その他諸々、etc. ……

膨大な量のやるべきことが積み重なっている以上、のんびりお昼を食べている余裕どころか、休憩する時間なんて毛ほども無いのが現状……

学期末であることも重なって、私『早乙女^{さおとめ}和子^{かずこ}』は喧嘩別れしたかつての男の事なんて考える暇も無くなるほどに忙しかったのだ。

さて、そんな修羅場に身を置いている私に、珍しく来客が来た。

職員室の入り口を見ると、制服に身を包んだ黒髪の美少女が一人、コチラに向かって歩いてきているのが見える。

のだが、その顔に見覚えが無かった。

これは由々しき事態である。

新入生が入って間もない4〜5月ならばまあ、わからんでもない。

だがしかし、今は3月。

平成21年度ももうすぐ終わろうとしているこの時期、たとえ自らが担当している学年以外の生徒だったとしても見覚えはある。

この学校に通っている生徒かどうかぐらいはわかるハズなのだ。

だが、この少女はまったくもって見覚えが無い。

「お久しぶりです。……私の事、覚えていますか？」

目の前まで来た少女は一礼と共に胸に片手を当て、首を少し傾けて問いかけてくる。

その一連の動作はまるで映画かなにかの一場面かのように洗練されており、女である私でも少しドキリとしてしまう。

それと同時に全く答えがわからないので内心は冷や汗ダラダラであり心臓バツクバツクだ。

彼女の第一印象は『2つの意味で心臓に悪い少女』で固定された。

と、そんな事はどうでもいいわね。

この場面でなんにも答えられなかったら流石に気まずい……なんとかしなくてはしかし、必死に脳内検索を試みるも該当する記憶は無し。

「あ、そういうえばこの姿では会ってませんでしたね」

正直「お手上げ〜」といって両手をバンザイしたい気分になってきた所で、目の前の美少女は慌てて懐から赤いメガネを取り出す。

「うっかりしてました……」と言いなながらメガネをかけると、文学少女へと姿を変えた。
(メガネ一つでここまで雰囲気が変わるモノなの……?)

と、少し驚きながらも出されたヒントに従って再度脳内検索を試みた所……
たった一件。既に殆ど記憶の底に投げ捨てられており鮮明な所は何一つ無くなって
いるような、憶えているとすら言えないようなぼんやりとした記憶だが、

たしかに一件。この眼の前の少女と似たような雰囲気的人物に会った記憶が発見された。

本当にこの子なのかどうか確証は無いけれど……コレ以外に手が無い以上、賭けるしかない。

「え〜つと……もしかして、数年前、病院で会っていたかしら?」

私がいっつも参加しているチャリティイベントで訪れた病院

その談話スペースの窓際の席に一人で座って夕日に照らされながら本を読んでいた子。

見た所一人ぼっちだったからと、声をかけたような……

その時の子はおつと根暗な子といったイメージで、今の目の前にいる彼女のような超然とした雰囲気は無かった筈だけれども……

確かに同じ赤いメガネをしていたような気がするような……しないような……

「ええ、そうです。……覚えてて、くれたんですね。」

少女がメガネの奥で瞳を僅かに揺れ動かす。

どうやら、賭けには勝ったようね。

でも、その反応……まるで「憶えている事に驚いた」って感じね……

コレ、素直に忘れちゃったって言っても良かったのかしら？

ま、まあ。憶えてた方が高感度高いだろうし合ってたみたいだからヨシ!!

その後、彼女は数分程度話をして帰っていった。

曰く、彼女は「暁美ほむら」といい、去年のハロウインのイベントで私と話していたらしい。

その時期はちょうど前の彼氏と付き合い始めた頃だ……

どうりで記憶が曖昧なワケね。その頃の思い出は親友の詢子と一緒にお酒の力で一括削除しちゃったんだもの。

暁美さんは心臓の病気で入院していたが、最近ようやく退院出来たらしく

来年度からこの見滝原中学に編入してくるらしい。

暁美さんによると、当時の私はポロッと名前と見滝原中学で教師をやっている事を漏らしていたらしく、挨拶に来たんだとか……

誰とも知らない、たった一回会っただけの私の顔を覚えてるなんて……今どき珍しい律儀な子ね。

きつと暁美さんみたいな子は将来、礼儀正しい大人になって、速攻でいい人を見つけ、結婚して、子供を産んで、幸せな家庭を築くんだろうなあ……

つと、いけないいけない。うっかり心の闇が吹き出たわ。

そういえば、学校の方が忙しくて私は参加出来ないのだけれども、ホワイトデーにも同じようなイベントがあるのよね……

暁美さん、あの様子だとイベントの方にもかなり興味あるみたいだったし、来年度の編入までは暇らしいから誘ってみようかしら？

☆☆☆☆

「コレで百江なぎさと接触出来るようになったわ。」

職員室から帰ってきた暁美さんが例のステルス結界を貼りながら何でも無いように言う。

けれども、聞き耳を立てていた私からすれば訳がわからない。ので、

「ごめんなさい。順序立てて説明してもらえないかしら？」

わからない事はハッキリ「わからない」という。

暁美さんはしよっちゅう説明無しに突拍子も無い事をやるけれど、聞かれたら必ず答える。

それも細かい魔術式等、私が全く理解出来ない部分はある程度省略してわかりやすく説明してくれる。

今朝からずつと暁美さんの規格外すぎる行動に振り回されてきて気づいた、暁美さんと仲良く過ごすコツだ。

「早乙女先生はボランティアで主に孤児院や病院等で子供達に向けたイベントを開催する団体に所属してるの。」

この世界の私も入院している時期に先生に会っていたらしいから、ありがたく利用させてもらったわ。

で、その団体と接触する理由なのだけでも。

明々後日の3/14……つまりホワイトデーに百江なぎさの母親が入院している病院でイベントを開かれる。

このタイミングで早乙女先生と接触していれば、そのイベントに先生の代理として出席する事が出来るわ。

つまり、病院に母親のお見舞いに来た百江なぎさに接触する正当な理由が出来る……という事よ。

そこからは、何回も会いに行つて信頼度を稼いで、単なる『年上の友達』という言葉では説明出来ない間柄になれば……

キュウベえに勧誘される前に魔法少女の事を知れるようになるわ。そうすれば……うん。

多分。きつと。おそらく。」

ほらね？聞けばちゃんと答えてくれるのよ。

それにしても、まさかウチの担任と既に知り合いだったとは……いや、向こうは憶えてなかったみたいだけれども

多分、いつもので一緒に忘れちゃったのね。

「……でも、それって結局運任せじゃないかしら？」

そのなきさちゃんがお見舞いに来てくれないと会えないじゃない。」
「だから、何日も病院に張り込むのよ。」

下見に来たとかなんとか言えば、一応正当な理由になるわ。

一般人の目はコレで誤魔化せばいいしね。」

そういつて暁美さんは手元の機械：光学ステルス迷彩魔術結界の発生装置を真上に放り投げてクルクルと回してはキャッチを繰り返している。

それだけなのだが、何故か一つしかないハズの装置が何個もあるように見える。残像が出来るようなスピードでは無いのに。

暁美さんのわけのわからない技術は置いておいて、実はまだ納得できない部分がある。

「そもそも、なんで病院で彼女に会う必要があるのかしら？」

やってる事は道端で理由をこじつけて話しかけるとそう変わらないわよね。

……つまり、病院じゃないといけない理由がある

そういう事、なのかしら？」

こんな回りくどい事をしなくとも、暁美さんの時間停止を使えば『学校帰りのなきさちゃんのカバンから何かを抜き取って、落とし物として渡す』程度のこじつけは出来るのだ。

少なくとも、今まで曉美さんに説明された情報だけでは、コレを使わない理由が無い。つまり、まだ曉美さんが私に話していない事があるわけで……

それはおそらく私が知ったらショックを受けるような、辛い事なのだろう。だって、曉美さんが隠す理由なんて、それぐらいしか思いつかない。

まだ出会って2日しか経っていないけれども、曉美さんはそういう人だと断言出来る。

ほら、その証拠に曉美さんの表情が僅かに陰っている。

気がついたら教室の前まで来ていた。入り口で立ち止まっていても邪魔なだけなので入って自分の席窓際の一番後ろの席。アニメや漫画等で大体主人公が座っている席だ。に座る。

曉美さんも私の隣の空いている窓枠に腰を掛けた。午前中もこの窓枠に曉美さんは座って授業を見ていた。おそらく放課後ぐらいの時間になるといい感じに夕日が窓から入ってきて最高にカッコいいと思う。

よく観察してみると、少し唇を噛み締めているのがわかる。私の為にここまで悩んでくれているなんて……

窓から入ってくるそよ風で髪がなびくのも合わせて非情に絵になる。なんなんだこの人は……

と、まあそういうのは置いといて。

どうやら暁美さんはしらばっくれるつもりだ。その態度から、相当に重い話なのだろうと予想出来る。

「暁美さん。確かにアナタは優しい。」

多分何も言わないのは私の事を考えての判断なのよね？」

暁美さんが外に向けていた視線をこちらに移す。

それは雲ひとつ無い青空を背負った事によって逆光も合わさりより鋭く感じられる。

「私を氣遣ってくれるのはすごく嬉しい。」

……でも、それって不公平じゃないかしら？

アナタの過去と一緒に背負うって、昨日約束したじゃない。

一緒にワルプルギスを討伐するって約束したじゃない。

今の私は、どんな真実でも、受け止める覚悟は出来ているわ。」

ココロをぶちまける。

思った事。考えた事。感じたこと。決めたこと。

それら全てを覚悟という器に入れて暁美さんにぶつける。

教室の中だけでも、関係無い。

不自然になる動作は全部結界が隠蔽してくれているのだから。

「……………百江なぎさ。彼女は、母親から虐待を受けている。」

数秒か、はたまた数分か。

長い沈黙の後に暁美さんは口を開いた。

★☆☆☆☆

曰く、彼女の母親は元アイドルでテレビにも出るほどの人気だった。

そして、とある浜辺で彼女の父親となる人物と出会い、愛を育んだ上結婚する。

その結果、百江なぎさが生まれた。

『なぎさ』という名前は出会いの場所である波打ち際から命名。

しかし、なぎさを産んだ後に彼女の母親は病気になる芸能界を引退。

次第に彼女の父親は母親を相手にしなくなり、離婚はしていないが一切会うことは無くなってしまった。

さらに、母親はネットにてアンチに苦しまされる。

現役の際は膨大な数のファンによってなんとか気にしないで済んでいたが、引退

により彼女にフアンの声が届く事は無く……

やがて周りの全てが敵に見えるほど精神の擦り減った母親は、全ての原因はなぎさが生まれてきたせいだとし、なぎさに当たり散らすようになる。

だが、なぎさは自分を責めた。

「なぎさが悪いのです。」

「お母さんは何も悪くないのです。」

父親はいつまでも帰ってこない。

母親が大好きなチーズを買っていつても、元の関係に戻るハズも無く、

悪循環を繰り返して……

そこに現れたのがキュウベえ

なぎさに契約を迫るものの、なぎさは悩み……

母親の病気を治す願いをすれば母親は元に戻り、自分を愛してくれると考えると決めて決断する。

しかし、その事を母親に相談したら……

・
・
・

「なぎさはお母さんの子供で、本当に良かったのです…」

「…やめてよ！そんなこと言わないでよ！」

「あたし、あなたを産んでよかったって言わなきゃいけないの？」

「よかったフリをしなきゃいけないの？」

「あなたまで私を責めるの？」

「なぎさは…ただ…ただ…」

…

「あなた、なんでもできるの？」

「なんだってしてくれるの？」

「それなら、私の代わりにみんな殺して

みんなみんな殺してよ」

「わたしのこと笑った奴も

わたしのこと知らない奴も」

「みんな殺して!!」

「病気なんてどうだっていい！」

「もうどうだっていい！」

「そんなことより

「あいつも！あいつも！！」

「あいつらも一緒に殺してよ！！」

「治ったってかわりやしない！！」

「あなたが産まれたから！

あなたが産まれちゃったから！！」

「もうとつくに手遅れなの！！」

「だからこれ以上

私を責めないでよ！！！」

.....

なぎさは、最終的に母親に後悔させる為、なぎさを愛さなかつた事を後悔させる為に『お母さんにとつてこの世で一番おいしいチーズケーキ』をキュウベえに願う。

そのチーズケーキを手に病室に駆け込んだ所……

『夢遊の亡霊』と呼ばれる世の中の悪人を殺して廻っている魔法少女に『娘を虐待している悪人』と判断され、殺害されていた。

★☆☆☆☆

「これが百江なぎさが本来辿る歴史……『百江なぎさは願いを叶えた』

つまり、私達はなぎさに事前に魔法少女の事を教えるわけでは無く、この問題を解決しないといけないの。」

「……え、ええ。うん。なる……ほど……？大体わかったわ。……うん。

覚悟していたんだもの。大丈夫。

……でもね」

「抜き打ちテストの最中に説明される覚悟はしてなかったわ……」

真つ白な答案用紙に涙のシミが広がっていく。

果たしてコレはなぎさの運命の悲惨さに対しての涙なのか

それとも、全く埋めることの出来なかったテストの結果に対しての涙なのか……

だが、まだ試験の時間は残っている。

せめて最初の問題ぐらいいは……

キーンコーンカーンコーン 「はい、試験やめ！後ろの席の人回収してきて〜」

隣の席の人達が一齐に席を立つ中、私の耳には持っていたシャーペン手から転がっていく音しか聞こえなかった。



「…すみませんでした」

六時間目、英語

つまり担任の早乙女先生の担当授業だ。

そして、私の目の前には日本の伝統芸能土下座DOUGESZAを炸裂させている暁美さんがいる。

その姿は土下座時の勢い故に土下座の範疇を超え、見事な三点倒立になっている。

手のひらと額を地面に擦りつけた状態のまま身体はピシッと天高くそびえ立っているのだ。

首の骨とか、どうなっているんだろう？明らかに魔法少女の肉体強化を無駄に使っている。

無駄のない洗練された無駄な肉体強化……

スカートが大変な事になっているが、相変わらずステルス結界で周囲の人には見えていないのでセーフ。

眼福です。ありがとうございます。

これだけでもご飯3杯はいけそうなのに、普通に暁美さんの料理が美味しいのは反則だと思えます。

……実のところ、本当は曉美さんが苦しんでいる姿は見たくないのだけれども、「私にも非があったから」って言っても、どうしてもって曉美さんが譲らないから……仕方なくやってもらっているのだ。

土下座三点倒立

早乙女先生は、昼休みに真面目な話をしていた曉美さんが教室内で土下座三点倒立をやっているなんて知ったらどんな表情をするのだろうか？

私でさえ先生が入ってきた時、状況のシニールさに少し笑ってしまったのだ。先生の腹筋が耐えきれぬか心配になる。

さて、私は曉美さんのパンツを思う存分堪能させて貰っているわけだが、実は授業の方も疎かになってはいない。

しっかりと、左目で曉美さんを見ながら右目で黒板を見てノートに書き写している。先生の自らの失恋談を交えた授業トークも、的確に必要な部分のみを取捨選択してノートにメモしていく。

長年、妄想しながら授業を受けてきた事による授業ノートの半自動化があるからこそ出来る芸当だ。

やろうとすれば、うつらうつらと眠りながら授業ノートをとる事だって可能だろう。

まあ、そんなこんなで真面目に授業を受けず煩惱の真っ只中に居た私は、

情けない事に校庭で巻き起こっている膨大な魔力の暴走に対して、なにも察知する事が出来なかった。

☆☆☆☆

「パス!!」

「まどかちゃん!」

「おっとと……うん! わかった!」

六時間目、私達一年生は今年度で最後の体育、最後のサッカーを楽しんでいる。

正直、最近まで私は運動は得意では無かったのだけれど……

実は私の身体、昨日からナニカがおかしい。

どれだけ走っても疲れないし、夜ふかししちやつたのにいつもの時間には何事もなく起きたし

身体のどこにも不調はない。

そして何より、自分の中にもう一人、ナニかがいるような……いないような……そんな感じがする。

でも、コレは誰かじゃない。……と思う。人ではないナニカ

だから、ちょうどコートの中の半分の位置でボールを受け取った時、

よくわかんないけれど、なんかイケる気がしてしまったのでした。

「えいッ!!」

ボールを上空に蹴り上げる。

ちよつと前まではこんな芸当、出来るはずも無かった。

どうやら昨日から体力だけではなく、何故か技術も進化している。

そして、私は飛んだ。

思いつきり、足に力を込めて、天高く舞い上がったボールを見て、『あそこまで飛ぶぞ!』と心の中で思つて、ジャンプする。

通常、普通の人間が跳び上がれる高さは、良くて数十センチ、鍛えていても5メートル以上は飛べないだろう。

けれど、私の身体は上空にまで打ち上げられたボールのすぐそばまで飛び上がっていた。

ちようど、3階の教室の窓が隣に見える。

あとから考えてみれば大体10メートルぐらい飛んでいた事になる。

そして、蹴り上げたボールに追いつくとどこからか薄ピンク色の羽根が身体から舞い上がる。

よくわからないけど、ココロの奥から湧き上がる衝動に突き動かされるままに動く。

空中だが、右足は地面に立つ時のようにまっすぐに、右足の延長線上になるように、ピ

ンと左腕を伸ばす。

右腕はまっすぐとゴールの方を指差して標準を定め、左足は思いつき後ろに引き絞る。

普通なら空中での姿勢制御なんてこんなうまくいく筈もなく、私は落下を初めているハズなのだが、

周囲に舞い散るこの羽根のおかげなのか、何故か滞空する事が出来ている。

心なしか、背中から翼が生えている…？

実際には生えてないんだけど、羽根が集まってそんな形を形成している。

そんなこんなで自らの現状を客観視してる間に、左足が限界まで引き絞られた。

衝動に明け渡した身体は、その弓を射るような体勢から溜め込んだパワーを開放する。

当然、左足はボールのど真ん中に命中し、一直線にゴールへと射出された。

と、思ったらボールの軌道上にピンク色の魔法陣が出現する。

その魔法陣のど真ん中を通ったボールは、魔法陣から出てきた何十何百ものピンク色のエネルギー弾と一緒にゴールを目指す。

驚きで目を見開いたさやかちゃん（ゴールキーパー）の顔がピンク色の光で照らされたのを見て、私はようやく気がついた。

あ、コレやばい。人が死ぬやつだ。

☆☆☆☆

いやいやいやいや、

ええええ……？

ちよつと待ってよ。

確かに試合前に「まどかのへなちよこシユートなんてアタシが全部受け止めてやるもんね！」とは言ったけれども

コレは予想してなかったわ。

というか、え？なにこれ？

どんだけ飛んでるの？その羽根は何さ？途中で出てきた魔法陣は何？

今アタシに襲いかかっているエネルギー弾は何なのさ

と、まあ一通り狼狽してみた訳なんですけれども……？

な〜んか時間が進むのが遅くなってるのよね

いわゆる走馬灯？

アドレナリンがどばーって出て思考が加速するってアレなのかな？

いや、困っちゃうな

美少女さやかちゃん！中一でまさかの臨死体験!!なんてね

ってか、よく考えなくともヤバくね？

つまりはコレ当たたらアタシ死ぬって事じゃん。

それなのになんでアタシは冷静なのさ。

自分で自分がわからんね。

まあ、でも、な、んか。

イケる気がするんだよねえ。

なんとなく、腕を振るう。

すると、虚空からいくつもの刀：？サーベル：？サーベルの方が近いかな？

サーベルが出現して足元に突き刺さった。

うん。

コレ、初めて持つ筈なのに、すごいしつくりくる。

次の瞬間、アタシは握ったサーベルをエネルギー弾に向かって投じた。

ロクに狙ってないんだけど、アタシの手を離れたサーベルは勝手にホーミングし

てエネルギー弾を確実につぶしていく。

でも、それは外側に広がっていかうとしていた物だけだ。

アタシに当たりそうなモノは依然としてこちらに向かつて突き進んでいる。おそらく、次の瞬間にはアタシはコレに当たって消し炭になつてゐる事だろう。だが、勿論そんなのは嫌なので抵抗させてもらう。

両の手に再びサーベルを出現させ、今度はガツチリと握り込むと……

まるでマシンガンの掃射の如きエネルギー弾の弾幕を一発も残さず斬り裂く。

いやあ……やっぱり弾丸をサーベルで斬るのってカッコいいよね！

某斬鉄剣の人しかり、某電撃文庫最弱主人公とか言われてるハーレム剣士だったり。

そして、最後の最後に、まどかが直接蹴ったボールがやってきた。

コレだけ明らかにエネルギーの密度が違う。

勿論アタシは最大限、ありつただけの力を込めて2刀を交差させて受ける。

が、それでも押し込まれる。

グラウンドの上で踏ん張っている足が徐々にボールの中へと押しやられていく。

「クツ……負けて……たまるかあああああ!!!」

腹の底から声を出して、更に力を加えてボールに叩き込む。

すると、アタシの2刀に加えて、さらにもう2刀、とんでもない大きさのサーベルが

アタシと同じように交差させてボールとの押し出し勝負に助太刀してきた。

見ると背後から甲冑を着た化け物がアタシを包み込むように現れており、そのサーベ

「よくやったわ、さやか。後は私に任せなさい。」

気がついたら、アタシは名前も知らない黒髪のキレイな人に片手でお姫様抱っこされてた。

その人は残った手でボールを抑えていて、ボールが回転しているせいでギューイイイインというとんでもない音が辺りに響いている。

ところが、その人は顔色一つ変えずに、一旦アタシを下ろすと、大ぶりのフォームでボールをぶん殴った。

その一撃は、巻き起こった風圧だけで校舎の窓ガラスが全て割れ、上空の雲が全て掻き消え、ボールを遥か彼方、地平線の向こう側までぶっ飛ばした。

「ま、先人に従ってここは『Plus Ultra、更に向こう側へ』……とでも、言っておきましょうかね」

コレが、まどかとアタシの、正義のヒーローとの出会いだった。

設定や旧あらすじ等のごみ置き場

《感想欄にて語ったり語らなかったりした裏設定》

・アリナ先輩第一形態

封じられしアリナ

属性：光

★☆☆☆☆

タイプ：サポート

A A B C C

コネクト：こんな、へなちよこアリナでも…ツ!!

攻撃力UP「Ⅲ」&HP回復「Ⅳ」

マジア：Nine Phases（自爆）

敵全体にダメージ「Ⅴ」&自身にダメージ「Ⅹ」&自身に呪い「3T」

備考：レアリティが上がると仕様がガラッと変わる珍しい魔法少女

覚醒には記憶のカケラが必要

・この世界の人間の精神のシステムについて

精神年齢が150歳を超えたあたりから大体800歳あたりまで精神的に不安定な時期が続く

これは自己の存在が人間と人外との中間を彷徨っていてどちらにも定まらずに中途半端になっているから

そして、800〜1000歳の時期は完全に狂人と化す

存在としては人外の枠に入ったけれどもココロが順応出来ずに壊れてしまう事で今までの価値基準を全てかなぐり捨てたような行動に出る。

大抵は非人道的な行いに走る場合が多い

そして1000歳を超えたあたりで悟りを開く……というか思考回路がガラツと変わる

倫理感とかが人間のソレでは無く他のナニカになり、精神が安定する

多少の出来事では全く動じなくなり、強靱でより強いエゴを持つようになる。

コレで一応完全な人外

というか、そんだけ生きれたらほぼ大妖怪や神霊とか同レベルの妖力や霊力、神力等を手に入れているハズ

・ほむらの周回数

本人は15000回以上とは言っているけれど、実際には30000回を余裕で超えている。ほむほむの記憶が定かでは無いのを良い事にサバを読んてるだけ。

全ての時間軸が一ヶ月でワルプルが襲来するわけではない&まどかが死んだ後も普通に成人まで過ごして大学で色んなジャンルの知識を深めてから時間遡行してた時期もある(知識だけなら里見灯花と殴り勝てるレベル)

故に精神年齢なんて1264歳どころか3000歳は軽く超えている。

・タバコ事情

ほむらを除くと織莉子以外はタバコを吸えない。

織莉子自身も積極的に吸うわけでは無く、ほむらにタバコ休憩に誘われたときに一緒に吸う程度

関係ないけどシガーキスって良いよね

・マミさんと織莉子

割と趣味が似通っていて案外仲が良い

・キリカのエヴァ好きの真相

最初は周りの話題に合わせるためにエヴァを見始めた。

当初は好きでも嫌いでも無く、他の周りに合わせるためにやっていた娯楽と同じ扱いだったが、

最終回及び旧劇でシンジ君の出した答え「おめでとうエンドに感化されて、「自分も何か変われるんじゃないか？」と考えるようになる

そこから漫画版やエヴァ2とか数多の考察サイトや二次創作小説等を漁りまくり、完全にエヴァという世界の虜になる

しかし、キリカがエヴァを見始めて一ヶ月程が経った頃、誰もキリカの話について行けなくなってしまう

好きという気持ちが大きすぎる故の悲しい事件が起こってしまった

それ以来キリカは学校で偽りの自分を演じるようになる
まだ魔法少女になる前どころか、織莉子に出会う前の出来事である

・ほむほむの自衛隊駐屯地強襲事件について

実はほむほむの技術なら自衛隊の装備より遥かに性能の良い装備を創ることが出来る

が、ゼロから創るのはめんどくさいし既にある装備を魔改造するほうが早いので奪ってきている。

生産の準備が整い次第、順次ほむほむ製のトンデモ装備へと変わっていく
要するにマイクラで言うボーナスチェストに入ってる木ツールみたいな感覚
最初に素手で木こりするよりかは早いけど、割とすぐに捨てるでしょ？

・エヴァシリーズの魔女の自我、及びこの世界の魔女の設定について

今後本編で説明する可能性が大なのでネタバレ防止の為に活動報告の方に置いておいてある

<https://syosetu.org/?mode=kappa|view&pid=261078&uid=272722>

《旧あらすじ》

もしも、マジアレコードでまどかが死に、マジレコほむらちゃんが再び時間遡行をする事になったのなら？

もしも、そのまま原作の時間軸でアルまど様がご降臨なされず、またもや終わりのない時間遡行の旅をする事になったのなら？

もしも、幾千幾万もの時間遡行の果て、様々な世界線（他のコミカライズ作品等など）を経験し、精神年齢カンストしてオーバーフローしたほむらちゃんが悟りを開くどころかはつちやけてしまい、偶然にも再びマジアレコードの時間軸にたどり着いたのなら……？

この物語はそんな精神及び技術や知識がバケモノな暁美ほむらが神浜にマジレコ第

一部開始の半年前から干渉した所、風が吹いて桶屋が儲かりまくり、紆余曲折様々な改変があつた結果……………

『アリナ先輩が記憶を失い、主人公になってみかづき荘入りする物語』です

(→ここが一番ワケわかんないんだよなあ……………)

(ちなみに半年前は、瀬名みことが魔女化したり、みたまさんがリヴィアさんに出会つたり、里見太助が居なくなつたり、マギウスが結成されて世界から環ういという存在が消えたりした頃)

基本的にシリアスの皮を被つたドタバタギャグコメディなので頭空っぽにして読むことをオススメします

新生アリナレコード　プロローグ

前奏曲（プレリユード）

あの子が魔女になってもう6年が過ぎた。

月日が経つのは速い。特に、こんなやることもほぼ無いような暮らしをしていれば。「待つて……話しを聞いて……」

「うるせえ!!誰が待つてんだ!!テメエらのそのちやちな宝石を砕きやあ俺らはたんまり金がもらえらるつてんだからよオ!」

と、昔を懐かしんでいたら外から怒鳴り声が聞こえてきた。

辟易としながらも、そういえばアレが最後だったな……と思い出した。

仕方ない。少々億劫だが様子を見てみることにしよう。

最後を見届ける責任が、私にはある。

安楽椅子に座ったまま腕をおもむろに持ち上げると、そのまま横にスワイプする。

空中にタブレットがあるイメージだ。

すると、空中に魔力で出来たモニターが現れ、とある都市の大通りが映し出される。

映像によると、どうやら筋骨隆々でガラの悪い大人達が集まっている。

その中心には涙を浮かべながら許しを乞っている一人の少女の姿が、大通りのど真ん中なのだから通行人はいる。……が、誰一人として少女を助けようと動くモノは居ない。

それどころか、男達を遠巻きに見つめ、少女の最期を今か今かと待ち望んでいる。パリン

私が何をするまでもなく、男達は恐怖で動けなくなつた少女の命ソウルジェムを砕いた。

その破片は、ドス黒く濁っており魔力も尽きていたであろう事がわかる。

まあ、わかつた所でどうにも出来ないのだが

さて、これが、今のこの世界の日常だ。

一体、何故私はこんな時間軸にまだいるのだろうか……？

決まっている。彼女と交わした約束を守るためだ。

『ゴメンね……？ほむらちゃん

最期のワガママになつちやうんだけどね……

ほむらちゃんには、皆を信じてほしいんだ。』

あの時の、私のなかで少しずつ冷たくなっていく彼女の身体

『……私は……でおしまい。それに未練は無い。』

でも、私が出会って変えていった魔法少女は、人間は、この世界は、

私がいなくなっても続いていくんだよ。』

弱々しく震える手で、最期に撫でられた頬の感触が蘇る。

『だからさ、ほむらちゃんには見ていてほしい。』

ほむらちゃんの事だもん。きっと、色々皆の手助けしちゃうんでしょ？

でも、それは駄目。

私は人間が自分たちの力で前に歩いていく世界が見たい。

その為の力は育てたから……

だから、

だから何もしないで、ただここから世界を見ていて欲しい。

何が会っても、皆を信じて見守って欲しいな。』

『それが、まどかが望む事なら……』

その結果が、コレだ。

魔法少女達は魔女化を克服しインキュベーターのシステムから独立した後、その存在を世間に主張し、自分たちのおかげで人類は発展してきた事を発表した。

その結果待っていたのは、おぞましき「第三次世界大戦」

世界各国が、自国の魔法少女を兵として使い、戦況は泥沼化かつてのフランスが現代に蘇ったかの如き惨劇が5年間続いた。

最終的には、彼女と私が育てた優秀な魔法少女が多かった日本が勝利し、世界は『日本政府』改め『地球政府』に統一された。

しかし、この対戦で甚大な被害を受けたのは他でもない地球政府自身

人類の総人口は1億人程度まで激減し、数多の文化が消え去ってしまった。

そんな政府が疲弊しきつた民衆からの支持を得るために牙を向けたのが、散々協力してきた魔法少女達

政府は彼女達の肉親や親友等を人質に取り出頭を命じ、大勢の聴衆の前で公開処刑を初めた。

あまりにも非人道的な行為だが、異を唱える者は誰も居ない。

『魔法少女がいなかったら、我々はこんなにも多くの血を流さなくてよかった』
誰もが、政府のその言葉に納得した。

魔法少女を悪だと決め、虐殺を繰り返していった。

5年間の大戦争は人々の心を壊してしまっていた。

それから約一年……政府に飼われている魔法少女以外はさっきの少女を除いて全滅した。

つまり、先程の少女が最期の希望だったのだ。

だからこそ祈っていた。

少なからず応援していた。

何か奇跡が起こるはずだと、信じていた。

しかし、現実はあるはずない幕切れ

なんの特別性も持たない、ごく一般的な“人間”によつて“魔法少女”は滅ぼされてしまった。

「はあ……」

私はため息を吐いて安楽椅子から立ち上がる。

「ねえ、まどかか。」

目の前には大理石から削り出された等身大の女神像

「最期の希望が、潰えたわ。」

その姿はいわゆるアルティメットまどか

円環の理となつてしまった別の世界のまどか

しかし、全てのまどかという存在の象徴でもある。

「貴方が行った事を疑いたくは無い。」

でも、それなら、これからいつたい……何を信じればいいのか？」

その右目には一つの黒い宝石がはまっている。

それはこの世界の彼女の命、魂の成れの果て。

グリーフシード^{ルジェム}。

「もう……終わりにしてもいいんじゃないかしら……？」

だが、もうそこに彼女の魂は無い。

この世のどこにも、そんなものは存在しない。

この世界には冥界や天界といった場所は存在していなかったのだから。

けれど、私は問いかける。

自分自身に言い聞かせるように問いかける。

「結局、人類のくだらない内輪もめに巻き込まれて終わりだった。」

こんなにも悲しいのに、こんなにも苦しいのに、

「政府の犬達も、もうすぐ自ら処刑されに行くのでしょうかね。」

なんで、なんで

「この世界の魔法少女は……全滅」

涙が出ないのだろうか

「貴方が守ろうとした人たちは、貴方を守ってくれていた人たちは、」

表情が動かないのだろう

「全員、死んでしまったわ」

私は女神像の前に跪き、両手を組み、祈る。

「やっぱり、人間は駄目ね……」

なぜなら、これから私は全てを終わらせるのだから。

「ありがとう。貴方と出会えて、本当によかった。」

彼女の残したこの世界を、終わらせる。

「私は忘れない。貴方という素敵（敵目まどか）な人がいた事を」

それが、彼女へ対する最後の弔い

「さようなら」

左手の指輪に、久方ぶりに魔力を通す。

随分と長い間使っていなかったから、多少の倦怠感はあるが、全力を出すのにはなんら問題はない。

ソウルジエムから溢れ出る魔力が身体全体を包み込み、私を中心に繭を形成する。

黒のワンピースが光の粒子となつて消え、その身体に纏わりつく魔力が変化して、いつものセーラー服魔法少女装を改造した漆黒のタキシードへと姿を変える。

左腕にはこれまでずっと一緒だった相棒小型ラウンドシールドが現れ、七色の魔力が迸り絶え間なく小さなスパークを発生させている。

フフ……ゴメンね。

アナタにも長い間待たせちゃったわね……

少しだけ、ほんの少しだけ魔力を循環させる。たつたそれだけで私を覆っていた繭は形を崩し、消える。

そして、再び地に足をつけた時、私の背中には邪神の翼が生えていた。

蝙蝠の腕のような骨格に、複数の艶やかな濡羽が垂れ下がりがり皮膚のような形状になっているソレは、見る人が見れば某破壊神フランドール・スカレットの力を宿した吸血鬼を連想させるかもしれない。誤解されている事だが、彼女の翼は宝石では無い。原作絵をよく観察すると、なにやら薄い被膜のようなモノなのだ。ボロ絵を見ていると亀裂が破れたような亀裂が入っているのがわかりやすい。

「ああ……そう。これこれ」

これは、彼女と対をなす姿。

彼女の為に、全ての魔法少女の為に、汚れ仕事を請負い、その身体を血に染め、憎ま

れ役を引き受ける姿。

右手を握りしめ感覚を確かめる。うん。懐かしい感触だ。ふわりと浮き上がって、女神像と同じ高さまで飛翔する。

この顔も、もう少し仕事をすれば、また見れるようになる。

女神像の額に口づけをして、小型ラウンドシールド相棒に収納する。

さあ、これでこの世界にはもう守る価値の有るモノが一切無くなった。

何も、心残りは無い。

ノーアクションで周囲の景色が一瞬で切り替わる。

そこは、旧国会議事堂

今は地球政府の本部が置かれている場所……その上空である。

内部からは慌ただしく動く数百人の気配が感じられるが、こちらに気づくモノはいない。

愚かな人間の象徴とも言えるソレを冷ややかに見下ろしながら

私は、

なんのためらいもなく

パンツ

終わりを告げた。
手を叩いた。

《暁美ほむら……キミっていうやつは一体何てことをしてくれただい?!?!?》

インキュベーターも6年ぶりを見る。

相変わらず、憎たらしい顔をしているのね。

《まさか、まさか地球そのモノを消してしまうなんて!!》

キミたち地球人のような感情を持った生命体があつただけ貴重なのか……

暁美ほむら、キミ程の存在が知らない訳がないだろう?!?!?》

ギヤアギヤあと隣で犬畜生が喚いてはいるが、構わずに私は相棒の中から媒体となるモノを取り出し、魔術式の演算を開始する。

今現在私がいるのはかつて地球があつた場所。

太陽系ごと地球を消し去った私は、当然宇宙空間に放り出される事になる。

一般人ならば気圧によって膨張してハジケ飛んでいる頃だが、私は魔法少女なので何

知した時、私は少しばかりながら関心した。

そちらを向けば、案の定、膨大なエネルギーの光線極大レーザーが殺傷能力明確な殺意を持って迫ってきていた。

魔術式の詠唱展開を中断して右手を突き出し魔力障壁を発生させる。

ふむ、なるほど。咄嗟に作った急ごしらえ、それも片手だけの魔力障壁位ならヒビを入れる程度の威力か……

しかし善戦はしたものの、そのレーザーはたった一枚の魔力障壁にヒビを入れるだけで消えてしまう。持続力に難有り。

『めんどくさいことになったな……』という目でレーザーが飛んできた方向を確認すると、案の定、政府が飼っていた魔法少女が息を荒げて宇宙空間に立っていた。

その足には魔力障壁が展開されており、簡易的な重力魔法も併用しているようで、彼女の髪も広がったりはしない。

また、呼吸しているその様子から彼女の周りには酸素ガスも発生しているのだろう。一人の魔法少女としてみれば、複数の魔法を併用して宇宙空間に対応しつつ、攻撃を放つその練度は化け物並なのだろう。

だが、私の前に立つ以上、そんな一般人基準の力量ではお話しにならない。

「ギザマアアアアア!! よくも……よくも地球を、ッ!!」

その顔は怒りと涙でぐっちやぐちやになっており、叫んでいる言葉もただひたすら恨みをぶつけるのみ。

まあ自分たちが住んでいた星を壊されたのだから普通はそんなものか

「はあ……言いたいことがあるならハッキリ言いなさいな。」

「黙れえええ!! 私ハッ……!! 誇りある地球政府軍直属の魔法少女なりイッ!! 我が最大の使命はアアッ!! その身を賭して反逆者を滅する事オオッ!! 故に……ゼエ……ハア……ッ!! あの伝説の邪神、暁美ほむらよ!! キサマを殺して、私も死ぬ!!!」

こんなにも聞いていてうんざりする『お前を殺して私も死ぬ』は無い……

予想はしていたけれど、自分で考える脳も無い傀儡、正直、見るのも耐えないけれども

「ま、あの一撃を受けて無事だった事は褒めてあげるわ。6年間も暇だった事だしちよつと遊んであげるようかしらね……さあ、貴方の持てる全力でかかってきなさい！」

一瞬でカタはついた。

この私と戦うんだから、即死耐性くらいはつけておかないと、話にもならない。むき出しのソウルジェムをちよちよいと空間湾曲させて粉碎して終了。

政府の犬としていつでも死ぬるように、あえてむき出しだったんでしようけれど……ソウルジェムの保護は常識でしょうに……

かつては星だった残骸が散乱している中、私は横槍を入れられた魔法を再び組み直していた。

ちなみに場所は変わって、ここはインキュベーターの母星があつた場所。

ちよつと不完全燃焼気味だったので腹いせに直接破壊した。

どうせ最後には消えることにはなるのだけれども、せつかくだからストレス発散に付き合ってもらつたわ。

インキュベーターほどストレス発散に丁度いい存在はいない。

何時の時代も変わらない、この世の真理ね。

そんなこんなで、この世界での最後の魔法が完成した。

私を中心に形成されている幾重にも絡み合つた複数の魔法陣。それらは要求する魔力を与えてやると水に墨汁を垂らしたかの勢いでその規模を拡大させていく。

その内側はまさに《闇》そのもの

ブラックホールはその重力故に光を捉えて逃さない事で真っ黒に見えるというが、コ

レはそんなチャチなモノでは無い。

惑星だろうが恒星だろうが、

無機物だろうが有機物だろうが知的生命体だろうが、

重力だろうが熱だろうが光だろうが、

この宇宙を形作る『モノ』『力』『法則』全てが無へと帰していく。

数多の恒星系、星団を飲み込んで銀河全体へとその力を及ぼしていく魔法陣は、数分後には宇宙全体を全て吸い付くしたにも関わらず、その外側にある他の宇宙までもを飲み込まんと更に更に更にその規模を増していく。

強制終焉魔法『Anti heat death of the universe』

それは、この世界の全宇宙からありとあらゆるエネルギーを吸い出し、全てを感情エネルギーに逆変換、一つのグリーンフシードに変える事で、エントロピーが増大しきつて宇宙が熱的な死を迎えるのを待たずして終わらせるといふ……割と力づくで強引な魔法

私の時間遡行は『別の平行世界へと移動する』という性質上、どうしても遡行する前

の世界の事は投げ出さなくてはならなかった。

かつての私は、時間遡行によってまどかを見捨てていた事に悩み、苦しんだ。

そして辿り着いた答えが『自らの手で世界を壊すこと』

結局、私が時間遡行でたどり着かなかつたら、その時間軸のまどかはただの女子中学生のままなのだ。

私が訪れた事で因果が集中してしまい、結果的に世界に被害が出てしまうのならば、その後始末までキツチリ片付ければ良いだけの事。

勿論思いついた当初はまだ若く、実現なんて到底不可能だった。

せいぜいが魔女化したまどかと一緒に世界中で暴れまわるくらいが関の山……
けれど、それは何の後始末にもならない。

たとえ今生きている地球人を全滅させたとしても、地球が残っているならばいずれ新たな知的生命体が誕生し、インキュベーターのシステムに組み込まれる事でしょう。

ならば、地球も破壊すればどうか？

忘却の魔女の例がある以上、この宇宙には地球以外にも感情エネルギーを生産出来る生命体がいる事は明らかだ。

それに、いずれ地球と似たような環境の星が出来上がってしまうかもしれない。

だから私は、後始末をするために一片たりとも可能性を残すわけにはいかなかった。

故に宇宙を、世界を、時間軸そのものを壊す必要があったのだ。

それを可能にするのが、この終焉魔法シリーズ。

まあ、昔と違ってだいぶ魔術研究が進んだ今となつては、もつたないからエネルギーを全てグリーンフィールドに変換して次の世界に持っていけるこの『Anti heat death of the universe』しか使っていない。

この時間軸に生きていた人たちには悪いけれど、最終的にその生命は私の為になつてくれているから勘弁してくれるとありがたい。

数時間後、ようやくこの時間軸の全てのエネルギーを回収した。

これでこの時間軸には何も存在していない事になる。

全てが『無』だ。

ここからまた新しくビッグバンが起こるとしたら、それはもはや新たな時間軸と言って良いだろう。

さて、後始末もすんだ事だし、次の時間軸へといきましようか

ガチャリ

私は砂時計相棒を一回転させた。

残った『無』は、観測者がいなくなった事で、真の意味で『無』になった。

オマケ 「帰るべき場所」

ジウワワワワワワワワ

私が思うに——別に唐揚げだろうと天ぶらだろうと何でもいいのだが——『揚げている音』というものはこの世で一番食欲を刺激する音なのでは無いだろうか

しかも、それが自分の頼んだトンカツだと言うのならばなおさらだろう。

確かにほむ姉ねえのトンカツ茶漬ねえは看板商品の一つだが、たまにはトンカツ単体で食べても美味しいのだ。

いや、そもそもそのトンカツ自体が美味くなければトンカツ茶漬ねえも美味くは無いだろう

元々は冷めきったカツを美味しくいただく方法だったと言われるトンカツ茶漬ねえも、その元のトンカツが美味しくなければならぬ。

そんな、とりとめもないような事を目の前でトンカツを揚ねえげているほむ姉ねえを眺めながら考える。

ふと視線を横にズラスすと、むら姉ねえがキャベツと白菜の野菜炒めに調味料を投入している所でカウンター席まで醤油が焦げる香りが漂ねえってきて、自然と唾を飲み込む。

ところが、隣席から漂ってくるアルコールの匂いと、その背後からの賑やかという言葉ではちよつと濟ませられないレベルの喧騒が、私のASMR鑑賞を妨げる。

どうやら、今日も他のほむら達は絶好調のようだ。

「大喜利対決!」「こんな早乙女先生は嫌だ」

「え、えくと……学生時代にホストクラブにハマって貯金^{有り金}全額溶かした」

「失恋した次の日は職員室に酒を持ち込む事が黙認されている」

……何の脈絡もなく始まる大喜利対決に

「えー…今回お話させていただきますは、そう!泣く子も笑い、大人も涙する。それはそれは小さく愉快な天邪鬼のお話……」

今ではすっかり馴染んだ巴亭マミ楽の新ネタ披露^{落語}

「グフオアツ……」

「な、なななな……しよ、しよんな……」

「マズイ!二次災害が!」

「おーい!!誰か代わりのチョコレートパフェ大至急持ってこーい!!」

博士がぐずりだしたぞー!!」

無差別に振るわれるイタズラほむらのハバネロ爆撃

そこから生じる二次災害三次災害

「「「かはーッ!!」」」」

そして、ビール一口で吐き出す酒の弱さ

なら、どうして飲むのよ……というのは禁句だ。

正直私も最初は思ったが、今では立派にコイツらの仲間入りである

吐かなきゃやつてられない。

お通しの冷奴、それも最後の一切れを口に放り込み、ジョッキを傾けて……

「かはーッ!」 ◀ 1P

うげえ……この頭がぐっちゃぐちゃになる感覚がどうにもやめられない。ちなみに心配せずともここ、あけみ屋での吐瀉物は勝手に消滅する。だから、汚くなんか無い。

どんな原理かは知らないけれど……

さて、このカオスな空気を感ぜると、ようやく帰ってきたという感じがする。

もはや実家よりもココで過ごした時間が長いのかから仕方無いのかもしれないけれど……

ここは時空の狭間に存在する酒処《あけみ屋》

時空を超えて戦うほむら達が束の間の休息を楽しむ酒場であり、皆の家だ。

二階には居住スペースがあり、従業員のほむらやその他住人が住んでいる。勿論宿泊

も可能。

なんやかんや色々あったけれども、私、『曉美たむら』こと曉美ほむらは、今日も今日とてこの店で英氣入りを養浸っている。

ワイワイとバカ騒ぎしている別世界のほむら達を肴にビールを呑み、たまに巻き込まれるこの毎日はまさに平和そのものと言っていていいだろう。

ガラツ

「ぬわああああん!!疲れたもおおおおん!!!ほむ姉くやけ酒の準備よろしく」 ◀ 蟋九
 じ纏翫? 纏サ纏? 纏

しかし、そんな平和がたった一人の『曉美ほむら』の来客によって踏みにじられる光景も、またあけみ屋の日常である。

……………え? いや、コレ本当に曉美私ほむら同じ? …………… いや、うん。その筈だ。

なんか、明らかに纏っている魔力量がハンパないし、別に敵対していないというのに体中が彼女に逆らう事を拒否しているけれど……………同じ曉美ほむらなんだろう。顔はおなじだし。

しかも私の ◀ 1Pレと同じもの付けてるし……………文字化けしてるし……………

そんな謎の強キャラから発せられたのが、語録だったのだがどうすれば良いのだろうか

?

温度差で風邪を引きそうだ。

「はえ……あ、先輩!? うそ……いつまで経つても帰つてこないからうまくいったのかとばかり思つてただけれど……」

「うくん……今回はワルプル軍団討伐までは行けたんだけど……まくた人間とかいう種族に邪魔されたのよねえ……」 ◀ 蟋九じ纏翫? 纏サ纏? 纏

いや、待て待て待て待て……色々ツツコミ所が多すぎてマズイ。

まず“先輩”つてなんだ?

あのほむ姉の先輩って一体どういう……

しかもワルプル討伐つて……そもそも軍団つて何よう? あんな化け物が複数で出てくるとでも言うの!?

訳がわからない。

が、理解が出来ない事なんていつもの事。

何の因果か私はやたらとおかしな時間軸に飛ばされることが多い。

そこで培われたスルー技術はこの状況を右から左へ流していく。

どうせ説明を求めてもロクな答えが帰つてこない事はわかつているんだ。

流される方が最終的にうまくいく。

クツ……でも凄い気になるわね……!!

「あ、チーほむ様だ。おかえり〜」

「なに入り口で突っ立ってるんですか。いつもの特等席は開けてますよ。」

「全く、13年もどこに行ってたの……」

「お〜皆ただいま〜。見ない間に随分と成長したなあ……それにちらほらと新入りもいるか。」

大先輩のお帰りだぞ〜!!」 ◀ 蟋九〇纏翫? 纏サ纏? 纏

「「「「わーっしょい!! わーっしょい!!」」」」

いや、なんかめつちや歓迎されてるし。ええ……皆あの魔力見て怖くないの?

あ、いや大丈夫だわ。私と同じような反応の子も何人かいるわ。

大体が進化前^{メガネ期}だけ。

「おー、最長老サマじゃねーか! あそぼーぜ!!」

と、そんな事を言いながら魔力の暴風雨とでも言うべき存在に飛^{ライダーキック}び蹴りをかましたのは例によって例の如くイタズラほむら

正直、今この瞬間だけはアンタを勇者だと思っわ……

方向性は間違っているけど

「残念ながら思考回路がボーボボ相当のチミに待ってるのはアイアンクロウの刑だけよ」 ◀ 蟋九〇纏翫? 纏サ纏? 纏

「ふんぎやああああ!!」

とか思ってたら次の瞬間、イタズラほむらは蹴り足を掴まれてそのまま反対側へと叩きつけられ……見るも無惨な姿になって伸びていた。

そこに容赦なくアイアンクローを実行する様はまごうことなくバトル漫画の悪役。でも普段うざったいイタズラほむらがズタズタにされているのはちよつとスツキリした。

特性：イタズラじろ

それにしてもあれに何かされる前に捕まえるなんて……

やっぱり魔力量考えても同じ暁美ほむらとは思えない。

あと、年齢はタブーなのか……

「……で、何アレ？」 ◀ 1P

彼女が席に座った事で一通りの騒動が落ち着き、イタズラほむらの遺体死んでいないが担架で回収されているのを見ながら、私は隣でラーメンを啜っている暁美ほむらに聞く。

「ああ……そういえばこの前帰ってきた時はたむらは居なかったもんな。」

ま、色々肩書はあるけど、一番わかりやすいのは『チーほむ様』だな。」

「チーほむ様？」 ◀ 1P

ふむ……確かに喧騒に耳を傾ければそう呼んでいるのが大半ね。

しかし一体なんなんだそれは……チーかまと同じ感じかしら？

「チーほむ様は、ほむ姉むら姉と並ぶこの「あけみ屋」創立者メンバーでありながら今でもまどかを救う旅を諦めず最前線で戦い続けている奇人……つつーか鬼神だな。周回回数は余裕で万を超えている最古参で、頭脳も戦闘技術も全てがトツプレベルだ。」

並レベルのワルプルギス程度なら無傷で数十匹ブチ転がせる戦闘力を持つてる。

更にやべえのは、何千年も生きてる事で半ば『神霊』の領域に片足突っ込んで、魔法少女でありながらほとんど神様みたいな存在になりかけてるって所だな。

本人の話によると気分で魔法少女にも神にもなれるとかなんだとか……

そんなチートみたいないな性能してる事から、誰が呼んだか『チートほむら様』略して『チーほむ様』なんて言われだしてね。

本人が否定しなかったからそのまま定着したんだ。」

「チーかまじゃないのね……」 ← 1P

正直情報過多で頭がおかしくなっている所にオコジョの杏子がやってきた。

カウンター席に飛び乗って口に加えた個包装のチーかまを私の空っぽの皿に落とす。

『喰うかい？』って事か……頂いておこう。

もぞもぞとチーかまを頬張りながら向こうの様子を眺めていると

「師匠おー!!!」

普段は絶対に出さない叫び声を出しながら博士が抱きついている所だった。

ほーん……そのチーほむ様つてのは博士の師匠なのねえ

「おーよしよし……しばらく留守にしちやっただけど寂しくなかつたかしら？」

「むん！最近は一人でお風呂にも入れるようになったの！」

今はまだ無理だけど……この調子でいつかは絶対に科学だけで師匠を超えて見せるの！

だから一人でも大丈夫なの！」

「そう、それは頼もしいわね。でも、そう簡単に超えられるほど、私の『魔術と科学の融合』は甘くないわよ？」

「望む所なの！」

うん、かわいい

正直かなりほっこりした。

やっぱり博士はあけみ屋メンバーの癒やしだわ。

おでんの大根が甘く感じる。

しばらくチーほむ様が博士のほっぺをむにゅむにゅしてるのを眺めていたら、箸が皿底をつつく感触が伝わってくる。どうやらおでんが無くなったらしい。

が、ほむ姉のおでんはこの煮汁まで美味しいのだ。

少しはしたくないが、そんな事を気にする連中はこの店にはいないので遠慮なく皿から煮汁を直飲みして…

「へえ……アナタが『たむら』ね。

話は聞いてるわ。なんでもワルプルギスを正拳突きで倒したのにまどかに時間遡行させられたとか……」 ◀ 蟋九〇纏翫？ 纏サ纏？ 纏

「ひゅいッ!!」 ◀ 1P

唐突に、背後から声がかげられた。

それだけで、まるでソウルジエムにナイフを突きつけられているかの如き恐怖が全身を駆け巡る。

と、どうかそのせいで煮汁が服にこぼれた。

まあこの店の機能のおかげですぐに綺麗になるんだけども。

そんな現実逃避を軽くはさみながらも、冷や汗が滝のように流しながら壊れた機械のようにギギギギ…と後ろを振り返る。

「や、はじめまして」

そこにいたのは予想外の……いや、ある意味予想通りかもしれないが……

「あ、ありのまま……今起こったことを話すわ。

私は、博士とチーほむ様のやり取りを眺めていたら
いつの間にかすぐ後ろにチーほむ様が立っていた。

何を言っているのかわからないと思うけれど、私も何をされたかわからなかった。
頭がどうにかなりそうだった。

『超スピード』だとか、『催眠術』だとか

そんなチャチなもんじゃあ断じて無い!

もつと恐ろしい物の片鱗を味わったわ……」 ◀ 1P

「はい、ポルナレフ構文ご苦労さま。かぼちやの煮つけいる?」 ◀ 蟋九〇縋翫? 漣サ縋? 縋
縋

「……よりもよってかぼちやの煮つけ? ま、まあイタダキマス……」 ◀ 1P

「そう硬くならなくていいのに……」 ◀ 蟋九〇縋翫? 漣サ縋? 縋

そう言つて可愛らしく口を膨れさせて不満アピールをするチーほむ様。

いや出来るかああ!! と、声を大にして叫ばせてもらいたい。

ただでさえ力量差で勝手に身体が縮み上がるせいで、今渡されたかぼちやの味もわ
かないのだ。

ついさつき会ったばかりだが、アナタはもう少し自分の放つ威圧感という物を理解し
た方が良い。

逃げ場を求めてもう一方の隣に顔を向けると、

そこには食べ終わったラーメンと箸だけが転がっていた。

「……あの野郎、逃げやがったわね」 ◀ 1P

後でイタズラほむらに報復依頼してやる。

はああ……

内心でかなり大きめのため息を吐いて、ヤツへの怒りを落ち着けると当然の疑問が湧いてくる。

なんでここにチーほむ様が二人にいるのよ？

念の為博士の方を確認するときつきと変わらずチーほむ様にほっぺをもにゆもにゆされてる。

そのまま視線を横にスライドさせるとチーほむ様がさも当たり前のようにカウンターの席で串カツを食べている。

さつきのは別にネタでもなくて本当に頭ポルナレフ状態になった。わけがわからな
いわ……

「ああ、本体はあっち。私はしががない分体よ。

ホラ、十六夜咲夜っているでしょう？

彼女の非想天則での分身と同じ原理のようなシステムだね

1秒先の自分、2秒先の自分、
 そういった『今の自分』とは別人の自分を観測、召喚して無理やり存在を固定化させているの。

でも、同じ存在は同じ世界に存在する事は出来ないから、本体とは別の意思をもたせる事で別人カウントさせてるワケね。

いわば同じ能力と記憶を持った別人の作成と言った所かしら……
 わかりにくかったら Dirty Deeds Done Dirt Cheapと

杏子のロツソ・ファンタズマを足して2で割った感じとでも捉えてもらえればいいわ」

◀ 蟋九〇縲翫? 縲サ縲? 縲

「いや、ナチュラルの心読むのやめてもらえると嬉しいのだけれど……」
 やめてくれ。当たり前のように新情報流してくるのはやめてくれ。

もう内心グロッキーなんです。

というか、心の中読めるんならコレ届いてますよね?

「さくあ? なんの事かしら?」
 ◀ 蟋九〇縲翫? 縲サ縲? 縲

あくまでシラを切るらしい。

「はあ……」
 ◀ 1P

また厄介な人に目を付けられたなあ……と思う事で、なんとか心を落ち着けて平常心

に戻す。

少し落ち着いてきたのかかぼちやの味がわかるようになった。あま、うま。

嫌な事は全部頭から追い出せば、もうそこには私と料理しか存在しないのだ。

ドンツという音で我に帰ると、チーほむ様（分体）のカウンターには串が数本転がった皿と空になったビールジョッキが現れていた。さっきのはジョッキをテーブルに勢いよく置いた音だったらしい。この短期間で呑んだのか……

「じゃ、他の新入りに挨拶してくるわ」

そう言うときチーほむ様（分体）は席を立つ。

「そう。」

返事をした時には、もうチーほむ様の姿は無かった。

うーん……一体、何がしたかったのかしら？

本当に挨拶だけだったりして……

「まさか……ね」

あれほどの力を持つてるのにも関わらず、わざわざ分体を用意してすることが挨拶だけだなんて、ちよつと考えられない。

未だに博士をむにゆむにゆしながら周りのテンションが高いほむら達に囲まれているチーほむ様の本体を眺めながら、私は新しいビールを呷った。

「かはーッ!!」

ふと、気がついた時には、もうどこからも威圧感を感じなくなっていた。

「たむら……今日あけみ屋に在中でもトップクラスの因果律の持ち主

なのだけでも、戦闘力は控えめ……

にもかかわらずまどかの説得に一役買った……

おおかた、ギャグ漫画の主人公。といった所かしら」

屋根の上で月を見上げながら、お猪口から日本酒を喉に注ぐ。

うん、おいしい。

大多数のほむらは酒に弱すぎる為、このような楽しみ方は出来ないが

なかなかどうして、自分で作った酒というものは美味しいものだ。

次の時間軸に行くまでまだ時間あるし、あのアレルギーみたいな酒の弱さを治す薬でも作ってみますかねえ……

「どごう思うっ？まどか」

屋根の上には私しかないけれど……そこにいる筈の彼女に向けて問を投げる。

「……………」

「まどか？」

だが、いつまでたってもその答えは帰ってこなかった。

「……………きつと、誰か迎えに行つてて忙しいとか、その辺りでしょ」

だから、この嫌な感じは気のせいのお筈だ。

そうに違いない。

用意していたもうひとつのお猪口には、ヒビが入っていた。

メインストーリー（アリナ編） 第一章「アリナのはじまり」

その1「アリナ・グレイという少女」

☆☆☆☆☆

夕暮れよりも真っ赤に染まった空の下

熱砂のように赤く、紅い砂は見渡す限り広がっており、周囲には謎の特大玩具やオブジェが散乱している。

どこまで進んでも同じような風景の連続であり、遠くに見える城のようなシルエットはいくら進んでも蜃気楼の如く近づいてこない。

そんな明らかにおかしな空間をひた走る少女が一人。

こちらもまた、ジャンルは違えどこの空間と同レベルの奇妙な格好をしていた。

萌葱色に輝く宝石を携えた軍帽は、彼女の腰まで届く白髪交じりの緑髪が汗と共に乱雑に振り回されるのを辛うじて抑え込んでおり、

光さえ飲み込む漆黒の軍服は、大きく胸元が開けられていながらも、上下する胸をなんとか抑え込んでいる。

その背には典型的な魔女の帽子が特徴的な赤髪の少女をおんぶしており、両腕は背の上で気絶している少女を支えている為自由に動かせない。

奇抜なデザインのミニスカートから覗かせるガーターベルトと網タイツ、そしてロングブーツに包まれた脚は、他の少女と比べても頼りないと感じるほどの華奢な肉体だが、人間二人分の重さを支えながら足元の砂を力強く蹴り上げ身体を前へ、前へと進めている。

彼女達の後ろにはカラフルな色をした芋虫の化け物の群れが襲ってきており、少しでもスピードを緩めたら、あっという間に物量に飲み込まれてしまうだろう。

『縋ヲ縋ユ綱』 縋ユ綱』 縋ユ綱』 誨ー縋励〓関峨□??シ』

背後の化け物の一人が三色団子のような自分の身体を飛ばして彼女を攻撃する。

ワンテンポ遅れながらも、なんとか二人分の重さで横に跳んで避けた彼女だが着地先の足場が悪く転びそうになる。

が、なんとか持ち直すと、そのまま再び駆けだした。

その眼には、少しも諦めの色は見当たらない。

必死に生命に縋り付き逃走を続ける彼女は、

その名を「アリナ・グレイ」という。

☆☆☆☆

夏休みも終わり学校も始まって少しづつ忙しくなってきた9月の上旬

今日はいつもの以上に蒸し暑くって暑苦しかったカラ、アリナは日が落ちて暗くなるまで部室でアートの取り掛かっていた。

まあ、たとえ過ごしやすい気温だったとしてもアリナは部室に籠もってたと思うケドともかく、部室にいたおかげ（……せい？）で手に入れたのがこの流星のキーホルダーなワケ。

見るだけで（見覚えなんて無いのに）何故か懐かしい気持ちになり、心が締め付けられて、どうしようもなく、泣き叫びたくなる

そんな不思議なキーホルダー

これは一体何なのか……そんな事を考えている内に下校時刻を告げるチャイムが鳴る。

あんまり遅くまで残っているとフル顧問ティーチャー先生が五月蠅いカラ、何か言われる前にさっさと荷物をまとめて帰路につく。

外に出た頃にはもう既に日は落ちかけ、真っ赤に染まっていた空は群青色に支配されている。

「ハア……」

そんな光景に感化されてか、ため息が溢れる。

アリナらしくない、少しセンチメンタルな気分。(多分さっきのキーホルダーの影響もあるだろうケド)

こんなキモチじゃ真つ直ぐ家に帰る気にもなれなかった。

いつものように学校の駐輪場に停めてあるアリナのバイク愛車(原付き)からチェーンを外してキーをインする。

ちなみに、この鍵穴はイグニッションスイッチと言うらしい。

イグニッション……いい響きだヨネ。

ヘルメットを被ったら校門前までは手押しで進めて、敷地外に出ると同時にひらりと愛車にまたがる。

レバーを引いたりペダル蹴ったり、まあ走り出す前にはなんやかんややることは多いものの、毎日やってるうちに慣れる。

エンジンをかけて、アクセルスロットルを回して、発進

この胸にヘッドロのように詰まってるドロドロしたキモチを吹っ飛ばすように法定速度ギリギリでバイクを飛ばす。

寄り道したのは北養区の裏山の中にある小さな展望台。

展望台って言っても、山道の途中にコンクリートでスペース作って、柵とベンチと案内看板が置かれただけのシンプルなモノ。

一応神浜の町並みを一望出来る観光スポットのハズなんだケド……いかんせんアクセスが悪いのと平日の夜という事も相まってアリナ以外には誰も居ない。

そんな廃れた展望台だからこそ、アリナのお気に入り場所の一つだったりする。

ヘルメットを外してバイクから降りると、夜の山の空気が肺へ入り込んでくる。

柵にもたれかかって、空を見上げる。

新興都市神浜

その名は決して伊達でも何でも無く、

完全に闇に包まれてしまったハズの空は眠らない人々が活動する光によって薄ぼんやりと照らされている。

おかげで星も満足に見れやしない。

『都会は星空の代わりに夜景が綺麗なのだ』とか言うヤツもいるケド、そんなモノよりもアリナはこの前東北の山奥でキャンプした時に見た夜空の方が綺麗だと思おうワケ。(残念ながら、アリナのアートのヒントにはなってくれなかったケド……)

「ハア……」

バイクを飛ばしてわざわざお気に入り場所に来たのに、このため息とキモチは消え

てくれない。

麓で買ってきたおしるこ（つめた〜い）を傾けながら、今後の事をぼんやりと考えてみる。が、答えは出ない。

ふと、思いついて例のキーホルダーを空にかざしてみた。

街の光を反射して鈍く光るこの流星を見ていると、やはり自分の意思に関係なく涙が出てくる。

そして胸の奥から溢れ出てくるのは激しい罪悪感

一体何に対しての罪悪感なのか……さっぱりわからない。

わからないケド、この胸に重くのしかかってくる感じは「罪悪感」と呼ぶのが一番しつくりくる……気がする。

それと、後悔？

ともかくにも、何かが気持ち悪い。

ただでさえスランプから抜け出せなくてイライラしているのに……

スランプ……スランプか。

なにか、引っかかる。…気がするだけかもしれないケド

ダメ元で一度頭の中を整理する為に、この半年間の事を思い出してみたワケ。

確か……始まりはアリナが賞に作品を出した時だったワケ。

アレはアリナが画材道具を全部壊した姿を写真に撮って、それを絵に描いたやつだった。

ま、あの時は会心の出来だったし、金賞を受賞したワケなんだケド：

問題はその時の審査員が後日、わざわざ学校に来てまで伝えてきた言葉だった。

「15を過ぎて、まだ自らのテーマを持たないのならば、世界を変えるつもりが無いのならば、作るのを止めろ」

まあ、細かい部分カ端ツ折トしたケド大体こんな感じの事を言われたワケ。

……アリナは未だにこの「テーマ」とやらを見つけられていない。

審査員の言う「テーマ」というモノが一体何を意味するのか、

自分が持つべきテーマとはなんなのか、

今までの自分の作品は何だったのか

この半年間、色んな事を考えて、試して、実験して、探してきた。

初めは海外に行ってみた。

——特に何も得られなかった。

次は久々に両親のアトリエに入り浸って、訪れてくる色んなジャンルの天才達と積極的に交流した。

——幼い頃とは全く違う彼らの対応に驚き、それ相応の社交性……?というのが身に

ついた。(らしい。)

その時の天才の内の人に影響されて、原付の免許を取った。

今の愛車と出会って、北海道から九州まで日本一周なんてのもしてみた。

——フル顧問ティー先生チャー先生から「出席日数が足りないからこのままだと留年になる」って連絡が来て、一周は断念せざるを得なかった。

結果、半年前と比べれば確かに出来る事が増えた。

旅を通して、当時と比べれば遥かに広い視野を得ることも出来た。

過程にあつた沢山の経験は、決して他では得ることの出来ない貴重なモノだったと言
い切れる。

ケド………

何故か、アリナのココロはエン空プ虚ティーのままだった。

ナニカが、足りない。

ココロの中に、あるはずのナニカが無い。

例えるなら……：自らが手塩にかけて創り上げたアートが横から奪われたような感覚。

「テーマ」はおそらくこの空白が関係している。……勘でしか無いケド

だけど、肝心のナニカがわからない。

いくら考えても、結論には至らず、堂々巡り

そして、今は初心に帰る為にひたすらにデッサンの山を積み上げている……って感じかナ？

む、ふと気がついた。

『そういえば、このキーホルダーはココ最近で一番アリナのマイ[□]ンド[□]を揺れ動かしたのでは無いか？』

だから、試してみた。

キーホルダーをぶら下げている右手を展望台の柵から外へと出す。

そして、手を離す。

当然、そのままキーホルダーは落ちていく。

そうなったら、このキーホルダーは特にアリナにとって必要無いという事。

——しかし、どんなに手を開こうとしても、アリナは手を離せなかった。

念の為左手でもやってみる。が、結果は同じ。

つまり、このキーホルダーはアリナにとって必要だという事。

……バツ^でも、アリナのココロは晴れなかった。

いつもなら、こんなスランプの状況を打開出来るキツカケを見つけたらエキサイトするハズなのに

★☆☆☆☆

帰り道、路地裏で偶然魔女の結界を発見した。

アリナはマジカルガール魔法少女ではあるが、実はまだ戦った経験は無い。

ただ単に、テーマを見つけるのに必死で、魔女と戦う余裕なんて無かったただけなんだ
ケド

キーホルダーの事も調べたいし、何より今は身体というよりは精神が疲れている。

いつも通り見て見ぬフリをしてそのまま帰るのが得策の筈だ。

どうせこの街には腐るほど魔法少女がいる。すぐに別の誰かが来るだろう。

でも、何故か今日は見過ごせなかつた。

ただ、気分が乗ったカラとか、そういう理由じゃ無い気がする。

？
そういう軽い感じじゃあ無くて、もつとシリアスな、ナニかを感じた……？ 気がする

普通の人なら一笑に付すだろう。

でも、アリナの勘は割と当たる。魔法少女なんてのが存在するんだから、非科学的だなんて否定する事は出来ないはずだヨネ？

結界に近づきながら、アリナは中指に嵌っている指輪をソウルジェムに戻す。

そして、ソウルジェムに魔力を通して、魔力で形成された衣装が身を包む。

アリナの武器である緑色のキューブを取り出して、中の謎の四次元収納スペースに愛

車をしまうと、そのまま結界の中に飛び込んだ。

☆☆☆☆

結界の中はこの世の常識が一切通用しない空間だった。

どこまでも、どこまでも広がっている紅い砂の山

遊具や巨大なシャベルが埋まっていたりするから公園の砂場がモチーフなワケ？

そんな感じで呑気に探索していたら

「縛薙ー縛ア縛よ眠縛峨」縛？'縛」

「ふゆうっ!!」

アリナとは違う、もう一人のマジカル魔法少女ガールが戦っている場面に出くわした。

茶色の三角帽子にケープやローブのような格好をした魔法少女。

捻じれた杖を振り回しながら魔法で巨大な鳶を生やしてかなりダイナミックに使い

魔と戦っている。

かなりのベテランと見た。

幸い魔法少女の方からも、彼女と戦っている使い魔の方からも、見えない位置にアリ

ナはいる。

初めての魔女退治で脚を引っ張っても印象が悪いだけだから大人しくココで隠れて

様子を伺って、戦いが終わった辺りで出てきて同行を依頼しようカナ。

思えば、アリナが他人の顔色を伺って行動を考えるなんて、半年前には思いもしなかっただろう。

一般人と比べれば一癖も二癖もある天才達と、今度は“高校生”として触れ合ってきた。

それは、幼い頃に経験した彼らとの交流とは全く異なる経験で、ただアリナの要望を押すだけでは上手くいかない事を学ぶ事が出来た。

振り返ってみると当時はアリナも子供だったヨネ。ただの駄々をこねてるガキと何も変わらなかった。

それが許されていたのはアリナがジーンニアスアーティスト^{天才芸術家}として結果を残していたから。

だから、同じ天才相手には全く通用しなかったワケ。

ハハッ………これじゃフルガールに顔向け出来ないヨネ

………?フルガールって………誰なワケ?

「ふゆううッ!!!」

悲鳴と轟音で意識が現実に戻ってくる。

慌てて状況を見てみた所、さっきよりも使い魔の数が数倍…いや、数十倍以上の数まで増えており、例の魔法少女は壁にクレーターを作って満身創痍で倒れている。

アレ？これって、もしかしくともかなりヤバイ状況なワケ……？

いや、そもそも別にアリナには関係が無いワケ

あの魔法少女が勝手に戦ってて、勝手にピンチになってるだけ

そこにアリナが助けに行く必要なんてこれっぽっちも無いワケ

そりゃあ助けられれば好感度はかなり上がるだろうし、治療を終えたらこの結界から出るまで一緒に戦ってくれるだろう。

でも、アリナは今まで戦ったことが無い。いや、恐怖心とかは無いケドさ…

しかしあまりにもリターンに対してリスクが大きすぎる。

だから、ここは見て見ぬフリをして立ち去るのが得策……

「本当に……？」

まただ。

また、胸の奥からナニ力を感じる。

それはナニカを叫んでいるような……
わからない。

けど、一つだけハッキリしてる事は

「ここで見捨てたら多分一生後悔するワケ」

もちろん、コレも勘でしかない。

でもアリナは富士の樹海から勘だけで生還を果たしたのだ。

アリナの勘を無礼^{ナメ}るなよ？

☆☆☆☆

ブオン

ブオオオン

さつき隠れていた場所から数百メートル程離れた場所で、アリナは愛車^{バイク}にまたがって
いた。

いつもどおり、アクセルを吹かす。

その音に数匹の使い魔が気づいてコチラを見てきた。

もう、逃げられない。

けど大丈夫、コイツは砂浜も走ったバイク^{自慢の愛車}なワケ。

思い描くのは最速の自分。魔法少女は感情をエネルギーにするらしい。

だから、必要なのはこの子を信じる事。

アリナの愛車なんだから、それすなわちアリナの一部なワケ。

魔女結界だろうが、なんだろうが…

「走れないワケが無いんですケドオッ!!!」

ブロロロロロロロロロロロツツツ

エンジンが設計上絶対に出せないような出力を叩きだし、タイヤは砂場である事を無視したかの挙動で走り出し、あっという間に己のトップスピードを凌駕する。

その速度、驚異の時速120 km

どう見ても50ccの原付が出せるスピードでは無い。

夢でも見ているかのようにだ。

だが、現実はずりが線に見える速度でアリナを前に進めている。

あっという間に、例の魔法少女が近づいてきた。

それすなわち使い魔の大群も近づいてくるといふ事ではあるケド……

ふうふう………覚悟を決めろ、アリナ・グレイ!

自らを鼓舞して、アリナはハンドルから手を離し脚だけでバイクにしがみつきのながら、身体を地面スレスレにまで倒した。

そんな事をしたら、普通ならばバランスを崩して即転倒。

だが、転倒しない。

そのままの速度を維持したままバイクは目的地を目指し走り続ける。

いや、そればかりか、操作していないのに勝手にハンドルを切り、スイスイと使いの弾幕の雨の中を切り抜けていく。

そしてその時は来た。

バイクが倒れている魔法少女とすれ違い……………

「獲ったぞおおお!!!」

元の体勢に戻ったアリナの手には、彼女のフードがガツチリと掴まれていた。

ここまで、幸運無くしてはたどり着けない道だった。

こんな無茶な作戦が成功した理由はただ一つ。

アリナがこの子を信じてたカラなワケ。

「つて、グナアツ……重っ!? ナニコレ、腕だけで人間大のモノを持ち上げるってこんなに力使うワケ!？」

と、多少グダりつつもなんとか例の魔法少女を救うことに成功した。

……数秒後、使い魔の攻撃が当たり、バイクは大破した。

☆☆☆☆

「アアツ……もう！いい加減にして欲しいんですケドおお!!!」

アリナは今、さっきの魔法少女を背負って走っている。

すぐ後ろには使い魔の大群

アリナの武器である謎のキューブから出るビームで攻撃してみるも、効いている様子は無し

そして最悪なことに、出口がどこなのかわからない。

八方塞がりのこの状況

まさか一度も戦ったことなかったかから知らなかったケド……

アリナがここまでクソ雑魚だったとは……

さつきから泣きっぱなしでもう顔中ぐっちゃぐちゃだ。

最悪にも程があるワケ。

でも、この涙はクソ雑魚なアリナに対する涙では無いワケ。

「アリナのバイクウウウウ!!!」

後ろから追いかけてくる!!ゴイツらは、あろうことか、アリナの愛車を粉々のスクラッ

プにしてくれやがった。

そりやあ泣きたくもなるワケ。

あの子は決して30万円ぼっちの価値しか無いワケでは無い。

この半年間、旅先で一緒に苦楽を共にしたパートナ^相ー^種だったワケ
それを目の前であんな風に……

「……………ふぎけるな」

そんなの当然認められないヨネ

「ふぎけるなふぎけるなふぎけるなふぎけるなアツ!!」

もう、こうなったらヤケクソだ。

攻撃が効かない？

上等なワケ。

あの子を壊されたこの怒り

煮え滾るこの思いを全力でぶつけてやる。

さあ、アリナの怒りとアナタ達の防御力、どっちが強いかな勝負ってヤツなワケ!

とその前に、全力で背中魔法少女を放り投げる。(流星に巻き添え喰らったらアリ
ナがここまででした意味が無くなるカラ……)

アリナはそのまま地面を滑ってUターン
使い魔の軍勢に真正面から向かい合う形になる。

胸についているソウルジェムの前にアリナのキューブをかざして念じる。祈る。

この怒りを全て魔力に変換してキューブに注ぎ込むイメージを展開する。

すると、確かにソウルジェムから紅い閃光が迸りキューブへと写った。

それに伴ってキューブが紅黒く輝き出す。

自分の事だからわかる。

今、確かに私の怒りはこのキューブにある。

前に向き直ると、目と鼻の先にまで使い魔が迫っていた。

途端に、時の流れが遅くなる。

アドレナリン……？だかなんだかがドバーって出て遅くなるっているヤツだ。

確か走馬灯とか言った気がする。

間違いない。

今、ここでアリナは死ぬ。

でも、だからって、ミスミスやられるワケが無いワケ。

だからアリナは、

右手でキューブを握り砕いた。

★☆☆☆☆

気がついたら、使い魔は全員消えていた。

それどころか魔女結界の外へと放り出されていた。

「痛っづ……」

助かった。そう思う間もなく全身に激痛が走る。

思考が飛びかける痛み。歯を食いしばりなんとか耐えて現状を観察する。

アリナに医学的知識は無いカラ、怪我をみてもどこがどうなったなんてわからない。

でも、もう手遅れだって事はわかった。

見える範囲しか見れなかったが、少なくとも右腕が跡形も無く消えており、胴体はズタボロ。

溢れ出している血でわかりづらいが、内蔵が見えている気がする。

そもそも失った血の量も相当にマズイ。

コレは、運良くココを救急車が通つても助かる事は無いだろう。

「あくあ……これでアリナもおしまいかあ……」

シット……

まだアリナにはやることが残ってる。

テーマが見つかっていない。

もつと色んな作品を創り出したい。

だが、現実是非情だ。

既に身体感覚が無くなってきた。

視界もどんどん暗くなっていく。

終わりは近い。

……血溜まりの中で星が輝いた。

それはあまりにも眩しくて、温かくて、閉じた瞳が再び開かれる。

そうして見えた最期の景色は、

蒼い人影と、一回り小さな白いイタチだった。

その2 「魔法少女専用救命支援要請：コード887」

スプラッタな死体なんて物は魔法少女を七年もやっている以上見慣れている。

特に驚く事も、もはや何かを感じる事も無い、至つて普遍的な光景………の筈だ。
だが、

彼女の紅く染まった淡緑の髪は、

地面にこぼれ落ちた小腸のカケラと思わしき内臓は、

未だトクトクと流れ出ている血液は、

苦しげに歪んだ顔は、

私の、それまでの常識……いや、人生を破壊する程の美しさを放っていた。

「モッキュ!!モッキュッパイ!!!」

「……………ハッ」

どれぐらいの時間放心していたのだろう。

ふと、何かの騒ぎ声で我に返る。

足元を見ると、そこには久しく見ていなかったクソ害獣インキュベーターの姿が

気分を害されたので遠慮なく貫いてやろうと思ったが、違和感を覚えて槍を止めた。

よく見なくとも、この害獣インキュベーター、明らかに小さいのだ。

それに害獣特有の、死んだ魚の目（というと魚に失礼だが、それほど感情が読み取れない目）では無く、ハイライトがガツツリ入ったキラキラした眼を持っている。

それ故か、表情というものもいくらか読み取り事が出来る。中々に愛嬌のある見た目と言えるだろう。ヤツの顔がチラつかなければ……

そんな、言わば『小さなキュウベえ』とでも言うべき生命体は、必死に彼女の方を指差して私の脚を揺さぶって謎の鳴き声を発している。

「ツ……コレって」

促されるままに彼女へと近づくと、血溜まりの中に黒く濁った翡翠色の宝石が浮かんでいる事に気がついた。

紛れもない。ソウルジェムだ。

つまり彼女は魔法少女であり、

ソウルジェムが無事な以上、まだ死んでいない。

「でも、穢れがかなり酷いわね……」

このままではいつドツベルが発動されるかわからない。

魔女結界内ならばいいものの、こんな路地裏で発動されたら周辺被害は全く予想がつかない。

また、気絶時のドツペルという物は総じて暴走するので、自らのソウルジエムを壊してしまおうという痛ましい事故が起こる可能性もある。

急いでグリーンフシードを使って魔力を供給する。

それと同時にコネクトの容量で彼女に魔力をいくらか譲渡し、回復力を高める。

傷口から流れでていた血液の勢いが増す。どうやら魔力の大部分は血液の方に回されていて思うように回復出来ていないようだ。

とりあえずの応急処置として彼女の魔法少女衣装を少々失敬して（元々ズタボロだったか大丈夫でしょう）傷口を無理やり塞ぐ。上から魔力で包んで圧迫止血をすればマシにはなるだろう。

…が、コレはあくまでも応急処置

私からの魔力供給が無くなれば再び傷口が開いてしまう。

燃費も悪いのであまり長くは持たない。

焦るキモチを沈めながら、懐からスマホを取り出してロックを解除しようとするが、血で滑つてうまく認識してくれない。

仕方がないので魔力を流してロックを解除

そのまま通話アプリを開き、テンキーに入力をする。

8・8・7

魔力を流しながら発信ボタンを押し、しっかりと送信された事を確認するとスマホを戻す。

通常の119番とは違って、オペレーターと会話しなくても良い。

番号さえ入れてしまえばコチラの座標が送られる。後は待つだけだ。

神浜内なら二分もしない内に……

「おまたせ!!魔法少女救命隊、千歳ゆまだよ!!」

今回は一分半でワゴン車が来た。

いつも思うが暇なのだろうか?彼女達も学生のハズだけれども……

まあ、実際887番を使う時は一分一秒を急ぐ時だし、いつも非情に助かってるから文句は無い。

ワゴン車の中から白衣を着て元気いっばいに出てきたのは幼い緑髪の魔法少女「千歳ゆま」

固有魔法「治癒」を使いこなす見滝原の魔法少女だ。

運転席にはいつもどおりポツキーをかじってる「佐倉杏子」が座っており、助手席には不機嫌な顔でこつちを睨んでくる「百江なぎさ」もいる。

「早速で悪いけれど、この娘の手当をお願いできるかしらう？」

とにかく急がなくては私の魔力も枯渇してしまう。

自分のソウルジエムも回復させながら、私は千歳さんが彼女を見れるように横にどいた。

「え!？」

すると、千歳さんが驚きの声をあげた。

今まで見たことの無い反応に思わず千歳さんを見ると、目をこれでもかと思開いて驚嘆のキモチを露わにしていた。

……………一体どういう事だろう？

この程度の光景は今まで散々見てきたハズなのだけれど……………

気づけば車の中で待っていた佐倉さんと百江さんも降りてきて同じく驚愕の表情を浮かべている。

「ちよ、ちよつとごめんね！」

そして、離れた位置でひそひそと三人で話し始めてしまう。

とりあえず治療を先にお願ひしたい。魔力を供給し続けるのってかなり辛いのだ。

「あ…………アレって、アリナ先輩!?!…だ、だよな?なんでこんな所で死にかけてるの!?!なん

でやちよさんと出会ってるの?!?!? ホント、何してんのあの人?!?!?」

「んな事アタシが知るかよ!?!この時期にあのアリナ先輩がやられるようなイベントは無
いんだが……」

「どうせいつものほむらのせいなのです。バタフライエフェクトとかいうヤツなので
す。いい加減にしてほしいのです……」

「あ、そういえば今つて9月だったよな?」

「9月つて言ったら……まさかアリナ先輩が? いや、ありえねーだろ、なのです。」

「でも、環いろはがあんな事になってるからなあ……ありえねえ話では無いと思う。
………と、とりあえずまずは治療して、それから話を聞こう。情報が無いと何にも判
断出来ないからな。」

「一応なぎさはほむら達に連絡してくるのです。ソレが本当なら、第一章が始まってる
のです。」

「じゃあ、そういう事で」

いやしかし、こんな事は初めてだ。

いつもの千歳さん達は何も言わずにすぐに治してくれるのだけれども……

ちよつと聞き耳を立ててみたが、上手く聞き取れない。おそらく認識阻害の魔法でも

使っているのだろう。

たしか佐倉さんの固有魔法が幻覚だった気がするし、おそらくソレの応用だろう。

こう：見滝原の魔法少女はどうにも秘密主義がすぎるのよね。

そのクセこちらに対して好意を持って接してくるのだから、本当によくわからない。

一体彼女達は何が目的なのやら……

「ゴメンねーちよつと今後のこと話してて……それじゃいくよ〜」

長かった話し合いもどうやら終わったようで、千歳さんがこちらにトテトテとやってきた。

手には彼女の固有武器である大きめのハンマーが握られていて、大きく振りかぶられる。

「え〜い!!」

と、そんな間の抜けた掛け声と共に、ハンマーは大きな円弧を描いて足元に叩き込まれた。

ともすれば幼い子供がごっこ遊びでもしているかの如きほのぼのした見た目だが、

そんなモノは関係ないとばかりにひび割れる地面、正円状に広がったそのヒビは魔法陣となり淡い緑色の光を発して回復陣が形成される。

すると、彼女の怪我が逆再生されるように治っていく。

こぼれ落ちた臓器は宙を浮かんで元の位置に戻り、新たな皮膚が生成され、血溜まりは一滴も残さず吸い上げられる。

腕も脚も生えていき、鼓動が刻まれ、肌に生気が戻った。

「ふう……」

そこまで確認して、彼女への魔力の供給を止める。

これで彼女がこの場でドツベルを発動する事は無くなった。

とは言いつつもこのままここで寝かせておくわけにはいかないでしょう。

ので、彼女を抱き起こす。

彼女のソウルジェムを少しばかり失敬して変身を解除してあげると、栄総合学園の制服が現れた。

栄……そうね、かなえと同じ学校ね。

「あ、あ、く………えっと、やちよさん？一応聞くけどその娘はどうするつもり？」

と、顔を手を当てて天を仰ぎながら千歳さんが聞いてきた。

少し鼻血を出している？

おそらくいつもの発作だろう。

「とりあえず調整屋に運ぶわ。さつきソウルジェムに触れた感じだと未調整みたいだったから」

「わかった。じゃあ送っていく?」

「お願いできるかしら?」

「うん、大丈夫だよ!!……………ふむふむ……………やちアリか……………割とマイナーだし、お互い別に相手がいるけれど……………だからこそ、＼良い＼なコレ……………」

なにか小声でごによごによ口走っていたけれど、まあ……………深くは突っ込まない。

見滝原の魔法少女は時々こうなるけど、正直放って置くのが一番だ。

「そういう訳だから、調整屋まで頼めるかしら?」

「一体いつからウチはタクシーになったんだか……………ま、いいさ。了解。」

うまい棒を頬張った佐倉さんに許可を取ったので、私は恍惚とした表情でぐへぐへ笑っている千歳さんを無視してワゴン車に乗り込んだ。

「ほら、ゆまもさっさと来るのです!」

「んにゅ、わかった。」

百江さんが千歳さんを回収してきて助手席に座った千歳さんは百江さんの膝の上に乗せられている。片時も離れるつもりは無いらしい。事を確認するとアクセルが踏み込まれ、魔法少女5人を乗せたワゴン車は発進した。

余談だが、コード887を送信した時には一分半で着たが、それは彼女達の拠点にあるワープ装置のおかげらしく帰りは普通に走って帰らなくてはならない。

いつでもどこでもワープ出来るなんてドラえもん地味な事は出来ないようだ。(でも彼女達が言うには、そのドラえもんのような固有魔法を使う魔法少女が神浜にいるらしい。)

一分半という時間は彼女達が連絡を受けてこのワゴン車で出発する準備が整うまでの時間なんだとか……

平日の夜間なので主要な道路はどこも通勤ラッシュで一杯だけれど、渋滞に捕まる前に佐倉さんは横道や抜け道を通って新西区へと法定速度ギリギリで飛ばす。

佐倉さんは確かまだ14歳だったはずだけれど、免許証どころか戸籍丸ごと幻覚魔法で偽造している。

私も一応普通免許は持っているけれど……ペーパードライバーだからここまでの運転は出来ないわ。

そもそもモデル業と大学と魔法少女の三足の草鞋スタイルでやってる以上、ドライブする時間なんて取れないのよね。

車内に沈黙が流れる。

が、別に重苦しい感じは全く無く

ただ単に『必要がないから話さない』だけ

……それにしてもこの娘、私以上に顔が良いわね。

モデルとかやったらあつという間に私の人気を追い抜きそうな逸材だわ。

そんなバカな事を考えながら、シートを倒して寝かせている彼女の髪を撫でる。

先程まではあんなにも綺麗に血に染まっていた髪。

そう思うと、何故だろう。

胸の奥がこう……変な気分になる。

その時、車が急カーブで左へと傾く。

シートベルトをしていなかった（シートを倒しているから出来ない）私は体勢を崩し、

彼女の髪の毛の中に顔から突っ込んでしまう。

「……………ふへ」

彼女の髪からは、微かなシャンプーの香りとそれを塗りつぶす汗と皮脂、そして乾いた血の匂いがした。

思わず頬が緩み、変な声が出てしまう。

まったく、私がこんな感情を抱くなんて……本当に不思議な人だ。

「カヒュツ…」「ピヤツ…」「アツ…」

前の三人が一斉に発作を起こし、危うく交通事故になる所だった。

☆☆☆☆

「アリナ先輩！」

誰かが、アリナを呼んでいる。

「アリナせんぱーい!!」

誰かはわからない。けれど、この小動物みたいな雰囲気は、どこか懐かしくて…

「わ。ぶ。つ……えへへ、アリナ先輩〜」

その誰かは、真正面からアリナに抱きついてきた。

普通なら誰とも知らない人に抱きつかれるなんて嬉しくもなないハズなのに

アリナが今感じているのは安心感

まるで、今まで足りなかったピースが元通りに戻ったような

そんな満ち足りたような満足感が胸の中に溢れて、思わず抱き返したくなる。

しかし、この身体は動かない。

別に縛られているワケでは無い。

まるで、神経そのものが接続されていないかのような

そんな手応えの無さに私は困惑する。

そうこうしている内に彼女が離れていく。

待つて

いかないで

でも、どんなにココロが動いても、身体が動かない。

それなりに離れた所で彼女が立ち止まる。

くるりと回ってコチラに振り向いた。

その顔はやはり見覚えが無い。

と、どうか黒く塗りつぶされて誰だかがわからない。

だが、その顔を見て、ひどく安らぐ自分があるのだ。

もう何がなんだか：アリナ自身の事がわからない。

彼女が一步、後ろへ下がる。

それだけで、アリナの背筋は冷水をぶっかけられたように冷たくなった。

彼女の後ろには崖

そのまま下がったら彼女は無事ではすまない、と全身が警鐘を打ち鳴らす。

何故そんな事を知っているかはわからない。

でもアリナは確信していた。

そこから飛び降りたら、もう戻ってこれない。

駄目だ

引き返せ

そんな事を叫ぶ。

でも、声は出てこない。

空気すら出てこない。

息が出来ない事に気がつくのと、急激に苦しくなってきた。

でも、そんな事は関係ない。

目の前の彼女を止めなければ。

動け、動け、

どうして動けないワケ!?

あの子はまだ手が届く範囲にいるのに

まだ、間に合うのに

何故この身体は動かない

何故、動かないんだ。アリナ・グレイ

「さようならなの！アリナ先輩」

彼女は、そう笑うと

下へ、下へと
アリナの届手のひらからかない所まで落ちていった。

アリナは、あの子を見殺しにしたのだ。

★☆☆☆☆

「……………」

気がついたら、アリナの視界にはやたらと青い光で満たされた部屋が広がっていた。
身体を起こすと自分が寝台の上に寝かされていたのが分かる。

イマイチ自分が置かれている状況がわからない。

いまだ本調子とはいかない頭で記憶を掘り起こす。

「……………ああ、そうだ。確か……………結界に入つて……………誰も知らない魔法少女助けて……………そ
して」

脚を見ながらつぶやく。

「アリナは死んだハズなんですケド…？」

そこには確かに自分の脚がある。

決して死んでなんかいない。

だが、あの時、確かにアリナは死んだハズだ。

身体が冷たくなつていく感覚は今でもハッキリと憶えている。

半身を失つて、あんなにも血を失つたのに、何故アリナは五体満足で生きているワケ

？

わからない事が多すぎる。

多いが……とりあえずこの状況ならばやるべきことがある。

アリナは再び寝台に横になり、かけられていたタオルを被つて消えるように呟いた。

「知らない天井だ…」

その3 「アリナ・グレイという魔法少女」

☆☆☆☆☆

「よし、到着だ。」

佐倉さんの声で意識が現実引き戻された。

ここ最近疲れが溜まっていたからだろうか？つい眠ってしまったようだ。

辺りを見回すとガラスの向こうは車のライト以外に灯りが無い漆黒の空間が広がっている。

魔法少女にとってはお馴染みである夜の廃墟街の闇

確かに、調整屋についたようだ。

「？」

立ち上がろうとした所で、膝に感じる重さに気づく。

未だぼんやりする頭で目線を下げていくと、視界に入るのは緑色の頭。

一体なんなんだ？……と、髪をかき分けてみると出てきたのはついさっき助けた魔法

少女の顔

未だ眠っているようで、すう……すう……といった規則正しい寝息と、閉じられた瞳が印

象的だ。

そんな、どこからどうみても美人としか言えない顔が私の膝の上にある。

——つまりは、まあ、膝枕の状態になっていた訳だ。

幸い彼女はまだ起きる気配は無いので助かったものの、もし起きていたら『初対面の人に膝枕をされていた』なんていう状況が出来上がってしまった、その後の関係修復は不可能だっただろう。いや、事実だけでも。

え？見滝原の三人に見られていただろうって？

彼女達はいつもソレ以上の奇行を繰り返しているし、そのクセして口は固いから、大丈夫でしょう。

根拠は無いけれど、謎の安心感がある。

彼女が起きてこない幸運に感謝しながら彼女を抱えて車から出る。

魔法少女としての肉体は見た目にそぐわず異常にパワフルだ。お姫様抱っこ程度、何時間も出来る。

が、やってしまってから気がついたが、コレはかなり恥ずかしい。ので、おんぶに切り替える。

こっちはこっちで、決して平坦だとはとてもじゃないが言えない彼女の胸が背中主張して来た。

……羨ましくなんかは無い。無いっただけ無いのだ。

夜とは言え、未だ残暑が残る9月。

エアコンが効いた車内から出るとムワツとした空気に思わず顔をしかめてしまう。

だが、それも調整屋に入るまでの辛抱だ。

廃墟の階段を登りながら、そんな事を思う。

いや、そもそも感覚遮断をしなければこんな暑さなんて苦でも無いのだけれども

……

それをしてしまうと背中の中の彼女の体温も感じられなくなってしまう。

それは些か勿体無い。というか、考えられないだろう。

こんなにも心安らぐ物を手放すだなんてどうかしている。

……いや、わかってる。わかってるつもりだ。

こんな風に心安らぐだなんて明らかにおかしい。

何かしらの影響を受けている……場合によっては精神干渉系統の魔法を受けている

と仮定して行動した方が賢明だ。

しかし、頭ではわかっていても、心は動いてくれない。

結局、ズルズルとこの都合の良い状況に甘えているのだ。私は。

今までの経験上“瀕死の魔法少女を助けた”後は、だいたい仲間になってくれる場合

が多い。

かつては賑やかだったみかづき荘も、今では私一人だけ……

もしかしたら私は彼女が仲間になってくれる事に期待しているのかもしれない。

はあ……本当に、私という人間は、誰かが側にいてくれないとダメなんだろう。

……みふゆ、一体どこに行ってしまったの？

「いらつしやーい」

暗幕で作られたカーテンを潜ると、いつもの調整屋が待っていた。

八雲みたま……あの暁美ほむらから直々に『調整』という技術を全てを叩き込まれた、神浜における調整のスペシャリスト

それこそ彼女の師匠以外に、彼女以上の調整を行える者を私は知らない。

あの規格外しかないような見滝原の魔法少女を入れても、だ。

まあ要するに信頼に値する人物である事は間違いない。

「久しぶりね、みたま。早速で悪いのだけれども、この娘の調整をお願い出来るかしら？ 代金は私が払うわ。」

調整屋への支払いは基本的にグリーンフシードだ。

これは調整屋自身が自らの力で戦えない魔法少女だ、という事もあるのだが、それ以外にも“魔法少女の戦いで手に入る物だから”といった側面も大きい。

そもそも現実ではゲームのように敵を倒したらお金が手に入るなんて事はまず無い。魔法少女は大体が未成年である以上、まとまったお金を用意できるかどうかはそれだけの家の事情によってかなり異なってしまう。

特に、東西格差が当たり前のように蔓延っているこの神浜では。

それ故に、魔法少女にとって公平に得る機会があるグリーンフシードが代金代わりになっている……という事だ。

しかし、グリーンフシードは魔法少女の生命に直結する重要な物である以上、ある程度のツケは許してくれたりするらしい。

踏⁺み倒^七そう^夜とした魔法少女には調整^も屋のボデー^もガードや各地域⁺のリー^七ダー^夜格^ひの魔法少女^なが集金^のしていくシステム^そになっている^私。

「新規のお客さんって事ねえ。腕が鳴るわあ。あ、その娘は施術室の寝台の上に乗せておいてねえ。」

ソファで紅茶虹色の紅茶は果たして紅茶と言えるのだろうか？を飲んでいたみたまは、ソレを一気に飲み干すと「んーっ」と伸びをして調整の準備に取り掛かった。

私が背中の彼女を寝台に乗せている間に、見滝原組は我が家のようにキッチンからお菓子を持ってきてきて寛いでいる。彼女達に遠慮という物は存在しない。おかげで神浜の魔法少女の自宅には常にお菓子が常備されているようになってしまった。

「それじゃあ、調整を始めるわねえ。」

準備が終わると、みたまはいつも通りに調整を始める。

私たちも、いつも通りに待合室のソファに座ってお菓子を食べる。

なんてことは無い

いつもどおりの調整屋の風景だ。

☆☆☆☆

数十分後、みたまが施術室からいつもどおりに出てきた。

「どうだった？」

「んー、特に問題は無いわねえ……」

勿論ちゃんとしたステ振りは本人が起きてからだけど、基礎的な部分は問題なく終わったわよお？」

「そう……よかった」

どうやら調整はいつもどおりに成功したようだ。

ホツと胸を撫で下ろし、ソファに腰を下ろす。

後はあの娘が起きるのを待つだけ……そういえば、私はあの娘の名前すら知らないのよね。

調整したって事はみたまは彼女の記憶を見たはずだけれども……

まあ、どうせ彼女が起きたら自己紹介するのだからその時でも良いだろう。

それに名前というのは本人から聞きたいものだ。

最後の一個となつてしまつたばかうけカレー味の袋を開け、頬張る。

「ふうん……問題なく、ねえ？」

隣の佐倉さんが意味深に呟いた。

だが、その意味を聞く前に千歳さんがキッチンで作つていたナポリタンを持つてきた。

時間は既に9時を回っている。

夕食としては少し遅いが、色々あつたので仕方がない。

お言葉に甘えて、ごちそうになつた。

見滝原の魔法少女は皆総じてスペックが高い。

これは勿論戦闘力という面でもそうなのだが、それと同時に人間としてもスペックが高い。

基本的になんでも出来るのだ。

千歳さんが作つたナポリタンは、濃厚でそれでいてしつこくないソースに、もちもちの麺と、シャキシャキ感を残した玉ねぎやピーマン、カリカリに焼き上げたウインナー、それら全てが絶妙にマッチした素晴らしい仕上がりだった。

半分程食べた所に、パルメザンチーズをかける。それだけで、また全く違った食べ物へと変化するのも凄まじい。

こんなにも美味しい、もはや料理人顔負けのナポリタンを私は小学5年生の時に作る事が出来ただろうか？

出来なかつただろう。

今でもここまで出来るかと言われるたら怪しい。

本当に見滝原の魔法少女は化け物だらけだ。

一体彼女達は何時寝ているのだろうか？

結局、五杯もおかわりしてしまつたが、佐倉さんも同じ位食べていたので問題ない。

魔法少女は体型なんていくらでも弄る事が出来るからいくらでも食べる事が出来る。(だからと言って、胸を大きくする気にはなれない。自然に大きくなつてこそだと私は思う。)

「んで、本当に調整の最中におかしなことは無かつたんだよな？」

ナポリタンのおかげで和気あいあいとしていた待合室は、

その佐倉さんのたつた一言、たつた一睨み、ただそれだけで形容し難い重圧に支配された。

立ち上がり、一步一步とみたまの方へと進んでいく佐倉さん。

その眼は既にハイライトが無く、怒りと侮蔑の表情が多分ににじみ出ている。千歳さんと百江さんがスツと出入り口の前へと移動する。

二人の移動はあくまでも自然で、何の違和感も無くみたまの退路を断った。それこそ、一步離れた位置にいる私だからこそ気がつけたのだ。

きつと、みたまは彼女達の移動に気づけていないだろう。

一体何が起こっているのか、私には全くわからない。

が、いつでも変身出来るように心の準備をしておく。

「え、ええ。何事もなく、いつもどおり終了したわよ……?」

壁まで追い込まれたみたまは、いつもの笑顔でそう答える。

言葉の端が震えているが、この重圧の中では仕方がない。

むしろよく平静を装えたものだ。

「ほーん……いつもどおりねえ」

次の瞬間、轟音が鳴り響き、建物が震える。

佐倉さんの腕が壁にめり込んでいる。

「いつもどおりなんて、んな事がある訳ねえんだよ」

ドスの効いた声、なんて言葉では表せないような、暗く、低く、殺意に満ちた声が響

いた。

「ごまかせると思ってるのか知らないがな、アタシ達だつてチラツとアリナのソウルジエムは軽く見てるんだ。

幾重にも張り巡らされた魔術の跡。

無理やり覆いかぶせられたような異物。

継ぎ接ぎだらけの記憶。

正常じゃ無い事は一発でわかる。

それを、アンタ程の調整屋が、「いつもどおり」だつて？

見滝原、舐めんじゃねえ!!」

その一喝で、部屋の上半分が吹き飛んだ。

星空とは言えない都会の空が、私達の頭の上に広がっている。

☆☆☆☆

「知らない天井だ…」

まさか、死んだと思つたら生き返つてて、そこでこのセリフを言う機会が来るなんて、本当にライフ^人つてやつは予測不能の連続で飽き^生が来ないワケ。

だから、さつさとアリナのアートの方の問題もななくなつてくれれば良いんだケド

……

そんな事を考えながらアリナはタオルの中でモゾモゾしていた。

まだ微妙に頭が痛いというのもあったが、一番はこのタオルに何故か懐かしさを抱いていたカラ。

どう見ても見憶えの無い薄灰色のタオル。

どっちかかっていうと、それに包くまるよりも抱きついた方がしっくりくる。

うーん……わからん。

こういつた事例は、この半年の間で割とよく起こった。

両親のアトリエにいた時に聞いた知った話によると、天才達にとつてもよくある話らしい。

魂に刻み込まれた前世の記憶だったり、運命的な何かだったり、聞く人にとつてそれは多種多様マチマチで要領をえなかったケド……

そんな感じで、タオルに抱きついて目を閉じていたら、突然、爆発にも似た轟音二度聞こえた。

その音に驚き目を開けると

「ええ……う？知らない天蓋なんですケド……」

夜空が広がっていた。

あの天才たちは数分の間に部屋の天井が綺麗サツパリ無くなっていたなんて経験が

あるのだろうか？

いや、無い。こんな事に巻き込まれた事があるのはどう考えてもアリナだけだろう。漂うトラブルの匂いとうんざりしながらも、アリナは寝台の上から降りた。

着ているのはいつもの制服

ソウルジェムの指輪も中指に嵌っている。

変身してアリナの武器の中に入れていた学生鞆等も確認

どれも無事だった。

いや、無事じゃ無いのが一つだけ……

「アリナのバイクう……」

スカートのポケットに入れていた愛車の破片

かつては元気にアリナを乗せて走っていた相棒の唯一回収できた成れの果てだ。

まだ名前付けてなかったのに……

今週末届く部品でもっと改造する予定だったのに……

マズイ、この事を考えたら辛くなってきた。

あわててこぼれた涙を拭う。

ともかく、アリナが気絶している間にここに運び込まれたワケだけでも、病院じゃない以上、アリナをここに運んだのは十中八九魔法少女だろう。相手がどんな人物かわ

からない以上、用心しておくにこした事はない。

アリナは変身したまま、この部屋の唯一の出入り口である扉を開けた。

「……………私には守秘義務がある事ぐらいわかってるわよね？」

「正確にはアンタじゃなくて、調整屋という役回りにおいては、だがな。」

その先に広がっていたのは地獄のような威圧感が支配する修羅場だった。

アナザーストーリー（ほむら編） 第一章「見滝原という街」

その1「最強のまどかを育てるRTAはつじまーるよー」

ハイ、どうも。

昨日のあけみ屋でのやけ酒が響いてる曉美ほむらです……うおえ

今回はタイトルにある通り、どんな魔女にもウワサにも人間にも負けない！最強の鹿目まどかを育成するRTAを走っていこうと思います。

走る前にぎつとすぺー^{あけみ記録室}どるんを確認したのですが、大抵がまどか契約を阻止するRTAばかりで、まどか契約を前提とするRTAは存在していなかったため、自動的に私が世界一位です。

先駆者様がいないので探り探りのRTAになってしまいましたが、「始まりの曉美ほむら」である私にとって『そんなこと』はいつもの事ですので、好き勝手やらせていただきます。

計測区間は、病院で目を覚ました瞬間にタイムースタート↓限界育成値に到達した瞬

間にタイマーストップとなりませんが……

どうせこんなイカれたRTA走るような暁美ほむらは私以外いないので、ぶっちゃけかなりアバウトでも問題ありません。

このRTAはそんな事タイムよりも完走する事自体に意義があるので、「RTA」というよりも「極限攻略」といった方が正しいかもしれませんね。

だが私は訂正しない。(鋼の意思)

さて、現在の状態ですが、集中治療室で治療を受けています。

・・・なんで？

と、言うのも

この状況は私こと『始まりの暁美ほむら』特有のイベントとでも言いましょうか……
他の暁美ほむらは時間軸移動逆行直後から魔法少女の力フルパワーを余すこと無く使えるので、病院脱走したり、なんやかんや好き勝手に勝手できるのですが

私みたいに永い間周回を繰り返して総魔力量時間軸移動が1億あたりを超えると（おおよそ八百万の神々と素手で殴り合えるレベル）、時間軸移動逆行先の『暁美ほむら』の身体に力が全て収まりきらず「パアン」って破裂しちゃうバグ仕様のせいです。

だから、一度あけみ屋を挟んで時間軸移動逆行する必要があつたんですね。（メガトンあけみ屋）

ですので、今ここにいる私は『チーほむ様』と呼ばれる力の1%も継承出来ていない一般魔法少女でしかなく、

つまるところ、クソ雑魚です。

最初は遡行先の許容量ギリギリの力を送って、時間軸移動その後は肉体の許容量が増える度^{時間軸移動}にあげみ屋の方に預けてきた力を送ってもらおう仕様なので、こちらの世界で魔法や魔法少女と戦って鍛えれば順次、力の方も開放されていくのですが……

今回の時間軸の身体は平均以下どころかぶつちぎり^{時間軸移動}で最低値を引いてしまったよう^{時間軸移動}で(ガバ)、さっきのトイレ移動からの嘔吐で体力を使い果たしてそのまま気絶……

そのまま集中治療室にプチ込まれたというワケです。

まさか二日酔いでゲームオーバーになりかけるとは……

魔法少女になっても病弱とかコレ詐欺では？(インキュベーターへの露骨なヘイトスピーチ)

これが普通のゲームならばキャラガチャ失敗といった所でリセット案件なのですがあくまでもコレは現実^{ゲーム}！

着いてこの回でしか経験出来ない貴重なイベントもあるかもしれないので決してA S O 慌てず騒がず落ち
T、丁寧丁寧丁寧に走っていきましよう。

足りないステはプレイヤースキルでカバーだ。

とは言え、魔法少女としての最低限しか継承出来なかつた以上、火力も耐久も持久力も体力も、何一つ期待出来ません。

例えるのなら調整の力も固有武器のスカーフも持っていない頃の八雲みたまさんレベルで期待できません。

こんなので修羅の街MTHR見滝原を駆け巡らないといけないとか
いやーキツイつす………

とは言え、コレもまどかと一緒に一変の曇りも無い明るい未来を掴むためです。
ぐつと我慢して走っていきましよう。

画面の方ではなけなしの魔力を最大限使ってなんとか身体の改造が終わりました。

心臓の血管を治して、貧弱な身体を一般人レベルにまで底上げした所で魔力が尽きたあたり、本当にこの身体はクソ雑魚ナメクジですね……

いつもお世話になっているお医者さんが急に元気になった私に驚いているいつもの風景を眺めながら今後の予定チャートを考えましよう。

先程ちらつと見えたカレンダーで確認した限りだと、現在は西暦2011年3月1日でした。

ワルプルギスが襲来してくるのが11月22日なので、いつもよりも半年ちよつと前ですね。

まま、えやろ。

補足すると、魔法少女になったばかりの暁美ほむらは皆一律で一ヶ月間しか時間遡行出来ないのですが、魔法少女として力をつけていくに当たってだんだんと時間遡行出来る範囲も増えていきます。

見滝原☆アンチマテリアルズ
 マミと同棲してる暁美ほむらとかは一年以上時間遡行しましたね。

余談ですが、彼女はあの時間軸で無事にワルプルを倒して（2つの意味で）ゴールインした後、「年越しもバレンタインも経験しやがって」と遊びに来たあけみ屋メンバーに恨みつらみをぶつけられていました。

当時のようすもあけみ屋のすぺーどあけみ記録室るんにあるので、気になった人は見てみると面白いかもしれません。

彼女の何百倍もの力を持っている私は、勿論一年以上の時間遡行なんて楽勝です。

本気を出せば私が存在していなかった時代に（魂だけですが）飛ぶことも可能です。（フランスでのあの戦いは当時の私には良い勉強になりましたわ。）

が、やはり力を持ちすぎた代償といえますか……時間遡行の調整が十年単位でしか出来ないんですよね。

「時間遡行したらまだ幼稚園児だった」なんてザラにあります。（どうしようもないの時間遡行でリセット案件）

ですので、今回のような半年時間遡行はむしろ当たりの部類

適度に準備期間が与えられているので、周辺の魔法少女の魔改造とワルプル討伐がやりやすいという良い時期です。

やっぱ希望と絶望は差し引きゼロ。ハッキリわかんかね。
半年時間遡行 クソ雑魚系

と、解説している間に病室に戻ってきました。

早速ですがベッドの中に潜り魔法少女に変身します。

どこで誰が見てるかわからないですからね。(1敗)

いつもの相小型ラウンドシールド 棒から前回から引き継いだグリーンフィードを取り出して身体改造に

使った魔力を回復させましょう。

ここで回復しないと精神状態に関わらず魔女化してゲームオーバーです。(0敗)

ついでに相棒の中の荷物を一応確認。たまにイタズラほむらがトンデモない物を混

ぜていたりしますが……今回は以上無し。ヨシッ！(現場ネコ)

次は変身解除して今度は部屋の荷物を漁ります。

出来れば日記があるとベストです。

一体この時間軸のほむらはどんな生い立ちなのかを知るのは大事ですからね。

もう経歴ガバは沢山なんじゃ……(53敗)

と言うのは建前で、本当はある事を確認する為に日記を開いています。

さつき話半分に聞いていたお医者さんによると、明日一日検査して問題が無かったら退院との事なのですが、いつもならお母さんへの連絡を入れたりでバツタバタしてるはずなのです。

ですが、今回そのような素振り無く、あつけなく病室に戻されました。

コレが意味する事は・・・つと、ありましたね。

ふむ、やはり両親は他界済みですか。

親戚も軒並み全滅：

いわゆる天涯孤独というヤツですな。

両親が居ないパターンは割とよくあるパターンですが、今回のように親戚も全滅となると少しばかり面倒ですね。

この日記によればこの病院の院長が未成年後見人になったようです。

うーん……いつものアほむパートホーム借りれるかな？

あそこ気に入ってるんだけど……

ま、日記によれば良い人だって話だし、なんとかなるやろ（楽観視）

粗方の荷物を漁った所で日が暮れてきました。

天涯孤独以外には特にコレといった友人もいないようなので経歴確認は終了！

それでは皆さんお待ちかね、ここからは魔法少女の時間となります。

再び魔法少女に変身し、なけなしの全魔力を使って身代わりを作成

ただ眠っているように見せかけるだけの身代わりですが、今の魔力ではコレが限界です
すね…

とは言え、病院側に脱走がバレなければ無問題モーマンたい

さっさとバレないように窓から外にでましょう。

イクゾー!! デッデッデッデッ!! カーン!! デデデッ

《さあ、キミの魔法を試してごらん》チカラ

その声と共に、私は己に刻まれた手順通りに魔力を操作し、固有魔法チカラを発現させる。

「……見滝原なの!!」

初めに出了た言葉は、そんなありきたりな物だった。

宙を舞うビル、叩きつける大雨、建物を丸ごと持ち上げる強風

「街が崩れていく…なんて力」

それらが巨大な魔女を中心にして見滝原を襲っていた。

一件するとバレリーナの衣装のようなシルエツト

だが、頭には大きな角…いや、耳か?

よくわからない突起が2つ生えた頭を上にしており、

下に存在する紺色のスカートから下は存在せず、代わりに大きな歯車がスカートから顔を覗かせていた。

「あれが魔女……？」

それは、初めて見るにはあまりにも巨大で、途方も無い存在だった。

そして、その巨大な魔女に立ち向かう魔法少女が一人

奇しくも似たような、されど全く違う桃色の衣装

遠く離れたこの位置からはわかりにくい、弓を魔女に向けて引き絞っている。

「これが私の運命というならば

なんとしても止めてみせるわ……」

見た所立ち向かっている魔法少女は確認出来た。

立ち向かえるという事は、乗り越える事が出来るという事。

決して無謀な事ではない。

視界の先で、桃色の魔法少女が弓を放った。

崩れ落ちていく紺色の巨大魔女

そして、暴風雨が収まっていき……

次の瞬間、世界は光に包まれた。

「あ」

光はすぐに収まった。

いや、収まってしまった。

「ああ……」

口から情けない声が漏れる。

が、仕方ないだろう。

あんな事を魅せられては……

《願いは叶ったかい？》

キュウベえが聞いてくる。

「うあ……あ……ああ……」

あの光景

巨大魔女を斃した魔法少女が、更に巨大な魔女へと変貌する光景

見ただけで理解した。

いや、理解わからさせられた。

あれは誰にも倒せない。

あれを解き放つてはいけない。

《どうしたんだい、織莉子？》

《顔が真っ青だよ。具合でも悪いのかい？》

何を呑気に……と思ったが、彼はこの光景を見ていないのだ。
故に仕方ないと飲み込む。

それよりも、どうすればいいのか……

今にも割れんばかりの頭を必死に動かし魔法で見える光景の中を探し回る。

何か、

何かないか

何かきっかけになるようなもの

なんでもいい。

彼女を魔女にはいけないんだ。

彼女を魔法少女にはいけないのだ。

キュウベえ
コイツに会わせてはいけないのだ。

どうすれば阻止出来る？

見つけた

「キュウベえ、良い知らせよ。」

そんな訳があるか。お前は私の敵だ。

「私の魔法は貴方の役にも立つみたい。」

だが、そんなお前が私の手のひらで踊ってくれるのならば、やりやすい事この上ない。

「貴方にとつてとてもいい、魔法少女の素体がいるようよ」

いや、実際はそんなに甘くはない。

コレは賭けだ。

分の悪い賭けなのだ。

でも、どれほど細かい綱でも、渡らなければならぬ。

《へえ…それは楽しみだね》

それが、私の運命なのだから

「そして、それは私の役にも立つようね」

背筋が凍るとは、このような事なのか

今まで後ろには誰も居なかったハズ。

それどころか、ここは我が家の屋上で、私は外を背にしている。

しかし、声は聞こえた。

後ろから、ハッキリと聞こえた。

私の耳元から、聞こえてきたのだ。

恐る恐る、振り返る。

「どうも」

目と鼻の先にいたのは、腰まで伸ばした黒髪の少女

身を包む衣装はセーラー服というには少し奇抜で、左腕に輝くラウンドシールドは彼女が魔法少女である事を示している。

が、一番驚いたのは、その眼だ。

「私の名は暁美ほむら」

深く、深く、吸い込まれるような漆黒の眼

それは私が見てきた中で最も多くの叡智を蓄えていた。

「まあ、調整屋つていうのをやらせてもらっているわ」

その眼が、まっすぐに私を貫いてくる。

いや、決して相手は睨んでいたりする訳では無い。

しかし、この、私の内側に入り込んで、全てを暴いていくかのような瞳は…

「貴方の名前は？……と、言っても知っているのだけれどね」

現実がどうであれ、私に決して小さくない衝撃を残した。

「美国織莉子」

何故、知っているのか

そんな疑問は浮かんでこなかった。

何故ならば彼女の瞳は『知っていた』から。

どこで、どうやって、どうして

詳しい事は何も分からない

だが、彼女は私の事を知っている

それ以外の情報は必要なかった。

「貴方のその運命、私にも背負わせてもらえるかしら？」